

せとじんじゃきゅうけいだいちない

# 瀬戸神社旧境内地内遺跡

## 発掘調査報告

—金沢八景駅東口地区土地整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2013

横浜市都市整備局

公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団



11 調査組織

調査担当 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団 理事長 高村直助（その1のみ財団法人）

埋蔵文化財センター所長 遠藤 廣昭（その1まで鈴木 重信）

学芸担当係長 橋本 昌幸 考古資料課職員 鹿島 保宏

調査協力者

[発掘調査] 岩崎 薫・西野 郁子・山本 裕志

[遺物整理] 石井 和佳子・笠原 牧子・尋木 けい子・西野 郁子・宮本 直子・山本 裕志

12 本遺跡の出土品、記録図面および写真等は公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターにおいて保管している。

13 発掘調査および出土品の整理作業に際しては、次の諸氏・諸機関にご助言・ご協力を賜った。ここに芳名を記し、深謝の意を表します。

熊谷 哲・小林 康幸・坂本 彰・佐野 和史・近野 正幸・山田 善一・株式会社齊藤建設・株式会社横浜技術コンサルタント

## 目 次

例言	i
目次	iii
第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査経過	3
第3章 発見された遺構と遺物	5
(1) 基本層序	5
(2) 平成22年度調査	5
調査地点概要	5
コンクリート地下構造物	8
石切遺構	8
切石積み遺構	9
方形掘込み遺構	11
土坑	12
地業面	12
I貝層	18
遺構外出土遺物	18
(3) 平成23年度調査1 (京浜急行擁壁部分)	20
調査地点概要	20
F貝層	21
石垣および参道	45
粘土採掘穴	48
遺構外出土遺物	48
(4) 平成23年度調査2 (遊興施設部分)	49
調査地点概要	49
井戸	51
灰溜まりピット	52
杭列遺構	53
土坑	53
G貝層	54
遺構外出土遺物	55
第4章 まとめ	56
付編1 瀬戸神社旧境内地内遺跡から出土した江戸期の貝層に見られる貝類組成	67
付編2 瀬戸神社旧境内地内遺跡から出土した哺乳類・鳥類について	85
付編3 瀬戸神社旧境内地内遺跡出土遺物の金属学的調査	90
写真	97

## 挿図目次

第1図	遺跡の位置図（縮尺1/10,000）	1	第37図	遺構外出土遺物	49
第2図	周辺の遺跡（縮尺1/25,000）	2	第38図	平成23年度調査区遺構分布図	50
第3図	調査区相関図（縮尺1/1,000）	3	第39図	井戸及び出土遺物（1）	51
第4図	土層模式図および参考土層	5	第40図	井戸出土遺物（2）	52
第5図	平成22年度調査区遺構分布図	6	第41図	灰溜まりピット	53
第6図	調査区境土層堆積状況	7	第42図	杭列遺構	53
第7図	コンクリート地下構造物	8	第43図	土坑	54
第8図	石切遺構	9	第44図	G貝層	55
第9図	切石積み遺構	10	第45図	遺構外出土遺物	56
第10図	方形掘込み遺構	11	図1	横浜市金沢区瀬戸の瀬戸神社旧境内地内遺跡の貝層分布図	67
第11図	土坑	12	図2	F貝層の分布と分析サンプル採集地点	68
第12図	中段地業面	13	図3	G貝層の分布と分析サンプル採集地点	71
第13図	中段地業面および出土遺物	14	図4	G貝層の層序断面図	72
第14図	中段地業面出土遺物および遺構外出土遺物	15	図5	I貝層の分布図	73
第15図	中段地業面出土遺物	17	*参考地図	明治時代初期の平潟湾周辺の景観	78
第16図	下段地業面およびI貝層	19	図6	F貝層から出土した貝類（1）	79
第17図	貝層トレンチ出土遺物	20	図7	F貝層から出土した貝類（2）	80
第18図	平成23年度調査区遺構分布図	21	図8	F貝層から出土した貝類（3）	81
第19図	F貝層出土範囲および調査区割り図	22	図9	G貝層から出土した貝類	82
第20図	F貝層	23	図10	I貝層から出土した貝類（1）	83
第21図	F貝層試掘溝および北西掘り込み	24	図11	I貝層から出土した貝類（2）	84
第22図	F貝層出土遺物（1）	25	図1	位置図	85
第23図	F貝層出土遺物（2）	26	図2	哺乳類	86
第24図	F貝層出土遺物（3）	27	図3	ドブネズミ左下顎臼歯	87
第25図	F貝層出土遺物（4）	28	図4	鳥類	87
第26図	F貝層出土遺物（5）	29	写真1	試料No.1（羽口片）外観	92
第27図	F貝層出土遺物（6）	30	写真2	N.2試料（羽口片）外観と断面組織	92
第28図	F貝層出土遺物（7）	31	写真3	試料3（鉄滓）の外観と断面組織	93
第29図	F貝層出土遺物（8）	32	写真4	試料4（鉄滓）の外観と断面組織	93
第30図	F貝層出土遺物（9）	33	写真5	試料5（鉄錆+铸铁片）の外観と断面組織	94
第31図	F貝層出土遺物（10）	34	写真6	試料6（铸铁塊）の外観と断面組織	94
第32図	F貝層出土遺物（11）	35	写真7	試料7（青緑色塊状物）の外観と拡大組織	95
第33図	F貝層出土遺物（12）	36	写真8	試料8（銅銭）の外観と断面組織	95
第34図	石垣および参道	46	写真9	試料9（銅板）の外観と断面組織	95
第35図	石垣出土遺物	47	写真10	試料10（五徳状片）の外観と拡大組織	96
第36図	粘土採掘坑	48			

## 写真目次

写真1	遺跡遠景	98	写真42	調査区境で検出された暗渠	103
写真2	遺跡近景	98	写真43	暗渠の蓋石を撤去後	103
写真3	調査前風景	98	写真44	暗渠の蓋石を撤去後	103
写真4	表土除去及び遺構確認風景	98	写真45	F貝層北側最上部の堆積状況	103
写真5	調査区設定風景	98	写真46	F貝層最上面での貝層の広がり状況	103
写真6	コンクリート地下構造物	98	写真47	F貝層	103
写真7	石切遺構	98	写真48	F貝層最北端でのブロック検出状況	103
写真8	切石積み遺構	98	写真49	F貝層調査風景	104
写真9	切石積み遺構	99	写真50	F貝層調査風景	104
写真10	切石積み遺構	99	写真51	F貝層土丹ブロック検出状況	104
写真11	方形掘込み遺構	99	写真52	鉄道関連擁壁下にある貝層及びブロック層	104
写真12	土坑	99	写真53	F貝層北西部のブロック堆積状況	104
写真13	中段地業面検出・精査	99	写真54	F貝層試掘トレンチ掘削風景	104
写真14	中段地業面およびピット	99	写真55	F貝層完掘状況	104
写真15	中段地業面調査風景	99	写真56	粘土採掘網	104
写真16	中段地業面ブロック検出状況	99	写真57	遺跡遠景	105
写真17	中段地業面ブロック検出状況	100	写真58	調査区設定風景	105
写真18	下段地業面及びI貝層	100	写真59	調査前風景	105
写真19	I貝層貝層トレンチ完掘状況	100	写真60	南西より表土除去風景	105
写真20	貝層トレンチ1北壁貝層堆積状況	100	写真61	北側調査区完掘状況	105
写真21	貝層トレンチ1西壁貝層堆積状況	100	写真62	井戸掘削風景	105
写真22	貝層トレンチ2完掘状況	100	写真63	井戸掘削風景	105
写真23	調査区境で検出されたH貝層	100	写真64	井戸完掘状況	105
写真24	遺跡完掘状況	100	写真65	井戸掘り方状況	106
写真25	遺跡遠景	101	写真66	灰溜まりピット	106
写真26	調査前風景	101	写真67	杭列検出状況	106
写真27	調査区測量風景	101	写真68	杭列検出状況	106
写真28	表土除去風景	101	写真69	土坑	106
写真29	京浜急行擁壁部分表土除去後	101	写真70	G貝層掘削風景	106
写真30	擁壁外遺構確認後	101	写真71	G貝層a地点貝層と断面	106
写真31	石垣検出状況	101	写真72	G貝層a地点貝層検出状況	106
写真32	石垣組み方	101	写真73	G貝層a地点上部掘込み実測状況	107
写真33	石垣検出状況	102	写真74	G貝層a地点下部貝層検出状況	107
写真34	参道三和土検出状況	102	写真75	G貝層完掘状況	107
写真35	参道完掘状況	102	写真76	調査終了後の底面の様子	107
写真36	参道完掘状況	102	写真77	調査終了後の底面の様子	107
写真37	参道北側ブロック積み状況	102	写真78	調査終了後の底面の様子	107
写真38	参道北側ブロック積み状況	102	写真79	自然層で確認されたオオノガイのコロニー	107
写真39	参道東側のブロック検出状況	102	写真80	包含層中から出土した漆椀	107
写真40	調査区境で検出された暗渠	102	写真81	22年度調査出土遺物写真	108

写真41	調査区境で検出された暗渠	103	写真82	23年度調査出土かわらけ・灯明皿類写真	109
写真83	23年度調査出土焜炉類写真	110	写真85	23年度調査出土遺物写真	112
写真84	23年度調査石器・金属器・部材類写真	111			

## 第1章 遺跡の位置と環境

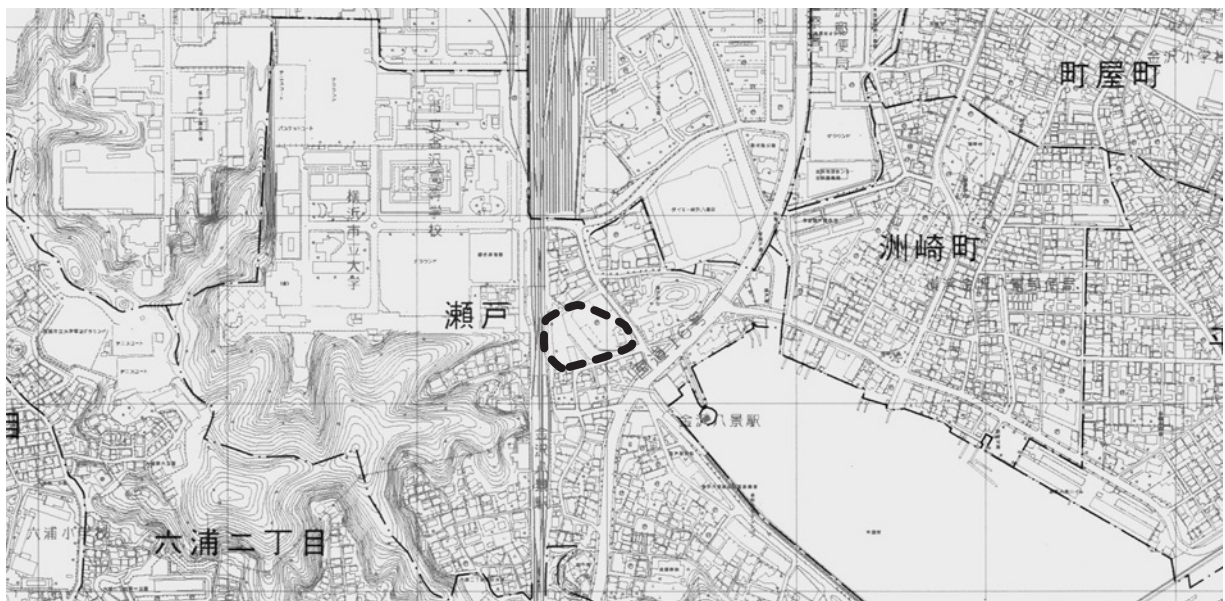
瀬戸神社旧境内地内遺跡は横浜市南部域の金沢区瀬戸に位置し、東京湾から入り込む平潟湾の最奥部にあたり、横浜市教育委員会発行の『横浜市文化財地図』には、金沢区No.49遺跡（県遺跡番号金沢区No.38）と記載されている。

現状の地目が雑木林・宅地・駐車場となっている遺跡は平潟湾の北側最奥部にあり、明治時代の地形図をみると上行寺の裏手（東側）にあたる権現山から岬状に伸びた丘陵の先端付近の南側に位置している。しかし、この丘陵は瀬戸神社との間に道路を造成するために切断され、瀬戸神社は現在独立丘陵状を呈する叢林を背負っている。その後、京浜急行線と瀬戸神社との間に残されていた通称「千葉山（もしくは五助山）」と地元で呼ばれていた丘陵も金沢八景駅東口の土地区画整理地業に伴い発掘調査を行なった後に、削平されて仮バスターミナルと姿を変えている。

遺跡をのせる基盤層は前期更新世の上総層群野島層となっている。この野島層は凝灰質砂岩ないしは泥質砂岩からなり、上位を漸移整合に大船層に覆われている。今回の調査で検出された遺構はすべてこの岩盤上または岩盤層を掘り込んで構築されている。

遺跡の周辺は、中世においては武蔵国久良岐郡六浦庄に属しており、六浦湊は鎌倉の外港として栄えていた。当時は、江戸時代に新田開発により埋められた六浦の名の元にもなったと考えられている袋状を呈した「瀬戸内海」が展開していた。瀬戸神社のある場所はちょうどこの袋状の入り口部分にあるため、流れが急で、瀬戸という地名が付けられている場所である。ここに瀬戸橋が架けられるようになると、鎌倉と称名寺を結ぶ主要路として六浦道が使用され、周辺には多くの寺院ややぐらなどが設けられるようになる。こうした歴史的環境から横浜市域でも中世の遺跡が比較的数量多く残り、また発掘調査がなされている場所となっている。

特に多く見られるのはやぐらである。その理由としては、先に記載したようにこの地域が鎌倉と結びつきが強かったこと、また、この地域で特徴的となっている崖面に露呈した基盤層がやぐらを造営する



第1図 遺跡の位置図（縮尺1/10,000）

ために適していることが上げられる。

数多くあるやぐら調査のなかで著名なのは上行寺東やぐら群遺跡である。3段に展開するやぐらのうち、上段部のやぐら前面に設えられた平場には建物跡（方形堂）や池などを配し、五輪塔や阿弥陀如来座像のレリーフを有するやぐらも調査され、やぐらの性格を考える上で重要なものとなった。

また、この遺跡の北東側には泥牛庵脇やぐらが調査されている。さらに、近年では財団法人かながわ考古学財団によって、「オヤシキ」と呼ばれている米倉陣屋跡一帯を囲む丘陵斜面に点在しているやぐら群（上行寺裏遺跡）が数年次にわたり調査されている。

また、今回の調査の西隣は昭和62年に横浜市埋蔵文化財調査委員会によって瀬戸神社旧境内地内遺跡として調査されており、江戸時代の貝塚と地業面、中世の墓壇や6基のやぐら（うち1基は前面に庭園を配する）や地業面、さらに古墳時代中期の貝塚などが調査されている。また、この調査時に、調査区内の基盤層に穿孔貝の巣跡が残っていたことから、縄文時代の海進に伴って形成された波蝕台と考えられるものが検出されている。



- |                |             |             |             |
|----------------|-------------|-------------|-------------|
| ○ 瀬戸神社旧境内地内遺跡  | 2 宿下遺跡      | 3 坂本屋敷やぐら群  | 4 市立金沢高校内貝塚 |
| 1 史跡称名寺旧境内地内遺跡 | 6 六浦大道やぐら群  | 7 光伝寺北やぐら群  | 8 六浦北部遺跡    |
| 5 六浦大道遺跡       | 10 上行寺裏遺跡   | 11 泥牛庵脇やぐら群 | 12 金龍院やぐら群  |
| 9 金沢区No.52遺跡   | 13 瀬ヶ崎和田山遺跡 |             |             |

第2図 周辺の遺跡（縮尺1/25,000）

## 第2章 調査経過

本遺跡は、金沢八景駅東口地区土地区画整理事業に伴い、平成22年度および平成23年度（2回実施）にわたって発掘調査を実施したものである。この事業区域内は県遺跡番号金沢区No.38(市遺跡番号金沢区No.49遺跡)瀬戸神社旧境内地内遺跡として周知化されている遺跡（埋蔵文化財包蔵地）であった。また、昭和62年度には平成25年現在仮バスターミナルとなっている箇所の発掘調査を同事業の一環で



第3図 調査区相関図（縮尺1/1000）

### 発掘調査にかかる届出文書

文書種別・内容	文書番号	日付	発信者	受信者	
文化財保護法第92条に伴う発掘届け	発掘調査届の届出 埋蔵文化財の発掘調査について（通知） 埋蔵文化財の発掘調査について（伝達）	横歴理第1057号 文道第50059号 教生文第6042号	平成22年9月27日 平成22年10月6日 平成22年10月20日	財団理事長 県教育長 市教育長	県教育長 財団理事長 財団理事長
出土品の手続き	埋蔵物の発見届け 出土文化財保管証 埋蔵物の文化財認定帰属について（通知） 埋蔵物の文化財認定帰属について（伝達）	横歴理第1069号 横歴理第1069号 教生文第6062号	平成22年11月19日 平成22年11月19日 平成22年12月9日 平成22年12月15日	財団理事長 財団理事長 県教育長 市教育長	金沢警察署長 県教育長 財団理事長 財団理事長
文化財保護法第92条に伴う発掘届け	発掘調査届の届出 埋蔵文化財の発掘調査について（通知） 埋蔵文化財の発掘調査について（伝達）	横歴理第1048号 文道第50077号 教生文第6059号	平成23年9月30日 平成23年10月18日 平成23年10月24日	財団理事長 県教育長 市教育長	県教育長 財団理事長 財団理事長
出土品の手続き	埋蔵物の発見届け 出土文化財保管証 埋蔵物の文化財認定帰属について（通知） 埋蔵物の文化財認定帰属について（伝達）	横歴理第1060号 横歴理第1060号 教生文第6062号	平成23年12月1日 平成23年12月1日 平成24年1月10日 平成24年1月16日	財団理事長 財団理事長 県教育長 市教育長	金沢警察署長 県教育長 財団理事長 財団理事長
文化財保護法第92条に伴う発掘届け	発掘調査届の届出 埋蔵文化財の発掘調査について（通知） 埋蔵文化財の発掘調査について（伝達）	横歴理第1065号 教生文第6065号	平成23年9月30日 平成23年12月12日 平成23年12月27日	財団理事長 県教育長 市教育長	県教育長 財団理事長 財団理事長
出土品の手続き	埋蔵物の発見届け 出土文化財保管証 埋蔵物の文化財認定帰属について（通知） 埋蔵物の文化財認定帰属について（伝達）	横歴理第1088号 横歴理第1088号 教生文第6079号	平成24年1月20日 平成24年1月20日 平成24年2月9日 平成24年2月16日	財団理事長 財団理事長 県教育長 市教育長	金沢警察署長 県教育長 財団理事長 財団理事長

\*名称・職名の略記は次のとおりである。

財団理事長：公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団理事長（平成22年は財団法人） 県教育長：神奈川県教育委員会教育長 市教育長：横浜市教育委員会教育長

(当時は都市計画局) 行なっているため、区画整理事業を実施する際には先立って埋蔵文化財の発掘調査を実施する必要性があった。このため、本体事業の進捗状況に従い、平成22年度には瀬戸神社の西隣の調査区を、平成23年度には京浜急行線路脇の調査区ならびに遊興施設下の調査区の調査を実施することとなった。調査の結果、各調査区から複数の遺構が検出された。

なお、それぞれの調査区の細かな経過については、調査地点概要に記載している。

### 第3章 発見された遺構と遺物

#### (1) 基本層序

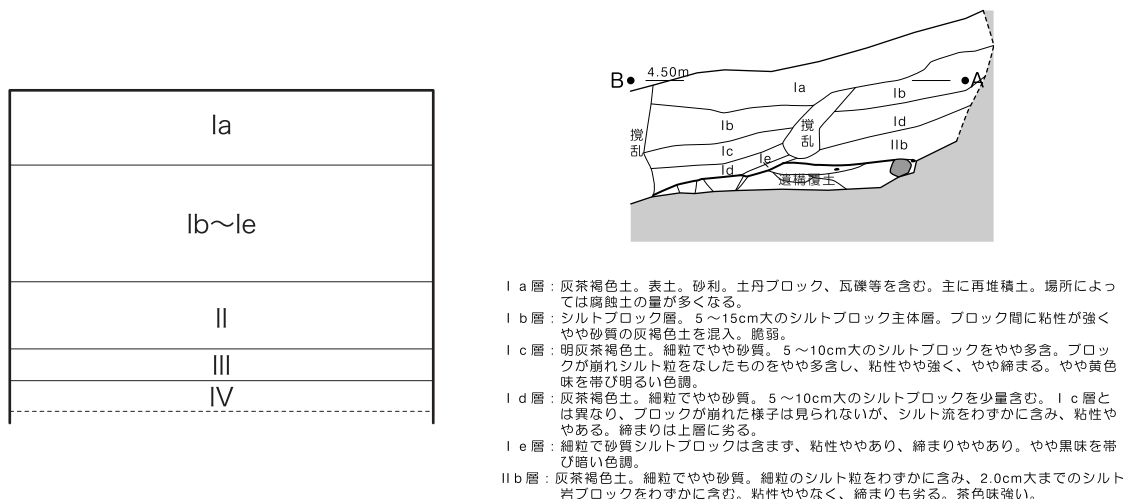
今回の調査は調査地点が3地点に分割しているうえに、その大半が上面から攪乱され、基盤層までプライマリーな層が残っている部分が認められなかった。特に遊興施設の下での調査区は大半が攪乱され、遺物包含層ですら残っていないような状況であった。そこで、最も遺存状態が良好であった22年度調査区の西壁および南壁をベースにして標準堆積とした。

標準堆積層Ia層としたものは、表土層である。現代に入ってからからの整地層はすべてこの層に含まれる。

標準堆積層Ib～Ie層としたものは江戸時代の遺物包含層である。複数の整地層や地業層があるため、a～e層に分層しているが、プライマリーに存在しているものではない。

標準堆積層Ⅱ・Ⅲ層としたものは古代～中世遺物遺物包含層である。ほとんど認められず、遺構の覆土中で確認できる程度である。

標準堆積層Ⅳ層としたものは、基盤層となっている岩盤層で、部分的に確認された海底であった時の砂層もここに含めている。



第4図 土層模式図および参考土層

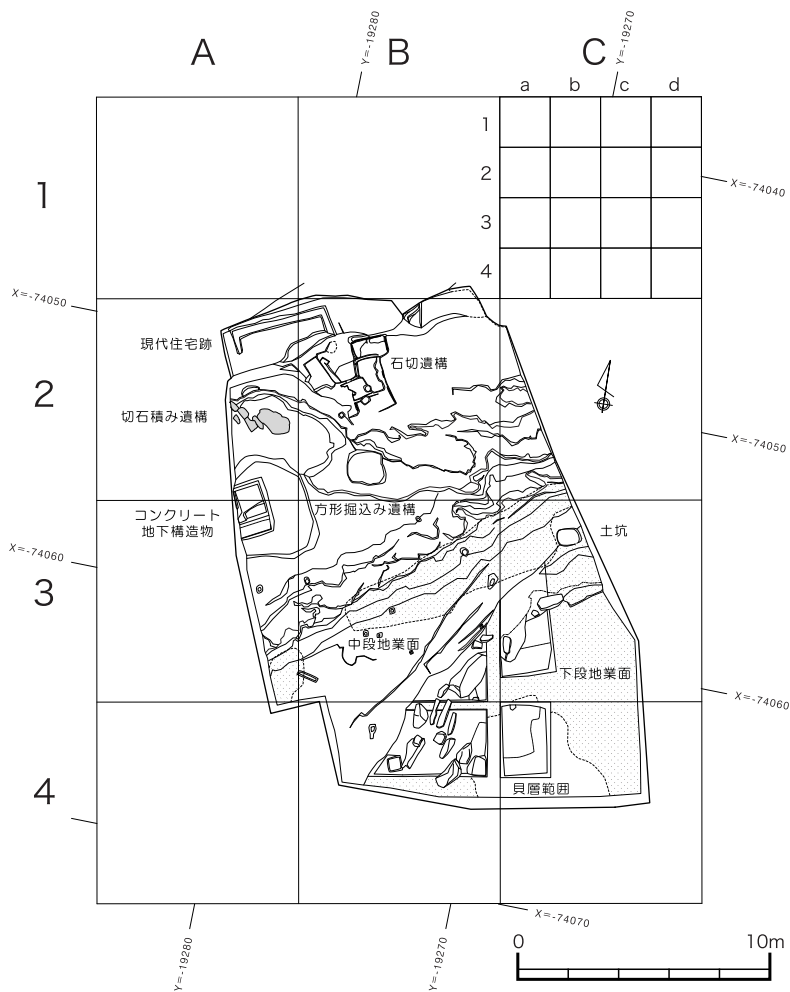
#### (2) 平成22年度調査

##### 調査地点概要（第5図）

平成22年度の調査地点は、瀬戸神社の西側、海軍道路を挟んだすぐ隣の部分となっており、西側をバスターミナル、北側を駐車場、東・南側を道路によって区画され、周囲を鋼板パネルによって囲われ島状に取り残された場所であった。

当初計画では280Fを調査する予定であったが、残された鋼板パネルや樹木倒壊防止の観点から調査区域を一回り小さくせざるを得ず、最終的には250㎡の範囲の調査を行なった。

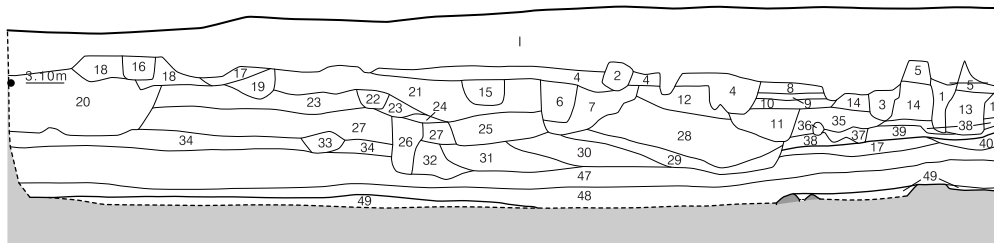
調査にあたってグリッドを組む必要があったが、調査区が斜面地に位置していることを考慮し斜面对してグリッドが直交ないしは平行になるように8mのグリッドを設置し、北西より東西方向にA～C、南北方向に1～4の番号を付し、さらに2mの小グリッドを同様に付した。



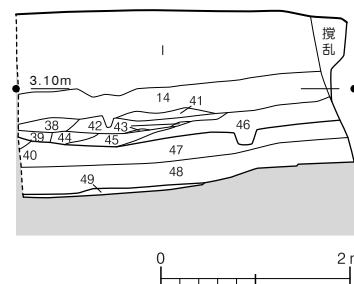
第5図 平成22年度調査区遺構分布図

現地調査は平成22年10月4日から実施し、表土除去作業は10月6日から実施した。周囲から隔離されているような状況のうへ、その大半が調査対象地点となっていたため、調査による発生土を場内でまかなうことは到底無理で、発生土については場外搬出することが計画されていた。しかし、バスターミナルや主要幹線道路に近いこともあってダンプトラックの入出場がうまくいかず手間取ってしまった。また、遺構には土丹ブロックを伴っているものがあったが、こうしたブロックが後世に攪乱され表土中や包含層中に混在してブロックかどうかをお判断しながらの表土除去になったため予想以上に時間をとられた。その結果、遺構の掘削調査は計画より2日遅れの10月14日から実施することになった。検出した遺構は排土の関係から北側（斜面上部）から順次調査を行なった。調査中、最も南側（斜面下部）で確認された地業面中にカキ殻からなる貝層が確認された。このため、トレンチを入れ調査を行ったが、出土遺物はほとんどなく、いわゆる縄文時代等に見られる文化貝層（貝塚）の様相が見られなかった。そこで、生涯学習文化財課職員を交え、調査の方法について調整を行なった結果、全面調査ではなくトレンチによる部分調査を行なうこととなった。調査は、11月8日に、台風の影響で湧出が止まらないトレンチ内の排水作業と埋戻し、残土搬出（一部中継地に仮置き）作業をもって、現地作業を終了した。

調査で検出された遺構は、コンクリート地下構造物、方形掘込み遺構、土坑、石切遺構、地業面（中段地業面・下段地業面）、H貝層、I貝層である。なお、H貝層は、南西調査区境の断面で検出されたもので、脇に大木があったために、拡張して調査することなく、堆積状況を確認しサンプルを持ち帰るに留まった。



- 1： 灰茶褐色土。やや細粒。赤色スコリア粒及び細粒のシルト粒を少量含む。粘性弱く、やや締まりなし。32層より暗い。
- 2： 灰褐色土。細粒でやや砂質。1.0～5.0cm大のシルトブロックを少量含む。粘性・締まりなし。脆弱。
- 3： 灰茶褐色土。細粒。細粒のシルト粒を含むほかに含有物なし。粘性・締まりなし。脆弱。
- 4： 灰褐色土。細粒でやや砂質。粗粒のシルト粒及び1.0cm以下の小円礫をやや多量。粘性やや弱く、締まりややなし。
- 5： 黄灰褐色土。細粒。ローム粒を多量含し、細粒のシルト粒をやや多量。粘性ややなく、締まる。明るい色調。
- 6： 灰褐色土。細粒。砂質。小砂利を少量含み、5.0cm大までのシルトブロックを極めて多量。粘性ややなく、締まりなし。やや脆弱。
- 7： 灰黒褐色土。細粒。細粒のシルト粒及び1.0cm大のシルトブロックをわずかに含む。粘性弱く、締まりややなし。
- 8： 黄灰褐色土。細粒。粗粒のシルト粒を多量含し、2.0cm大までのシルトブロックをやや含む。粘性ややなく、やや締まりなし。
- 9： 灰黒褐色土。細粒。1.0cm大のシルトブロックを少量含み、カーボンをわずかに混入。粘性ややあり、締まりややあり。黒味を帯びる。
- 10： 黄灰褐色土。8層に似るが、ブロックは少ない。性状はほぼ同じだが締まりはある。
- 11： 灰黒褐色土。細粒。細粒のシルト粒を少量含み、カーボンをやや多量含す。1.5cm大のシルトブロックをわずかに含むほか、14層に7.0～15.0cm大のシルトブロックを混入する。粘性ややあり、締まりあり。
- 12： 灰黒褐色土。細粒。赤色スコリア粒及び粗粒のシルト粒を多量。わずかにカーボン、1.0cm大のシルトブロックを混入する。粘性ややなく、締まる。
- 13： 灰茶褐色土。細粒。赤色スコリア粒・粗粒のシルト粒を多量含し、カーボン及び2.0～3.0cm大のシルトブロックを少量含む。粘性強く、やや締まる。
- 14： 灰茶褐色土。細粒。細粒のシルト粒を含み、こくわずかにカーボン・かわらけ片を混入する。粘性ややなく、締まりあり。
- 15： 黄褐色土。ロームブロック層。1.0～3.0cm大のロームブロックによる埋戻し土。粘性弱く、締まりなし。脆弱。
- 16： 黒褐色土。細粒で含有物なし。粘性強く、締まりややなし。黒味強い。
- 17： 黒褐色土。21層に似るが4.0cm大のシルトブロックをわずかに混入。
- 18： 灰褐色土。細粒で砂質。1.5cm大までのシルトブロックを少量含み、粘性強く、締まりややなし。
- 19： 灰褐色土。33層に似るが1.5～12.0cm大のシルトブロックを少量混入。粘性・締まりは同じ。
- 20： 灰黒褐色土。細粒でやや砂質。細粒のシルト粒を少量含み、かわらけ小片をやや多量。粘性なく、締まりややなし。
- 21： 灰黒褐色土。細粒。赤色スコリア粒・細粒のシルト粒を少量含み、2.0cm大のシルトブロックをこくわずかに混入。粘性ややなく、締まりややなし。
- 22： 灰褐色土。細粒。シルト粒を少量含み1.5cm大までのシルトブロックを多量。粘性弱く、締まり強い。やや明るい色調。
- 23： 灰黒褐色土。細粒。スコリア粒をわずかに含み、粗粒のシルト粒を少量含む。粘性ややなく、締まりややあり。
- 24： 茶褐色土。細粒。粉末状のローム及びローム粒を極めて多量。粘性なく、締まりややなし。
- 25： 灰黒褐色土。細粒。34層に似るが、かわらけは混入しない。
- 26： 黒褐色土。細粒。粗粒のシルト粒を少量含み、赤色スコリア粒・カーボンをこくわずかに含む。粘性ややなく、やや締まる。
- 27： 灰黒褐色土。細粒。粗粒のシルト粒及び赤色スコリア粒を少量含み、1.0cm大のシルトブロックをこく少量含む。粘性ややなく、締まりややあり。かわらけ小片を多量含す。
- 28： 灰黒褐色土。細粒。赤色スコリア粒を少量含み、粗粒のシルト粒をやや多量含す。また、3.0～7.0cm大のシルトブロックをこくわずかに含む。粘性ややなく、締まり強い。黒味を帯び、暗い色調。
- 29： 灰黒褐色土。29層に似るが、シルト粒が少なく、かわらけは含まない。粘性・締まりは同じ。
- 30： 灰黒褐色土。細粒。赤色スコリア粒をわずかに含み、細粒のシルト粒をやや多量含す。カーボン及びこく小片のかわらけを少量含む。粘性ややなく、締まる。暗い色調。黒味を帯びる。
- 31： 黒褐色土。細粒。細粒のシルト粒を少量含み、カーボンをやや多量。粘性ややあり、黒味強い。
- 32： 灰黒褐色土。34層に似るがかわらけを含まず、粘性なく、非常に締まる。
- 33： 灰黒褐色土。細粒。赤色スコリア粒及び細粒のシルト粒をやや多量含す。粘性ややあり、締まりややあり。上層よりやや明るい色調。
- 34： 灰黒褐色土。34層に似る。かわらけの混入量少なく、シルト粒の含有量は勝る。また、少量のカーボンを混入する。締まりは16層と34層の間。
- 35： 灰茶褐色土。15層に2.0～4.0cm大のシルトブロックを混入した層。15層より若干締まる。
- 36： 灰黒褐色土。木根による攪乱層。脆弱。
- 37： 灰黒褐色土。細粒。赤色スコリア粒を含むほかに含有物なく、黒味が強い。粘性弱く、やや締まりがない。
- 38： 灰褐色土。細粒で粘質。赤色スコリア粒を含み、1.0～3.0cm大の粘土ブロック及び粘土粒を多量含す。また、肺を多く含み、カーボン・粉末状の貝殻も少量含む。粘性強く、締まりややあり。
- 39： 灰黒褐色土。粘土粒・灰・カーボンを多量。細粒で肌目こまやか。部分的に粉末に近い再編の貝を混入。
- 40： 赤褐色土。47層が被熱赤変化したもの。場所によって赤～橙色になる。
- 41： 純貝層。アサリ・シオフキなどの二枚貝を主体とする。若干灰褐色土を混入する。H貝層。
- 42： 灰黒褐色土。細粒でやや粘質。赤色スコリア粒及び焼土ブロックをわずかに含む。また、貝層下との境には特にカーボンが入る。粘性強く、締まりややなし。
- 43： 灰褐色土。灰及び粉末状の貝細片を主体とする腐炭層。
- 44： 赤褐色土。41層と47層の被熱赤化範囲。
- 45： 黒褐色土。含有物はほとんどなく、粘性やや強く、締まりややなし。南よりでは被熱によりやや硬質となる。
- 46： 灰黒褐色土。細粒。スコリア粒を多量含し、細粒のシルト粒をやや多量含し、カーボンも少量含む。黒味を帯び、暗い色調。南側ではスコリア粒の混入量が少ない。
- 47： 灰茶褐色土。細粒で緻密。粗粒のシルト粒を多量含し、こくわずかに赤色スコリア粒を混入する。粘性やや弱く、締まり非常に強い。全体に明るい色調。
- 48： 灰黒褐色土。細粒。粗粒のシルト粒をやや多量含し、1.0cm大のシルトブロックをこくわずかに含む。粘性強く、やや締まる。また、西壁の北より部分にはスコリア粒が集中し、カーボンを混入するが同じ層としてとらえた。
- 49： 灰茶褐色土。細粒。粗粒のシルト粒を含み、5.0cm大のシルトブロックをまんべんに含む。一部ではブロックが主体となり南西ではブロックはわずか。粘性ややあり締まる。上面が地業面。



第6図 調査区境土層堆積状況

### コンクリート地下構造物（第7図・写真6）

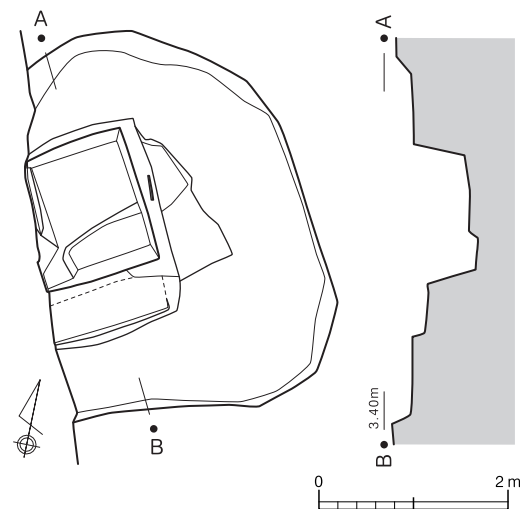
本址は調査区西壁際中央のA～B-2～3グリッドに位置し、一部を調査区外へと延ばしている。4.40×3.00m、深さ0.16mほどの大きく不整の楕円形を呈した浅い掘り込みの中央西寄り付近に、2.20×1.45m、深さ0.12mほどの矩形の掘り込みを有し、その北西側縁辺付近から内法で1.45m×1.15mほどの平面形状が長方形を呈するコンクリート製の構造物を構築している。深さは平均0.60mほどで、南側に寄った部分では約0.06mほどの高低差を持って一段深く設えている。また、周辺の岩盤からのコンクリートの厚みは、平均で15cmを測り、東側ではセメントが岩盤に染込み、モルタル状に変質している部分が認められた。

掘り込みはほぼ垂直に近く設えられているが、西側の上方では一段を持っていた。また、西南側の底面は約35cmほどの幅で調査区の外側方向へとわずかに突出した形状を呈している。

矩形を呈したコンクリート製の掘り込み内には表土に似たものが充填されていたが、コンクリート壁は炭のようなものが付着しており、周辺の堆積土は被熱し炭化した木材片を含む粘性の強い黒色土となっていた。

充填土中からは、何ら出土遺物は確認されていない。

この遺構の性格については、この全体の形状および上面に住宅が建てられていたことから、便槽のようなものではないかと考えた。底面に一段深く設えられている部分が調査区西側に寄って設けられているなら、この部分が汲み取り口とすることも考えられたが、逆の東側が一段低くなっているのが不自然である。また、コンクリートの周囲に設けられている浅い掘り込みについてもわざわざ設ける必要もなさそうである。現在横浜市立大学がある一帯は戦時中に海軍工廠があり、御伊勢山と権現山中には防衛施設が設けられていたことが発掘調査によって確認されている。その内のひとつに高射機関銃台座跡があったが、本址の形状にも似通っている。このため、本遺構についても海軍関係の施設であった可能性がある。



第7図 コンクリート地下構造物

### 石切遺構（第8図・写真7）

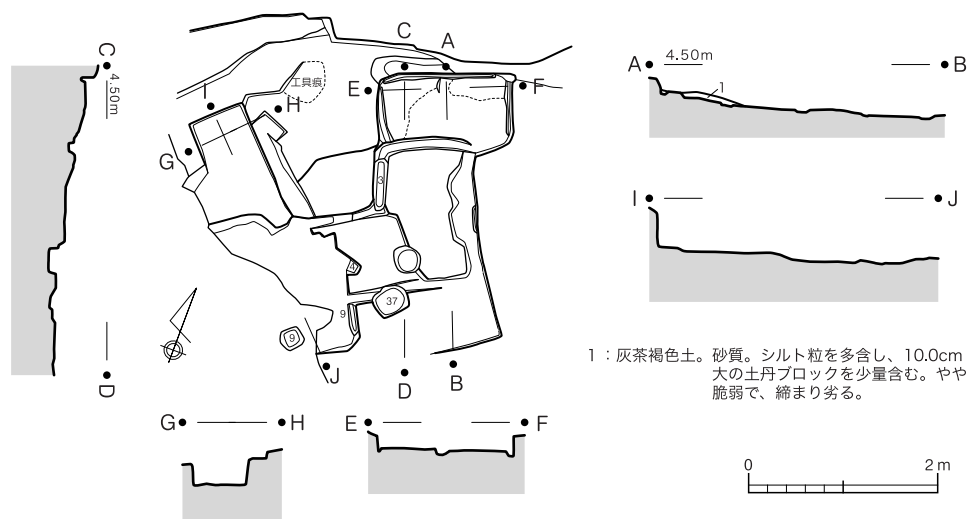
本址は、調査区の北側寄りのB-2グリッドで検出された。幅0.80×長さ1.50mほどの矩形の掘り込みが約3.70×3.15mほどの範囲内に重なり合うように検出されている。

これらの掘り込みは多くは非常に浅く、周壁はほとんど残存しておらず、周壁と底面との境には幅5cm～10cm、深さ3～9cm程度の溝状のものをもつ掘り込みを有するために、その形状を推測できる程度となっている。ただ、最も西側にある掘り込みは0.60×1.30m、深さ0.47mと深く周壁の遺存状態も良く、垂直に掘り込まれていることが分かる。

周壁沿いの溝は石を切り出す際の鑿の痕跡と考えられ、この他にも、岩盤上に鋏様の工具痕が付けられている場所も確認された。

同様のものが上行寺裏遺跡（金沢区No.52遺跡）の調査において御伊勢山やと権現山の尾根や斜面地からいくつも確認されている。遺跡周辺では、基盤層の野島層を形成する凝灰岩の露頭している箇所が多く、近代になるまでこれらの凝灰岩を切り出して使用していたことが知られている。特に関東大震災による侍従川が決壊した際には護岸修復に使用されていたようで、現在でも干潮時には侍従川の川底近くに凝灰岩が積まれている様子を確認することができる。また、近世の文献の中にも瀬戸神社裏山から石を切り出したという記載があると聞いている。現代の石切の例として、今泉（鎌倉）石の切り出し方法では、岩盤層につるはしなどで石の周囲に溝を切り、底面にヤを打ち込み石を切り、切り出した石をおこすように取り出しており、取り出された後の痕跡は本址と似通っている。

遺構内からは何ら遺物が出土していないため、遺構の所産時期は特定できない。



第8図 石切遺構

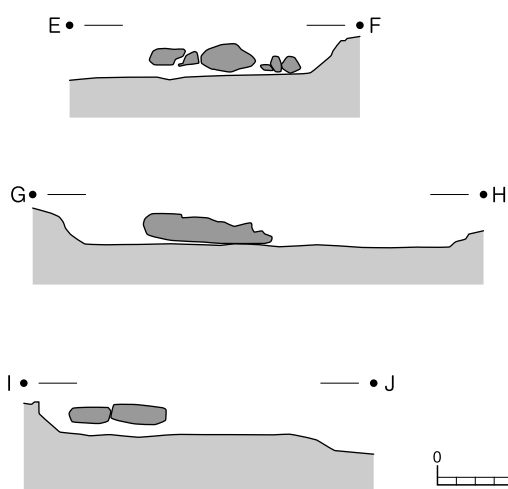
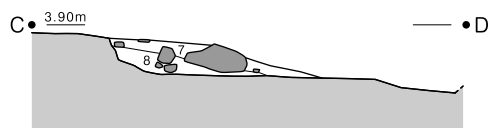
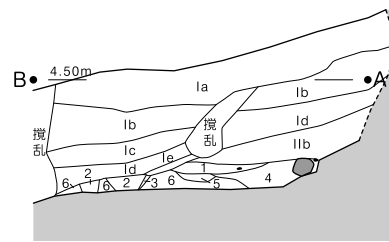
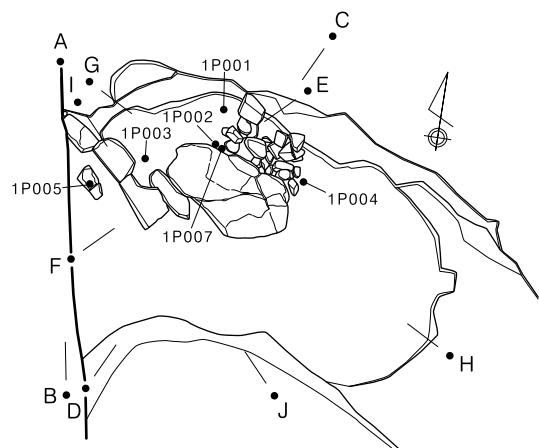
### 切石積み遺構（第9図・写真8～10）

本址は上段部のA～B-2グリッドに位置し、西側の一部を調査区外へと延ばしている。基盤層である岩盤層を掘り込んで構築され、堆積土は標準堆積層のII層相当の灰茶褐色土で、掘り込みの北寄り（斜面上部）ではシルトブロックを比較的多く含んでいたほか、上面には玉石も混入していた。

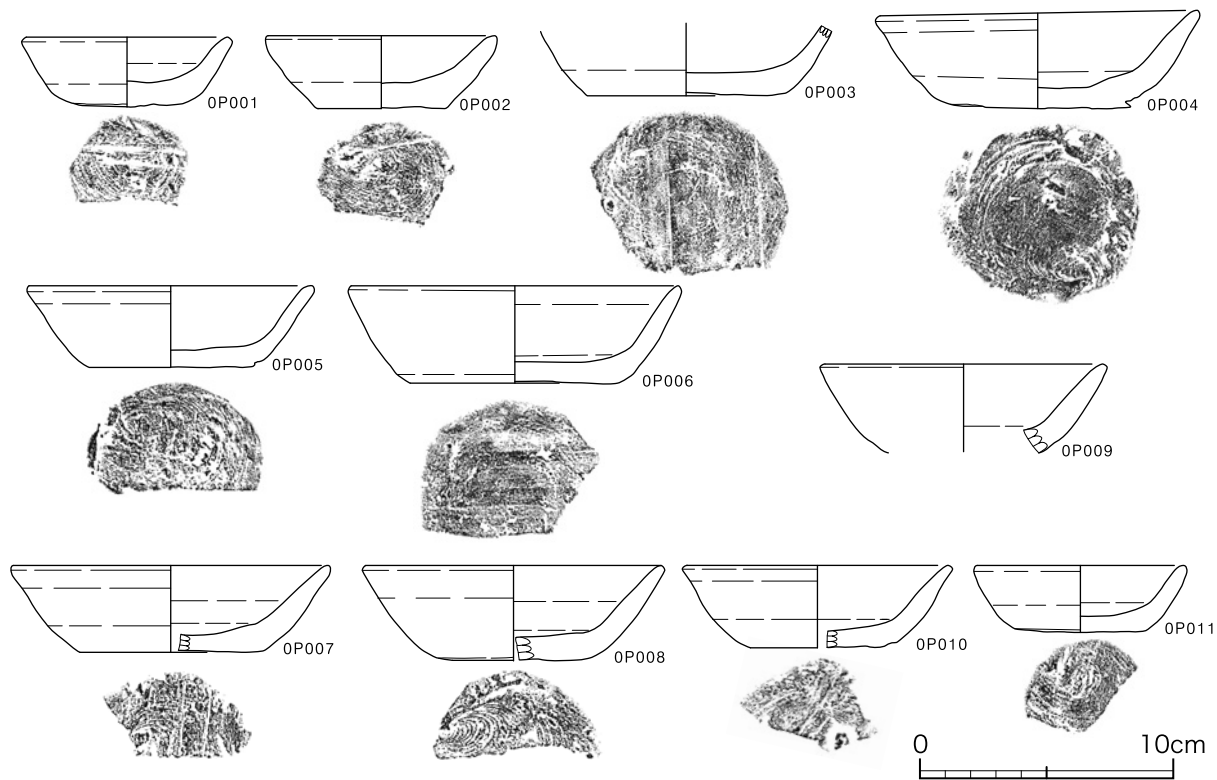
検出部での規模は4.40×3.20mほどの楕円形に近い平面形状を呈している。掘り込みは斜面下方に位置する南側は立ち上がらず、断面形状ではL字に近い形状を呈しており、最も高低差がある部分で0.35mほどとなっている。

掘り込みの北西寄りに140cmほどのきわめて大型の岩盤ブロックを置き、その周囲に30cmまでの大きさの土丹ブロックが集中していた。また、大型の岩盤ブロックの西側には面取りされた長さ60cm、幅35cm、厚さ20cm程度の泥岩の切石が並べて置かれていた。うち2つは南西側の面を揃えており、その北西に置かれたものも若干のズレはあるものの意識的に面を揃えた形跡がうかがえる。ともに掘り込みからは浮いた状態で設置されていた。また、これらの切り石の上部にはさらに1段の切石が存在していたが、表土を除去する際に、表土中に混在する土丹ブロックとともに重機で誤って取り外してしまった。

遺構の軸（向き）については、切石面が揃えられていることから、南西方向から北西に向かっているものと思われる。



- 1 a 層： 灰茶褐色土。表土。砂利。土丹ブロック、瓦礫等を含む。主に再堆積土。場所によっては腐蝕土の量が多くなる。
- 1 b 層： シルトブロック層。5～15cm大のシルトブロック主体層。ブロック間に粘性が強くやや砂質の灰褐色土を混入。脆弱。
- 1 c 層： 明灰褐色土。細粒でやや砂質。5～10cm大のシルトブロックをやや多含。ブロックが崩れシルト粒をなしたものをやや多含し、粘性やや強く、やや締まる。やや黄色味を帯び明るい色調。
- 1 d 層： 灰茶褐色土。細粒でやや砂質。5～10cm大のシルトブロックを少量含む。1 c 層とは異なり、ブロックが崩れた様子は見られないが、シルト流をわずかに含み、粘性ややある。締まりは上層に劣る。
- 1 e 層： 細粒で砂質シルトブロックは含まず、粘性ややあり、締まりややあり。やや黒味を帯び暗い色調。
- 11 b 層： 灰茶褐色土。細粒でやや砂質。細粒のシルト粒をわずかに含み、2.0cm大までのシルト岩ブロックをわずかに含む。粘性ややなく、締まりも劣る。茶色味強い。
- 1： 灰褐色土。細粒。シルト粒をやや多含し、わずかにカーボンを含む。粘性強く、締まりあり。暗い色調。玉石を含む。
- 2： 灰褐色土。細粒でやや砂質。シルト粒をごくわずかに含むほか含有物なし。本遺構に伴わない可能性がある。
- 3： 灰褐色土。2層に似るもシルト粒を含まない。
- 4： 灰黒褐色土。細粒。シルト粒をやや多含し、2.0cm大までのシルトブロックをやや多含。カーボンを少量含む。粘性強く、やや締まる。黒味を帯びる。
- 5： 灰黒褐色土。4層にシルトブロックを多含したものの。
- 6： 明灰褐色土。2.0～3.0cm大のシルトブロック及びシルトブロックがつぶれたようなシルト粒を主体とする。粘性極めて強く、締まりややあり。シルトブロックの色調から全体に黄色味を帯びる。
- 7： 灰黒褐色土。細粒でやや砂質。3.0mm大の橙褐色粒をわずかに含む。2.5～15cm大のシルトブロックを多含。やや締まりなく、粘性も弱い。
- 8： 灰黒褐色土。3.0mm大のシルト粒を含むほか含有物なし。細粒に粘性強く締まりややあり。



第9図 切石積み遺構

切石積み遺構出土遺物一覧表

遺物番号	出土地点層位	種別	法量	胎土	色調	文様・特徴
OP001	P-3	かわらけ約1/3片	口:(8.4) 底:(4.4) 高:2.8 厚:0.8	微細な褐色粒を含む	橙褐色	ロクロ成形。回転糸切り後スノコ痕。内底わずかに凸。
OP002	P-4	かわらけ約2/5片	口:(9.2) 底:(5.0) 高:2.9 厚:0.9	ごく微細な砂粒を含む	淡褐色	ロクロ成形。ややゆがむ。回転糸切り。内底はヨコに指ナデ。
OP003	P-1	かわらけ底部約1/2	底:(8.0) 高:(2.8) 厚:0.6	ごく微細な黒色粒を含む	淡橙褐色	ロクロ成形。回転糸切後スノコ。
OP004	P-2	かわらけ底部約2/3片	口:12.8 底:7.2 高:3.9 厚:1.0	微細な褐色粒を含む	橙褐色	ロクロ成形。回転糸切後。内底指横ナデ。16C?
OP005	P-14	かわらけ約1/3片	口:(11.4) 底:(6.6) 高:3.3 厚:0.6	ごく微細な砂粒をわずかに含む	橙褐色	ロクロ成形。回転糸切り。口唇がわずかに外反する
OP006	A-2グリッド表土～遺構覆土	かわらけ約1/5片	口:(13.2) 底:(8.2) 高:3.9 厚:0.7	微細な褐色粒を多含む	橙褐色	ロクロ成形。回転糸切り後スノコ痕。器面やや粗い。
OP007	P-5	かわらけ約1/10片	口:(12.8) 底:(7.4) 高:3.5 厚:0.9	微細な褐色粒を含む	淡橙褐色	ロクロ成形。口唇がわずかに反る。内底横ナデ。回転糸切り後スノコ。
OP008	P-	かわらけ約1/7片	口:(12.0) 底:(6.2) 高:3.8 厚:0.8	微細な褐色粒を含む	淡橙褐色	ロクロ成形。口唇がわずかに外反。回転糸切痕。内底横ナデ。
OP009	P-7	かわらけ口縁約1/8片	口:(11.4) 高:(3.5) 厚:0.9	微細な褐色粒を含む	橙褐色	ロクロ成形。外面に指あと?
OP010	2区覆土	かわらけ約1/4	口:(10.8) 底:(5.4) 高:3.3 厚:0.8	ごく微細な黒色粒を含む	淡橙褐色	ロクロ成形。回転糸切り後スノコ痕。口唇わずかに外反。
OP011	2区覆土	かわらけ約1/4片	口:(8.4) 底:(5.2) 高:2.6 厚:0.7	ごく微細な黒色粒を含む	淡橙褐色	ロクロ成形。回転糸切り痕。

大型の岩盤ブロック周辺、特に小さめの土丹ブロックが集中している部分から、ブロックに混じって完形に近いかわらけを含む数個体分のかわらけがまとまって出土しているが、これらを除くとかなり細片で、復原接合できないものばかりであった。出土したかわらけのうちの1点1P005は、最も南西で確認された切石の下から出土しており、切石が設置された時期と大型の岩盤ブロックが設置された時期については時間差があることが考えられる。出土かわらけは、やや器厚が厚めで体部が直線的に立ち口縁付近がわずかに外反しており、16世紀代の特徴を持っており、遺構の構築年代については16世紀の所産と考えられる。

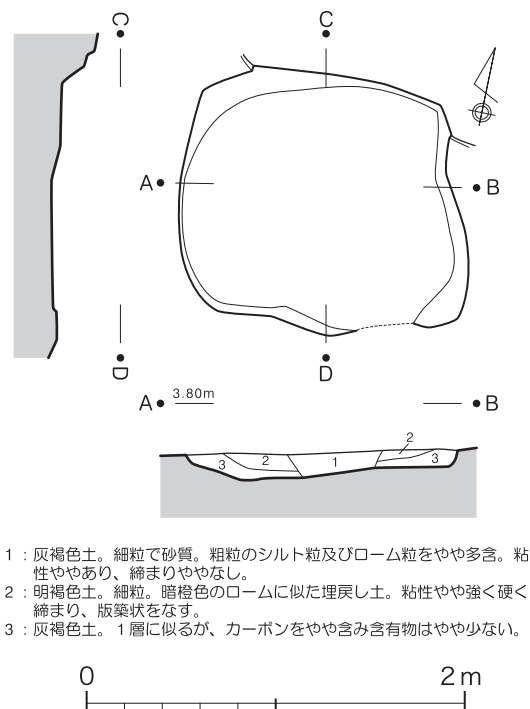
### 方形掘込み遺構 (第10図・写真11)

本址は、C～B-2グリッド、石切遺構の南側、切石積み遺構の南東に位置している。基盤層である岩盤層を掘り込んで構築され、石切遺構同様に掘り込みは浅い。

検出部の規模は、1.55×1.35mほどを測り、平面形状はわずかに崩れて入るが方形を呈している。現存する掘り込みの深さは最大でも0.21mほどで一辺をほぼ北に向けている。

周壁は、岩盤層を緩やかに掘り込んで作られているため、残存部での遺存状況はさほど悪くはない、斜面下方側の周壁はわずかに2cm程度が残っているに過ぎない。また、底面は若干の起伏はあるものの、ほぼ平滑となっている。

堆積土は標準堆積層のIb層相当の灰褐色土で、上



- 1: 灰褐色土。細粒で砂質。粗粒のシルト粒及びローム粒をやや多量。粘性ややあり、締まりややなし。
- 2: 明褐色土。細粒。暗褐色のロームに似た埋戻し土。粘性やや強く硬く締まり、版築状をなす。
- 3: 灰褐色土。1層に似るが、カーボンをやや含み含有物はやや少ない。

第10図 方形掘込み遺構

面の一部が版築状に近く硬く締まっており、人為的に埋め戻されている状況であった。

出土遺物は皆無で、遺構の構築時期および性格は不明である。

### 土坑（第11図・写真12）

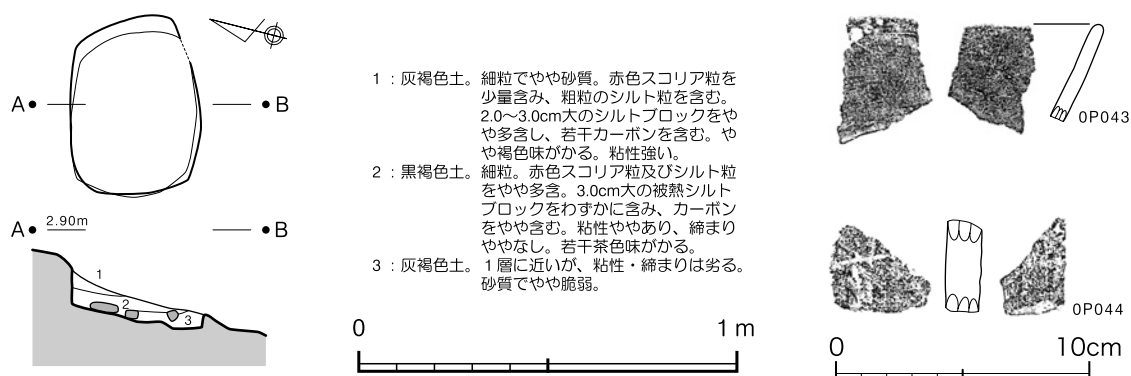
本址は、C-3グリッドに位置している遺構で、中段地業面を最大で30cmほど掘り込んで構築されている。斜面地に構築されているため、斜面上方の北側では周壁が遺存しているものの、斜面下方にあたる一部はすでに失われている状況であった。検出部での規模は0.95×0.70mほどを測り、平面形状は不整の楕円形を呈している。特に周壁の遺存は悪く、一部激しく凸凹を呈していた。

堆積土は標準堆積層のId層に似る灰褐色土および黒褐色土であったが残存部分が少なかった。また、周囲の地業層が黄褐色の硬質土であったため、堆積土との区別はつきやすかった。

坑底は、基盤の岩盤層まで達していなかったが、坑底付近が締まりのない砂質の灰褐色土であったこと、および岩盤層が風化してブロック状をなしていたため、精査時に岩盤層が露呈してしまった。

出土遺物は少ないが、少量のかわらけ片などが確認されている。

遺存状態が悪かったため土坑の性格は分らないが、地業層より新しい構築物であることは間違いない。



第11図 土坑

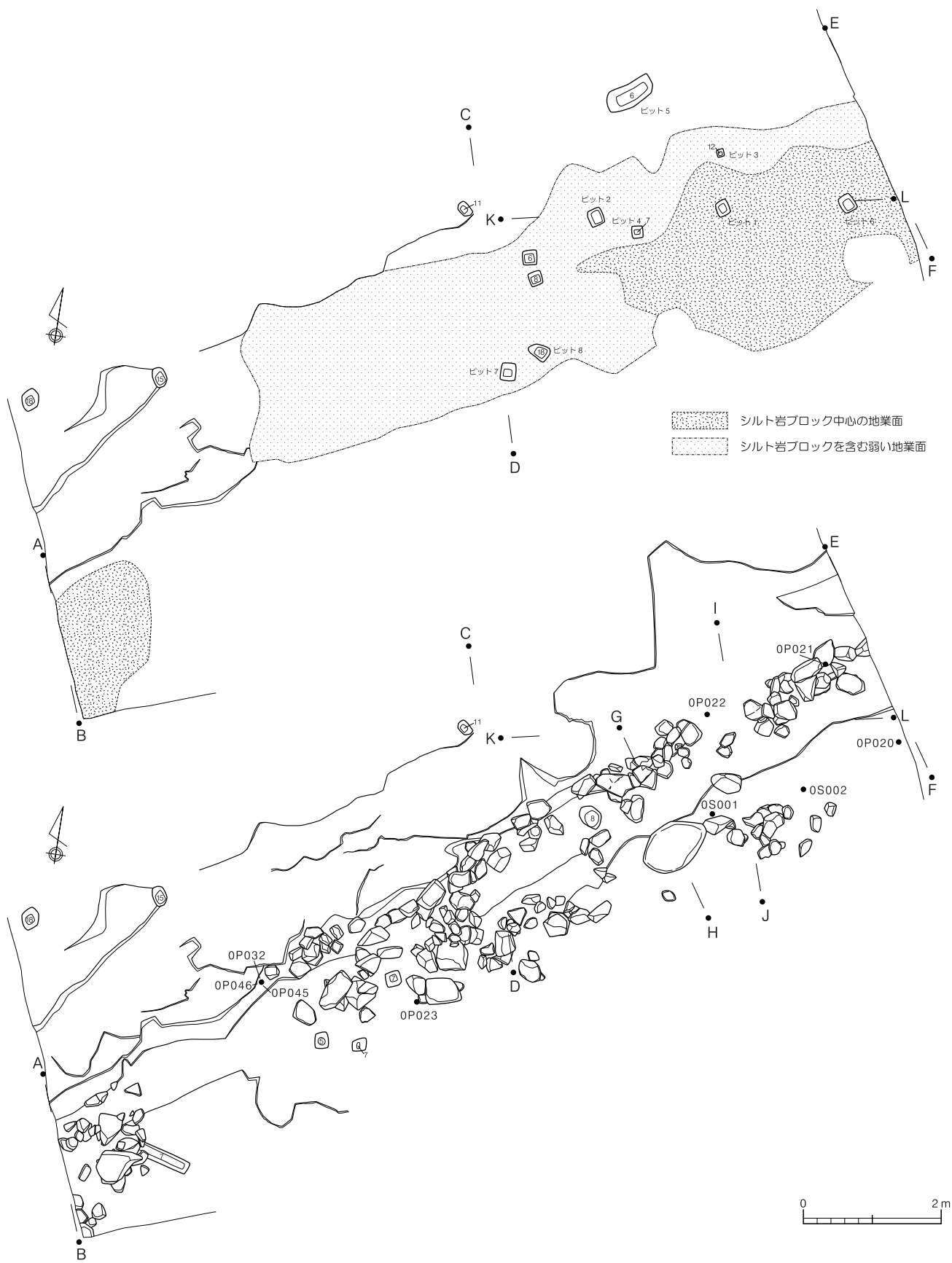
### 地業面（第12~16図・写真13~18）

今回の調査では2か所の大規模な地業面が確認された。2つの地業面のうち、調査区中央付近の中段位に検出されたものは、便宜上中段地業面とし、それより下方に存在するものを下段地業面とした。また、この他にも調査区境の断面において、明確な地業を伴わない遺構面も確認されている。

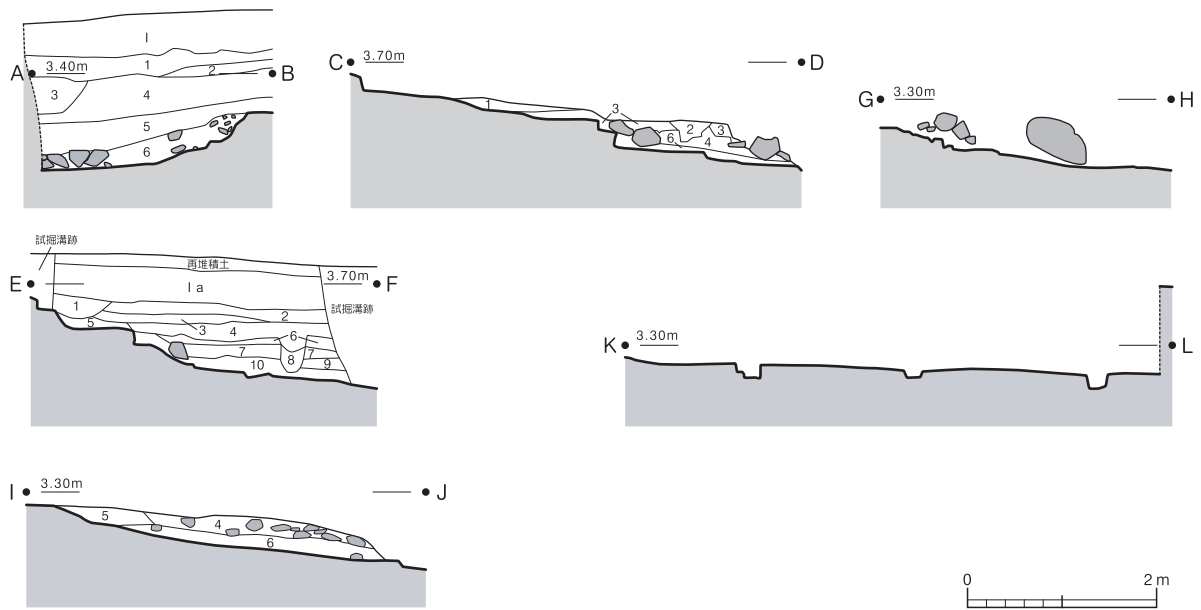
**中段地業面**はA~C-3グリッドに位置し、幅1.2~4.5m、長さ約14mを測り、細長く東西方向に延び、両端をさらに調査区外へと延ばしている。

この地業面の東側においては、小型の土丹ブロックを潰したたき締めたような様相を呈しており、平滑かつ硬く設えられていた。地業層は最大で25cmほどの厚さを呈しており、この地業層と岩盤層の間には砂質の古墳時代遺物包含層の薄い黒褐色土が堆積していた。また、地業層と地業層を覆う土層からは、1~2cm大のかわらけ小片が大量に混入していた。

東側の地業に対して西側の地業は、ブロックをたたき締めたような状況ではなく、全体的に硬質な性質をもつ灰褐色土層中に10~20cm大のブロックが点在するような様子を呈しており、東側ほど明瞭な



第12図 中段地業面



**A-Bライン土層注記**

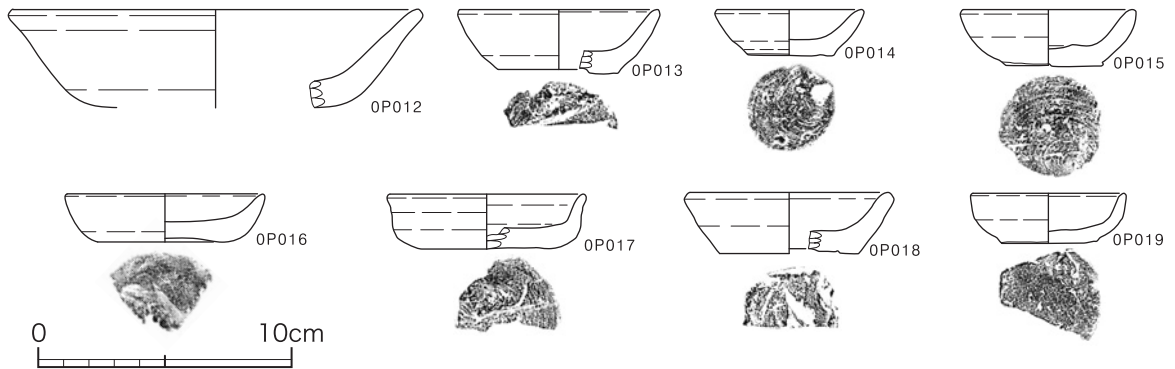
- 1: 灰褐色土。細粒でやや砂質。シルト粒をやや多含し、1.0cm大のシルトブロックを少量含む。粘性ややあり、締まりあり。
- 2: 灰褐色土。細粒でやや砂質。シルト粒を少量含む。粘性ややあり、締まりあり。
- 3: 灰茶褐色土。細粒。細粒のシルト粒を多含し、2.0~4.0cm大のシルトブロックを多含する。粘性ややなく、締まる。明るい色調を呈する。
- 4: 灰褐色土。細粒。シルト粒及びカーボン少量含む。また、橙色のスコーリア粒がブロック状に纏まってやや多く混入。粘性ややあり、締まりは1層より強い。
- 5: 灰黒褐色土。細粒。スコーリア粒を多含し、細粒のシルト粒をやや多含。カーボンも少量含む。黒味を帯び、暗い色調。
- 6: 灰黒褐色土。細粒で砂質。スコーリア粒は含まず、シルト粒を少量含む。また、1.0cm大及び7.0~30.0cm大のシルトブロックを多含する。上面が地業面となる。

**C-D・I-Jライン土層注記**

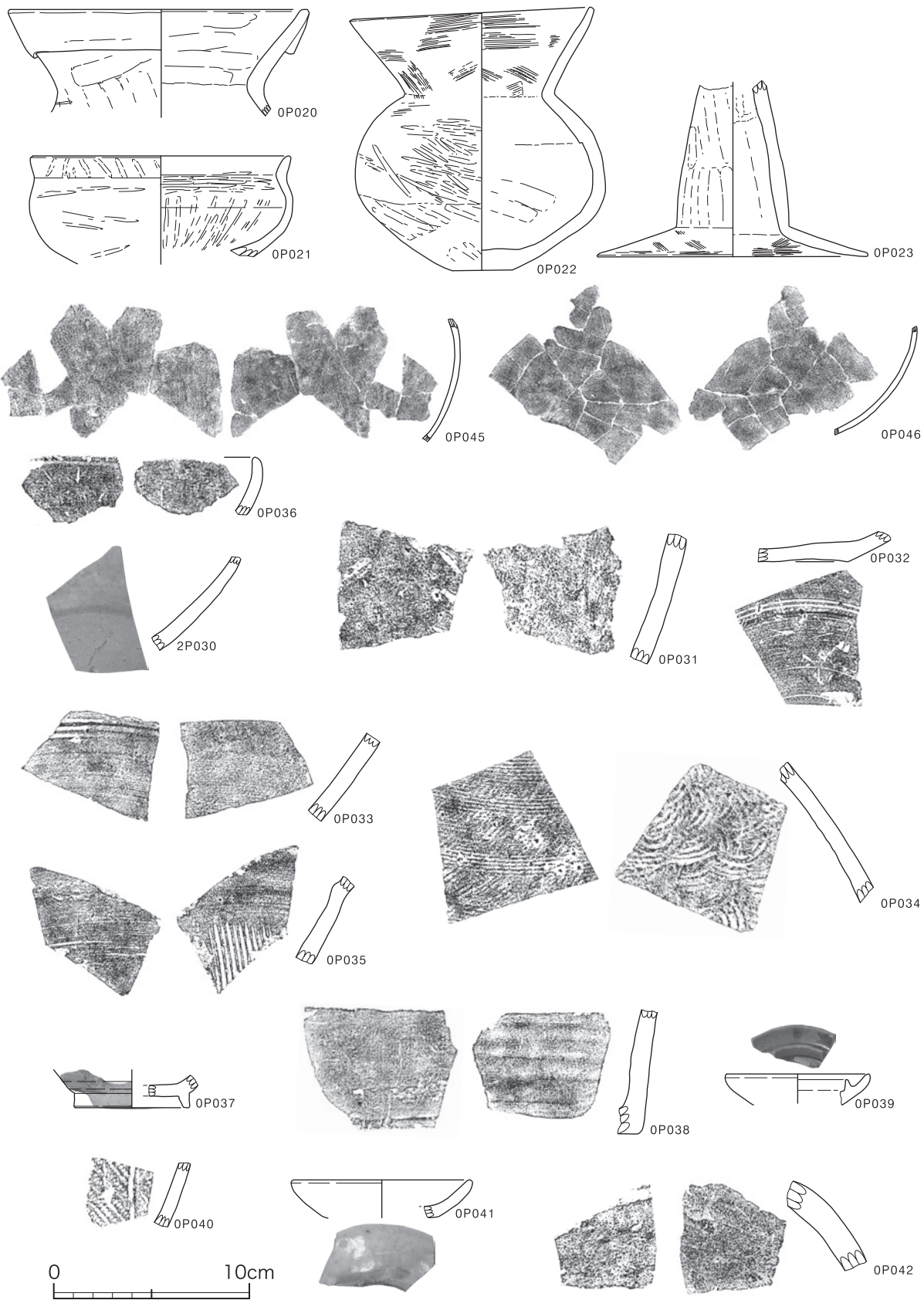
- 1: 灰黒褐色土。細粒で砂質。シルト粒及びスコーリア粒をやや多含。2.0cm大までのシルトブロックを少量含む、また、カーボンも若干含む。粘性ややあり、締まりややあり。
- 2: 黒褐色土。細粒。スコーリア粒をやや多含し、シルト粒はごく少量含む。小型のシルトブロックをわずかに含む。粘性ややあり締まりややなし。
- 3: 灰褐色土。砂質で砂粒。上層に比べシルト粒の粒子が細かく、多い。全体的に粉末状に入り明るい色調をなす。2.0cm大までのシルトブロックをやや多含。粘性強く、締まりあり。上面が地業面となる。
- 4: 灰褐色土。細粒。粗粒のシルト粒を多含し、0.5~7.0cm大のシルトブロックを極めて多含する。粘性強く、締まりあり。また、南側では1.0~4.0cm大の大型シルトブロックが主体となり、間に細かなシルトブロック、カーボンを充填。かわらけを多含。3層同様上面が地業面。
- 5: 灰茶褐色土。細粒。粗粒のシルト粒をやや多含し、スコーリア粒を含む。また、若干カーボンを混入し、3.0cm大のシルトブロックをまばらに混入する。粘性極めて強く、締まりは上層に劣る。かわらけをやや多含。
- 6: 黒褐色土。細粒で砂質。粗粒のシルト粒をやや含む、カーボン・炭化材(3.0cm以下)をやや多含する。粘性ややあるも締まりがなく、ジャリジャリした感じ。南寄りでは10~20cm大のシルトブロックを混入するが上層より洗んだ状況を呈している。

**E-Fライン土層注記**

- 1: 茶褐色土。細粒で緻密。スコーリア粒を少量含む、細粒のシルト粒をやや多く含む。わずかにカーボンを混入し、粘性なく締まる。全体に茶色味がかり明るい。
- 2: 灰褐色土。細粒で緻密。スコーリア粒を少量含む、細粒のシルト粒を多含。わずかにカーボンを混入し、若干かわらけを混入する。粘性なく、締まる。
- 3: 灰茶褐色土。細粒で緻密。スコーリア粒を少量含む、上層より細粒のシルト粒を多含。上層よりカーボンを多く混入し、3.0cm大までのシルトブロックをわずかに混入する。上層に比べ粘性は変わらないが、締まりは強く、弱い地業層と思われる。
- 4: 灰褐色土。細粒。粗粒のシルト粒を含む、カーボンをわずかに含む。3.0cm大までのシルトブロックを少量含む、多量のかかわらけ片を含む。やや粘性を帯び、締まりは2層と同じ。やや暗い色調。
- 5: 灰黒褐色土。細粒でやや砂質。シルト粒・スコーリア粒を多含し粗粒のシルト粒を少量含む。粘性やや強く、締まりあり。別土層図の1層に相当。
- 6: 灰褐色土。細粒。スコーリア粒をやや多含し、粗粒のシルト粒を少量含む。2.0~5.0cm大のシルトブロックを含む、粘性強く、やや締まる。かわらけを含む。
- 7: 灰褐色土。細粒。粗粒のシルト粒を多含し、細粒のシルト粒を極めて多含する。0.5~7.0cm大のシルトブロックをきわめて多含し、粘性強く、非常に締まる。カーボンを若干混入するほか、かわらけ片を含む。ブロック間に粘性の強いシルト質をたたき締めた感じで、上面が地業面となる。
- 8: 灰褐色土。やや砂質。粗粒のシルト粒を多含し、5.0cm大までのシルトブロックをやや多含。粘性を帯びるが、締まりはややなく、上層の部分的にたたき締めが弱かった部分に相当する。褐色土の割合が多い。
- 9: 黒褐色土。別土層図の6層に相当。細粒で砂質。粗粒のシルト粒をやや含む、カーボン・炭化材(3.0cm以下)をやや多含する。粘性ややあるも締まりがなく、ジャリジャリした感じ。南寄りでは10~20cm大のシルトブロックを混入するが上層より洗んだ状況を呈している。



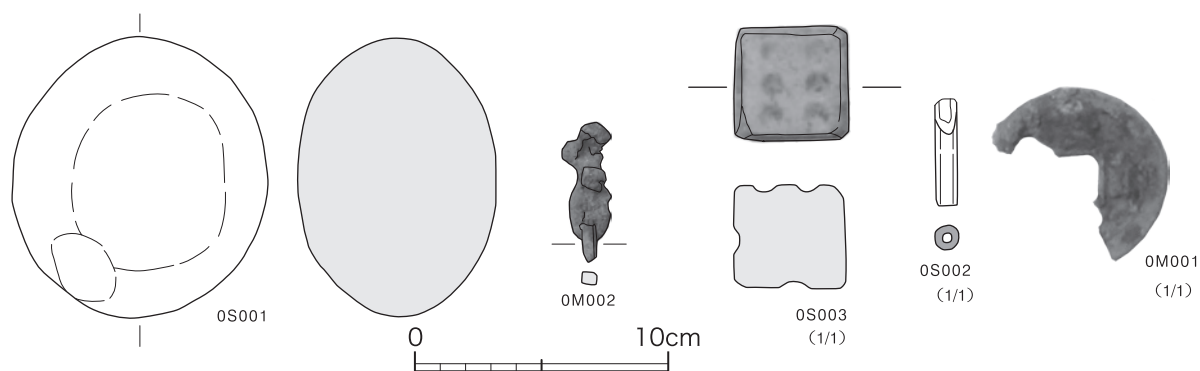
第13図 中段地業面および出土遺物



第14図 中段地業面出土遺物および遺構外出土遺物

地業面・遺構外出土遺物一覧表

遺物番号	出土地点層位	種別	法量	胎土	色調	文様・特徴
0P012	中段地業面1区 地業中	かわらけ約1/8片	口：(16.4) 高：(3.9) 厚：0.8	ごく微細な砂粒を含む	淡橙褐色	口唇がわずかに外反。底面との境不明瞭。
0P013	B-3グリッド2 区(土丹ブロッ ク?)	かわらけ約1/5片	口：(8.0) 底：4.7 高：2.6 厚：0.6 口：6.0 底：3.5	ごく微細な砂粒を含む 微細な褐色粒をわず かに含む	橙褐色 橙褐色	ロクロ成形。回転糸切り後スノコ。スノコに押され瘤状を 呈する。 ロクロ成形。回転糸切り。
0P014	B~C-2グリッ ド地業面直上	かわらけ完形	高：1.9 厚：0.6 口：7.0 底：4.0	微細な褐色粒を含む	橙褐色	ロクロ成形。回転糸切り。内底横ナテ。
0P015	B-4グリッド地 業面~包含層	かわらけ完形	高：2.3 厚：0.7 口：(8.0) 底：(5.2)	微細な褐色粒をわず かに含む	橙褐色	ロクロ成形。底面にスノコ痕?。口唇にごく少量の黒色附着 物を認める。
0P016	B~C-2グリッ ド地業面上	かわらけ約1/4片	高：2.0 厚：0.7 口：(8.0) 底：(5.7)	微細な褐色粒をわず かに含む	橙褐色	ロクロ成形。底面に回転糸切り痕。
0P017	B~C-2グリッ ド地業面上	かわらけ約1/8片	高：2.2 厚：0.4 口：(8.2) 底：(5.6)	ごく微細な黒色粒を わずかに含む	橙褐色	ロクロ成形。底面糸切り痕。
0P018	A~B-3グリッ ド土丹ブロッ ク	かわらけ約1/4片	高：2.4 厚：0.8 口：(6.2) 底：(3.9)	ごく微細な砂粒を含 む	橙褐色	ロクロ成形。底面中央若干凹む。
0P019	A~B-3グリッ ド包含層	かわらけ約1/6片	高：2.0 厚：0.5 口：15.4 高：(5.4)	ごく微細な黒色粒を わずかに含む	暗褐色	複合口縁。内外ともナテ調整。一部に赤色顔料を塗布した 痕跡。調整はやや粗い。
0P020	中段地業面P-3 ほか	壺口縁部片	口：13.4 底：13.6 厚：0.8	微細な褐色粒をわず かに含む	淡橙褐色	器面が荒れる。ミガキ調整。
0P021	中段地業面P-5	碗3/4	高：(5.2) 厚：0.4	微細な褐色粒を含む	淡橙褐色	ミガキとナテ調整。口縁の器面がある。ミガキは細かい がややあらい(特に下方)。
0P022	中段地業面P- 2	坩2/3	口：12.6 胴：12.9 底：(3.0) 高：13.6 厚：0.6	微細な褐色粒を含む	淡橙褐色	
0P023	中段地業面P-4	高坏脚部約1/3	脚径：(14.0) 高：(9.0) 厚：(0.7)	ごく微細な褐色粒を 含む	橙褐色	器面ある。ミガキ&ナテ調整。
0P030	B~C-2グリッ ド地業面上	碗	厚：0.7	ごく微細な褐色粒を わずかに含む	淡灰褐色	薄緑茶透釉を施釉。瀬戸・美濃系。
0P031	B-3グリッド2 区(地業面)	甕胴部片	厚：1.0	微細な砂粒を含む	暗茶褐色	常滑産
0P032	中段地業面P-1	鉢	厚：0.7	ごく微細な褐色粒を わずかに含む	淡灰白色	内外面に釉。ロクロ成形。
0P033	B~C-2グリッ ド地業面上	鉢破片	厚：0.8	ごく微細な褐色粒を わずかに含む	黄灰色	一部を除き内外面に施釉。
0P034	A~B-3グリッ ド土丹ブロッ ク	甕破片	厚：0.8	微細な白色粒を含む	灰褐色	外面に白い自然釉。内面にアテ具痕。
0P035	A~B-3G表土 ~遺構フク土	播鉢破片	厚：0.9	微細な黒色粒を含む	黄白色	瀬戸・美濃系。濃茶色釉。
0P036	A~B-3G包含 層	碗口縁片	厚：0.6	ごく微細な砂粒を含 む	赤褐色	内外面に赤色顔料を塗布。ミガキ調整。
0P037	中段地業面C- 2グリッド	碗底部片	高台：6.0 厚：0.6	微細な砂粒をわずか に含む	黄白色	内面に白色の釉。見込みはなし。瀬戸・美濃系。
0P038	B-4グリッド地 業面~包含層	火消壺	厚：1.0	極微細な砂粒を含む	淡橙褐色	ロクロ成形。江戸在地系。
0P039	中段土丹ブロッ クB-3グリッド	灯明皿	口：(7.4) 高：(1.6) 厚：0.5	ごく微細な黒色粒を 含む	灰褐色	鉄釉が薄く施釉。
0P040	地業層上B~C- グリッド	深鉢片	厚：0.7	微細な砂粒を含む	暗褐色	沈線及びLRの単節縄文。
0P041	中段地業面ピッ ト4	施釉皿	口：(9.4) 底：(5.8) 高：(2.0) 厚：0.6	ごく微細な褐色粒を 含む	黄白色	緑透色の灰釉。貫入。瀬戸・美濃系。
0P042	B-4グリッド地 業面~包含層	甕胴部片	厚：1.3	微細な砂粒を含む	暗茶褐色	常滑産。
0P045	中段地業面P-1	甕胴部片	厚：0.6	微細な黒色粒を多含	暗褐色	ナテ調整。外面の器面荒れる。煤状黒色物附着。
0P046	中段地業面P-4	壺胴部片	厚：0.5	微細な黒色粒を多含	暗褐色	ミガキ調整。焼成時の黒斑あり。
0S001	中段地業面S-2	敲き石	長：11.2 幅：10.0 厚：7.9			若干扁平。敲打痕はない。 小形で孔も小さい。
0S002	中段地業面S-4	管玉一部欠	長：(1.4) 径：0.3			
0S003	B-2グリッド包 含層	骰子	長：1.5 幅：1.5 厚：1.5			目の中に朱色の顔料がわずかに残る。
0M001	B~C-3G地業 層~包含層	銭				錆び著しく読めない。破片。
0M002	B-3G包含層 2区	鉄釘	長：(5.6) 幅：1.8			錆膨れ著しい。0.4×0.6cmの断面四角形を呈する。



第15図 中段地業面出土遺物

地業面を確認することができなかった。

平滑で硬質な地業面の下面は、地業層の基礎に用いられたと考えられる土丹ブロック層が検出されている。この土丹ブロックは、30cm程度のブロックを中心とし、大きいものでは、100cm以上のものも存在している。こうしたブロックのうちのいくつかは、遺構確認時において地業面上に頭を出しており、平滑で矩形を呈したブロックが同レベルに存在していたために、礎石にも見受けられた。しかし、地業面を掘り下げると同様なブロックが数多く検出され、さらにお互いのブロック間に規則性がないことから、礎石ではなく単に地業の基礎に使用されていたものであることが判明した。

また、すべての箇所ではないが、部分的に比較的並んでいるよううかがえる場所も確認されている。これらは、斜面の上方（北寄り）と下方（南寄り）に列状をなしており、これらのブロックに挟まれた範囲に、小型のブロックとたたき締めた土丹が充填されていたことから、大きめのブロックである程度の範囲を定め、その範囲内を道路状に地業していたものと考えられる。

また、東側の地業面上からはピットがいくつか検出された。しかし、検出されたピット間には規則性がうかがえず、明確に建物の柱穴と考えられるものは確認されなかった。

地業面が構築された時期については、地業層中に含まれていたかわらけの特徴から16世紀前半～中葉と考える。

**下段地業面**はA～C-3～4グリッドに位置し、中段地業面とは約40cmの高低差をもっている。最大で7.00×8.00mほどの範囲となっており、検出部では調査区の関係上三角形に近い形状を呈し、北西側においては平坦な岩盤層とほぼ同じレベルを呈している。

中段の地業層が黄灰褐色の明るい土丹ブロックをたたき潰して地業されているのに対し、こちらは、灰茶褐色土を主体としたなかに橙色の土丹ブロック（5～7cm程度）をまばらに散らして地業しており、たたき締めた地業層（硬化層）の厚さは最大でも15cmと薄い。北西側で露呈している岩盤層は露呈部では平坦であるか、ここを境にブロック状をなし傾斜し始める。このブロックは大きなものでは2mを越えるものもあり、元々は岩盤層音ひと続きであったものが、地殻変動や海進海退などによって基盤層から剥がれ落ちるように海側に移動したような状況を呈していた。こうしたブロックの間に小さなブロックを詰めるようようにして平坦にするための地業であることが、調査区境の土層堆積から見受けられた。この地業層の下にカキの貝層（I貝層）があることが確認された。地業層中には遺物はほとん

ど含まれておらず、いくつか見つかったものでも実測可能なものは存在していなかった。

下段地業面の構築時期については、地業層直上の堆積土が標準堆積層のId層相当の灰茶褐色土であることからみて江戸時代に入ってから地業層であるものと判断した。

### I 貝層（第16～17図・写真19～22）

本址は下段地業面下で検出された貝層で、約4.00×5.00の範囲で検出され、東側並びに南側がさらに調査区外へと延びている。なお、東側のエリアについては、調査による発生土を仮置きスペースにあてていたため、この部分について先行し深掘りを実施し、貝層の堆積状況を掴むこととした。その結果、1mを測る厚さのカキ層が検出された。しかし、通常の貝塚等で見られるような堆積状況ではなく、まったくといっていいほど遺物の混入も見られなかった。そこで、横浜市教育委員会と協議を行なったところ、検出された貝層が一般的な貝層とは異なっていること、および発生土の仮置き場の確保という点から、試掘溝（トレンチ）を設定し部分的な調査をするという方向性で纏まった。

試掘溝は3×2mのトレンチ（貝層トレンチ1）を基本とし、貝層の範囲を確認する目的の補助トレンチ（貝層トレンチ2～4）の都合4か所に設置し、トレンチ調査を実施した。

調査の結果、下段地業面の下部に一部間層を挟むものの、1.50mほどの厚さの貝層が検出された。

特に貝層トレンチ1の東側では、基間層もなく盤層（砂層・岩盤ブロック層）まで概ね貝層となっていた。

これらの貝層は純貝層と混土貝層とに分層することができた。貝層トレンチ2では貝層間に上部に土丹ブロックを敷き並べたような灰黒褐色土（10）が存在し、この層の下にさらに貝層があることが確認され、貝層中にも地業が施されていることが判明した。また、貝層トレンチの底面北側では土丹ブロック層と砂層との間に自然の倒木が検出されている。

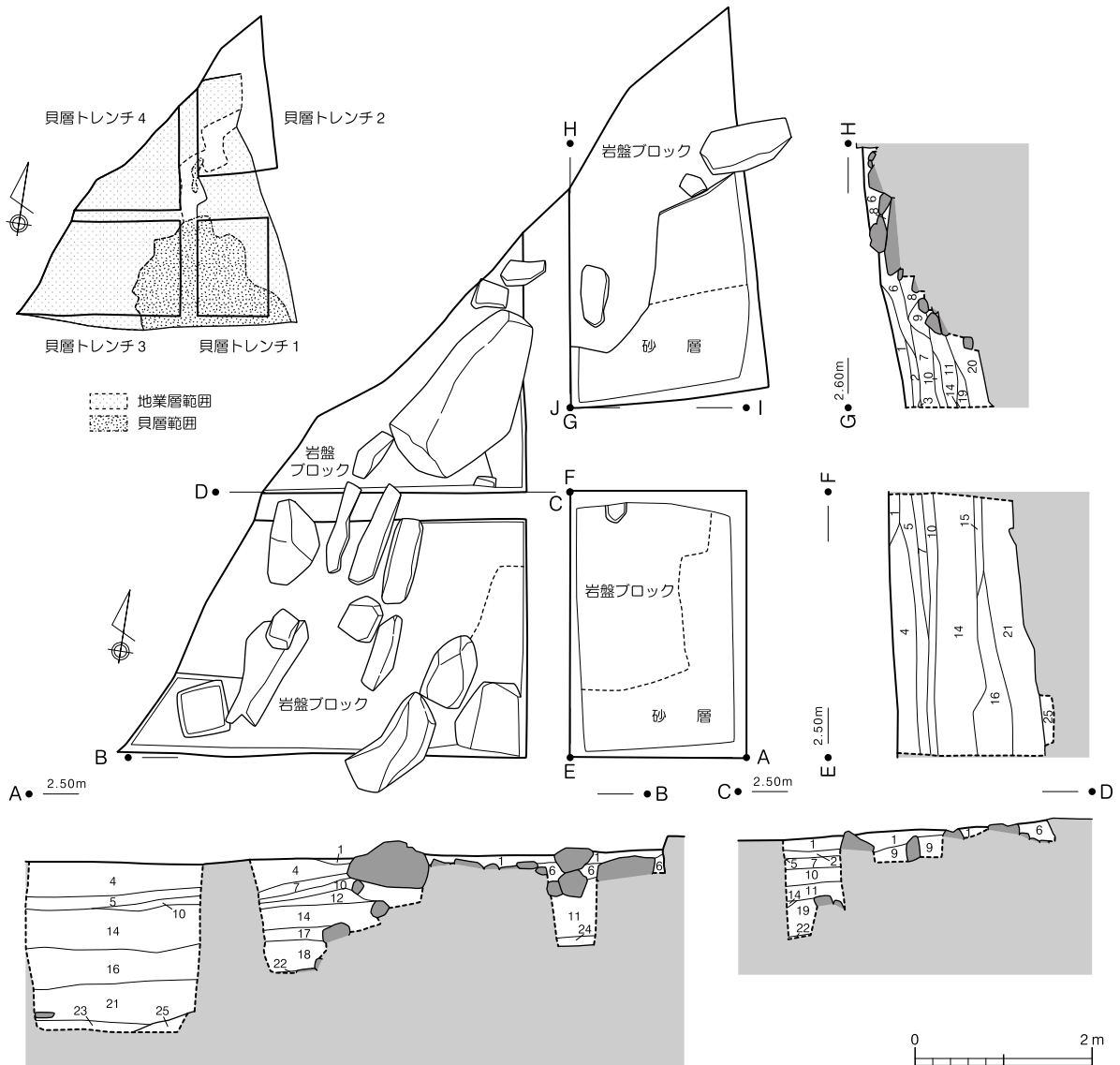
出土遺物は少なく、貝層中の間層から古墳時代中期の高坏脚部（0P024）と縄文時代早期末の条痕文系の深鉢土器の破片（0P025～0P028）が出土している。何れも貝層に直接伴うものではなく、二次的に紛れ込んだものとする。

貝層の性格については、貝類組成を行なったところ、カキ殻の大きさがほぼ一定となっていることから、養殖カキであることが指摘されている。これだけの大量のカキのみで形成されている点からみて、個人消費レベルではなく、商いなどに伴って発生したカキ殻を廃棄したものとする。

### 遺構外出土遺物（第14図）

調査区の大半は現代住宅が建てられていた関係から上面が削平され、表土直下が岩盤層であったり、すぐ憩遺構の覆土であったりしたため、あまり遺物包含層は残っていなかった。こうしたなかでいくつかの遺物が確認されている。また、表土除去時に取り上げ、どの遺構に属するか定かでないものも含んでいる。

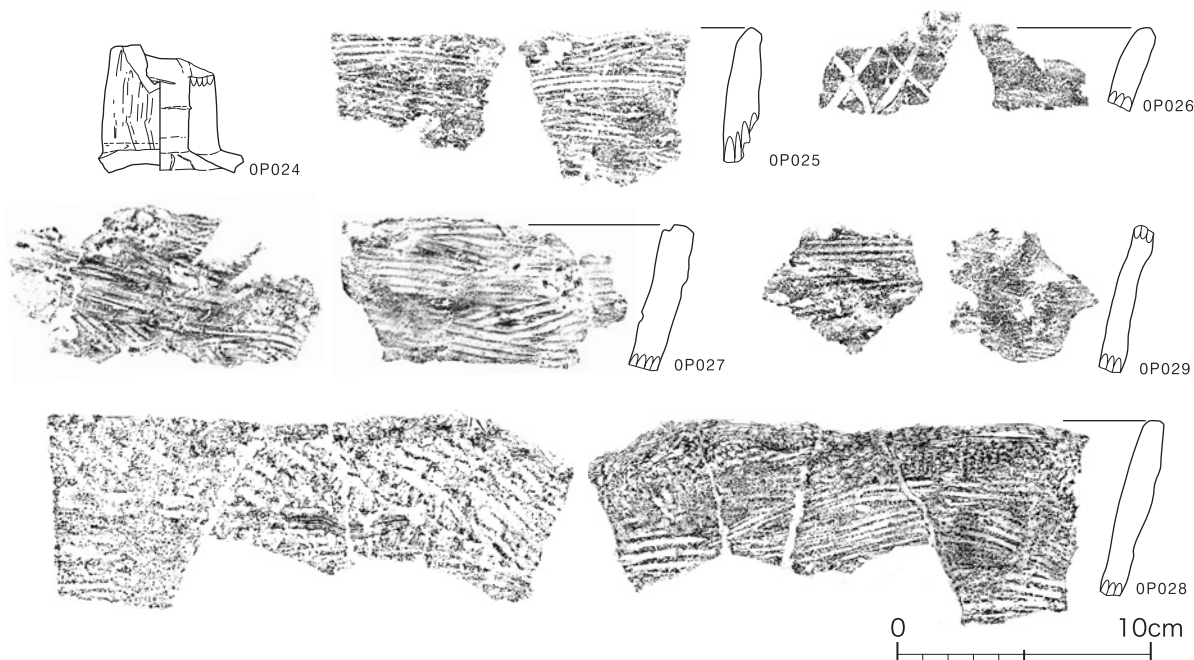
中段地業面を取り外す過程で、地業層の下部に古墳時代の遺物包含層が遺存していることが判明した。この層の大半は地業によって上部を破壊されてしまっていたが、斜面上方にあたる部分では、基盤層をなす岩盤がえぐれており、こうした部分などに古墳時代の遺物が集中して見つかっている（0P0450・



- 1: 灰茶褐色土。細粒。シルト粒をやや多含し、2.0~7.0cm大のシルトブロックを極めて多含。粘性強く締まりあり。上面が地表面。茶色味がかりやや明るい。
- 2: 灰褐色土。細粒で砂質。¥含有物はほとんどなく、わずかにシルト粒を混入。粘性弱く、締まりもややない。
- 3: 混貝土層。2層に破碎カキを混じる。粘性は2層よりあるが、さほど強くない。
- 4: カキ純貝層。5層に似るが全体的に黄色味がかった貝が多く、締まりに欠け、もそもそと脆弱。また、部分的に炭化材を多く含むが明瞭に分層できない。
- 5: カキ純貝層。5cm以上の大型のカキと破碎カキからなる。貝層中に灰褐色土をわずかに混入し、こくわずかに4.0cm大以上のシルトブロックを含む。
- 6: 灰褐色土。2層に1.5~3.0cm大のシルトブロックを少量含む。2層に比し締まりやや強い。
- 7: 灰黒褐色土。細粒で緻密。細粒のシルト粒・スコリア粒をやや多含し、カーボンを含む。部分的にシルトブロックをわずかに含む。粘性・締まりややあり。
- 8: 灰褐色土。6層に似るがブロックは小型で少ない。6層に比べ締まりが非常に強い。
- 9: 灰褐色土。6層と8層の間くらいにブロックをの混入量をもつ。粘性はあまりないが、締まりは非常に強い。8・9層は基盤のシルト岩ブロック間に入り込む層。
- 10: 灰黒褐色土。細粒で緻密。シルト粒を少量含む。3.0~5.0cm大のシルトブロックを多含し、少量のカーボンを含む。ブロックの上面は面をなし地表面となる。7層に比べ黒味が強く暗い。粘性ややあり、締まりは非常に強い。
- 11: 灰黒褐色土。細粒。粗粒のシルト粒をやや含み、こくわずかにスコリア粒を含む。粘性はやや強いが、締まりはさほどない。
- 12: 灰黒褐色土。灰黒褐色土。細粒。シルト粒をわずかに含むほか含有物はなく、粘性強く、やや締まる。黒味強い。
- 13: カキ混土層。破碎カキを黒褐色土に多量に混入する。やや粘性を帯び、締まりはあまりない。全体に黒味が強く、14層との間にカーボンを多量に混入し、部分的に層をなす。
- 14: カキ純貝層。大型のカキと破碎カキからなる層。5層より土の混入率は低い。層は部分的に上層に破碎貝、下層に完形貝が多く確認されるが明瞭に分層はできない。かなり締まる。
- 15: カキ混貝土層。灰黒褐色土に約50%貝を混じる。粘性強く、締まりややなし。やや茶色味がかかる。
- 16: カキ純貝層。大型のカキと破碎貝からなる。粘性やや強く、締まり強い。
- 17: カキ混貝土層。混入率約50%。細粒の灰褐色土にカキを混入。粘性やや強く、やや締まりなし。
- 18: カキ純貝層。14層に似る。やや破碎貝が目立ち、締まりやや劣る。
- 19: 灰褐色土。やや砂質。わずかにシルト粒とカーボンを含む。粘性はややあるが、締まりなし。
- 20: 灰褐色土。やや砂質。19層に2.0~4.0cm大のシルトブロックを混入。部分的にはかなり砂質となる。
- 21: カキ混貝土層。やや砂質。細粒の灰褐色土に破碎貝を50%ほど混入。粘性はややあるが、締まりは12層より強い。
- 22: 灰褐色砂層。細粒で緻密。やや黒味を帯びる。
- 23: 黒灰色砂層。一部上層よりの破碎貝が沈み込んでいる。
- 24: 砂層。3cm以下の円礫（やや角ばるものも含む）を主体とする。
- 25: 岩盤ブロック層。一部ブロック状をなしている。非常に硬い。

第16図 下段地表面および貝層

0P046)。また、最も東側よりのエリアでは、埴 (0P021) や埴 (0P022)、壺 (0P022) の破片が見つかっており、周辺からは、頭蓋骨破片や管玉0S002も見つかっている。0P040は縄文時代後期土器片、でその他の0P030以降の遺物は中世ないしは近世の遺物となっている。近世遺物については、昭和62年度調査地点から移動してきたものの可能性が高い。



第17図 貝層トレンチ出土遺物

Ⅰ 貝層・土坑出土遺物一覧表

遺物番号	出土地点層位	種別	法量	胎土	色調	文様・特徴
0P024	貝層トレンチ1	高坏脚台破片	径：4.5 高：(5.1) 厚：1.1	微細な砂粒を含む	橙褐色	外ミガミ調整。内ヘラナデ。
0P025	貝層トレンチ1	深鉢口縁部片	厚：1.3	微細な砂粒を含む	暗褐色	内外面に条痕文。
0P026	貝層トレンチ2	深鉢口縁部片	厚：1.1	ごく微細な砂粒を含む	暗褐色	外面に格子状文。口唇に刻目。
0P027	貝層トレンチ2	深鉢口縁部片	厚：1.3	ごく微細な砂粒を含む	暗褐色	内外面に条痕文。
0P028	A～B-3グリッド	深鉢口縁部片	厚：1.2	微細な砂粒を含む	暗褐色	Lの無節縄文およびヘラ状の押しき文。内は条痕文。波状口縁。
0P029	貝層トレンチ2	深鉢口縁部片	厚：0.9	微細な砂粒を含む	暗褐色	内外面とも条痕文。外上部に刺突文。
0P043	1号土坑覆土	高坏口縁部片	厚：0.6	ごく微細な褐色粒を含む	暗赤褐色	内外面に赤色顔料を塗布した痕跡。
0P044	1号土坑覆土	瓦破片	厚：1.4	微細な褐色粒を含む	灰白色	軽しような焼き。

(3) 平成23年度調査 1 (京浜急行擁壁部分)

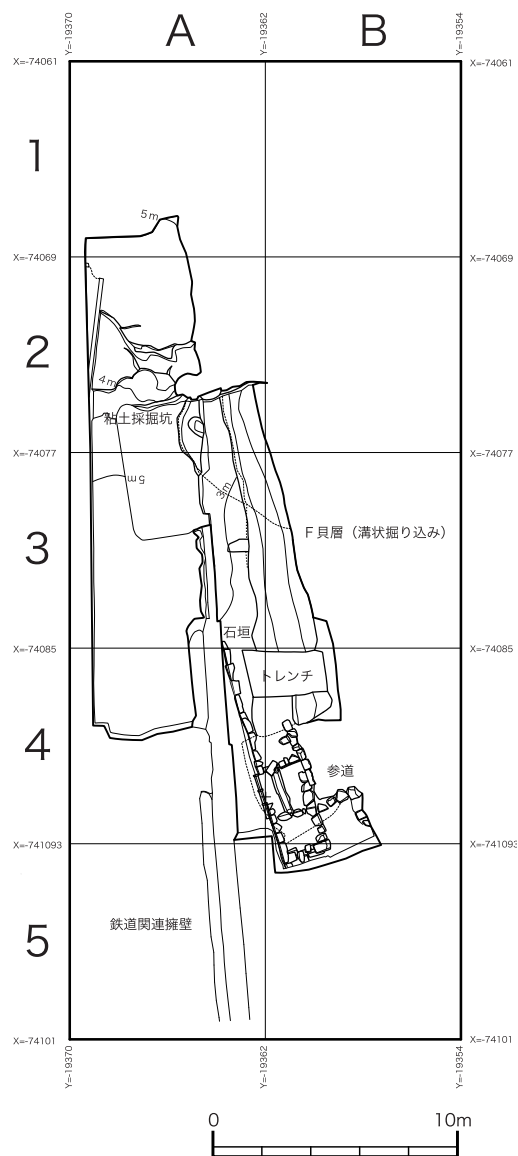
調査地点概要 (第18図)

平成23年度は2地点の調査を行なうため、調査用のグリッドについては2つの調査区を網羅すべく8mメッシュの包含をかけ、西側隅よりから北西より東西方向にA～C、南北方向に1～4の番号を付し、さらに2mの小グリッドを同様に付した。調査地点は仮設のバスターミナルならびに遊興施設と京浜急行の線路に挟まれ部分で、当初計画では調査対象面積150㎡のうちの擁壁となるおよそ80㎡の範囲を調査する予定であった。現地調査は平成23年10月12日から実施した

しかし、当初計画していた部分の表土を除去したところ、表土下に鉄道関連と思われる擁壁が検出さ

れた。この擁壁は調査以前から調査区南側では露出していたものの、北側までは続いているものと思われていたが、実際には土砂の下に擁壁が遺存しており、埋もれていた。調査区の大半はこの擁壁の裏込め部分にあり、大型凝灰岩ブロックが乱雑に詰め込まれており、調査区内はこの擁壁によって破壊されているものと考えられた。そこで、検出された擁壁の外側（東側）下部を確認するべく掘削を行ってみた。その結果、擁壁の外側並びに擁壁下に江戸時代の貝層が残存していることが確認された。このため、調査区を当初計画の位置から東側に直し調査を行なう必要が生じた。しかし、この部分は委託契約の対象区域外にあっていたため、委託事業発注者と調整する必要があった。これを受け、10月17日に現地において事業発注者である横浜市都市整備局金沢八景駅東口開発事務所の担当者、横浜市教育委員会生涯学習文化財課職員ならびに工事請け負い業者とともに打合せを行ない、調査範囲を変更して調査することが決定された。なお、調査区の南限に関しては、現状において現状で使用している排水施設があり、それを損なわない範囲までの掘削ということになった。

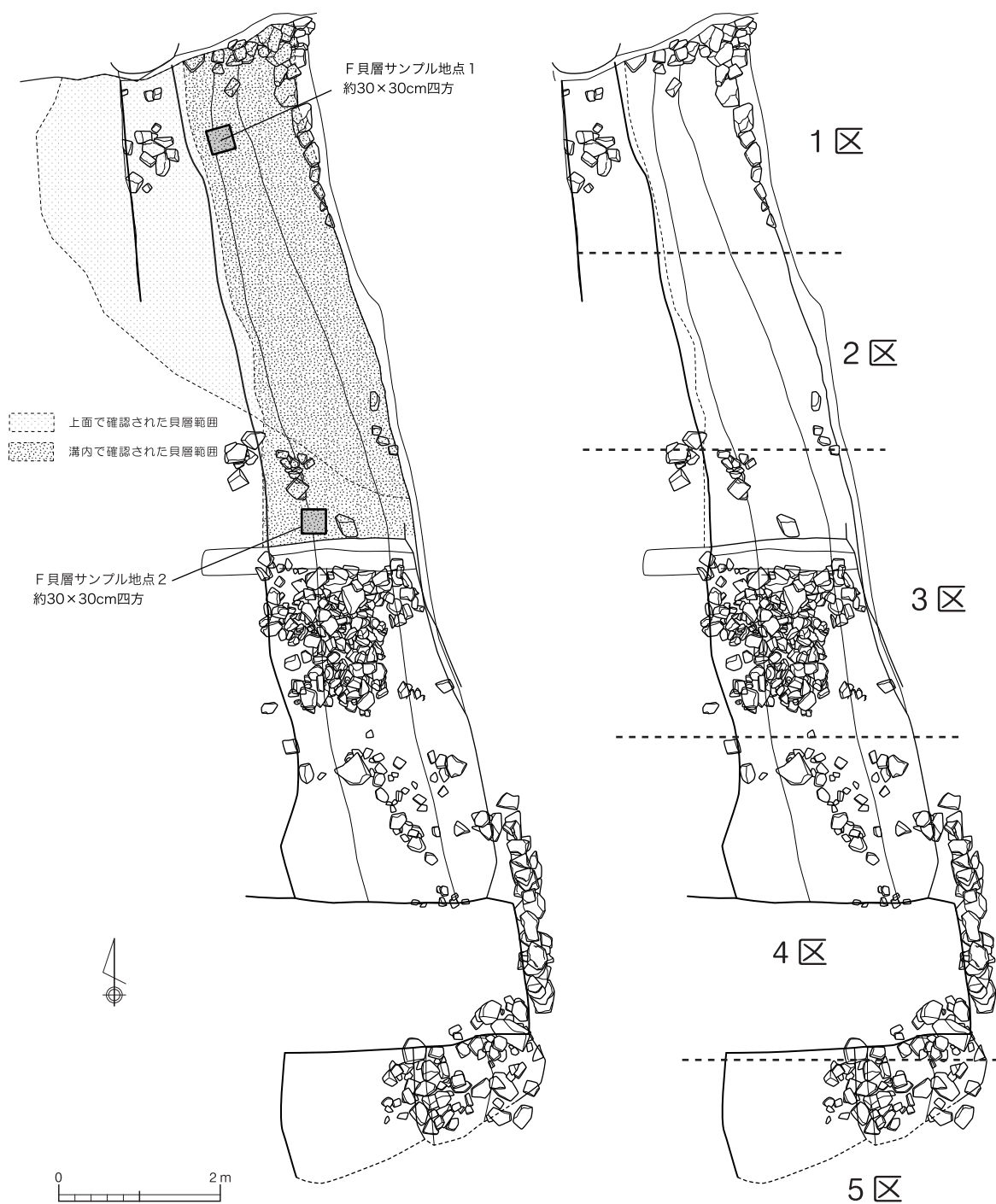
新たに設定された調査範囲を貝層を追って南側に堆積土を除去していったところ、凝灰岩のブロックが新たに検出された。こうしたブロックに混じって面取りされた凝灰岩の切石があることが判明した。この切り石周辺を精査した結果、調査区の南側に露出している千葉屋敷石垣方向に延びており、この石垣の続きである可能性が考えられた。また、貝層は一部この石垣の下に潜り込んでいた。遺構の調査にあたっては、効率よく調査を進めるため、北側から貝層を調査しつつ、石垣を同時併行で調査することとし、11月11日の調査区境の土層図の完成をもって現地作業を終了した。なお、最終的な調査面積は159㎡となった。



第18図 平成23年度調査区遺構分布図

### F貝層 (第19～33図・写真44～55)

鉄道関連と思われる擁壁の下面レベルで貝層が確認されたことで、擁壁の東側ではこの面を遺構確認面として調査したところ、約6m×3.5mの範囲に貝層が分布していることが分かった。また、この貝層の下の一部には溝状を呈する落ち込みがあり、その堆積土中にも貝層が形成されていることがボーリング調査によって確認された。これらの貝層についてはそれぞれを別の貝層として扱うのではなく、ひとつの貝層として取り扱うこととし、昭和62年に隣接する地点で貝層が調査されていることから、これまでに続くF貝層として取り扱うこととした。

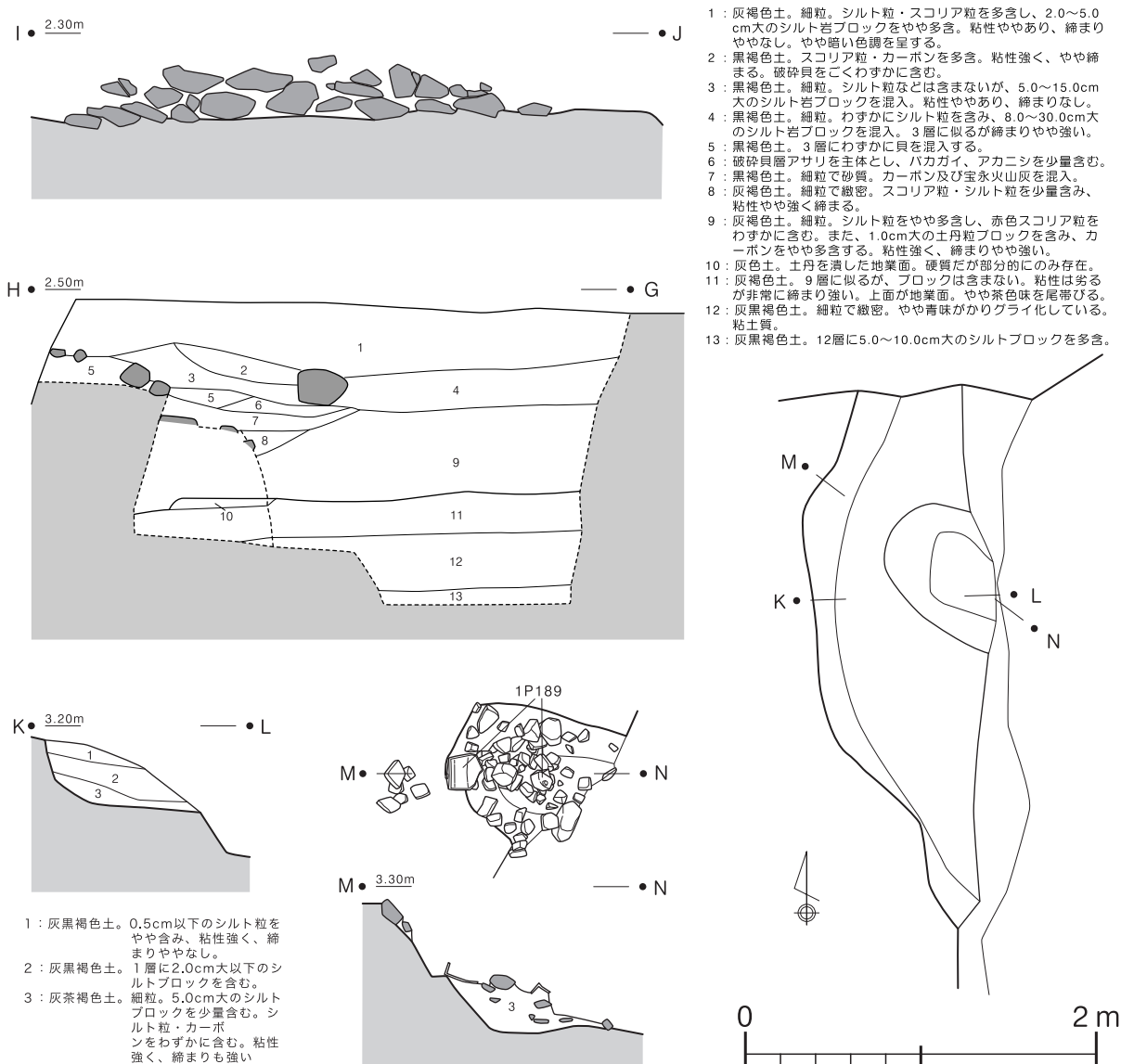


第19図 F貝層出土範囲および調査区割り図

北側で検出された溝状の掘り込みを覆う貝層については、擁壁の下に延びていることがすでに分かっていた。しかし、擁壁を取り外すには建設重機を使用しなければならず、すでに検出している部分の貝層を調査しないことには取り外しができないことから、やむを得ず2回に分けて調査を行なった。貝層は、垂直方向には確認できるだけで9枚の貝層であることが判明した。貝層間には間層もあり、溝状の落ち込みを埋めるような（または埋まっていく）形で形成されている。この溝状の掘り込みの北端は基盤層の崖にぶつかっており、この部分には凝灰岩のブロックが乱雑に積み上げられていた、この様なブ



第20図 F貝層



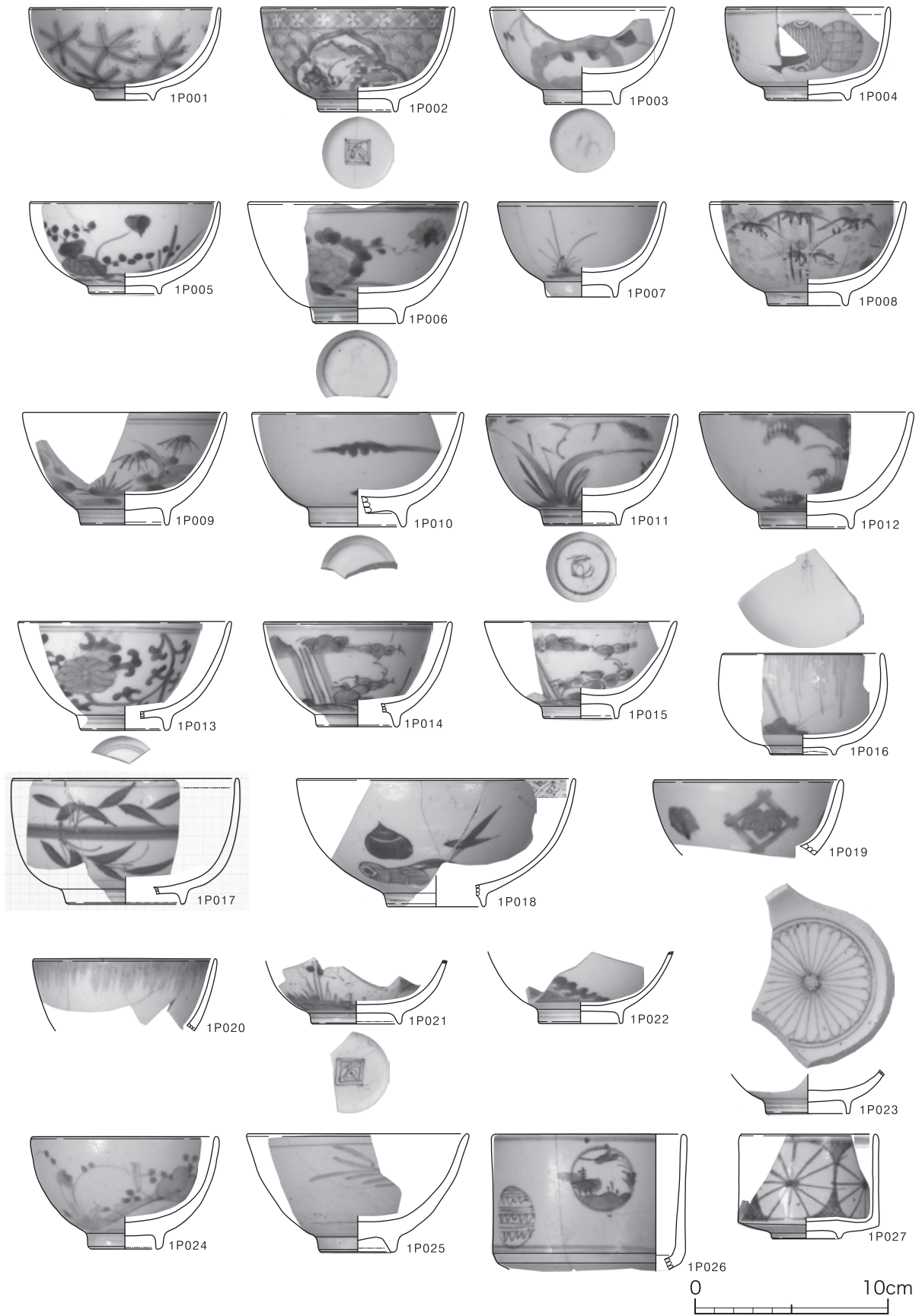
第21図 F貝層試掘溝および北西掘り込み

ロックは溝状の掘り込みの東側の何か所かで確認されており、溝の範囲（幅）を示すものとして人為的に積まれたものかあるいはいたずらに貝が散乱しないよう積まれたものと思われる。しかし、その大半は後世の攪乱によって破壊されている。

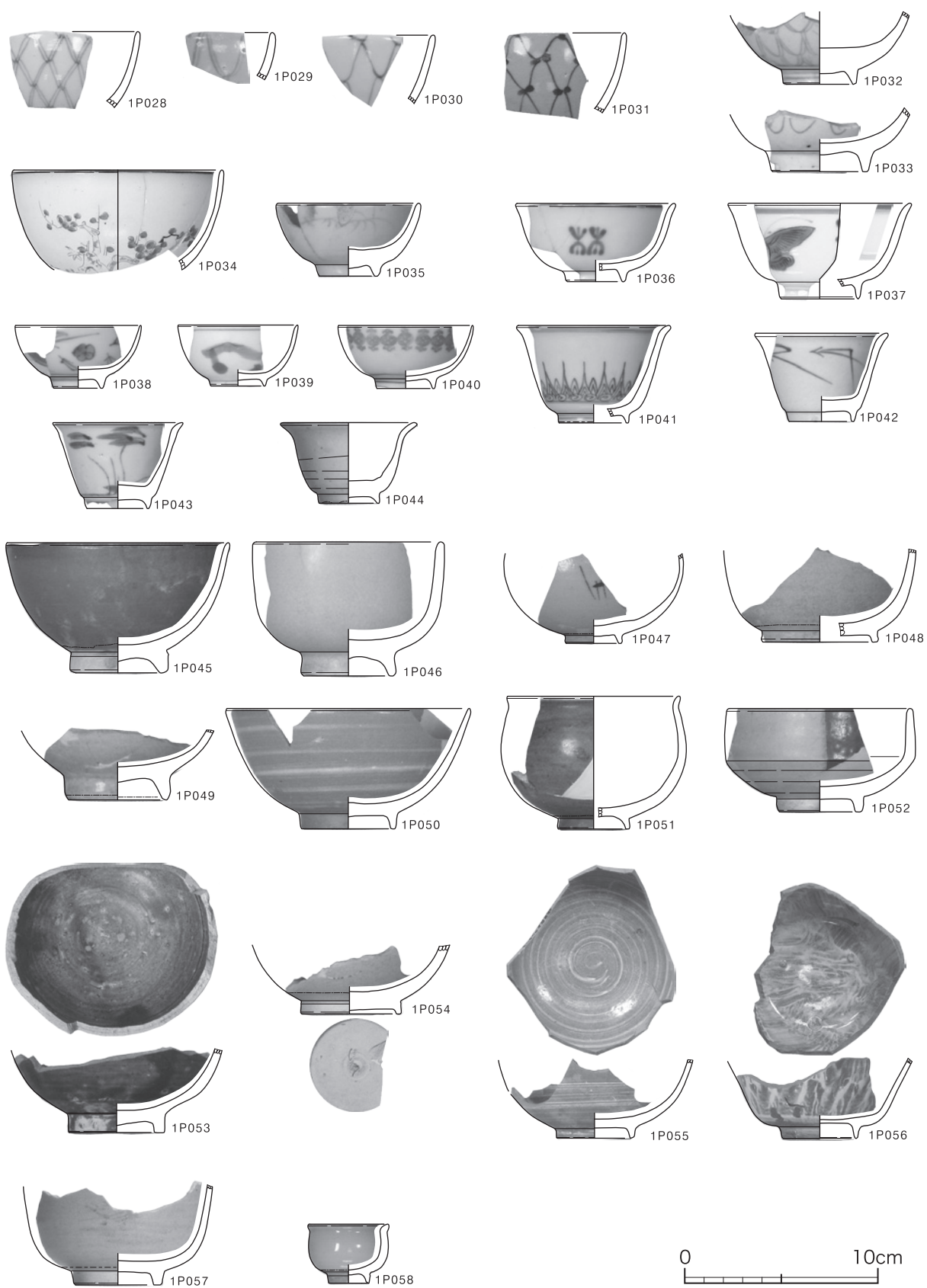
また、こうしたブロックとは異なり、溝状の掘り込みを埋めるような状況を呈している部分も確認されている。この部分では被熱ブロックも確認されている。

貝層を構成する貝種については、詳細は付編に譲るが、露呈部や断面、掘削後の排土を観察したところ、アサリを主体とし、次いでバカガイが多く、それに続きハイガイ、ミルガイ、サザエ、スガイなどが確認された。また、数は少ないがアワビやナガニシなども確認されている。

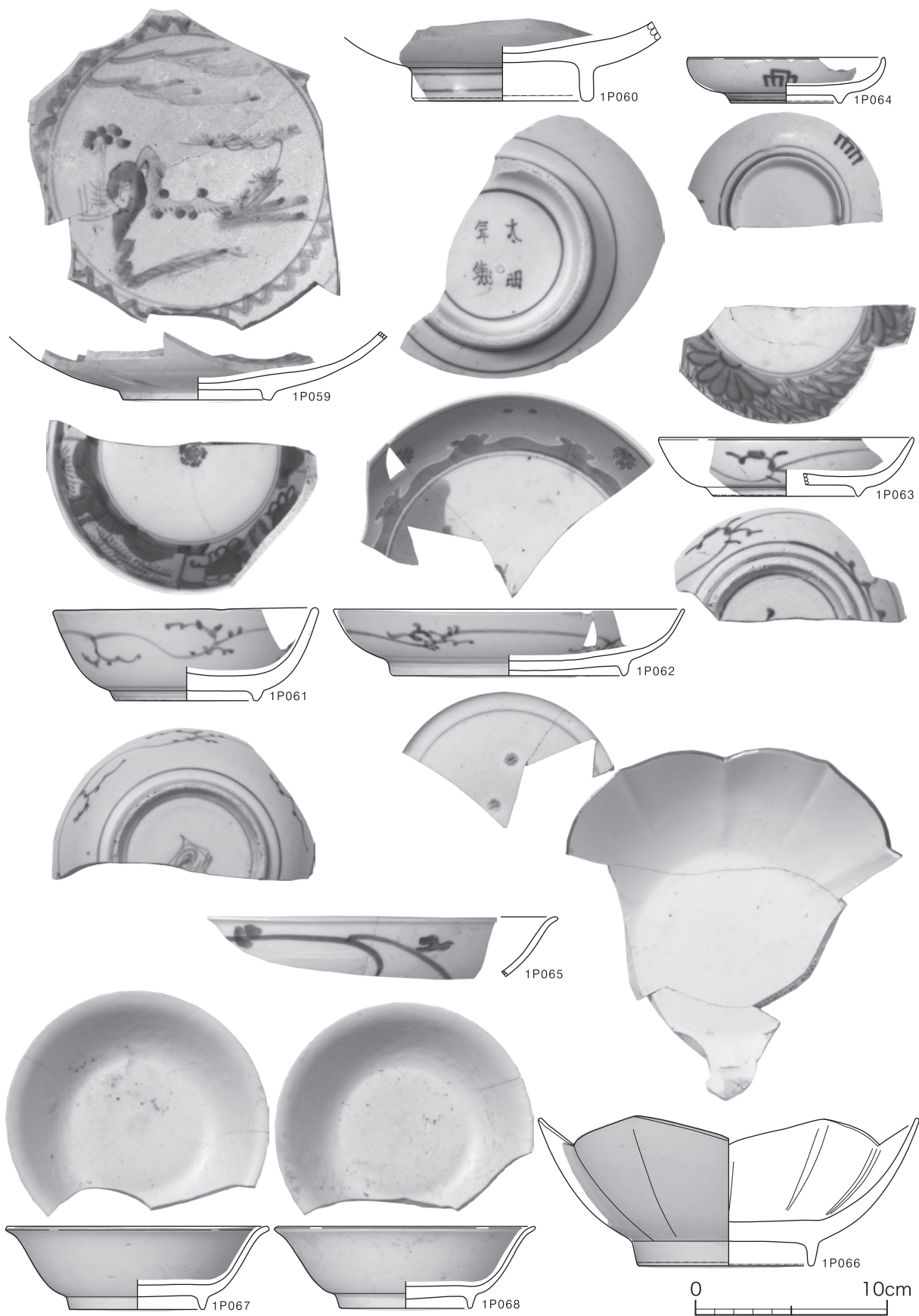
こうした貝層は、ほとんどが完形貝や破砕貝からなる純貝層あるいは純貝層に近い混土貝層であるが、調査区の南寄りの参道下付近では、破砕貝が少量黒褐色土中に混入する混貝土層が確認された。この層については、溝状の掘り込みを伴わず貝の混入率が低いことから、貝層として形成されたものではなく、どこかに存在していた貝層が二次的に堆積した層と判断し、遺物包含層として調査を行なった。



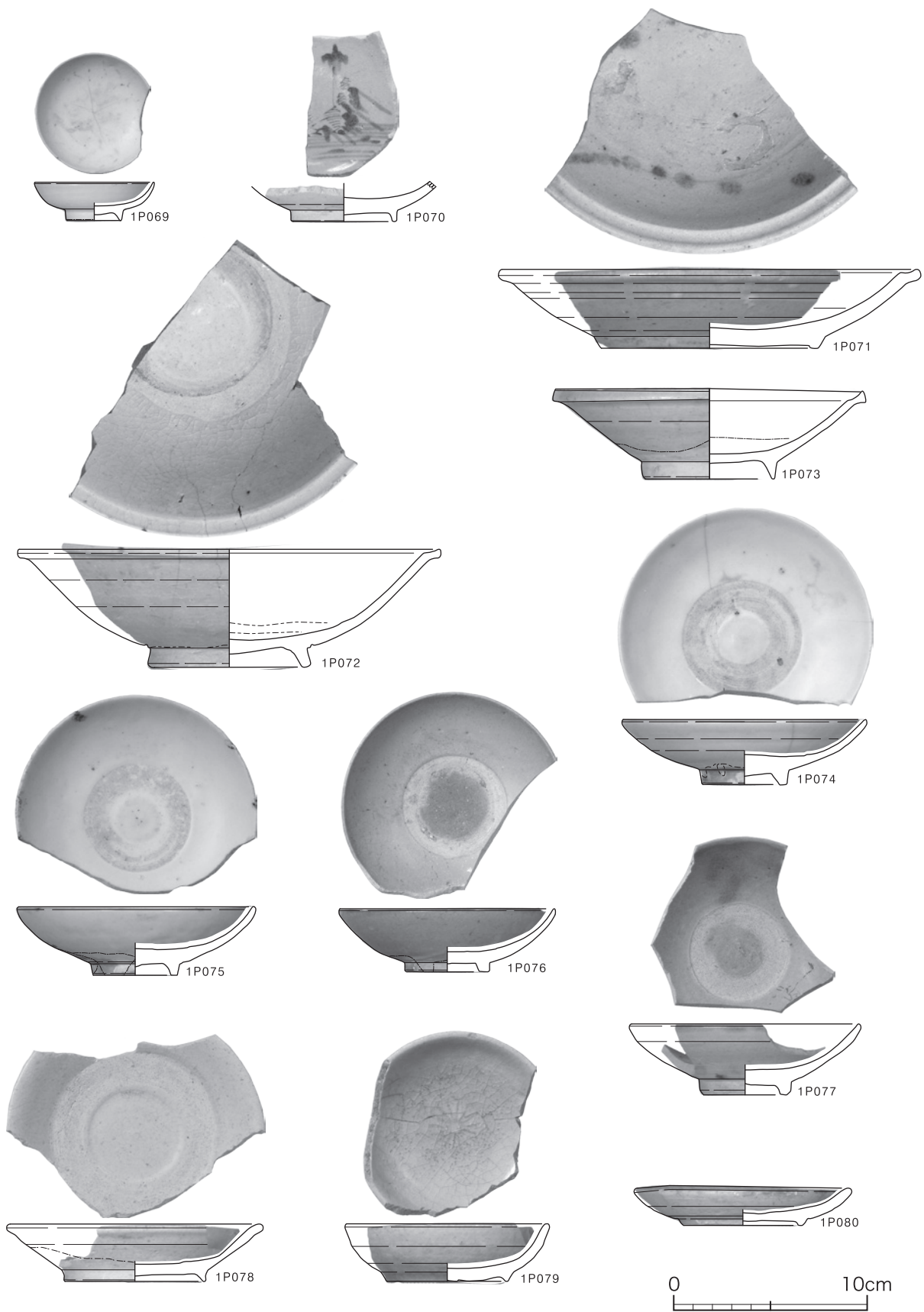
第22図 F貝層出土遺物（1）



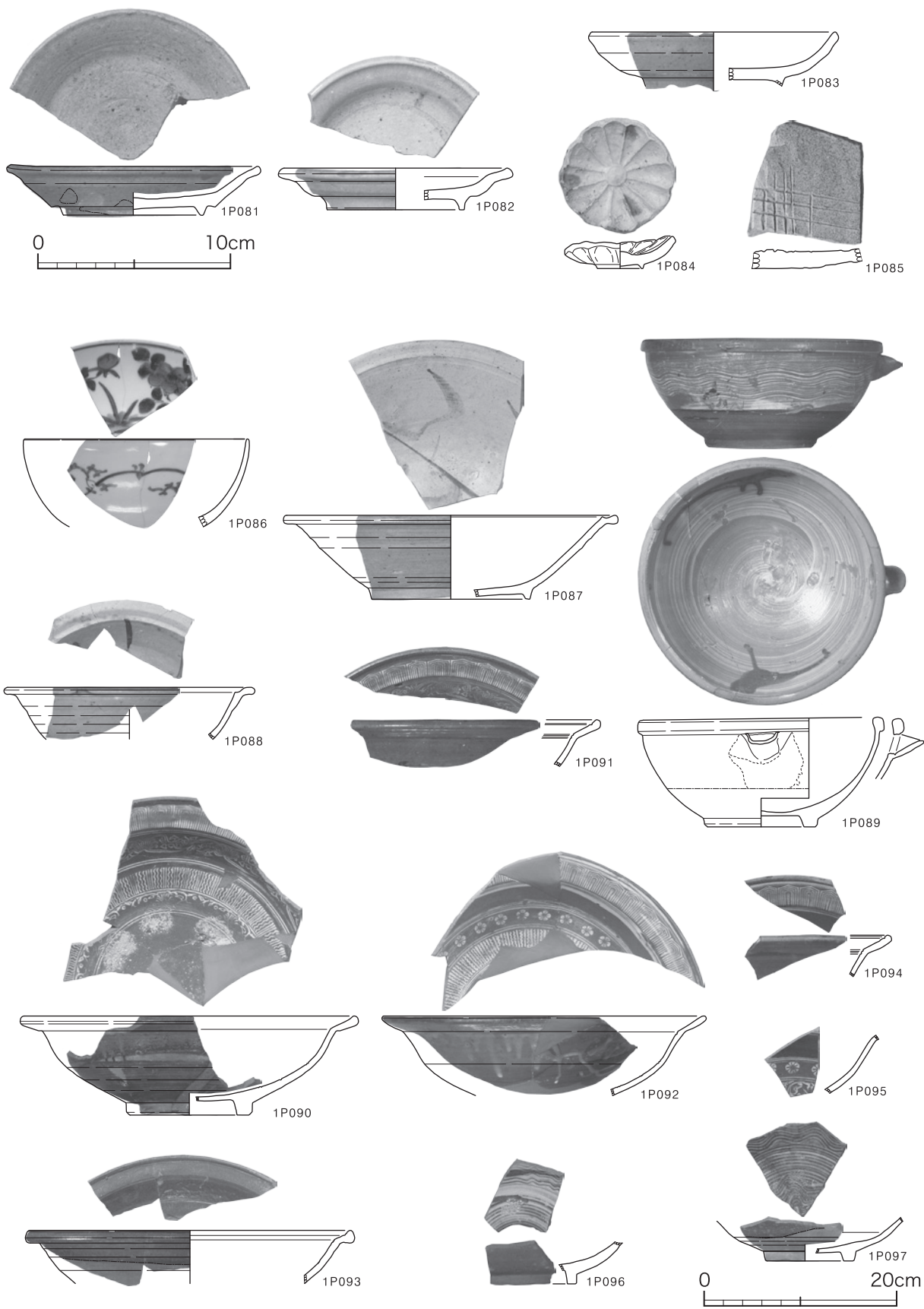
第23図 F貝層出土遺物（2）



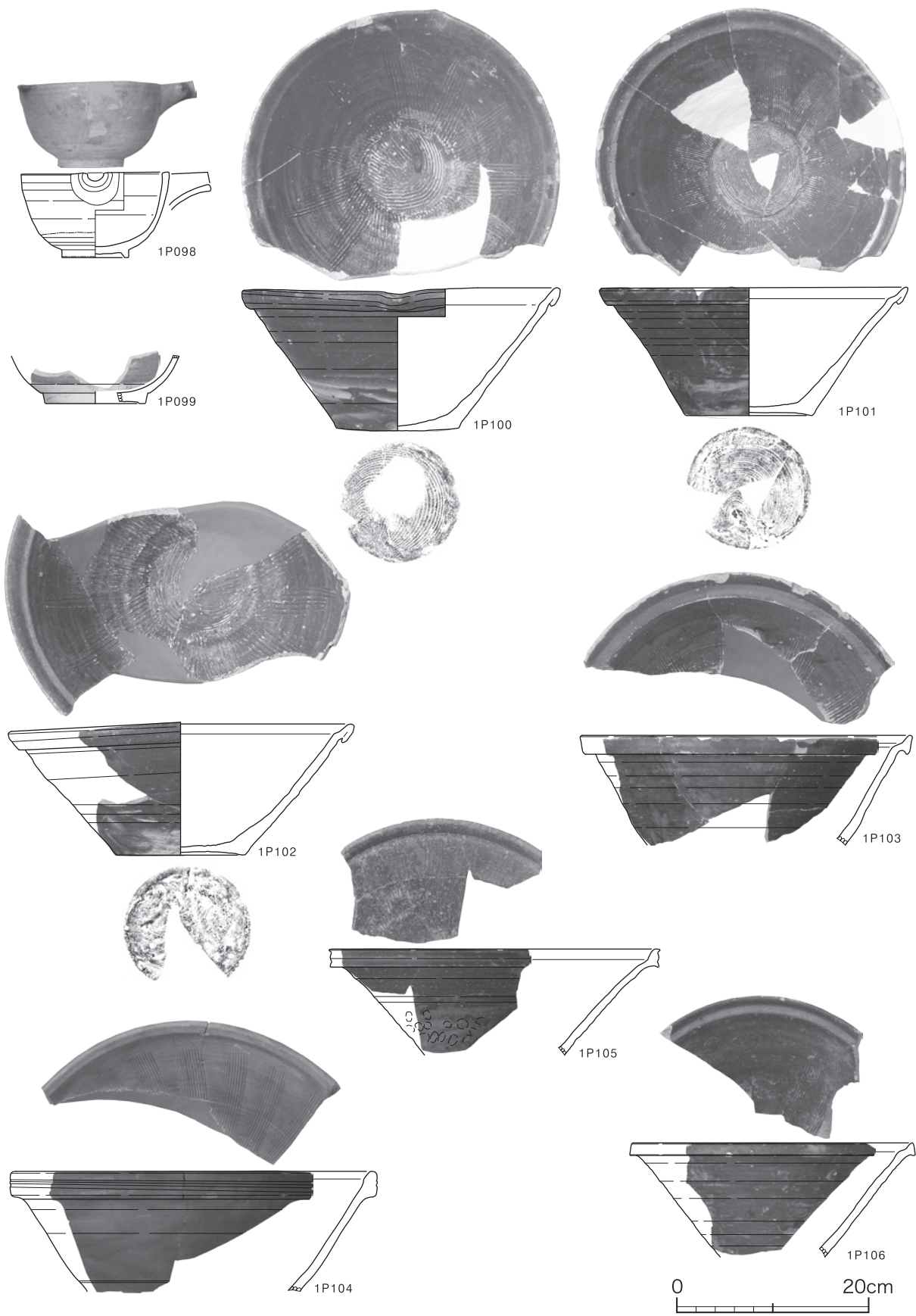
第24図 F貝層出土遺物（3）



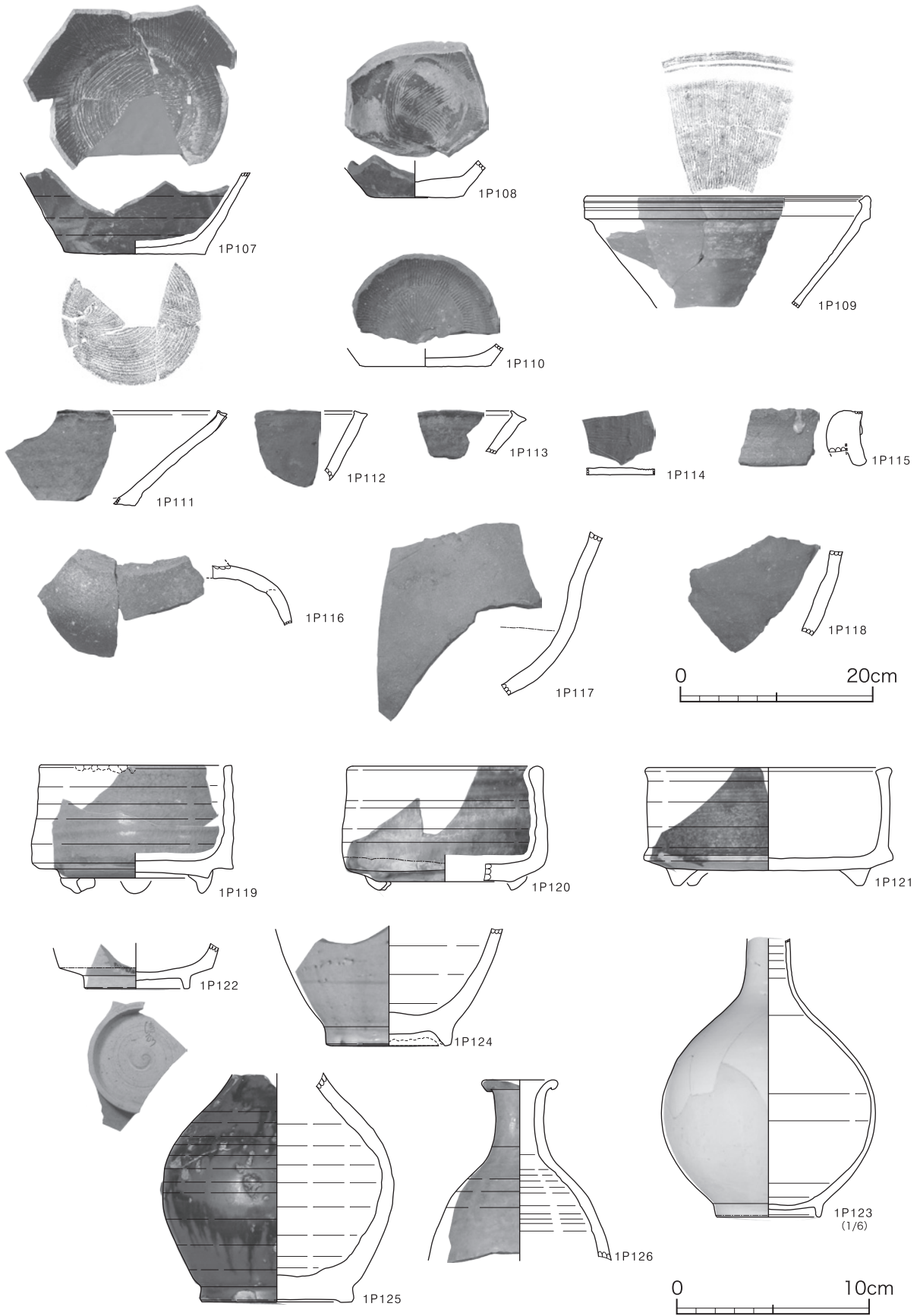
第25図 F貝層出土遺物（4）



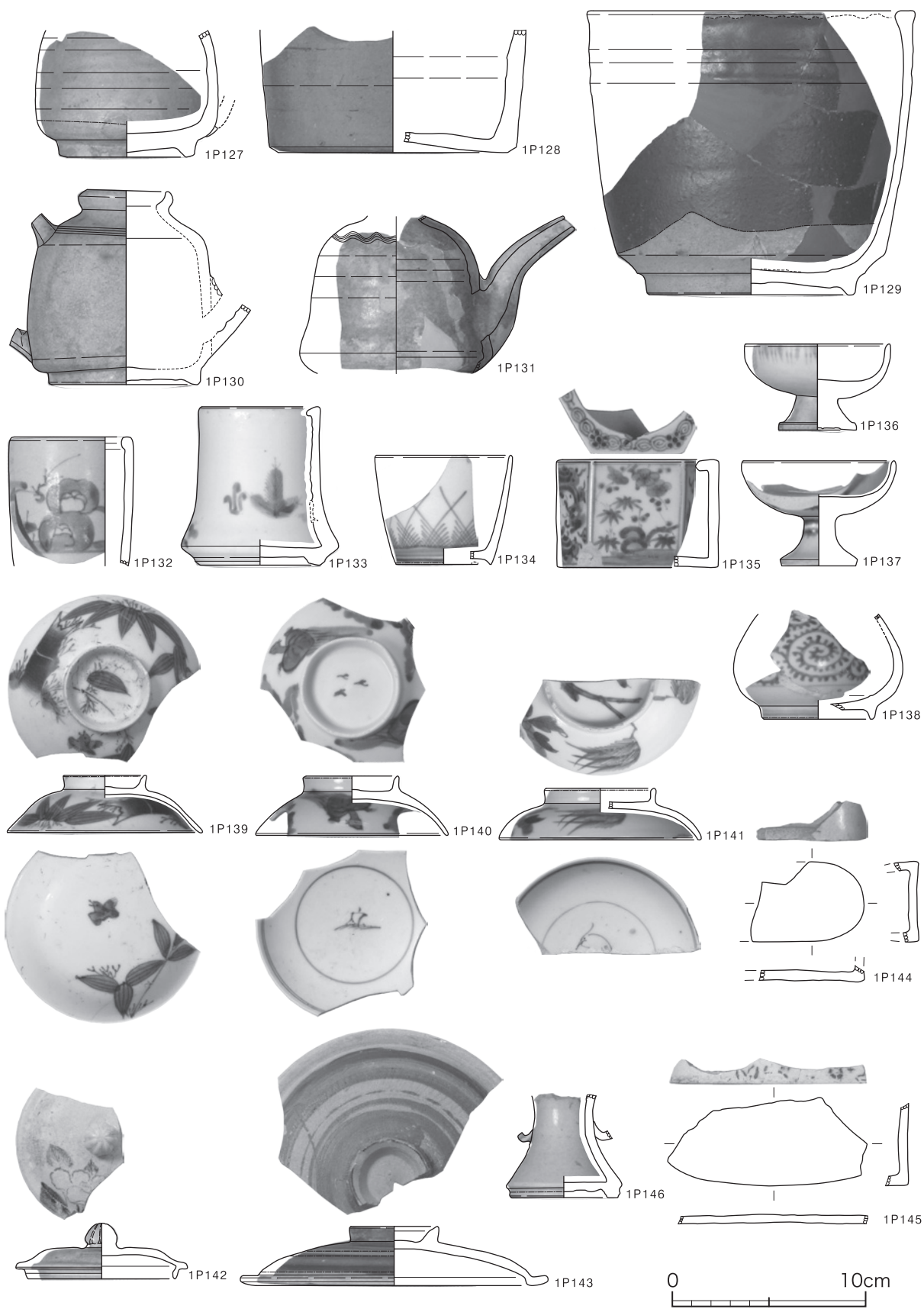
第26図 F貝層出土遺物（5）



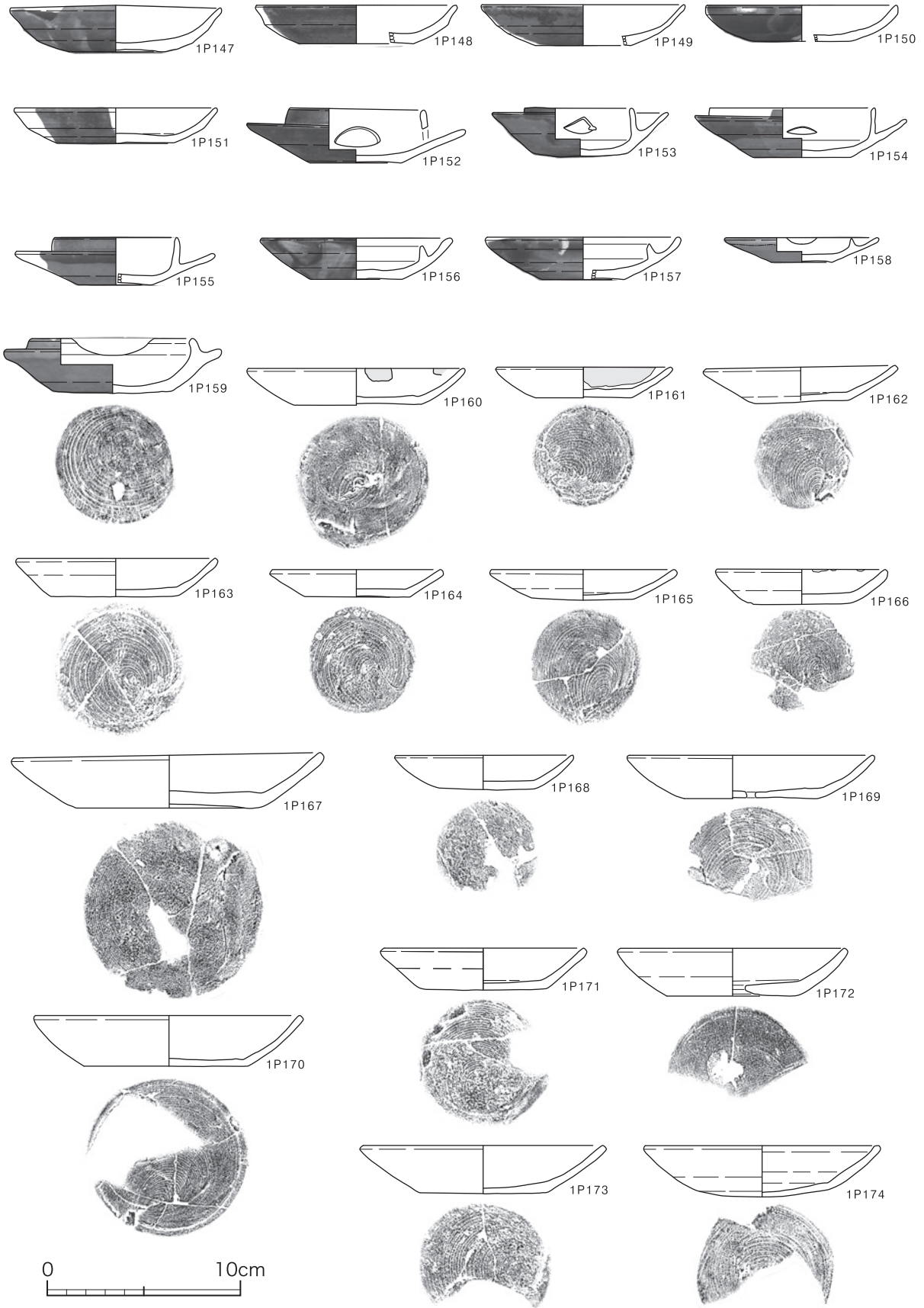
第27図 F貝層出土遺物（6）



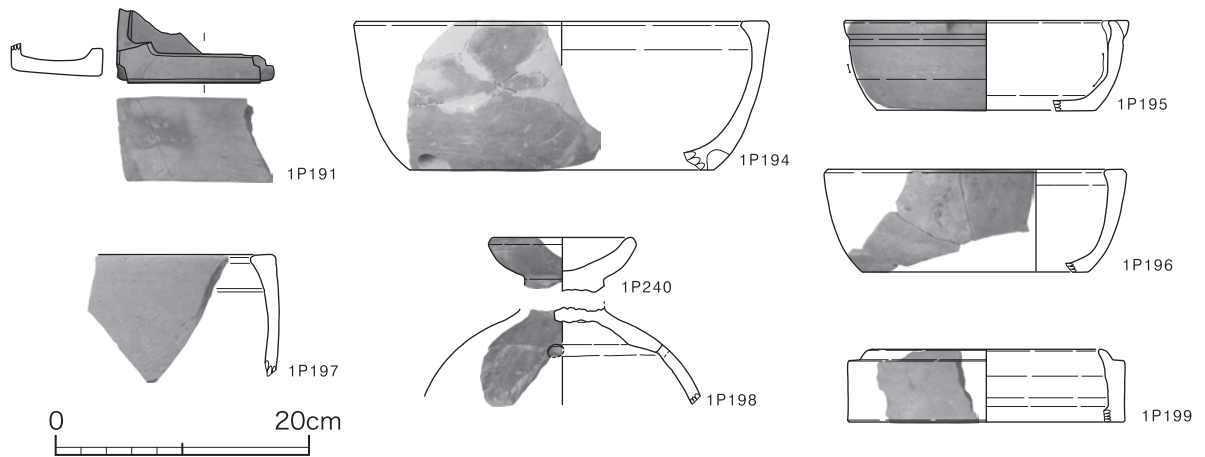
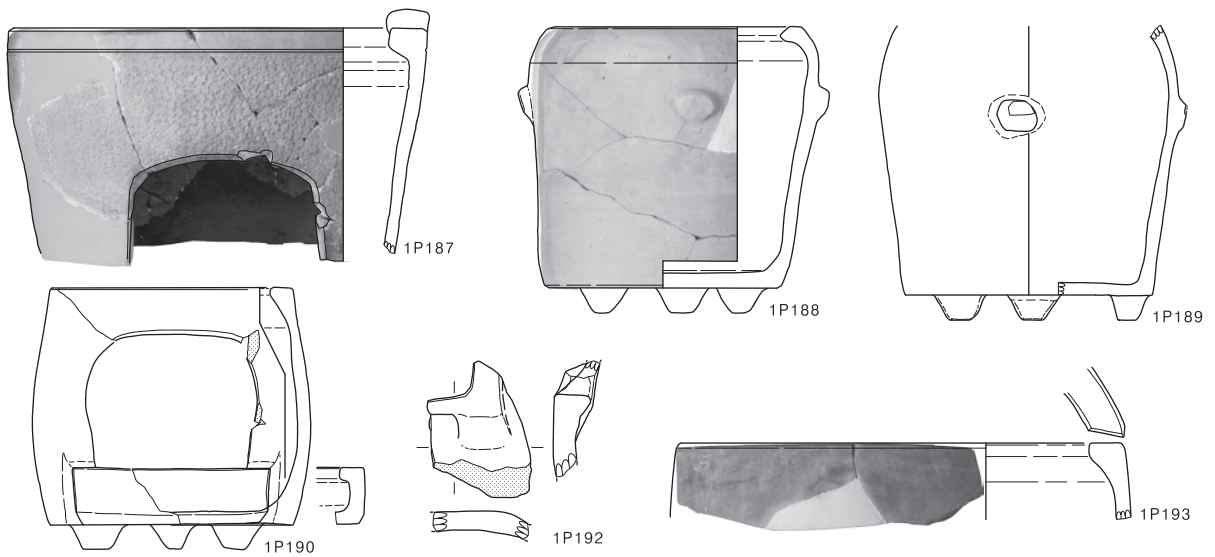
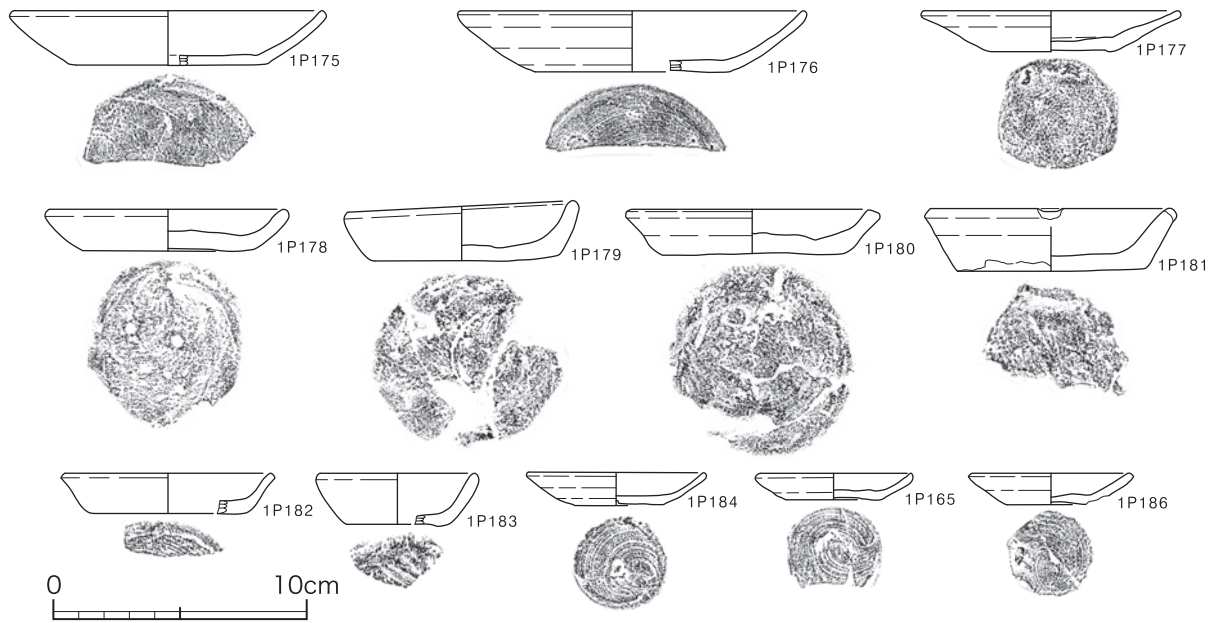
第28図 F貝層出土遺物（7）



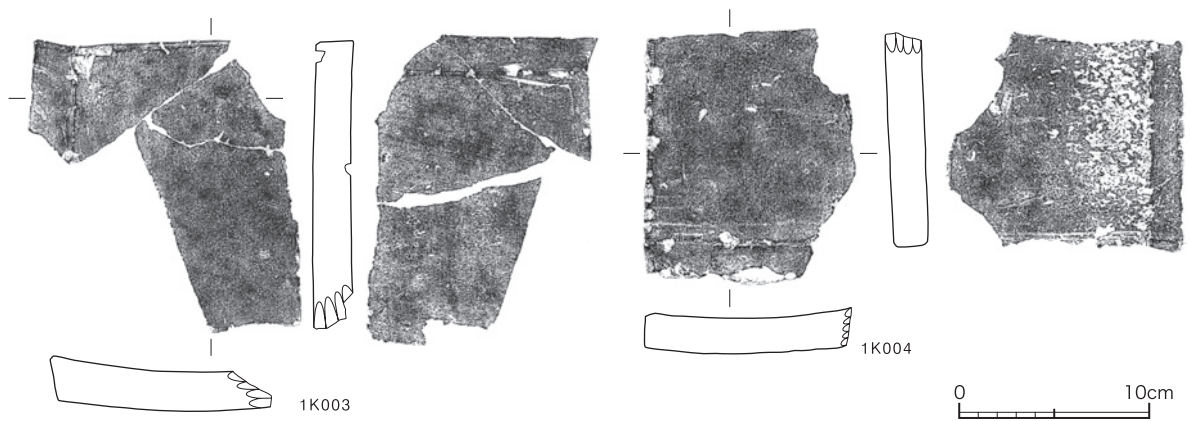
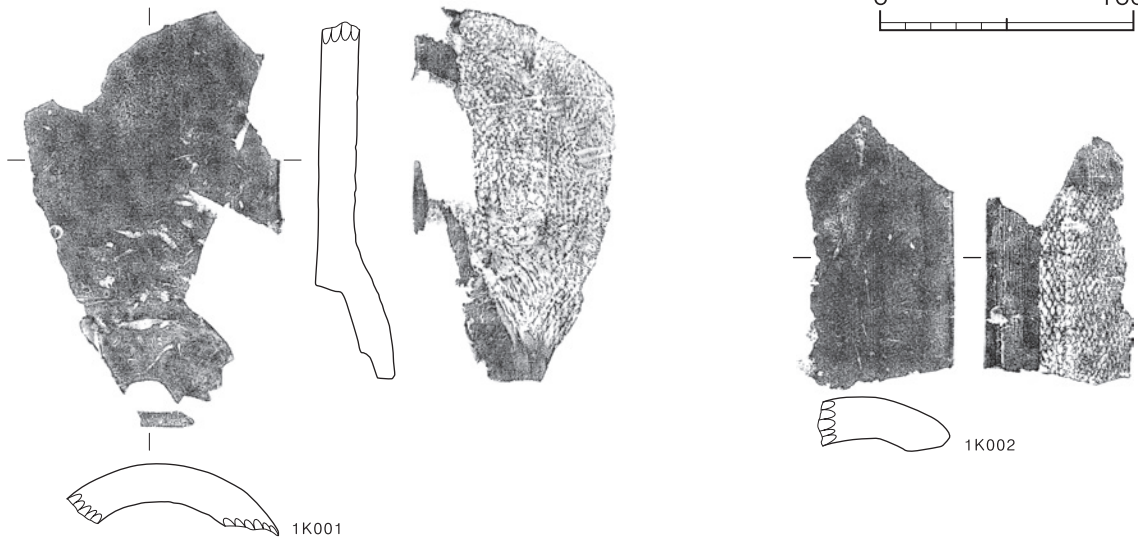
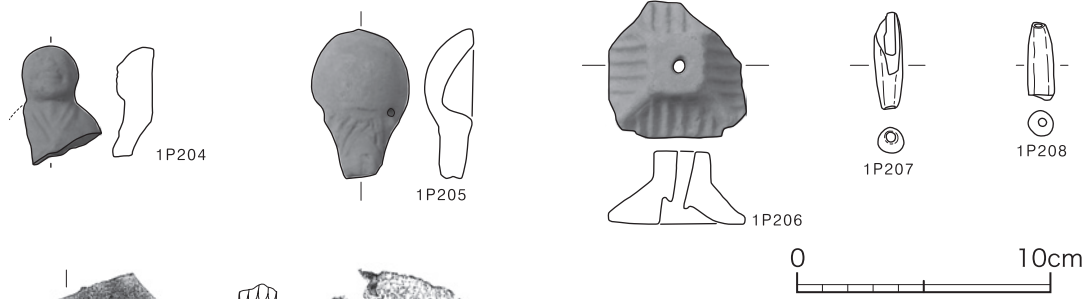
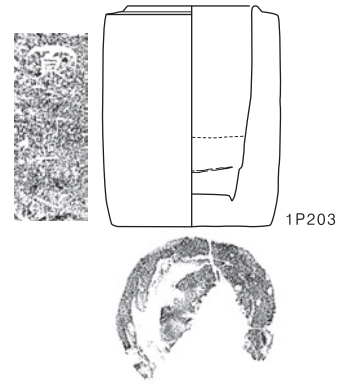
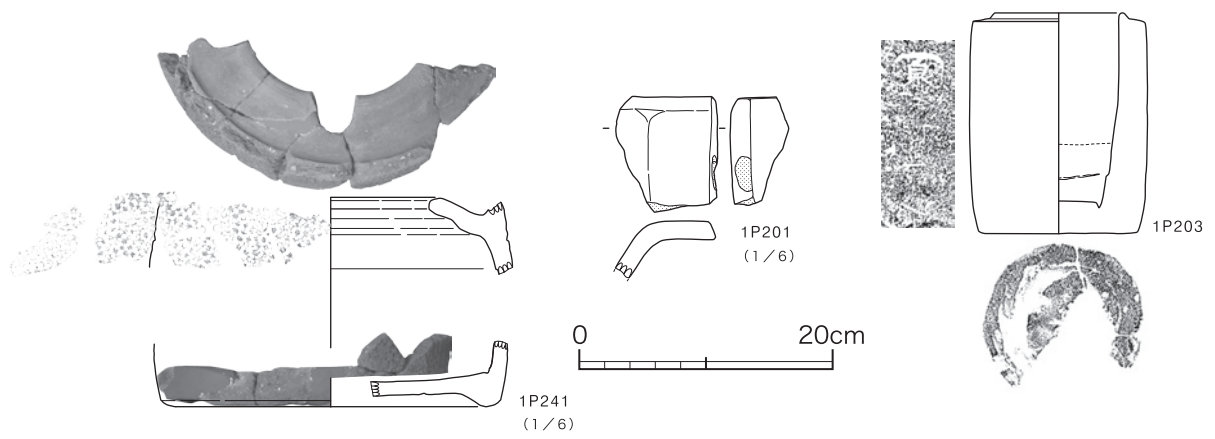
第29図 F貝層出土遺物（8）



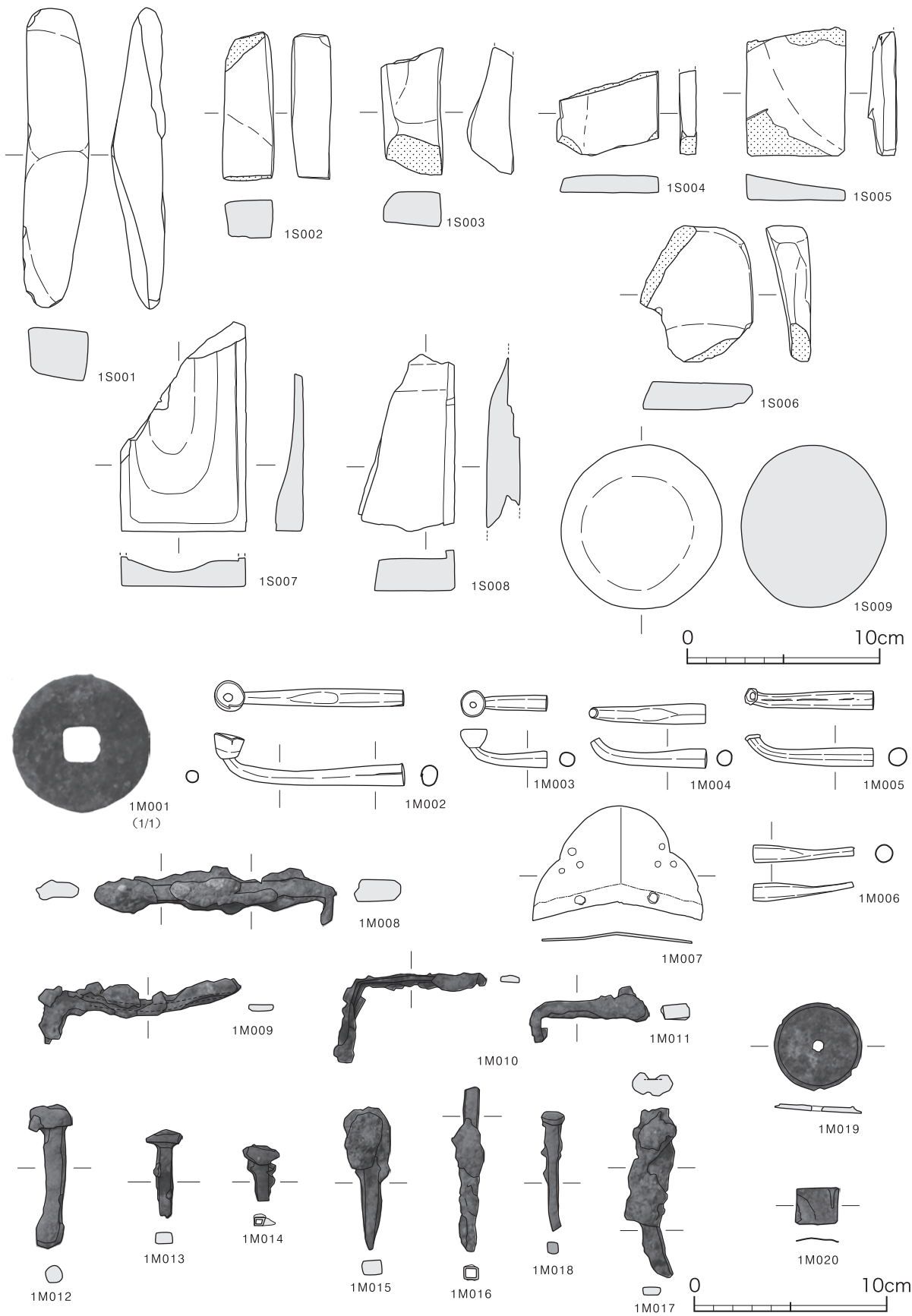
第30図 F貝層出土遺物（9）



第31図 F貝層出土遺物 (10)



第32図 F貝層出土遺物 (11)



第33图 F貝層出土遺物 (12)

F 貝層出土遺物一覽表 (1)

遺物番号	出土地点・層位	種別	器種名	遺存度	部位	法量・大きさ (cm)	胎土	色調	文様・特徴
1P001	3～5区貝層上黒褐色土	磁器	碗	完形	口縁～底部	口：10.0 高：4.9 底：3.0 厚：0.3	白色	白色	染付：若松文。豊付無軸。肥前系18世紀。
1P002	3区貝層上黒褐色土	磁器	碗	9/10	口縁～底部	口：10.1 高：5.5 底：4.1 厚：0.3	白色	白色	染付：四方藤文。花弁上画文内山水家屋文。青海波文。渦文。圓縁。高台内二重方形枠内「福」。豊付無軸。肥前系18世紀。
1P003	3区貝層上黒褐色土	磁器	碗	1/7	口縁～底部	口：9.6 高：5.1 底：4.0 厚：0.5	灰白色	灰白色	染付：草花文・圓縁。高台内銘有り。豊付無軸。高台内砂目付着。肥前系(波佐見)18世紀。
1P004	5区貝層上黒褐色土	磁器	碗(蓋付碗)	1/3	口縁～底部	口：8.6 高：4.9 底：4.4 厚：0.4	白色	白色	染付：圓縁。円文。圓縁。豊付無軸。肥前系18世紀後半～19世紀初頭。
1P005	3区貝層上黒褐色土	磁器	碗	1/2	口縁～底部	口：10.0 高：4.8 底：3.8 厚：0.4	白色	白色	染付：草花文・圓縁。高台内銘有り。豊付無軸。肥前系18世紀。
1P006	4区貝層下	磁器	碗	1/2	口縁～底部	口：(11.4) 高：6.4 底：4.6 厚：0.4	白色	白色	染付：草花文・圓縁。高台内銘有り。豊付無軸。肥前系18世紀。
1P007	4区貝層上黒褐色土	磁器	碗	2/3	口縁～底部	口：8.7 高：(5.0) 底：3.7 厚：0.4	黒褐色	黒褐色	染付：草花文・圓縁。高台内銘有り。豊付無軸。肥前系18世紀。
1P008	4区貝層上	磁器	碗	1/3	口縁～底部	口：10.2 高：5.4 底：4.1 厚：0.4	白色	くすむ白色	染付：松竹梅文。圓縁。豊付無軸。肥前系18世紀。
1P009	1区18層	磁器	碗	1/3	口縁～底部	口：10.6 高：5.9 底：4.6 厚：0.6	白色	白色	染付：圓縁。草文。圓縁。高台内砂目付着。肥前系18世紀。
1P010	1区貝層上黒褐色土	磁器	碗	1/3	口縁～底部	口：11.0 高：6.0 底：5.0 厚：0.4	白色	白色	染付：草花文。圓縁。高台内銘有り。豊付無軸。肥前系18世紀。
1P011	4区貝層下	磁器	碗	1/2	口縁～底部	口：10.3 高：5.8 底：4.0 厚：0.5	黒色	黒色	染付：草花文。圓縁。高台内一重圓縁内くずし寿幅。肥前(波佐見)18世紀。
1P012	4区貝層上黒褐色土	磁器	碗	1/3	口縁～底部	口：11.2 高：6.1 底：4.9 厚：0.5	白色	白色	染付：草花文・圓縁。高台内一重圓縁。高台内砂目付着。肥前系18世紀。
1P013	1区18層	磁器	碗	1/4	口縁～底部	口：11.1 高：5.7 底：4.6 厚：0.4	白色	白色	染付：圓縁。牡丹唐草文。圓縁。高台内圓縁。豊付無軸。肥前系18世紀。
1P014	4区貝層上黒褐色土	磁器	碗	1/3	口縁～底部	口：9.8 高：5.5 底：4.3 厚：0.4	黒褐色	黒褐色	染付：圓縁。山水文。圓縁。豊付無軸。肥前系18世紀。
1P015	4区貝層上黒褐色土	磁器	碗	1/4	口縁～底部	口：10.0 高：5.1 底：3.9 厚：0.4	白色	白色	染付：圓縁。山水文。圓縁。豊付無軸。肥前系18世紀。
1P016	5区貝層上黒褐色土	磁器	碗	1/4	口縁～底部	口：8.3 径：8.8 高：8.8 底：3.4 厚：0.4	黒褐色	黒褐色	染付：柳文。圓縁。圓縁。見込に「寿」。肥前系18世紀後半。
1P017	4区貝層下	磁器	碗(蓋付碗)	1/4	口縁～底部	口：11.7 高：6.6 底：6.1 厚：0.5	黒褐色	黒褐色	染付：圓縁。蓮文・帯縁。豊付無軸。肥前系18世紀後半～19世紀初頭。
1P018	5区貝層上黒褐色土	磁器	碗	1/5	口縁～底部	口：14.5 高：6.7 底：5.1 厚：0.3	白色	白色	染付：藤文・葉文・帯縁。圓縁。口内四方藤文。見込圓縁。肥前系18世紀。
1P019	5区貝層中	磁器	碗	口3/4	口縁～体上半	口：9.9 高：(3.9) 厚：0.5	黒褐色	黒褐色	染付：コニヤク印。井行桐葉文・桐花文。肥前系18世紀後半。
1P020	4区貝層下	磁器	碗	口1/2	口縁～体上半	口：9.6 高：(3.8) 厚：0.3	灰白色	灰白色	染付：雨降文。肥前系18世紀。
1P021	5区貝層下	磁器	碗	底1/2	口縁～体下半	高：(3.3) 底：4.7 厚：0.4	白色	白色	染付：草花文。圓縁。高台内端高文。豊付無軸。肥前系18世紀後半。
1P022	4区貝層上	磁器	碗	底のみ	体部～底部	高：(3.7) 底：4.4 厚：0.3	白色	白色	染付：草花文。圓縁。高台内「大明年製」銘。豊付無軸。肥前系18世紀。
1P023	5区貝層中	磁器	碗	底のみ	底部のみ	高：(2.3) 底：4.3 厚：0.3	白色	白色	染付：草花文。圓縁。見込圓縁内菊花文。豊付無軸。肥前系18世紀。
1P024	4区貝層下	磁器	碗	1/2	口縁～底部	口：9.8 高：5.9 底：3.9 厚：0.4	黒褐色	黒褐色	染付：梅花文。圓縁。高台内圓縁。豊付無軸。高台内砂目付着。肥前系(波佐見)18世紀。
1P025	3区土丹精査	磁器	碗	1/5	口縁～底部	口：11.6 高：6.2 底：4.0 厚：0.6	灰色	灰色	染付：圓縁。菊花文。圓縁。豊付無軸。高台内砂目付着。肥前系(波佐見)18世紀。
1P026	5区貝層中	磁器	筒茶碗	底欠	口縁～体下半	口：10.1 高：(7.1) 厚：0.4	白色	白色	染付：圓縁。円文。圓縁。口縁部無軸。肥前系18世紀後半～19世紀初頭。
1P027	5区貝層中	磁器	筒茶碗	1/5	口縁～底部	口：7.4 高：5.5 底：3.6 厚：0.3	白色	くすむ白色	染付：圓縁。菊散し。圓縁。内上・下圓縁。見込花文？肥前系18世紀後半～19世紀初頭。
1P028	4区貝層上	磁器	碗	破片	口縁～体上半	高：(4.0) 厚：0.3	茶褐色	白色	染付：二重網目文。肥前系18世紀。
1P029	5区貝層上黒褐色土	磁器	碗	破片	口縁～体上位	高：(2.5) 厚：0.4	黒褐色	灰色	染付：二重網目文。肥前系18世紀。
1P030	5区貝層中	磁器	碗	破片	口縁～体上半	高：(3.6) 厚：0.4	白色	青味かかる	染付：一重網目文。肥前系18世紀。
1P031	4区貝層上	磁器	碗	破片	口縁～体中位	高：(4.5) 厚：0.4	黄色	黄味かかる	染付：一重網目文。肥前系18世紀。
1P032	5区貝層中	磁器	碗	1/2	体下半～底部	高：(3.7) 底：3.8 厚：0.3	白色	灰色	染付：二重網目文。圓縁。高台圓縁。豊付無軸。高台砂目付着。肥前系(波佐見)18世紀。
1P033	3区土丹集積付近	磁器	碗	底1/5	体下半～底部	高：(3.0) 底：5.0 厚：0.6	黒褐色	灰白色	染付：一重網目文。豊付無軸。肥前系(波佐見)18世紀後半～19世紀初頭。
1P034	2区最下層	磁器	碗	1/3	口縁～体部	口：11.0 高：(5.2) 厚：0.3	白色	白色	染付：外面体部海蘭文。口唇口縁。内外面透明釉。肥前系。
1P035	5区貝層上	磁器	小杯	2/3	口縁～底部	口：7.8 高：3.9 底：3.0 厚：0.4	黒褐色	青灰色	染付：草花文。豊付無軸。高台内砂目付着。肥前系(波佐見)18世紀。
1P036	5区貝層中	磁器	碗(端反形)	1/4	口縁～底部	口：8.3 高：4.1 底：3.1 厚：0.3	白色	白色	染付：口唇口縁。林文。豊付無軸。瀬戸・美濃系19世紀。
1P037	4区貝層上黒褐色土	磁器	碗(端反形)	1/5	口縁～底部	口：9.5 高：5.0 底：4.2 厚：0.4	白色	白色	染付：帯縁。蝶文。圓縁。口縁内子持帯縁。見込二重圓縁。豊付無軸。瀬戸・美濃系19世紀。
1P038	4区貝層上黒褐色土	磁器	小杯	1/5	口縁～底部	口：6.6 高：3.3 底：2.6 厚：0.2	白色	白色	染付：梅花・松葉文。圓縁。高台内圓縁。豊付無軸。瀬戸・美濃系19世紀。
1P039	4区貝層上黒褐色土	磁器	小杯	2/5	口縁～底部	口：6.2 高：3.2 底：2.8 厚：0.2	黒褐色	白色	染付：圓縁。松・山文。圓縁。豊付無軸。肥前系18世紀。
1P040	4区貝層下	磁器	小杯	1/4	口縁～底部	口：7.0 高：3.3 底：3.0 厚：0.2	白色	白色	染付：腰落文。圓縁。豊付無軸。肥前系18世紀。
1P041	1区最下貝層	磁器	小杯	1/3	口縁～底部	口：8.0 高：5.1 底：3.6 厚：0.3	白色	白色	染付：圓縁。花弁？・渦文。圓縁。高台内不明文。口縁内圓縁。内底圓縁。豊付無軸。端反形。肥前系18世紀。

F 貝層出土遺物一覽表 (2)

遺物番号	出土地点・層位	種類	器種名	遺存度	部位	法量・大きさ (cm)	胎土	色調	文様・特徴
1P042	2区最下貝層	磁器	小杯	1/2	口縁～底部	口：6.6 高：4.5 底：3.2 厚：0.3	黒褐色微細粒子含む	くすむ白色	染付：松葉文。壺付無軸。端反形。肥前系18世紀。
1P043	1区18層中	磁器	小杯	1/2	口縁～底部	口：6.9 高：4.6 底：3.4 厚：0.3	白色	白色	染付：草花文。圈線。壺付無軸。端反形。肥前系18世紀。
1P044	1区20層	磁器	小杯	1/3	口縁～底部	口：7.1 高：4.2 底：3.1 厚：0.3	黒褐色微細粒子含む	灰白色	透明釉。壺付無軸。高台砂目付着。内底周囲に流線。端反形。肥前系18世紀。
1P045	1区16層	磁器	小杯	2/3	口縁～底部	口：11.7 高：6.8 底：5.1 厚：0.4	黄灰色	外面黄褐色	ロクワロ成形。削り高台。外面銅線釉。内面透明釉。体下部～高台無軸。肥前系。(内野山窯?)17世紀末～18世紀前半。
1P046	P-3	陶器	碗	1/2	口縁～底部	口：10.0 高：7.0 底：3.9 厚：0.5	黄灰色	黄白色	ロクワロ成形。呉器手碗。透明釉(貫入目立つ)。壺付無軸。肥前系17世紀末～18世紀前半。
1P047	4区貝層上	陶器	碗	1/5	体下半～底部	高：(4.7) 胴：9.2 底：2.9 厚：0.4	灰色	若草色	ロクワロ成形。灰釉。山水文?(鉄釉)、体下部～高台無軸。京・信楽系18世紀。
1P048	4区貝層下	陶器	碗	底1/3	体下半～底部	高：(5.0) 胴：10.0 底：6.0 厚：0.5	黄白色	淡黄緑色	ロクワロ成形。透明釉。体下部～高台無軸。御室碗?肥前系17世紀後半～18世紀前半。
1P049	2区20層	陶器	碗	底のみ	体下半～底部	高：(3.7) 底：5.3 厚：0.3	黄白色	淡黄緑色	灰釉。壺付無軸。瀬戸・美濃系18世紀中葉～19世紀前半。
1P050	3・4区貝層上黒褐色土	陶器	碗	1/3	口縁～底部	口：12.7 高：6.3 底：5.0 厚：0.4	赤灰色	茶褐色	肥前系(唐津)17世紀後半～18世紀前半。
1P051	5区貝層中	陶器	碗	1/6	口縁～底部	口：9.0 高：7.0 底：3.8 厚：0.4	淡黄白色	黒褐色	外周鉄軸。削り高台。鉄軸。灰釉掛分け(貫入あり)。壺付無軸。腰折れ形
1P052	3区、4区貝層上黒褐色土	陶器	碗(壺形)	1/4	口縁～底部	口：10.0 高：5.4 底：4.3 厚：0.4	淡灰白色	濃茶色・淡黄緑色	ロクワロ成形。瀬戸・美濃系18世紀中葉～19世紀初頭。
1P053	1区18層	陶器	碗	1/2	体上半～底部	高：(4.3) 底：5.0 厚：0.5	白色粒子少量含む	黄緑色	灰釉。体部～高台無軸。瀬戸・美濃系18世紀中葉～19世紀前半。
1P054	3区土丹精査	陶器	碗	1/5	体下半～底部	高：(3.6) 底：5.4 厚：0.5	黄白色	淡黄緑色	京焼風陶器。透明釉(内外面貫入)。体下部～高台無軸。高台内清水銘。肥前系17世紀後半～18世紀前半。
1P055	3・4区貝層上黒褐色土	陶器	碗	1/2	体～底部	径：(10.0) 高：(4.1) 底：4.0 厚：0.3	灰色	緑灰色	内・外面刷毛目(白泥・鉄軸)。壺付無軸。肥前系(唐津)17世紀後半～18世紀前半。
1P056	5区貝層上黒褐色土	陶器	碗	1/2	体上半～底部	径：(9.6) 高：(4.0) 底：3.8 厚：0.3	赤灰色	濃茶色	内・外面刷毛目手(白泥・鉄軸)。壺付無軸・砂目付着。見込み目跡3点。肥前系(現川)18世紀前半。
1P057	5区貝層上黒褐色土	陶器	碗	1/2	体上半～底部	体部径：(9.8) 高：5.2 底：4.6 厚：0.3	黄白色	黄緑色	肥前系京焼風陶器。内～外面体部下位透明釉。外面具須による椀隔山水文。
1P058	5区貝層中	陶器	碗	1/2	口縁～底部	口：4.2 高：3.1 底：2.2 厚：0.4	白色	淡青白色	体下部～高台無軸。肥前系17世紀後半～18世紀前半。
1P059	4区貝層下	磁器	小杯	2/5	体下半～底部	高：(3.3) 底：7.6 厚：0.4	灰白色	白色	口縁部端反形。内～外面体部下位透明釉。高台部無軸。肥前系。
1P060	4区貝層下	磁器	皿	底2/3	底部のみ	高：(3.5) 底：9.4 厚：1.0	黒褐色粒子含む	白色	染付：見込圈線外連続鋸歯文。圈線内松・雲文。生掛り?壺付無軸。高台砂目付着。削り高台。肥前系17世紀(初開伊万里?)。
1P061	A-2(グ)ッド	磁器	皿	2/5	口縁～底部	口：13.8 高：4.9 底：7.4 厚：0.5	白色	白色	染付：圈線。高台圈線内「大明年製」。内面体部波文?圈線。見込み花文。壺付無軸。肥前系。
1P062	3区貝層上黒褐色土	磁器	皿	1/4	口縁～底部	口：19.0 高：3.5 底：12.4 厚：0.2	黒褐色粒子少量含む	白色	染付：唐草文。圈線。高台内圈線。内面圈線。二輪花・五弁花・波状文。圈線。見込み雲・花文。肥前系。
1P063	4区貝層下	磁器	皿	2/5	口縁～底部	口：13.4 高：3.1 底：7.6 厚：0.4	黒褐色微細粒子含む	白色	口唇部口紅。染付：唐草文。圈線。高台圈線内不明文。内菊・矢羽限文。圈線。見込み五弁花?壺付無軸。高台砂目付着。肥前系。
1P064	4区貝層下	磁器	皿	1/2	口縁～底部	口：10.5 高：2.4 底：5.8 厚：0.4	白色	白色	染付：圈線。不明文。圈線。見込み草花文。肥前系。
1P065	3区貝層上黒褐色土	磁器	皿	破片	口縁～体部	高：(3.2) 厚：0.3	白色	白色	口縁部端反り。染付：外面唐草文。内面圈線。体部草花文。肥前系。
1P066	3～5区貝層上黒褐色土	磁器	皿	1/4	口縁～底部	口：20.0 高：7.8 底：9.0 厚：0.5	黒褐色微細粒子含む	白色	輪花皿。口唇口紅。白磁釉。内面彫刻(笹文)。壺付無軸。高台砂目付着。肥前系。
1P067	P-1	磁器	鉢	2/3	口縁～底部	口：13.8 高：4.4 底：7.0 厚：0.3	白色	白色	口縁部端反り。白磁釉。内面彫刻(桐葉・雲文)。高台砂目付着。肥前系。
1P068	2区20層	磁器	皿	2/3	口縁～底部	口：13.6 高：4.3 底：7.0 厚：0.2	黒褐色粒子少量含む	白色	口縁部端反り。白磁釉。内面彫刻(桐葉・雲文)。壺付無軸。高台砂目付着。肥前系。
1P069	3区貝層上黒褐色土	磁器	皿	4/5	口縁～底部	口：6.2 高：2.0 底：2.8 厚：0.2	白色	白色	透明釉(貫入あり)。壺付無軸。肥前系。
1P070	3区貝層上黒褐色土	磁器	皿	破片	底部	高：(1.8) 底：5.5 厚：0.4	黄白色	淡黄緑色	肥前系京焼風陶器。見込み具須による椀隔山水文。外体部下位まで透明釉。高台内銘有。肥前系17世紀後半～18世紀前半。
1P071	P-8	陶器	皿	1/5	口縁～底部	口：22.0 高：4.1 底：11.2 厚：0.7	黄茶色	灰緑色	折縁。高台。灰釉に銅線釉流し。見込み目跡2点。瀬戸・美濃系。
1P072	3・4区貝層上黒褐色土	陶器	皿	1/4	口縁～底部	口：22.0 高：6.2 底：8.9 厚：0.4	灰色	灰色	折縁。灰釉(貫入)。体下部二重沈線。高台部無軸。見込み蛇の目細測ぎ。瀬戸・美濃系。
1P073	P-12、5区貝層上黒褐色土	陶器	皿	1/2	口縁～底部	口：16.2 高：5.0 底：6.8 厚：0.4	黄白色	淡黄緑色	折縁。灰釉。外下位～高台無軸。見込み蛇の目細測ぎ。瀬戸・美濃系。
1P074	4区貝層上黒褐色土・貝層下	陶器	皿	2/3	口縁～底部	口：12.7 高：3.4 底：4.4 厚：0.3	白色	淡青色	透明釉。体下部～高台無軸。削り高台。高台砂目付着。見込み蛇の目細測ぎ。肥前系17世紀末～18世紀初頭。

F 貝層出土遺物一覽表 (3)

遺物番号	出土地点・層位	種類	器種名	遺存度	部位	法量・大きさ (cm)	胎土	色調	文様・特徴
1P075	3区貝層上黒褐色土	磁器	皿	1/2	口縁～底部	口：12.5 高：3.6 底：4.4 厚：0.4	白色	淡青色	外体部～内面透明釉。体下位二重沈線。削り高台。高台無釉。見込み蛇の目釉剥ぎ。肥前系17世紀末～18世紀初頭。
1P076	P-11	陶器	皿	1/2	口縁～底部	口：11.3 高：3.3 底：4.4 厚：0.3	黄白色	緑色	外体部透明釉。外下位～高台無釉。削り高台。内面体部銅緑釉。見込み蛇の目釉剥ぎ。肥前系(内野山窯)17世紀末～18世紀初葉。
1P077	5区貝層上黒褐色土	陶器	皿	口1/5	口縁～底部	口：12.0 高：3.7 底：4.5 厚：0.3	黄白色	薄緑色	外上位透明釉。体下位～高台無釉。内面緑色釉。見込み蛇の目釉剥ぎ。肥前系(内野山窯?)17世紀末～18世紀初頭。
1P078	1区貝層～黒褐色土	陶器	皿	口1/3	口縁～底部	口：13.3 高：3.0 底：7.4 厚：0.4	黄白色	淡黄緑色	外中位～内面灰釉。体下位～高台無釉。見込み蛇の目釉剥ぎ。瀬戸・美濃系17世紀後半。
1P079	3区貝層上黒褐色土	陶器	皿	1/2	口縁～底部	口：10.6 高：3.0 底：6.3 厚：0.4	淡褐色	黄緑色	外体部にロクロ成形痕。高台内輪トナシ痕あり。内・外面灰釉。見込みに菊印花文。瀬戸・美濃系17世紀中葉。
1P080	5区貝層中	陶器	皿	2/3	口縁～底部	口：11.3 高：2.0 底：6.2 厚：0.5	灰白色	淡黄緑色	口縁～高台に長石釉。外下位沈線。削り高台。見込み目跡3点。瀬戸・美濃系17世紀中葉。
1P081	5区貝層～黒褐色土	陶器	皿	1/3	口縁～底部	口：13.3 高：2.6 底：7.2 厚：0.4	黄白色	淡茶褐色	口縁外反。内～外体部下位に灰釉。削り高台。高台無釉。瀬戸・美濃系17世紀中葉～18世紀初葉。
1P082	4区貝層上黒褐色土	陶器	皿	1/3	口縁～底部	口：12.2 高：2.2 底：7.2 厚：0.5	灰色	灰緑色	口縁折縁。内・外面灰釉。体外面に沈線。削り高台。高台無釉。見込み溶着痕。瀬戸・美濃系17世紀初葉。
1P083	1区貝層下	陶器	皿	1/3	口縁～底部	口：13.0 高：(2.8) 底：(7.3) 厚：0.5	灰色	灰緑色	外体部にロクロ成形痕。内面高台。外下位～高台無釉。削り高台。見込み溶着痕。瀬戸・美濃系18世紀前半。
1P084	3区貝層上黒褐色土	陶器	皿	完形	体部	口：5.8 高：1.7 底：2.4 厚：0.5	黄白色	黄色	型打成形。菊花肌。付り高台。雲付無釉。灰釉・緑釉流し。瀬戸・美濃系。
1P085	2区20層	陶器	おろし皿	破片	口縁～体下半	厚：0.9	黄白色	黄白色	外面淺溝状沈線。内面格子目沈線。瀬戸・美濃系。
1P086	5区貝層中	磁器	鉢	1/8	口縁～底部	口：22.6 高：(9.0) 厚：0.5	淡灰白色	白色	染付；外体部唐草文。内面縞線。花文。肥前系。
1P087	5区貝層中	陶器	鉢	1/6	口縁～底部	口：35.0 高：8.6 底：16.6 厚：0.7	灰色	淡茶灰色	灰釉。折縁。内面体部～見込み草文(鉄絵)。見込み目跡1点。高台内胎土目。瀬戸・美濃系。
1P088	3区土丹精査	陶器	鉢	破片	口縁～体上半	口：26.2 高：(5.5) 厚：0.5	赤灰色	灰色	灰釉。銅緑釉流し。折縁。外上半淺溝1条。口縁内淺溝。内面草花文(鉄釉)。瀬戸・美濃系。
1P089	P-6、4区黒褐色土	陶器	片口鉢	完形	片口鉢	口：25.8 高：11.2 底：11.2 厚：0.7	赤褐色(白色粒子含む)	茶褐色	口縁部玉縁。内・外面刷毛目。高台無釉。内面に緑・褐色釉重ね掛け。片口接着は地釉後開間に粘土擦り付け。肥前系(唐津)17世紀後半～18世紀初頭。
1P090	3区土丹集石付近ほか	陶器	鉢	1/6	口縁～底部	口：35.4高：10.4底：12.4 厚：0.7	赤褐色(白色粒子含む)	濃茶色	三鳥手。折縁。外面口縁直下に沈線。体部下端に沈線。雲付溶着痕。内面体部に重沈線。見込み目跡3点。肥前系(唐津)17世紀後半～18世紀中葉。
1P091	3区貝層上黒褐色土	陶器	鉢	破片	口縁～体上位	厚：0.6	赤褐色(白色粒子含む)	濃茶色	三鳥手。折縁。内面口縁下および体部上位に沈線。肥前系(唐津)17世紀後半～18世紀中葉。
1P092	3区・1区土丹精査	陶器	皿	1/6	口縁～体中位	口：32.4 高(8.0) 厚：0.5	赤褐色(白色粒子含む)	濃茶色	三鳥手。折縁。外面体部中位無釉。内面口縁下沈線。体部上・中位4列二重沈線。肥前系(唐津)17世紀後半～18世紀中葉。
1P093	5区貝層～黒褐色土	陶器	皿	破片	口縁～体上位	口：32.4 高(5.5) 厚：0.7	赤褐色(白色粒子含む)	濃茶色	三鳥手。折縁。外面体部上位幅広淺溝1条。口縁内および体部に沈線。肥前系(唐津)17世紀後半～18世紀中葉。
1P094	1区貝層下	陶器	鉢	破片	口縁部	厚：0.5	赤褐色	濃茶灰色	三鳥手。折縁。口縁内および体部上位に沈線。肥前系(唐津)17世紀後半～18世紀中葉。
1P095	5区貝層中	陶器	鉢	破片	体部	厚：0.5	赤褐色	濃茶色	三鳥手。外体部中位無釉。内面体部中位に沈線。肥前系(唐津)17世紀後半～18世紀中葉。
1P096	3区土丹精査	陶器	鉢	破片	体下位～底部	高：(4.5) 厚：1.0	赤褐色	赤褐色	外体部下位～高台無釉。体部下端 高台内沈線。内面体部刷毛目(白灰)鉄釉流し。見込み目跡2点。肥前系(唐津)17世紀後半～18世紀初頭。
1P097	5区貝層中	陶器	鉢	破片	体下半～底部	径：(9.4) 高：(4.2) 底：9.2 厚：0.5	小礫 白色粒子含む	濃茶色	内面刷毛目(白泥・鉄釉)。見込み目跡1点。肥前系(唐津)17世紀後半～18世紀初頭。
1P098	3区土丹精査	陶器	片口鉢	完形	口縁部	口：15.5 高：9.0 底：7.0 厚：0.6	黄白色	黄緑色	片口縁切込。体部半球形。ロクロ成形痕。内～体中位灰釉・鉄釉流し。外体部下～高台無釉。削り高台。見込み目跡3点。瀬戸・美濃系。
1P099	4区貝層下・黒褐色土	陶器	襷	破片	胴下半～底部	径：(17.6) 高：(5.0) 底：10.6 厚：0.6	淡灰白色	濃茶色	外面灰釉。胴下位～高台・内面無釉。見込み・高台内溶着痕あり。瀬戸・美濃系。
1P100	3区20層・土丹層外	陶器	搦鉢	2/3	口縁～底部	口：34.0 高：15.0 底：12.9 厚：0.9	黄白色(黒褐色粒子含む)	濃茶色	鉄釉。口縁帯無文。底部回転糸切り痕。口縁部に片口。体部9本単位の櫛目。内底も同一工具による櫛目。瀬戸・美濃系。17世紀末～18世紀初頭。
1P101	3・4区貝層・貝層上黒褐色土ほか	陶器	搦鉢	4/5	口縁～底部	口：33.9 高：13.6 底：13.3 厚：0.8	黒褐色粒子少量含む	濃茶色	鉄釉。口縁帯無文。底部回転糸切り痕。体部16～18本単位の櫛目。内底と同一工具による櫛目。瀬戸・美濃系。17世紀末～18世紀初頭。

F 貝層出土遺物一覽表 (4)

遺物番号	出土地点・層位	種別	器種名	遺存度	部位	法量	胎土	色調	文様・特徴
1P102	1・3・4区。試掘貝層～黒褐色土貝層上	陶器	搦鉢	1/3	口縁～底部	口：36.4 高：13.8 底：13.6 厚：0.9	黒色粒子含む	黒褐色	内面・見込み9本単位の欄目。底部回転系切り痕。鉄釉。瀬戸・美濃系17世紀末～18世紀初葉。
1P103	5区貝層上黒褐色土	陶器	搦鉢	1/3	口縁～体上半	口：34.8 高：(11.6) 厚：0.9	黄白色	黒色	鉄釉。口縁帯無文。内面12本単位の欄目。瀬戸・美濃系17世紀後半。
1P104	3区貝層上黒褐色土	石器	搦鉢	1/3	口縁～底部	口：38.3 高：(12.6) 厚：1.0	白色粒子・雲母少量含む	赤褐色	口縁外帯三段。体部下位沈澱2条。口縁内小突帯。内面11本単位の欄目。丹波産17世紀末。
1P105	3区下部貝層、貝層～黒褐色土ほか	陶器	搦鉢	1/5	口縁～底部	口：34.7 高：(11.2) 厚：0.8	長石・小礫多く含む	濃茶色	口縁外帯三段。体部下位沈澱2条。口縁内小突帯。内面6本単位の欄目。丹波産17世紀末。
1P106	3区貝層上黒褐色土	陶器	搦鉢	1/5	口縁～底部	口：30.0 高：(12.0) 厚：1.0	黒褐色粒子・細礫少量含む	黒色	鉄釉。口縁外帯三段。体部下位沈澱2条。口縁内小突帯。内面11本単位の欄目。丹波産17世紀末。
1P107	3区貝層上黒褐色土	陶器	搦鉢	底2/3	体下半～底部	高：(7.8) 底：14.8 厚：0.9	黒色粒子多く含む	濃茶色	鉄釉。口縁外帯三段。体部下位沈澱2条。口縁内小突帯。内面11本単位の欄目。丹波産17世紀末。
1P108	3区20層	陶器	搦鉢	底のみ	底部のみ	高：(3.1) 底：10.0 厚：1.1	黒色粒子・細礫少量含む	黒色	鉄釉。見込み12本単位の欄目。回転系切り痕。瀬戸・美濃系。
1P109	A-2クワッド	陶器	搦鉢	口破片	口縁～底部	口：30.0 高：(11.8) 厚：0.9	長石・細礫含む	赤褐色	口縁外帯沈澱2条。口縁内突帯下に浅溝。11本単位の欄目。堺・明石系18世紀。内面10本単位の欄目。見込み使用による磨滅。堺・明石系18世紀後半～19世紀。
1P110	4区貝層下	石器	搦鉢	底1/2	底部のみ	高：(1.9) 底：13.8 厚：1.0	小礫多、白色粒子含む	赤褐色	内面10本単位の欄目。見込み使用による磨滅。堺・明石系18世紀後半～19世紀。
1P111	5区貝層～黒褐色土	陶器	搦鉢	口破片	口縁～底部	高：(10.0) 厚：1.1	白色微粒子・細礫少量含む	外面茶色	口縁平坦成形。口縁部内・外面に細帯状突出(口状)。内面下半使用による磨滅。常滑(中世?)
1P112	3区貝層上	陶器	搦鉢	口破片	口縁部	厚：1.2	長石・細礫・雲母少量含む	外面茶褐色	口縁平坦成形。口縁部直下浅溝状。常滑(15世紀?)
1P113	B-5クワッド	陶器	搦鉢	口破片	口縁部	厚：1.2	細礫・長石含む	黒褐色	口縁平坦成形。口縁部直下浅溝状。常滑(15世紀?)
1P114	3区貝層上	石器	搦鉢	底破片	底部のみ	厚：0.8	長石小粒多含む	濃茶色	口縁平坦成形。口縁部直下浅溝状。常滑(15世紀?)
1P115	4区貝層下	陶器	甕	口破片	口縁部	厚：1.8	細礫・長石多く含む	濃茶色	内面7本単位の欄目(放射状、周囲回転状)。丹波系?
1P116	4・5区貝層下、貝層中	陶器	甕	破片	肩部	厚：1.4	細礫・長石・雲母含む	外面濃茶色	口縁部上・下縁は連続的打痕。N字口縁の新段階。常滑15世紀。外面刷毛塗り釉。輪轆底残る。常滑。
1P117	5区貝層上黒褐色土	陶器	甕	破片	胴下部	厚：1.5	砂粒多く含む	茶褐色	胴下部に凹み。内・外面に斜位へろ先痕。胴部下縁に自然釉。常滑。
1P118	5区貝層中	陶器	甕	破片	胴部	厚：1.5	長石・雲母少量含む	外面黒褐色	口縁部上・下縁は連続的打痕。N字口縁の新段階。常滑15世紀。外面刷毛塗り釉。輪轆底残る。常滑。
1P119	3区土丹精査	陶器	香炉	破片	口縁～底部	口：10.2 高：6.5 底：7.0 厚：0.6	灰色	黄緑色	灰釉。外縁部外周斜位回転削り。底部回転成形後三足貼付(内二足欠)。内体部口縁形成残る。瀬戸・美濃系。
1P120	5区貝層中	陶器	香炉	1/3	口縁～底部	口：10.0 高：6.7 底：10.2 厚：0.4	灰色	灰褐色	口縁外面に破打痕。外体部灰釉後遺灰釉。底部無釉。三足貼付(内一足欠)。
1P121	5区貝層中	陶器	香炉	1/5	口縁～底部	口：12.8 高：6.2 底：13.0 厚：0.4	黄褐色	緑褐色	口縁外面に破打痕。外体部灰釉後遺灰釉。底部無釉。三足貼付(内一足欠)。
1P122	3区貝層上黒褐色土	陶器	香炉	破片	底部	径：8.0 高：(2.2) 底：5.4 厚：0.5	黄白色	淡灰黄褐色	口縁外面に破打痕。外体部灰釉後遺灰釉。底部無釉。三足貼付(内一足欠)。
1P123	A-2クワッド精査	磁器	壺	1/3	頸～底部	径：(22.0) 高：(29.0) 底：(10.8) 厚：0.4	微細黒色粒少量含む	淡青白色	肥前産京焼風陶器。外体部透明釉。内面及び高台無釉。高台内清水紋。肥前系17世紀後半～18世紀前半。
1P124	4区貝層下	磁器	瓶	底1/2	体下位～底部	高：(6.1) 底：6.8 厚：0.5	黒褐・白色微粒子少量含む	淡青灰色	外周透明釉。高台～壺付無釉。肥前系。染付・圖線。壺付無釉。高台砂目付着。内面無釉。肥前系(初期伊万里?)17世紀前半。
1P125	4区黒褐色土	陶器	壺	口欠	体部～底部	頸径：5.3 径：12.4 底：8.0 厚：0.8	黄白色	茶色	外体部～底部鉄釉。灰釉流し。内面底部一部除き鉄釉。口縁形成形残る。瀬戸・美濃系。
1P126	4区貝層下	陶器	徳利	口1/2	口縁～体上半	口：4.0 高：(9.5) 厚：0.5	灰色	緑灰色	灰釉。口縁部は外側こびねり作り。外体部に浅い沈澱。内体部無釉。口縁形成形残る。瀬戸・美濃系18世紀前半。
1P127	4区貝層下	陶器	水注	底のみ	体下位～底部	高：(6.6) 底：7.0 厚：0.5	黄白色	黄灰白色	口縁外周に破打痕。把手貼付の痕跡。体～高台無釉。高台内回転痕。内体～口縁形成形残る。瀬戸・美濃系。
1P128	5区貝層～黒褐色土	石器	徳利	底1/2	体下位～底部	高：(6.4) 底：12.8 厚：0.8	灰色(底部外側茶色)	茶色	口縁外周に破打痕。把手貼付の痕跡。体～高台無釉。高台内回転痕。内体～口縁形成形残る。瀬戸・美濃系。
1P129	4区貝層下	陶器	半脚甕		口縁～底部	口：17.0 底：10.8 厚：0.3	黄白色	濃茶色	口縁～体中位。内面鉄釉。体下位～底部無釉。内面灰状物質付着底部多、胴部少。口縁部短口縁。内周状。外周破打痕あり。灰落し等に転用か?瀬戸・美濃系。
1P130	3区20層	陶器	水注	口欠	口縁～底部	口：4.8 高：10.2 底：7.8 厚：0.6	黄白色	黄褐色	口縁部短口縁。内周状。外周破打痕あり。灰落し等に転用か?瀬戸・美濃系。
1P131	3区貝層上黒褐色土	陶器	水注	1/2	体部～底部	高：(8.5) 底：10.0 厚：0.5	灰色	黄褐色	高台部・壺付無釉。内面口縁形成形残る。瀬戸・美濃系。体内～外面鉄釉。外部二重波状沈澱。内面口縁形成形痕。瀬戸・美濃系。

F 貝層出土遺物一覧表 (5)

遺物番号	出土地点・層位	種別	器種名	遺存度	部位	法量・大きさ (cm)	胎土	色調	文様・特徴
IP132	3区貝層上黒褐色土	磁器	灰落とし	1/2	口縁～体下半	口：6.4 高：(6.2) 厚：0.4	黒褐色微粒子含む	白色	口縁内突帯状。突帯下沈線。外面～口唇淡黄白釉(貫入)。内面突帯下～体部無釉。回転ナデ成形痕。内面下位黄色付着物。
IP133	A-2グリップ包含層	磁器	灰落とし	4/5	口縁～底部	口：6.2 高：8.2 径：8.3 底：6.4 厚：0.5	白色	白色	染付：山水・梅・柳文。圈線。肥前系。口縁内側突帯状。体部下端で外側に開く。内突帯～外面体部透明釉。内体部ロクロ成形痕。下位に黄褐色付着物。高台部無釉。
IP134	5区貝層上黒褐色土	磁器	蕎麦猪口	破片	口縁～底部	口：7.0 高：5.7 底：5.0 厚：0.3	白色	白色	体部中位～下位に格子状文。体下位圈線。染付：外面体部松・土筆・鳥文。肥前系。
IP135	4区A-2グリップ下包含層	磁器	香戸	1/6	口縁～底部	口：6.6 高：5.6 径：8.6 厚：0.5	黒色微粒子含む	白色	六角形。底部に足貼付痕あり。染付：上面連続端文。角部円形花文。体部側面側面一重沈線・花文・龍文。
IP136	4・5区貝層上黒褐色土	磁器	仏飯器	1/3	口縁～底部	口：7.5 高：4.5 底：4.0 厚：0.3	黒褐色微粒子少々含む	淡青色	染付：口縁外周降り文(コンヤク印版)。脚部指頭状沈線。底面回転削り。中央凹み。無釉。肥前系(波在見)18世紀後半。
IP137	3区土丹集石上	磁器	仏飯器	1/3	口縁～底部	口：8.0 高：5.5 底：4.0 厚：0.3	黒褐色微粒子含む	淡青色	染付：体部文様不明。体部下位一重圈線。脚部上位二重圈線。底面無釉・砂目付着肥前系。
IP138	4区貝層下	磁器	瓶	破片	体下位～底部	高：(5.7) 底：11.6 厚：0.4	白色	白色	染付：体部下位駒唐草文。圈線。内体部中位ロクロ成形痕。壺付無釉。高台砂目付着。肥前系。
IP139	5区貝層上黒褐色土	磁器	蓋	2/3	撮み～口縁部	口：10.1 高：3.0 厚：0.2	黒褐色微粒子含む	白色	染付：撮み～体部外面竹・花文。内面並・花文。撮み端部無釉。肥前系。
IP140	4区貝層下	磁器	蓋	1/5	撮み～口縁部	口：10.0 高：3.1 厚：0.3	白色	白色	染付：外体部亀文・飛鳥文。内面圈線。見込みに舟文。肥前系。
IP141	4区黒褐色土	磁器	蓋	1/3	撮み～口縁部	口：10.5 高：2.7 厚：0.3	白色	白色	染付：外樹木文。圈線・鷲文。撮み上端無釉。砂目付着。肥前系。
IP142	P-9	陶器	蓋	1/4	口縁部	口：8.9 高：2.9 厚：0.3	黄褐色	淡黄褐色	撮みは円形・8花弁。撮み～口唇部吹袖。体部花文。内面無釉。京・信楽系。
IP143	3区貝層上黒褐色土	陶器	土鍋蓋	1/4	撮み～口縁部	口：16.0 高：3.1 厚：0.4	黄褐色	茶色	撮み体部に貼付後内部回転削り。撮み～体部鉄軸。飛び砲。無釉。口縁部内～外面無釉。内面体部～底部鉄軸。内面天井部に落着痕。
IP144	3区貝層上黒褐色土	陶器	蟹罎	破片	体下位～底部	厚：0.5	淡黄褐色	薄緑色	内外面鉄軸。底部無釉。指ナデ痕残す。瀬戸・美濃系。
IP145	4区貝層上黒褐色土	陶器	蟹罎	破片	体下位～底部	厚：0.5	黄白色	薄緑色	内外面鉄軸。底部無釉。指ナデ痕残す。外体部は型紙削りによる花文か？瀬戸・美濃系。
IP146	4区黒褐色土	陶器	仏花瓶	底のみ	体下位～底部	径：3.0 高：(5.4) 底：5.5 厚：0.5	黄白色	黄白色	体部下端断面口形沈線。体～内底部吹袖。高台部回転削り成形。無釉。両側把手破損。肥前系？
IP147	3区貝層上黒褐色土	陶器	灯明油皿	ほぼ完形	口縁～底部	口：11.0 高：2.3 底：5.0 厚：0.4	淡褐色	茶褐色	体～底部ロクロ成形痕残る。口縁～見込み鉄軸。口縁部一部煤付着。
IP148	3区貝層上黒褐色土	磁器	灯明油皿	1/4	口縁～底部	口：10.5 高：2.2 底：6.2 厚：0.4	白色微粒子微量含む	黒褐色	体～底部ロクロ成形痕残る。体上半～見込み鉄軸。内外面煤付着。志戸呂産。
IP149	3区範圍確認	磁器	灯明油皿	1/4	口縁～底部	口：10.6 高：2.1 底：5.0 厚：0.3	赤褐色	茶褐色	外体部ロクロ成形痕残る。外口縁～見込み鉄軸。内外面煤付着。志戸呂産。
IP150	3区範圍確認	陶器	灯明油皿	1/4	口縁～底部	口：10.2 高：1.9 底：4.9 厚：0.4	灰色	濃茶色	体部外面上半鉄軸。見込み鉄軸。瀬戸・美濃系。
IP151	4区貝層上黒褐色土	磁器	灯明油皿	1/8	口縁～底部	口：10.6 高：1.9 底：6.0 厚：0.3	灰色	茶褐色	外面油煙・煤付着。内面油煙付着。志戸呂？
IP152	3区貝層上黒褐色土	磁器	灯明受皿	2/3	口縁～底部	口：11.4 高：2.9 底：4.8 厚：0.3	灰色	黒褐色	油溝ア一字状3か所。内～外面口縁部鉄軸。外体部～底部無釉。志戸呂産。
IP153	3区貝層上黒褐色土	磁器	灯明受皿	2/3	口縁～底部	口：9.2 高：2.5 底：5.0 厚：0.3	灰色	黒褐色	油溝ア一字状1か所。外体部下位に落着痕あり。内～外面口縁鉄軸。外体～底部無釉。志戸呂産。
IP154	5区貝層中	磁器	灯明受皿	2/3	口縁～底部	口：11.0 高：2.6 底：5.0 厚：0.3	赤褐色	暗赤褐色	油溝ア一字状2か所。口縁部外面ロクロ成形痕。内～外面体部上半鉄軸。外体下半～底部無釉。志戸呂産。
IP155	4区貝層上	磁器	灯明受皿	1/2	口縁～底部	口：10.5 高：2.5 底：3.8 厚：0.3	茶褐色	濃茶色	内～外面口縁部鉄軸。外体部～底部ロクロ成形痕。無釉。志戸呂産。
IP156	4区貝層上黒褐色土	陶器	灯明受皿	2/3	口縁～底部	口：10.0 高：2.2 底：4.7 厚：0.4	灰色	濃茶色	外体部にロクロ成形痕。細沈線・落着痕あり。体下半～底面に小粘土塊付着。
IP157	4区貝層下	陶器	灯明受皿	1/3	口縁～底部	口：8.0 高：2.4 底：4.5 厚：0.4	黄白色	濃茶色	鉄軸。瀬戸・美濃系。
IP158	A-2グリップ精査	陶器	灯明受皿	4/5	口縁～底部	口：8.0 高：1.3 底：3.1 厚：0.2	乳白色	黄褐色	内～口縁部外面鉄軸。外体部～底部無釉。瀬戸・美濃系。
IP159	P-7	土器	灯明受皿	4/5	口縁～底部	口：11.3 高：2.8 底：6.1 厚：0.7	橙色	橙色	油溝半月形1か所。外～口縁部鉄軸。外体部～底部無釉。瀬戸・美濃系。
IP160	1区20層	土器	かわらけ	完形	口縁～底部	口：11.4 底：6.6 高：1.9 厚：0.4	微細な褐色粒を含む	淡橙褐色	底部回転削り痕。油溝半月形1か所。江戸在地系。
IP161	P-2	土器	かわらけ	完形	口縁～底部	口：9.2 底：5.0 高：1.6 厚：0.3	微細な褐色粒を含む	淡橙褐色	ロクロ成形。回転削り(左)。3か所にターール状付着物。内面は円芯状に調整。
IP162	3区土丹精査	土器	かわらけ	略完形	口縁～底部	口：10.2 底：5.0 高：2.0 厚：0.3	微細な褐色粒を含む	淡褐色	ややいびつ。ロクロ成形。回転削り(左)。内底同心芯口調整 約1/2保ける。
IP163	1区18層中、1区最下貝層	土器	かわらけ	9/10	口縁～底部	口：10.5 底：6.6 高：2.0 厚：0.3	微細な褐色粒を含む	淡橙褐色	ロクロ成形。回転削り(左)。口唇にターール状付着物。わずかに外反。器面荒れる。
IP164	4区貝層下	土器	かわらけ	口1/4欠	口縁～底部	口：9.0 底：5.6 高：1.4 厚：0.4	微細な砂粒を含む	暗褐色	ロクロ成形。回転削り(左)。内外面口縁に煤状付着物。また重ねた為内外底にターール状付着物。外面に赤褐色を認め、着色されていた可能性あり。内底は渦巻き状に調整。
IP165	1区18層中	土器	かわらけ	口1/5欠	口縁～底部	口：9.8 底：5.4 高：1.6 厚：0.4	微細な褐色粒を含む	淡橙褐色	ロクロ成形。回転削り(左)。内底渦巻き状に調整。

F 貝層出土遺物一覧表(6)

遺物番号	出土地点・層位	種別	器種名	遺存度	部位	法量・大きさ (cm)	胎土	色調	文様・特徴
IP166	1区11層	土器	かわらけ	約4/5		口：9.0 底：5.0 高：1.9 厚：0.5	微細な砂粒を含む	淡橙褐色	ロクロ成形。回転糸切り(左)。口唇にターレット状付着物。内底は同心円状調整。遺存悪い。
IP167	5区貝層中	土器	かわらけ	約4/5		口：16.2 底：9.5 高：2.0 厚：0.5	微細な褐色粒を含む	淡褐色	ロクロ成形。回転糸切り(左)。内底端が沈む。同心円状調整。
IP168	4区貝層上黒褐色土	土器	かわらけ	約4/5		口：9.4 底：4.8 高：1.8 厚：0.3	微細な褐色粒を含む	淡橙褐色	ロクロ成形。回転糸切り(左)。口唇にターレット状付着物。器面剥落著しい。
IP169	3区貝層上黒褐色土	土器	かわらけ	約1/2		口：(12.8) 底：(6.8) 高：2.3 厚：0.4	微細な褐色粒を含む	淡橙褐色	ロクロ成形。回転糸切り(左)。口唇にターレット状付着物。
IP170	1区貝層中、1区11層	土器	かわらけ	約4/5		口：14.0 底：8.5 高：2.7 厚：0.3	微細な褐色粒を含む	橙褐色	ロクロ成形。回転糸切り(左)。内底同心円調整。体部境況線状に沈む。
IP171	1区18貝層中	土器	かわらけ	2/5		口：10.8 底：6.4 高：2.0 厚：0.4	微細な褐色粒を含む	淡橙褐色	ロクロ成形。回転糸切り(左)。ごくわずかに外反。
IP172	3・4区貝層上黒褐色土	土器	かわらけ	約1/3欠		口：(12.0) 底：(6.8) 高：2.5 厚：0.5	微細な黒色粒を含む	淡橙褐色	ロクロ成形。回転糸切り(左)。焼成後底部穿孔。内底は同心円状調整。
IP173	3区貝層上黒褐色土	土器	かわらけ	約1/5		口：(12.8) 底：6.7 高：2.5 厚：0.4	微細な褐色粒を含む	淡褐色	ロクロ成形。回転糸切り(左)。口唇にターレット状付着物。内底同心円状調整。
IP174	1区18層	土器	かわらけ	約1/3片		口：(12.4) 底：(6.8) 高：2.7 厚：0.4	微細な黒色粒を含む	淡褐色	ロクロ成形。回転糸切り(左)。内底端が沈む。
IP175	3区20層中	土器	かわらけ	1/5片		口：(12.6) 底：(7.8) 高：2.2 厚：0.4	微細な褐色粒を含む	淡橙褐色	ロクロ成形。回転糸切り(左)。内外面に灰状物が付着。内底同心円状調整。
IP176	4区貝層上黒褐色土	土器	かわらけ	1/6片		口：(13.8) 底：(7.8) 高：2.5 厚：0.4	微細な黒色粒を含む	橙褐色	ロクロ成形。回転糸切り(左)。口唇に棘状付着物。内底端が沈む。
IP177	4区貝層上黒褐色土	土器	かわらけ	約1/4片		口：(10.2) 底：(6.8) 高：1.6 厚：0.3	微細な粒子を含む	赤銅色	ロクロ成形。回転糸切り(左)。外は鉄錆状のものか付着し、内は黒く煉ける。
IP178	3区貝層上黒褐色土	土器	かわらけ	約7/10		口：(9.7) 底：6.8 高：1.7 厚：0.5	微細な砂粒を含む	淡褐色	内底は同心円状調整で境が沈む。
IP179	3区20層	土器	かわらけ	8/10		口：9.4 底：(7.8) 高：2.4 厚：0.6	微細な黒色粒を含む	淡橙褐色	ロクロ成形。回転糸切り(右)。ゆがむ。口縁は立つ。
IP180	3区20層	土器	かわらけ	約8/10		口：(10.1) 底：7.2 高：1.8 厚：0.5	微細な黒色粒を含む	淡橙褐色	ロクロ成形。回転糸切り後へラナデ。内底端が沈む。椀状の付着物。
IP181	1区18層	土器	かわらけ	約1/5片		口：(10.0) 底：7.4 高：2.5 厚：0.8	微細な褐色粒を含む	淡橙褐色	ロクロ成形。回転糸切り(左)。内底指頂ナデ。焼成前の口唇のくぼみ。
IP182	4区貝層上黒褐色土	土器	かわらけ	1/6片		口：(8.4) 底：(6.2) 高：1.7 厚：0.3	微細な砂粒を含む	暗褐色	ロクロ成形。回転糸切。口唇に棘状の付着物。
IP183	4区貝層上黒褐色土	土器	かわらけ	1/4片		口：(6.5) 底：(4.0) 高：2.1 厚：0.5	微細な黒色粒を含む	淡橙褐色	ロクロ成形。底面にスノコ痕。
IP184	5区貝層中	土器	かわらけ	約1/3片		口：(7.2) 底：3.6 高：1.3 厚：0.2	微細な黒色粒を含む	淡橙褐色	ロクロ成形。回転糸切り(左)。内底同心円状調整。境はわずかに沈む。底部中央に小穴(未貫通)あり。焼成前。
IP185	3区20層	土器	かわらけ	約1/4片		口：(6.6) 底：3.7 高：1.1 厚：0.3	微細な褐色粒を含む	淡褐色	ロクロ成形。回転糸切り(左)。内底同心円状調整。境が沈む。
IP186	4区貝層上黒褐色土	土器	かわらけ	約1/3片		口：(6.6) 底：3.1 高：2.3 厚：0.3	微細な黒色粒を含む	淡褐色	ロクロ成形。回転糸切り(左)。外面器面遺存悪い。内底同心円状調整境沈む。
IP187	石垣外(京急)	土器	焜炉	約4/5		口：33.2 高：(19.5) 厚：1.1	微細な雲母を多く含む	暗褐色	口唇に3つの突起。口縁下に一条の沈線を巡らせ以下にローラー痕。1か所に窓あり。破損後に鉄錆塊が内外に付着。三河産か。
IP188	3区土丹精査。3区貝層中、1区石垣下、3・4区貝層上黒褐色土	土器	火消壺	約3/4		口：20.2 底：18.0 胴：23.0 高：22.9 厚：1.1	微細な黒色粒を含む	橙褐色	三脚。2か所に突起。口縁内湾。ロクロ成形。内の調整はあらうい。
IP189	P-4・P-5、1区貝層中、3区龍田確認	土器	火消壺	胴約2/3		胴：(23.6) 底：19.6 高：(23.5) 厚：1.1	微細な砂粒を含む	暗褐色	江戸在地系素焼。三脚2脚現存。突起部あり2つ?。ロクロ成形。
IP190	3区焼土内脇貝層中、3区20層中、他	土器	焜炉	約1/3		口：(19.4) 底：(19.2) 胴：(22.0) 高：20.9 厚：1.0	微細な黒色粒を含む	暗褐色	ロクロ成形。江戸在地系。脚は1つのみ現存。12年の調査破片と接合。
IP191	4区貝層上黒褐色土	土器	焜炉	破片		長：(20.6) 幅：(9.6) 高：(10.9) 厚：1.6	黒褐色粒をわずかに含む	暗褐色	四角い。底面に脚のとれた痕跡を有す。
IP192	4区貝層上黒褐色土	土器	焜炉	破片		厚：1.8	微細な砂粒を含む	暗褐色	禁口付近の破片。
IP193	4区貝層上黒褐色土	土器	焜炉	破片		口：(35.4) 高：(6.1) 厚：1.1	微細な砂粒を含む	暗褐色	タテのナデ形成。口が切られる。
IP194	3区土丹精査	土器	火鉢	破片		口：(33.0) 底：(24.0) 高：11.9 厚：1.1	微細な砂粒を含む	暗褐色	底部境に指かけ穴あり。
IP195	3区貝層上黒褐色土	土器	火鉢	約1/5片		口：(22.6) 底：(17.4) 高：7.2 厚：1.2	微細な褐色粒を含む	橙褐色	ロクロ成形。底部に足の痕跡あり。口縁下に沈潜をめぐらせ、胴部に飾指波状を施す。口唇に6か所窪みを入れる。内面上にターレット状付着物。
IP196	3区貝層上黒褐色土	土器	火鉢	約1/8		口：(24.0) 底：(17.8) 高：8.2 厚：1.1	微細な褐色粒を含む	橙褐色	口縁内側にスズ状付着物。江戸在地系。
IP197	3・4区貝層上黒褐色土、5区貝層上黒褐色土～貝層	土器	火消壺	破片		口：(23.6) 厚：1.0	微細な黒色粒を含む	橙褐色	口縁内に浅い沈線状あり。江戸在地系。
IP198	1区石垣下	土器	瓦燧破片			径：(22.0) 高：(11.1) 厚：1.0	微細な褐色粒を含む	暗褐色	外面の調整は丁寧。1か所に穿孔。
IP240	3区貝層上黒褐色土、4区貝層上黒褐色土	土器	瓦燧	受皿破片		径：(10.8) 高：(4.6) 厚：1.6	微細な砂粒を含む	暗褐色	外面にハケ目状のナデ痕。
IP241	石垣外(京急)	土器	瓦燧	約1/4		径：(30.0) 底：(27.0) 厚：1.2	長石・金雲母多含	暗褐色	外面にローラー痕。内突起に6個の窪み。内面にターレット状の付着物。三河産。
IP199	4区黒褐色土	土器	瓦燧	破片		径：(22.0) 高：(6.8) 厚：1.4	微細な砂粒を含む	淡橙褐色	ロクロ成形。

F 貝層出土遺物一覧表 (7)

遺物番号	出土地点・層位	種別	器種名	遺存度	部位	法量・大きさ (cm)	胎土	色調	文様・特徴
1P201	3区土丹精査	土器	規炉扉?			長：(9.2) 幅：(8.1) 厚：1.5	微細な砂粒を含む	暗橙褐色	外面にターレット状のものが付着。
1P202	3区貝層上黒褐色土	土器	規炉扉?			長：(7.3) 幅：(6.7) 厚：2.0	微細な砂粒を含む	暗褐色	端部が面取りされる。瓦にもみえる。
1P203	4区貝層下	土器	塩焼蓋	1/3		口：(7.0) 底：6.4 高：8.8 厚：1.2	微細な砂粒を含む	淡橙褐色	泉の刻印。内側に成形時の圧痕あり。
1P204	3区土丹集石上	土製品	泥人形			長：(4.7) 幅：(3.9) 厚：1.3	微細な砂粒を含む	淡橙褐色	胴部分は中空。坊主か?
1P205	4区黒褐色土	土製品	泥人形			長：(6.0) 幅：(3.1) 厚：0.9	微細な砂粒を含む	橙褐色	合わせ面は平滑。1か所に孔あり。首部に刻み。坊主か?
1P206	3区土丹精査	土製品	箱庭道具			長：5.5 幅：5.5 厚：2.9	微細な金色砂粒を含む	淡橙褐色	裏に接合部と思われる痕跡あり。
1P207	5区貝層上黒褐色土	土製品	土錘			長：(3.9) 径：1.0 孔径：0.4	微細な砂粒を含む	橙褐色	ややいびつ。
1P208	3区下部貝層	土製品	土錘			長：(20.2) 幅：(10.5) 厚：2.0	微細な砂粒を含む	橙褐色	孔は小さい。
1K001	3区貝層上黒褐色土	瓦	丸瓦片			長：(14.6) 幅：(7.6) 厚：2.2	長	表に丸の刻印。裏に布目痕。	裏面に布目痕を残す。
1K002	4区貝層下	瓦	丸瓦片			長：(15.8) 幅：(12.5) 厚：2.0	長	裏面はやや荒れる。	裏面はやや荒れる。
1K003	4区貝層上黒褐色土	瓦	平瓦			長：(12.1) 幅：(11.3) 厚：1.9	長	裏面の一部分が剥落。	裏面の一部分が剥落。
1K004	K-1	瓦	瓦片			長：15.6 幅：3.6 厚：2.8	長	柱状を呈する。2面が丁寧な研磨。2面が成型時の工具痕を残す。流紋岩。	柱状を呈し一部欠。4面とも丁寧に研かれる。流紋岩。
1S001	4区貝層中	石器	砥石			長：(6.7) 幅：3.2 厚：2.4	長	柱状を呈し両端を欠する。4面とも丁寧に研かれる。流紋岩 (新第三紀)。	柱状を呈し両面が丁寧に研磨。片側面に形成時の細かな工具痕。輝緑凝灰岩。
1S002	5区貝層中	石器	砥石			長：(7.1) 幅：(5.9) 厚：2.3	長	角も面取り。裏面は一部剥落し傷も多い。粘板岩。	丁寧に研かれる。裏面に成型時の工具痕あり。董青石ホルンフェルス。
1S003	4区貝層上黒褐色土	石器	砥石			長：(11.0) 幅：(6.5) 厚：(1.6)	長	海は中央左に寄る。周囲は欠ける。粘板岩。	
1S004	5区貝層中	石器	砥石			長：(9.3) 幅：(5.0) 厚：(2.1)	長	周囲が欠ける。輝緑岩凝灰岩。	
1S005	4区貝層下	石器	砥石			長：8.6 幅：8.4 厚：7.6	長	球形を呈する。砂岩。	
1S006	4区貝層上黒褐色土	石器	子産石			長：9.9 径：1.1 受径：1.4 厚：0.05	長	錆び著しく解説不能。	
1M001	3区貝層上黒褐色土	金属器	煙管			長：4.5 径：0.9 受径：1.4 厚：0.05	長	雁首。短い。遺存良好。一部に金鍍金を有する。	
1M002	3区貝層上黒褐色土	金属器	煙管			長：(6.1) 径：1.0 厚：0.05	長	雁首。火皿欠。一部に金鍍金を残す。	
1M003	4区貝層上黒褐色土	金属器	煙管			長：(6.7) 径：1.0 厚：0.05	長	雁首。火皿欠。補強帯残る。一部に緑青が付着し、下に金鍍金が残る。	
1M004	5区貝層上黒褐色土	金属器	煙管			長：5.3 径：0.9 厚：0.05	長	ややいびつ。合わせ目に金鍍金残る。	
1M005	3区貝層上黒褐色土	金属器	煙管			長：6.2 幅：9.0 厚：0.1	長	左右対称に3個ずつの孔あり。また下位にはビスが残る。このビスで他の部分と繋いでいたため周囲の錆びは進む。	
1M006	5区貝層上黒褐色土	金属器	煙管			長：2.2 幅：(12.4) 厚：3.1	長	錆びの進行著しく、錆膨れ多。一部に炭化木材がつく。	
1M007	4区貝層上黒褐色土	金属器	脚り金具			長：(10.5) 幅：1.3 厚：0.3	長	錆びが著しい。	
1M008	暗塚精査	金属器	錠			長：(8.0) 幅：1.0 厚：0.3	長	上字にまがる形状の鉄製品。用途は不明。やや錆び進む。	
1M009	3区貝層上黒褐色土	金属器	錠			長：(6.3) 幅：1.5 厚：0.8	長	錆びが進む。2面に木質が付着。	
1M010	4区貝層上黒褐色土	金属器	錠状鉄製品			長：(7.4) 径：0.9 厚：0.7	長	錆びが全面を覆い詳細不明。下位にも錆膨れあり。把手になる可能性も。	
1M011	4区貝層上黒褐色土	金属器	錠			長：(4.6) 幅：(3.6) 厚：0.9 厚：0.4	長	先を欠く。頭はT字状を呈する。断面は四角形。	
1M012	5区貝層上	金属器	釘?			長：7.5 幅：2.7 厚：0.8	長	錆びが著しい。一部に木質。欠損部にて中空であることが判明。	
1M013	4区貝層上黒褐色土	金属器	釘			長：(8.6) 幅：1.8 厚：0.7	長	頭がなく釘としたが、あるいははばりになる可能性あり。一部に木質。	
1M014	5区貝層上	金属器	鉄釘			長：(9.0) 幅：(2.6) 厚：0.4	長	錆び進む。中空。	
1M015	3区貝層上黒褐色土	金属器	鉄釘?			長：(6.3) 幅：1.2 厚：0.7	長	緩い円弧を呈する。先を欠く。錆び著しい。貝をむく道具か?	
1M016	4区黒褐色土～貝層	金属器	火箸			径：4.6 厚：0.25	径	錆び進む。一部に木質。断面は四角気味。	
1M017	3区貝層上黒褐色土	金属器	不明鉄製品			長：1. 幅：2.2 厚：0.08	長	周囲が一段低くなる。中心の孔の裏側にバりが残る。	
1M018	暗塚精査	金属器	鉄釘						
1M019	3区貝層上黒褐色土	金属器	紡車車?						
1M020	3区貝層上黒褐色土	金属器	銅板						加工品の切れ端か?

## F 貝層出土遺物一覧表 (8)

遺物番号	出土地点・層位	種別	器種名	遺存度	部位	法量・大きさ (cm)	胎土	色調	文様・特徴
1P233	5区貝層中		鍋こすり			長：7.0 幅：9.0 厚：2.7			石碗大の常滑口縁片を使用。裏側も四隅は研磨される。口唇に鉄錆状が付着。
1P234	4区貝層下		鍋こすり			長：4.2 幅：10.7 厚：0.7			三鳥手の鉢口縁片を使用。口唇部の研磨が強い。
1P235	3区土丹精査		鍋こすり			長：4.2 幅：7.5 厚：0.7			襷鉢口縁部片を使用。図下方は研磨痕少ない。
1P236	5区貝層中		鍋こすり			長：8.8 幅：8.7 厚：1.1			襷鉢片を使用。図上の一部はほとんど研磨されない。
1P237	4区貝層上黒褐色土		羽口			径：8.0 孔径：2.7		暗橙褐色	先端に一部溶融金属が付着。
1P238	3区貝層上黒褐色土		羽口			長：(16.0) 幅：(11.2) 厚：(8.5)		橙褐色	差込部、断面左側下位は船状となる。
1P239	1区貝層中		羽口			長：(5.6) 幅：(4.9) 径：1.5		橙褐色	送風孔は小さめ。

## 石垣・参道出土遺物一覧表

遺物番号	出土地点・層位	種別	器種名	遺存度	部位	法量・大きさ (cm)	胎土	色調	文様・特徴
1P209	石段付近精査	磁器	碗	1/3	口縁～底部	口：11.0 高：5.5 底：4.2 厚：0.4	黒褐色粒子含む	灰白色	染付：外体部位笹・梅文、團縁。墨付無軸。見込み蛇の目軸刺ぎ。肥前系。
1P210	石段貝づまり薄覆土	磁器	香炉	1/5	口縁～底部	口：14.2 高：7.2 底：10.0 厚：0.4	黒褐色微粒子含む	白色	染付：團縁、花唐草文、團縁。外底部波状文・團縁。口唇・墨付無軸。高台砂目付着。肥前系。
1P211	石段付近精査	磁器	小杯	1/3	口縁～底部	口：8.2 高：4.1 底：3.4 厚：0.4	淡灰白色	淡灰白色	染付：外体部位笹文・円文、見込み花文？墨付無軸。肥前系。
1P212	石段貝づまり薄	磁器	碗	1/4	口縁～底部	口：12.0 高：5.4 底：4.0 厚：0.4	淡青白色	淡青白色	青磁染付？外内～内面体部にかけ松鶴文。墨付無軸。高台砂目付着。瀬戸・美濃系近代以降。
1P213	石段貝づまり薄	磁器	碗	1/5	体下半～底部	口：(7.0) 高：(2.7) 底：3.8 厚：0.4	黒褐色微粒子含む	白色	染付：体部紅葉文、團縁。墨付無軸。高台砂目付着。瀬戸・美濃系近代以降。
1P214	石段貝づまり薄	磁器	皿	1/3	口縁～底部	口：7.8 高：1.8 底：4.0 厚：0.2	白色	白色	輪花皿。見込み月・昇。内外面透明軸。高台無軸。近代以降。
1P215	水滴	磁器	水筒	2/3	角部	径：(4.1×5.1) 高：3.0 厚：0.3	黒褐色微粒子含む	白色	油漕2か所アーチ状。内外～外部鉄軸。注水付近に呉須。肥前系。
1P216	石段付近精査	磁器	灯明受皿	2/3	口縁～底部	口：9.2 高：2.4 底：4.0 厚：0.3	白色微粒子含む	濃茶色	油漕2か所アーチ状。内外～外部鉄軸。注水付近に呉須。肥前系。
1P217	石段付近精査	陶器	灯明受皿	2/5	口縁～底部	口：11.4 高：2.4 底：5.6 厚：0.3	底部付近黄白色	濃茶色	油漕1か所U字状。内～外部鉄軸。外面下位に焼成時溶着痕。瀬戸・美濃系。
1P218	石段付近精査	陶器	灯明皿	1/8	口縁～底部	口：10.4 高：3.0 底：4.8 厚：0.4	灰色	白色	内～外体部中位鉄軸。
1P219	暗渠精査	磁器	碗	1/3	口縁～底部	口：8.4 高：4.4 底：3.6 厚：0.4	黒褐色微粒子含む	白色	染付：團縁、花松文、團縁。内面團縁。墨付無軸。瀬戸・美濃系19世紀。
1P220	暗渠P-1	陶器	碗	破片	口縁部	高：2.8 厚：0.5	黒褐色細粒子少量含む	灰色	折縁。上面に浅溝。内外面灰軸。内体部草花文(鉄軸)。瀬戸・美濃系。
1P232	石段付近精査	鉢	灯明受皿	2/3	口縁部～底部	口：9.2 高：2.4 底：4.0 厚0.3cm	白色微粒子含む	濃茶色	油漕2か所アーチ状。内面～外面体部中位鉄軸。口縁部一端に墨付着。志戸呂。

## 遺構外出土遺物一覧表

遺物番号	出土地点・層位	種別	器種名	遺存度	部位	法量・大きさ (cm)	胎土	色調	文様・特徴
1P221	B-3～4グリッド包合層	磁器	蕎麦箸口	完形	口縁～底部	口：7.2 高：5.6 底：5.6 厚：0.4	白色	薄青味	染付：團縁。区画矢羽根文、團縁。見込み一重團縁内風景文。蛇の目凹形高台(外周無軸)。肥前系(波佐見)。
1P222	A-2グリッド貝層下	磁器	皿	1/4	口縁～底部	口：14.6 高：3.8 底：9.6 厚：0.2	黒褐色細粒子少量含む	白色	染付：外周凹文(墨弾き)。見込み松文。墨付無軸。
1P223	B-3～4グリッド包合層	陶器	壺	破片	口縁～胴中位	口：7.4 高：(10.0) 胴：12.0 底：0.8 厚：0.8	黄白色(やや粗い)	濃茶色	高台砂目付着。高台内目跡1か所。肥前系。
1P224	B-5グリッド表土～包合層	陶器	灯明受皿	1/4	口部～底部	口：10.8 高：2.3 底：5.2 厚：0.4	灰色	濃茶色	内面～外面体部上半鉄軸、口縁部1か所凹み有り(耳皿状)。瀬戸・美濃系。
1P225	土丹積外試掘	土器	内耳鍋	破片		厚：0.7	ごく微細な黒色粒を含む	橙褐色	素焼き。
1P226	表塚	磁器	保存食容器	破片		厚：0.5	白色	白色	表面に防衛食大日本防衛食料株式会社と書かれる。
1P227	B-4G表土	磁器	碇子	破片		径：13.4 高：(7.2)	白色	白色	外面に会社マークと製造年？
1P228	B-4C表土	磁器	碇子	破片			白色	白色	白色釉を施軸。
1P229	B-4C表土	磁器	碇子	破片			白色	白色	口縁下に沈線状の窪み。以下に煤状の付着物。
1P230	4区貝層下	磁器	火鉢	完形	淡橙褐色	長：1.9 幅：7.5 厚：1.6	微細な黒色粒を多含む		脚の割かれた痕跡あり。口の部分をわずかに残す。
1P231	4区貝層上黒褐色土		碇子		暗褐色	口：(30.6) 高：(4.8) 厚：0.6 厚：2.9	ごく微細な褐色粒を含む		

貝層を取り外した後は長さ14.20m、幅1.00～1.75m、深さ0.10～0.65m、ほどの溝状を呈した掘り込みが検出された北側寄りでは周壁の遺存状態はよく、南側では上面が削平され掘り込みはほとんど残存していない。周壁は緩やかに掘り込まれ、底面は平坦ではなく断面形状は上側が開くU字状を呈している。

北側の鉄道擁壁下に広がる貝層の下には掘り込みが確認された。3.20×1.20mほどの不整形の掘り込みで、最大で深さは0.45mほどとなっている。この掘り込みより西側では貝層はわずかに散逸しているのみなことから、貝層の広がりはこちらまでであったと考える。また、この掘り込み内にはさらにシルトブロックが詰められている掘り込みが設けられている。この掘り込みは90×75cmほどのもので、深さは最深部で32cmを測る。このブロックに混じって火消壺（1P189）が出土している。

また、この掘り込み下の様子を確認するために試掘溝を設定し掘削を行なったところ、溝状遺構の底面よりさらに下に1枚の地業面があることが判明した。この地業面はレベルから見て昭和62年度調査の中世地業面にあたるものと思われるが、詳細は不明である。

出土遺物は、貝層中並びに間層中から江戸時代の陶磁器並びにかわらけなどが数多く見つまっている。また、鉄滓や鞆の羽口、鉄分が釉着している土器破片、銅の部材製品のなども混入している。

B-4グリッド周辺の貝層下の黒褐色土には宝永火山灰層が混入していた。なお、宝永火山灰層についてはA-2グリッド付近において8cm程度の厚さでプライマリーな堆積状況を示していた。

宝永火山灰層が溝の溝底に堆積していたことから、貝層の形成は少なくとも宝永火山灰の降灰以降であることが推察される。

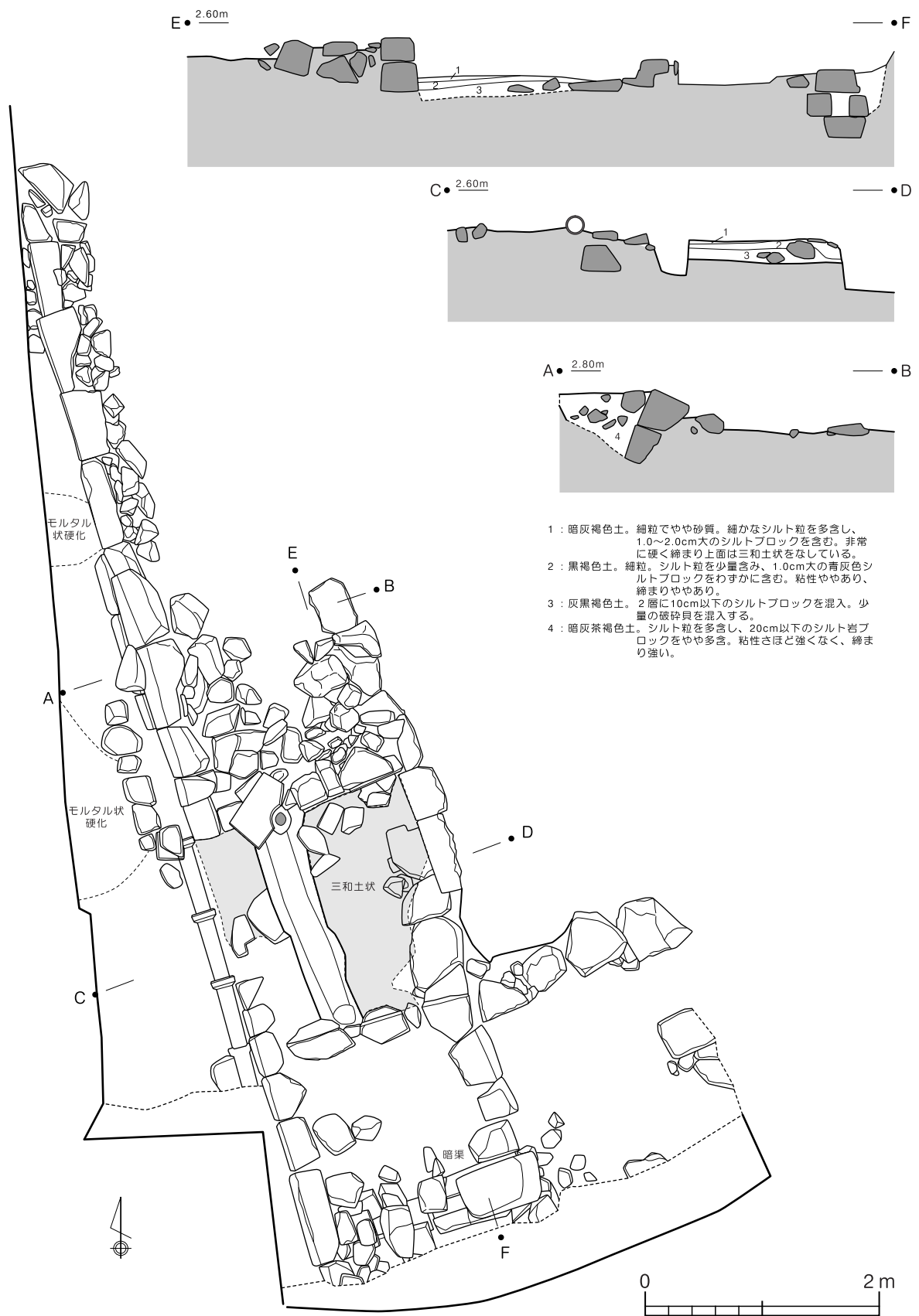
#### 石垣および参道（第34・35図・写真31～34）

京浜急行関連の擁壁下のA～B-4～5グリッドに凝灰岩の切り石を用いた石垣が重複して検出された。鉄道関連の擁壁とは走行方向が異なり北西方向から南東方向に向かって延びており、擁壁によって北側部分が破壊され、南側は調査対象エリアの外側へと続いている。

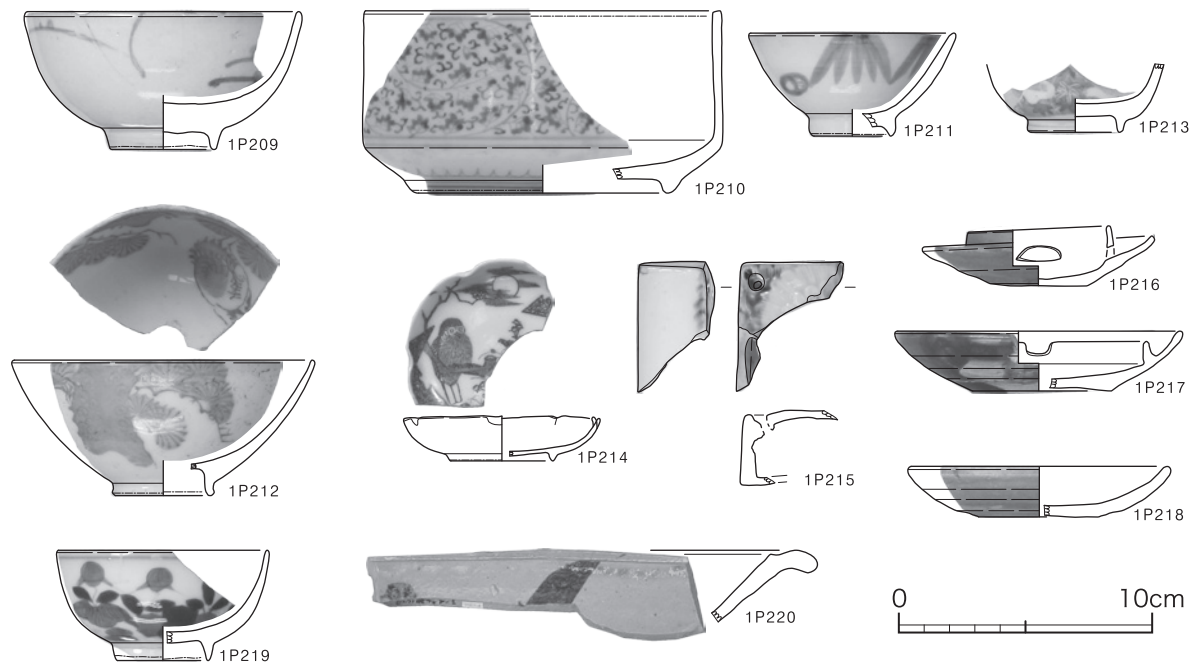
この石垣は、北寄りでは1段、南寄りでは2段の石積みが確認されている。概ね70cm×35cm×35cmの大きさの石材が用いられている。いずれも矩形に切りだされ、表面にあたる部分のみ斜めになるように加工がなされている。また、表面はあまり整えられておらず、切り出し時の工具痕を有している。検出された石垣の長さは、9.5mにわたり、高さは最大で55cmを測る。この石垣の西側には一部に陶管が設置された。しかし、この陶管は石垣とは直接関係なく、鉄道関係の擁壁下にモルタルが沁みだした凝灰岩ブロックによる整地土が存在し、それを掘り込む形で設置されていることから、後世に石垣に沿って水が流れるように設置されたものとする。

石垣に直接伴うと考えられる出土遺物はその性格上確認されていない。このため、石垣が構築された時期については不明といわざるを得ない。しかし、後に記載する参道との新旧関係については、積まれた石の様子から参道の方が先出するものと考えられる。

調査対象区外の遊興施設の並びには露出している石垣が存在する。この石垣は昭和62年の調査時に測量されており、現在では少なくとも4段積みであることが確認されている。なお、調査対象区域外であったが、その後の地業に支障をきたさない範囲という条件下で、調査終了後、事業者と工事関係者の



第34図 石垣および参道



第35図 石垣出土遺物

協力のもと表土部分を建設重機で除去してもらい、調査区内に検出された石垣と露出している石垣が一連のものであることを確認している。

また、最も南側に位置している石垣の最下段のものには25×25cmの穴が穿たれており、この穴の幅で両側に70×23×20cmほどの長細い大型石材は据え置かれていた。これらの石材の上にはさらにひと回り大きい70×30×20cmほどの石を載せて暗渠にしていることが分かった。石垣部分の底石よりこの暗渠の底面に使われている石の方が低いため、石垣を作る際に計画的に作られた暗渠であることが分かる。また、暗渠部分の以外には石材は使われていない。

この暗渠の延長線上の東側では、昭和62年度の調査では大溝と呼ばれるドブ状の溝が検出されており、関連性がある可能性が考えられる。さらに石垣の外側には現状で活きている水路がありこちらとの関連性も興味深い。

参道は石垣と重複して検出された遺構で、南北に2か所の石積みとそれらの間に存在する三和土状の部分からなっている。

石積み部分は検出範囲でともに1.8×2.0mほどの規模で、何れも鉄道関係の擁壁が造成された時点で、すでに上部が削平されており、最大でも2段しか現存していない。千葉屋敷の石垣の石材の規模がおもに70cmほどであったのに対し、こちらの石積みで使用されている石材は50cmほどで一回り小さい。

北側の石積みは、口字状に切り石を並べ、その中に凝灰岩ブロックが乱雑に遺存しているような状況であった。三和土状の部分に面した部分では2段に積み重ねられている様子が分かり、直線的に並べられている。ただし、最も西側に位置する石材のみ斜めにずれていた。ただ、この石の一部には半円形に抉った痕跡があり、ちょうどその部分にあたる場所に柱状の木材が埋けられていたことからみると、何らかの理由で石材が移動した後に、そのままの状態でも機能していたことが窺える。

これに対し南側の石積みは切り石は口字状に並べられているものの、内側に裏込め状のブロックはさほど認められなかった。これは、後世の削平によってすでに失われてしまったためである。また、石積

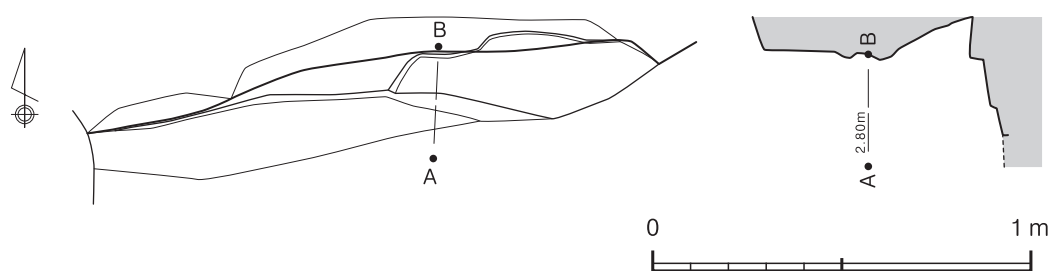
みは1段のみしか確認されていないが、最も東側に位置するものは石材をL字に削り出し、削りだした面を三和土状の面とレベルを合わせている。三和土状の地業面は、周囲に存在する破砕貝を含む層を平坦に削り、その上に2～3cm大の泥岩ブロックを多含したものによって覆い、さらに細かなブロックを三和土締め、上面を平坦に設えている。また、一部には薄手の平坦な石材があり、さらにこの上に平坦な石材を敷き詰めていた可能性も考えられる。この三和土状の地業面の一部には、幅25cm×長さ180cmほどの範囲でアサリの破砕貝が確認された。この破砕貝を除去したところ、溝状に垂直に掘り込まれ、両端に直径20cm程の円形のピット状の掘り込みが設けられていた。このピット状の掘り込みのうち、北側のものには円柱状の木材が埋けられていた。また、下部の貝層を除去する際に、南側の掘り込みにあたる部分から、腐食した同様の木材および、人為的に水平にカットされた木材も確認されている。こうした木材が、相対する位置に確認されていることから、木戸などの施設があったことが推測される。

精査時にいくつかの遺物が出土しているが、明確にこの施設に伴う遺物かどうかは不明瞭である。ただ、1P220の皿破片は暗渠内から出土している。

#### 粘土採掘坑（第36図・写真56）

本址は調査区北西寄りのA-2グリッドに位置する。丘陵裾にあたり、元々は露呈していたものと思われるが、京浜急行の擁壁によって埋められていた。

検出部は幅3.10mの範囲にわたって約0.20mほど岩盤を掘り込んで構築されている。掘りくぼめられた範囲の高低レベル差は0.40mほどである。底面は平坦になっており、断面形状は上方に向かって手前側に迫り出す形状を呈していた。また、南側に一段低く平坦になっている部分が検出されたが、これは昭和62年度の調査でやぐらが構築されていた底面に続く平場であろう。掘り込まれている岩盤自体は凝灰質の岩盤で硬質であるが、この遺構の周辺ではやや含水量が多く粘土質となっていた。この粘土質の部分を掘り終えた痕跡であろう。出土遺物は皆無である。

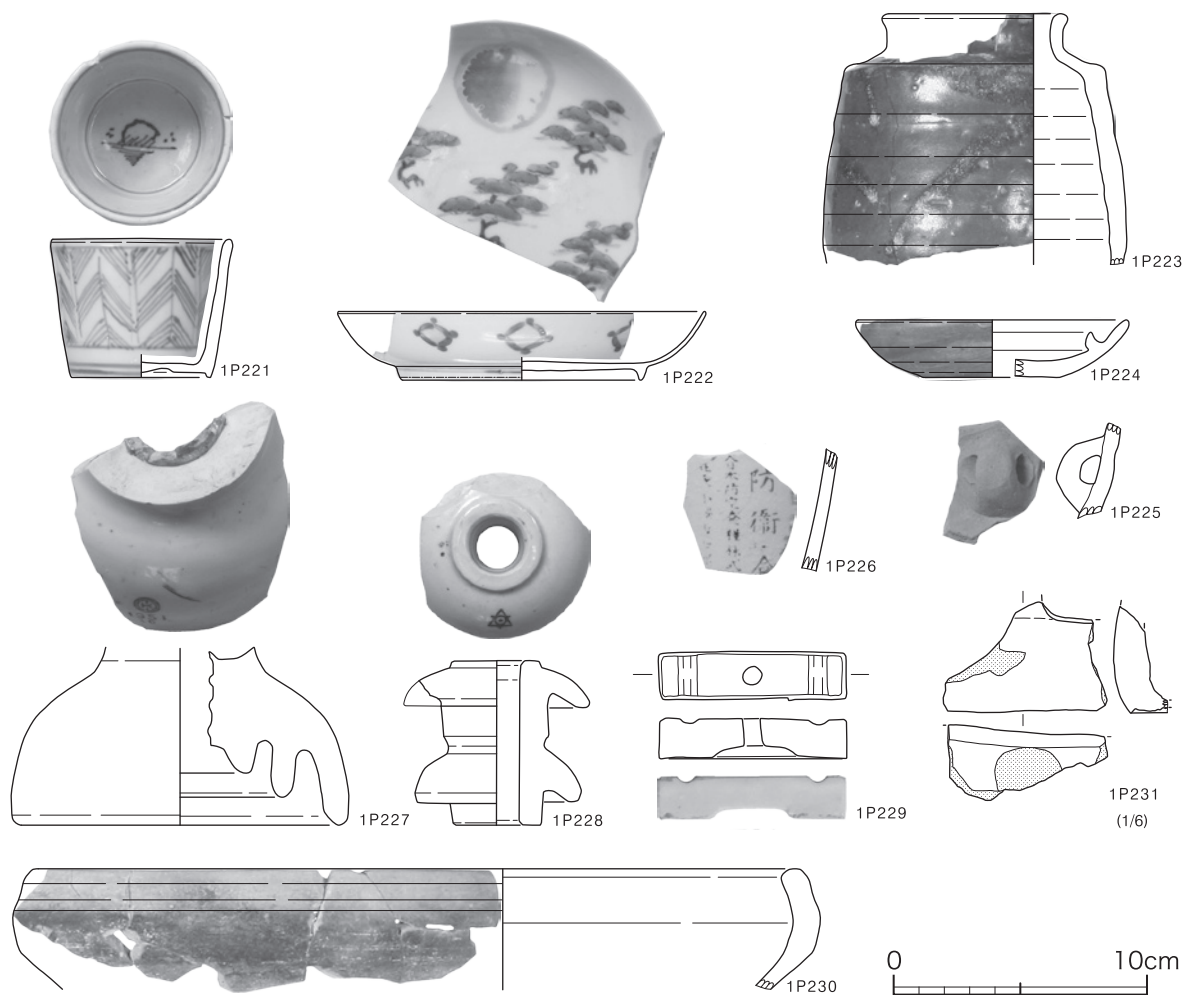


第36図 粘土採掘坑

#### 遺構外出土遺物（第37図）

出土遺物の多くはF貝層からの出土であったが、わずかながらどこにも属さない遺物が出土している。特に、京浜急行関係と思われる擁壁部分からは礎子など鉄道に関係のありそうな遺物も出土している。

他のものはF貝層に由来するものとする。



第37図 遺構外出土遺物

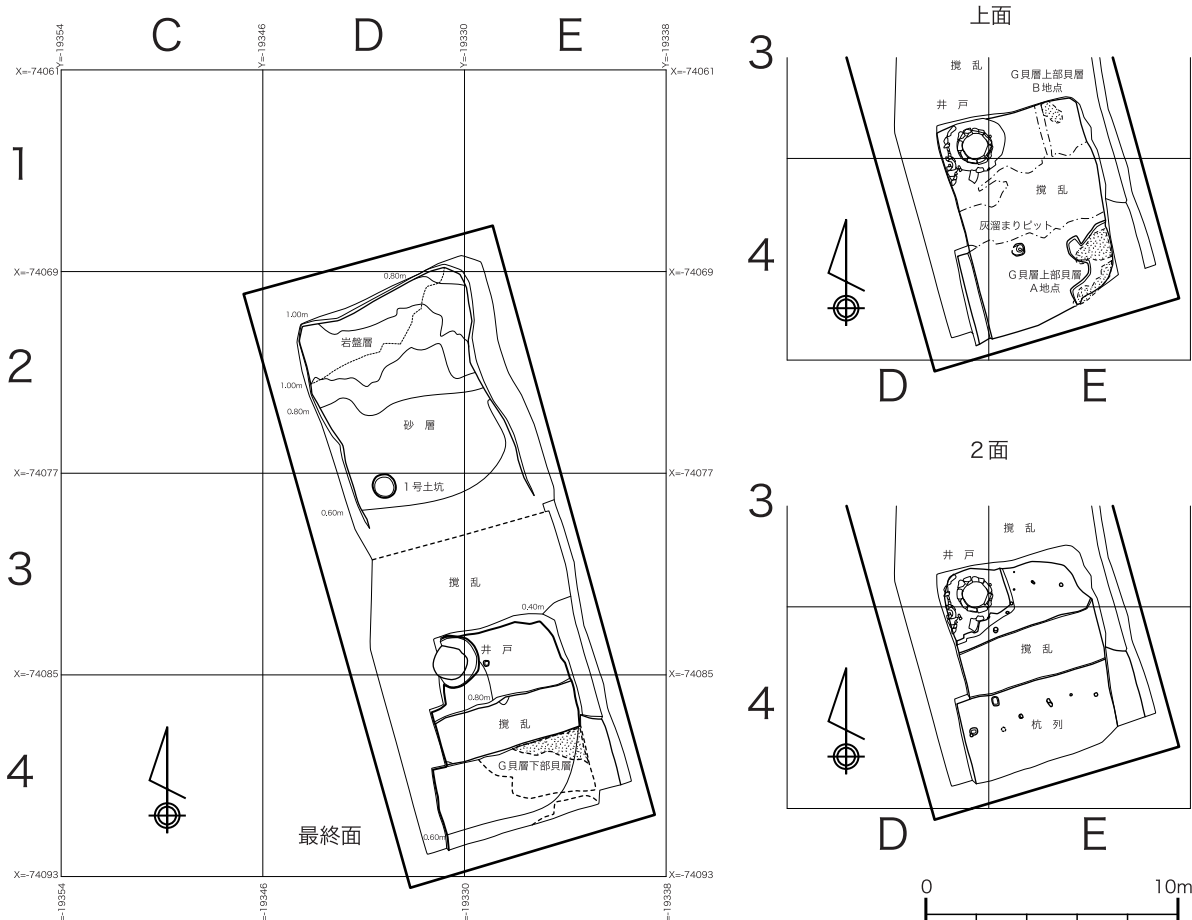
#### (4)平成23年度調査(遊興施設部分)

##### 調査地点概要 (第38図)

調査用グリッドについては京浜急行協の調査区のもの踏襲して臨み、現地調査は平成23年12月13日から実施した。調査地点は遊興施設が建っていた場所となっていた。しかし、この施設の基礎は調査区全体に及んでいるわけではなく、建物の周囲部分のみに存在しているとの情報が得られており、内側部分には遺構が遺存している確立が高いと考えられていた。

そこで、この基礎の内側にあたる部分の表土（遊興施設解体ガラ層を含む）を除去し遺構を確認することとし、当該部分が南側に傾斜していることが予想されたため、北側より表土を除去することとした。

その結果、調査区の北側約半分のエリアについては、建物基礎は予想通り周囲にあたる部分に存在していたが、内部にあたる部分も岩盤層や自然砂層まで削平・攪乱されていることが分かった。また、調査にかかる発生土が場内で処理できないことから、調査区全体を一括して調査することをあきらめ、北側部分の調査を実施した後、南側半分のエリアの調査をする方針に切換えて、唯一検出された土坑の調査終了した12月19日に、横浜市教育委員会職員立ち会いのもと北側部分の終了確認を行ない、引き続き南側の調査エリアの表土除去並びに遺構確認に取りかかった。



第38図 平成23年度調査区遺構分布図（遊興施設部分）

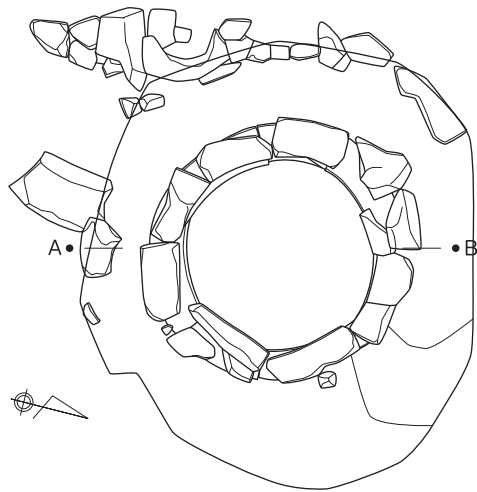
南側調査エリアは北側とは異なり、建物内部にあたる部分がすべて攪乱され削平されているわけではなく、約半分ほどの範囲に遺物包含層や遺構が残存していた。また、表土を除去したところ、これまでの調査と同様に大量の湧水があることが判明した。このため、周辺の基礎が設けられている部分を深掘りし、調査区に湧水が流れ込まないようにした。この深掘部分の東側断面において、文化貝層と考えられるものが上下2か所に確認され、2面調査の必要性が考えられた。

上面の遺構を調査し掘削を行なったところ、下部の遺構面に達する前に杭列が存在していることが判明した。このため、急遽この面の遺構調査を行なうこととした。また、上部で確認された井戸については、調査の手間ならびに掘削深度を考慮し、下部遺構面の調査と併行して行なうこととした。

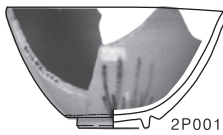
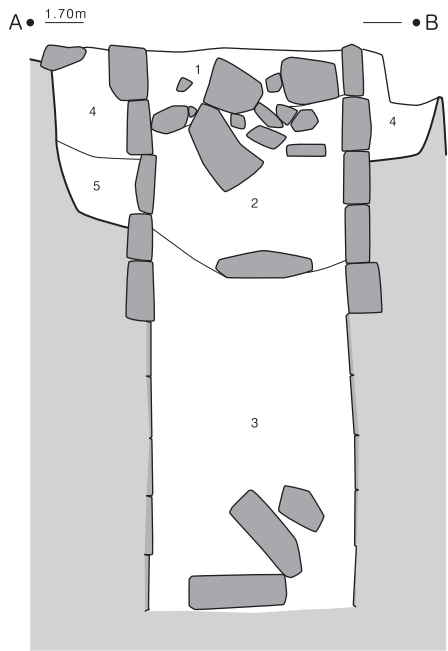
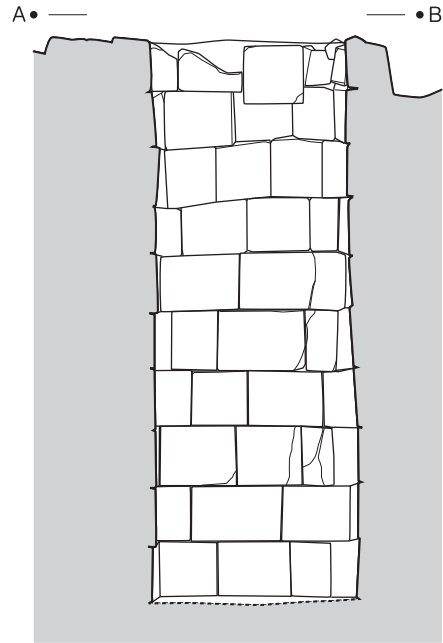
平成24年1月6日の下部遺構面掘削完了写真の撮影をもって現地作業は終了した。なお、調査深度が深かったため、調査の安全上調査面はセットバックせざるを得ず、計画上の240㎡のうち調査実施面積（調査区底面）は195㎡となった。

### 井戸（第39・40図・写真62～65）

本址はD-3グリッドに位置する。検出時には周囲に破碎したシルトブロックが散逸していたため、集石遺構とも思われたが、細かなブロックを除去したところ円形に大型ブロックが巡らされていることが判明した。検出部分での内径は約1.00mを測り、深さは2.95mを測る。シルト岩を弧状に加工した石材を用いて井戸枠とし、1段あたり8個の石材を現存部分で10段積み上げている。1個の厚さは20cm、



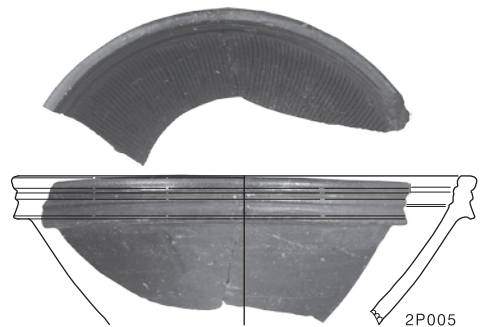
- 1: 暗灰色土。細粒で砂質。2.0~3.0cm大のシルトブロックを多含。粘性弱く、やや硬質。
- 2: 黒褐色土。細粒。0.5~1.0cm大のシルトブロックを少量含む。粘性強く、やや軟質。
- 3: 黒褐色土。基本的に2層と同様。ブロックの含有量は劣る。2層同様に投げ込み井戸部材を含む。湧水が激しく、以下の分層はできない。
- 4: 灰褐色砂層。1.0cm以下の破砕貝を少量含む。粘性ややなく、締まり強い。
- 5: 暗灰色砂層。1.0cm以下の破砕貝を3層の半分ほど混入。粘性ややあり、締まりややあり。



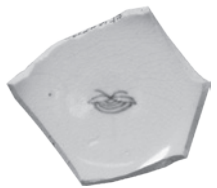
2P001



2P002



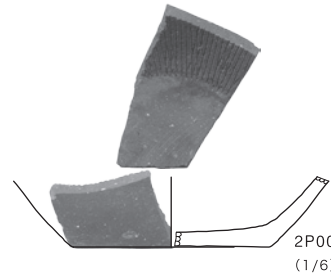
2P005  
(1/6)



2P003



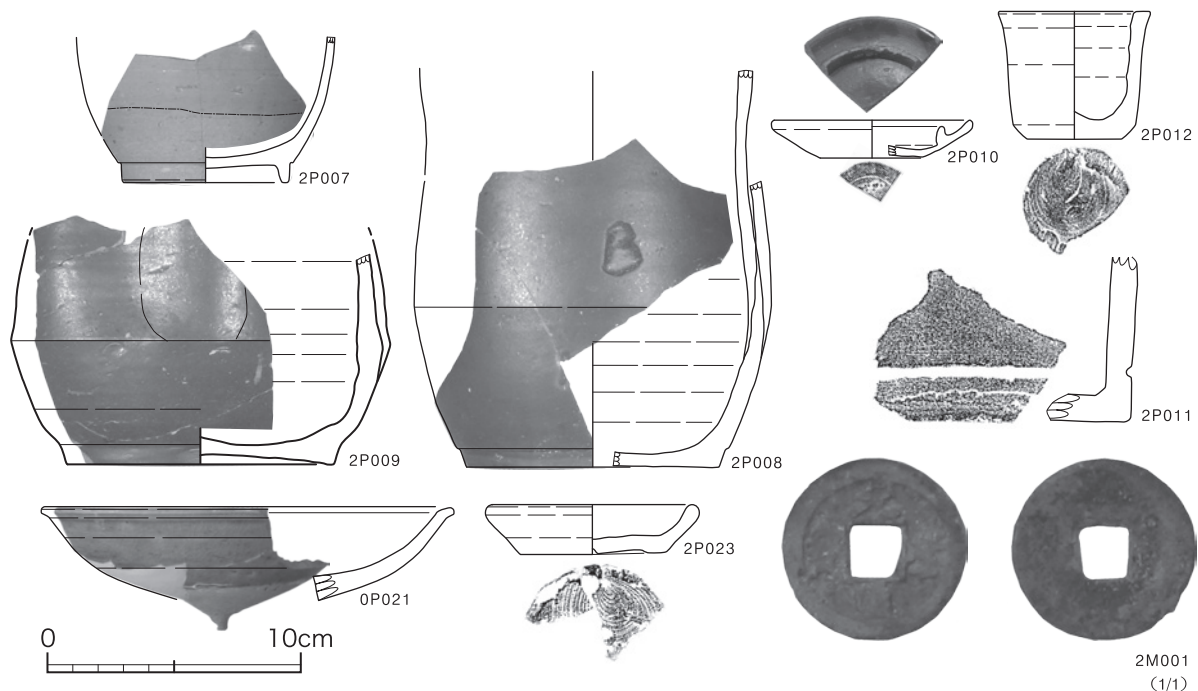
2P004



2P006  
(1/6)



第39図 井戸及び出土遺物(1)



第40図 井戸出土遺物（2）

井戸出土遺物一覧表

遺物番号	出土地点層位	種別	法量	胎土	色調	文様・特徴
2P001	覆土	碗約2/3	口：8.6 高：4.9 底：2.8 厚：0.3	淡灰色	淡緑色	小杉碗。内面～外面体部下位透明釉。外面体部下位若松文。京・信楽系18世紀後葉。
2P002	覆土	碗(端反形)約1/2	口：9.7 高：5.3 底：4.2 厚：0.3	白色	白色	染付：外面体部楼閣山水文。体部下位二重圈線。高台部二重圈線。見込み文様あり(不明)。量付無釉。瀬戸・美濃系。19世紀。
2P003	覆土	碗破片	径：(8.0) 高：(1.9) 底：3.6 厚：0.5	白色	白色	内面～外面体部灰釉。
2P004	覆土	皿破片	口：12.0 高：(3.0) 底：(6.0) 厚：0.5	淡灰色	黄白色	瀬戸・美濃系
2P005	覆土	播鉢1/5	口：37.0 高：(11.9) 厚：1.0	細礫・長石・雲母多く含む	暗赤褐色	口縁部外帯三段(幅3.5)。口縁内凸帯有り。内面体部櫛目8本単位。堺・明石系18世紀後半～19世紀。2P320と同個体が内面体部櫛目8本単位。見込み使用により摩滅著しい。底部外面砂付着。堺・明石系19世紀。P319と同一個体か？
2P006	覆土	播鉢破片破片	径：(25.0) 底：15.8 厚：1.0	細礫・長石多含	暗赤褐色	内面～外面体部下位灰釉。高台無釉。瀬戸・美濃系。
2P007	覆土	徳利破片	径：(10.2) 高：(5.8) 底：6.6 厚：0.3	灰色(白色まじり)	淡青灰色	外面胴部中位に押圧による凹み。外面胴部～高台部鉄釉。底部外面は無釉。瀬戸・美濃系。
2P008	覆土	べこかん徳利1/4	径：14.2 高：(15.8) 底10.0 厚：0.5	淡灰黄色	濃茶色	外面胴部中位に凹み。内・外面鉄釉。瀬戸・美濃系。
2P009	覆土	べこかん徳利破片	径：15.0 高：(9.5) 底：10.6 厚：0.5	灰色	濃茶色	外面胴部中位に凹み。内・外面鉄釉。瀬戸・美濃系。
2P010	覆土	灯明皿	口：(8.0) 底：(4.0) 高：1.5 厚：0.3	灰色	濃茶色	内外面に鉄釉。瀬戸・美濃系。
2P011	覆土	火消壺?破片	厚：1.1	微細な砂粒を含む	橙褐色	体部下方に沈線。内側は二次焼成をうける。江戸在地系
2P012	覆土	小型灰落し約1/3	口：(6.0) 底：3.8 高：5.1 厚：0.5	ごく微細な褐色粒をわずかに含む	橙褐色	内底がへソ状を呈する。内側に二次焼成及び煤状付着物。口ク口成形。江戸在地系(素焼)
2P023	掘り方	かわらけ約1/2	口：(8.6) 底：(5.8) 高：2.0 厚：0.5	ごく微細な黒色粒を含む	淡褐色	口ク口成形。回転系切り(左)。内底渦状成形。口縁の一部に煤状付着物をわずかに認める底に未貫通の孔あり。

高さは30cmとなっており、確認面から底面までの高低差はちょうど3mとなっている。

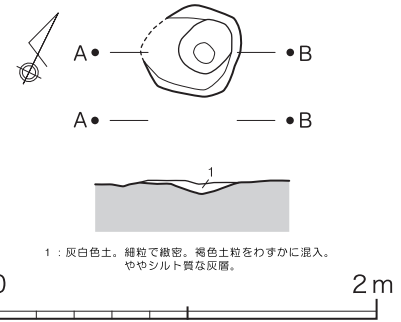
この井戸を確認した面では、井戸の西側にはシルト岩が敷き詰められているような状況を呈していたことから、恐らくこの面付近が井戸を使用していた際の地表面になるものと考えた。

井戸の内部には、シルトブロックが投げ入れられていた。これらのブロックの一部は面取りがなされており、井戸を廃棄する際に地表より飛び出している部分を破壊して入れたものと考えられる。

井戸の掘り方については、上半部は浅く円形（ドーナツ状）に掘り込んでいた。しかし、これは上部

の1m未満の部分で、井戸下半部分については掘り方はなく、石材を詰めながら掘っていった可能性が考えられる。これは、現存する掘り方底面以下が砂層になっているため、いきなり深く掘ると周壁が崩れてしまうためではないかと推測される。

井戸内からは比較的多くの遺物が確認されたが、そのうちのいくつかは現代のものであった。恐らく、井戸が廃棄されたのが現代であったためと考えられる。また、遺物の多くは中位より上方で、井戸の底面からは井戸廃棄に伴う祭祀遺物と考えられるようなものは確認されていない。また、堀片より出土下焜炉の破片がF貝層のものと接合しており、F貝層が形成された後にこの井戸が構築されたことを示している。



第41図 灰溜まりピット

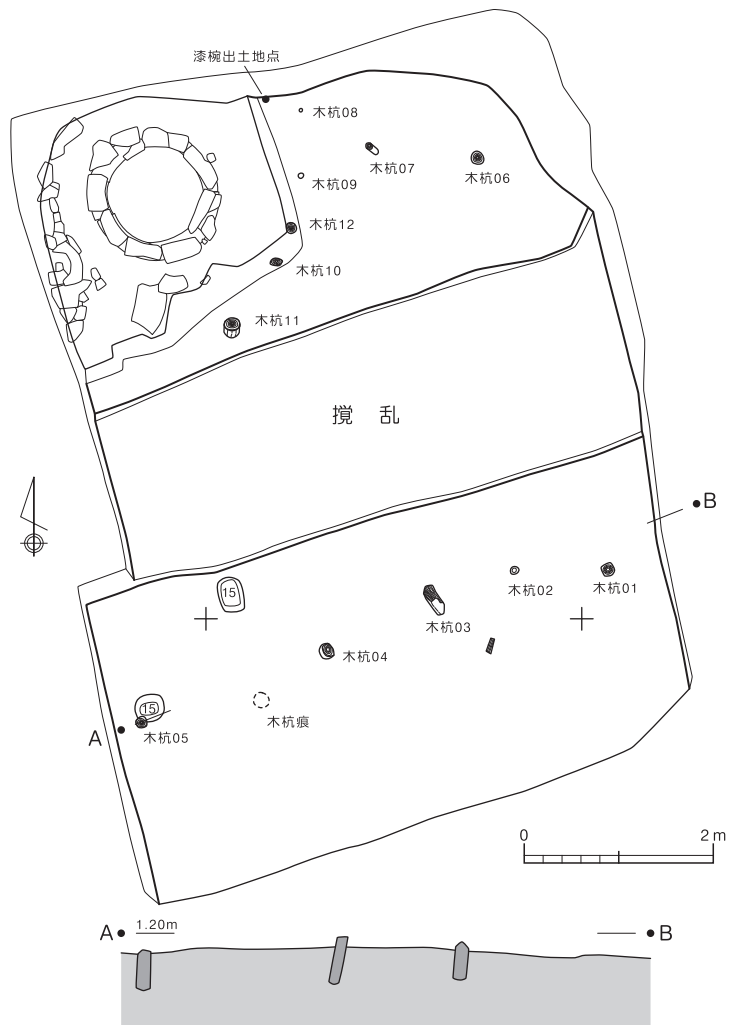
### 灰溜まりピット (第41図・写真66)

本址はE-4グリッドに位置し、上面の遺構面で検出された。本址が位置するあたりは上面からの攪乱が達するかしないかといったところで、上面はほとんど削平され遺存状況は極めて悪いものであった。

現存する規模は0.50×0.50mの平面形状は不整の円形を呈しており、掘り込みが最も遺存していたところでも、わずかに0.05mと非常に浅い。

周壁は緩やかに掘り込まれ、底面の一部がさらに一段浅く掘り込まれており、掘り込み内にはすべて灰が堆積していた。ただ、上方から転圧された状況であったためか硬く締まっていた。

掘り込み内には被熱硬化の痕跡は認められたが、赤変化までは達していなかった、また、出土遺物は皆無であった。



第42図 坑列遺構

### 柱列遺構 (第42図・写真67・68)

下部遺構面まで掘り下げていく過程で、中途に木材が埋まっていることが判明した。そこで、範囲を広げて確認したところ、12本の大小の丸太杭が確認された。このうちのいくつかは列をなしているようで、確認時に抜けてしまったものをあわせると、南側に少なくとも2列の

柱列があったものと思われた。ただし、それぞれの柱間にはあまり規則性はうかがえない。これらの木材には掘り方と思われるものが存在しておらず、上部から打ち込んだものであることが推測され、一部は傾いて検出されている。このような丸太杭は建物の基礎として使用されることがあるが、攪乱により分断された北側で検出されたものとの間の連続性については不明といわざるを得ず、一連のものかは断定できない。

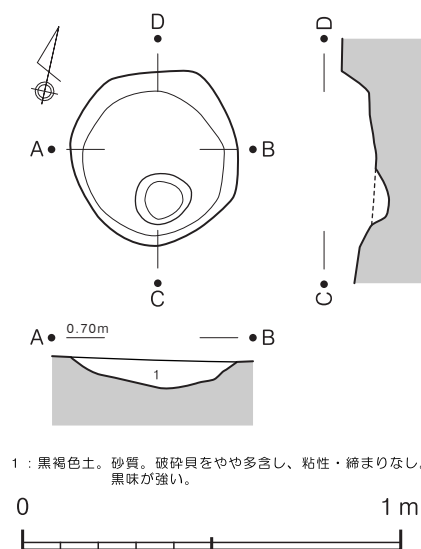
また、攪乱の北側で検出された木材のうちのいくつかは、その位置からみて井戸に伴う可能性も考えられる。

### 土坑 (第43図・写真69)

本址は調査区北側エリアのD-3グリッドで検出された。0.90×0.90mほどの平面形状が円形を呈したもので、現存する掘り込みの高さは0.17m程となっている。本址周辺の遺構確認面は砂地で非常に柔らかく湧水が著しい状態であった。このため、掘削時に底面の一部を掘り抜いてしまったが、底面はほぼ平坦な円形を呈していた。

充填土は黒褐色砂質土で、破砕貝をやや多含し、粘性・締まりともにない黒味の強いものであった。出土遺物は皆無である。

性格は不明であるが、井戸の覆土が本址の覆土と似通っており、あるいは井戸の底面である可能性も有している。



第43図 土坑

### G貝層 (第44図・写真70~75)

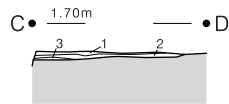
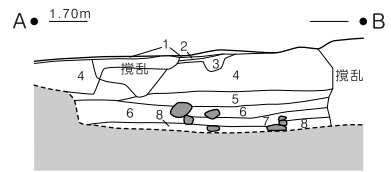
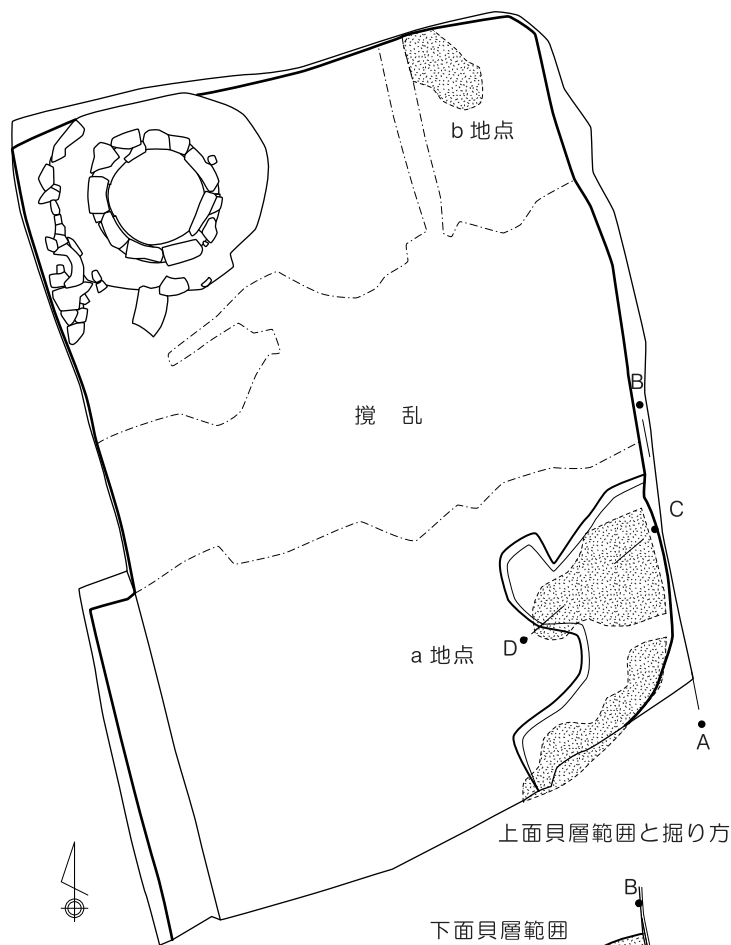
本址は、E-3~4グリッドに位置する貝層で、中央部分を攪乱によって分断されているが、検出レベルがほぼ同レベルであるため、もともと同一の貝層であったものと判断し、南側の遺存状態の比較的良好なものをa地点、北側のものをb地点として調査を行なった。

これらの貝層はともに遺構確認面から5cm程度と貝層の底面部分のみが残存しているに過ぎない状況で、またa地点の貝層は下部にも貝層があることが判明しており、こちらは2つの貝層間に間層があり時間的に差はあるが、いたずらに貝層番号を増やさないようにG貝層の下層として調査を行なった。

a地点の上部貝層は約1.55×1.15mと、約1.95×0.55mとの2つのエリアに分かれて検出されているが、ともに貝層底部のみの残存で、元々は同一の貝層を形成していたものと思われる。ともに破砕貝を主体とするが、上面からの圧力で壊れている可能性が高い。また、完形のアサリ、サルボウを若干混入している。上部からの転圧を受け非常に硬く締まっており、含有される破砕貝はいずれも細かく、転圧されたために破砕した可能性を有している。層厚は最大で10cm程度である。

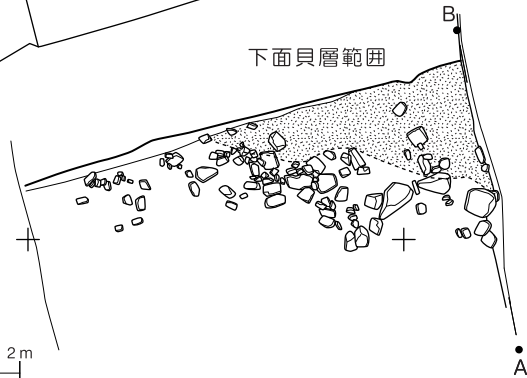
b地点の貝層は約80×50cm程の小さな範囲しか残存しておらず、また、攪乱により一部を失っており遺存状態は極めて悪い。こちらもアサリの破砕貝を主体とする貝層で、破損率は高い。

a地点の下部で確認された貝層は南側に大きめのシルト岩ブロックを並べそれ以北に形成されてい

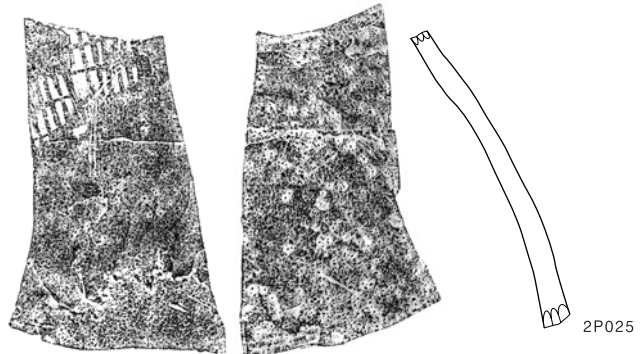
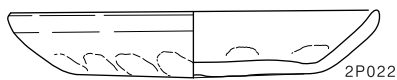


- 1: 混土貝層。破碎貝を主体とし、若干完形貝が入る。アサリ・サルボウを主体とし、アサリは主に破碎される(上面からの転圧による)。やや粘性を帯びる。
- 2: 暗灰褐色土。細粒で砂質。わずかにカーボンを含む。粘性やや強く、締まる。黒味を帯びる。
- 3: 混土貝層。アサリの完形貝を主体とし、若干破碎貝を混入する。性状は1層とほぼ同じ。
- 4: 暗茶褐色土。細粒で緻密。褐色土粒をわずかに含み、ごく少量の破碎貝を含む。また、カーボンを少量含む。粘性非常に強く、やや締まる。
- 5: 灰黒褐色土。細粒。破碎貝を少量含み、ごくわずかにシルト粒・カーボンを混入する。粘性さほどなく、非常に締まる。やや黒味を帯びる。
- 6: 黒褐色土。細粒。上層に比し破碎貝の混入量が多い。3.0~20.0cm大のシルトブロックを含む。粘性やや強く、やや締まる。黒味強い。
- 7: 破碎混貝土層。アサリを主体とする二枚貝の破碎貝層。混入率は低い。また、破碎率は高く、細かい。
- 8: 黒褐色砂層。細粒。破碎貝を若干混入する。粘性やや強く、締まりややあり。

上面貝層範囲と掘り方



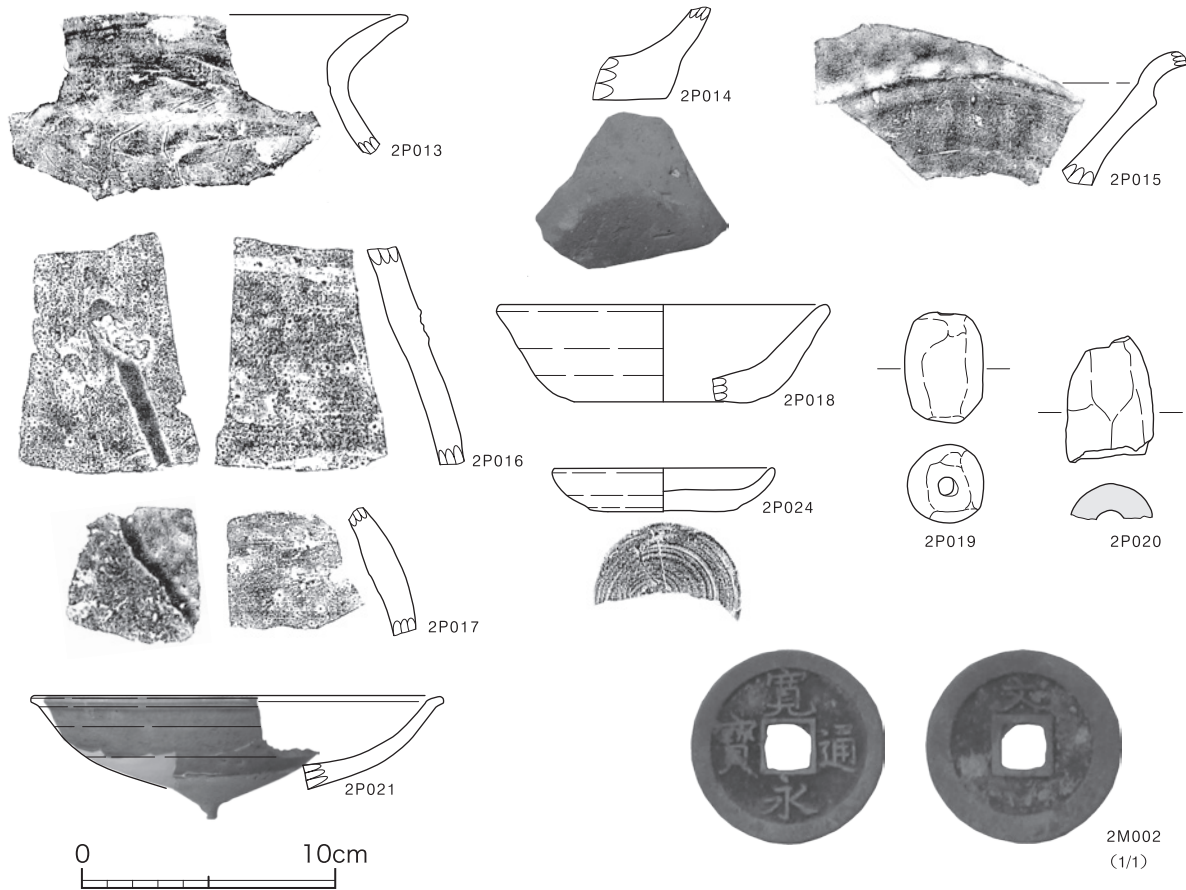
下面貝層範囲



第44図 G貝層

る。アサリを主体とした二枚貝の破碎貝層で、部分的にマテガイのブロックが認められた。このブロックは25×35cm程の範囲で、マテガイのみ一回の廃棄によって形成されたものとする。

なお、この貝層の下位には自然貝層が存在し、掘削時に一部分自然貝層まで達してしまった場所も存在する。



第45図 遺構外出土遺物

G貝層・遺構外出土遺物一覧表

遺物番号	出土地点層位	種別	法量	胎土	色調	文様・特徴
2P013	D-4グリッド5層中	甕形土器口縁片	厚:0.9	ごく微細な砂粒を含む	淡褐色	ナデ調整。
2P014	E-3グリッド包含層	甕底部片	厚:0.9	微細な砂粒を含む	暗褐色	ナデ調整。底は厚い。
2P015	D-4グリッド5層中	高坏破片	厚:0.8	ごく微細な黒色粒を含む	赤褐色	稜を有する。内外面に赤色顔料を塗布。口唇端を欠く。
2P016	D-4グリッド5層中	甕胴部片	厚:1.2	微細な砂粒を多含	茶褐色	灰釉の釉だれ
2P017	D-4グリッド5層中	甕破片	厚:1.3	灰色	灰褐色	灰釉。常滑か?
2P018	E-4グリッド包含層	かわらけ	口:(13.2) 底:(7.0) 高:3.9厚:0.9	微細な褐色粒を含む	淡橙褐色	ロクロ成形。
2P019	E-3グリッド包含層	土錘	長:4.4 径:3.0 孔径0.7	ごく微細な砂粒をわずかに含む	淡褐色	胴づまりで成形はやや粗い。
2P020	E-3グリッド包含層	土錘片	長:(5.1)幅:(3.5)	ごく微細な砂粒をわずかに含む	淡橙褐色	やや成形は粗い。
2P021	G貝層下部貝層	施釉皿	口:(16.4) 高:(5.9) 厚:0.7	灰褐色	薄緑灰色	体部下半は無釉
2P022	G貝層下部貝層	かわらけ	口:14.8 底:9.6 高:2.7 厚:0.5	ごく微細な砂粒を含む	淡褐色	ロクロ成形。体部下に指状の押圧痕。内底ナデ。破損後に被熱煤ける。いびつ。
2P024	D-4グリッド5層中	かわらけ	口:(8.8) 底:5.8 高:1.7 厚:0.5	ごく微細な砂粒を含む	暗褐色	ロクロ成形。回転糸切(左)。内底境が沈む。
2P025	G貝層下部貝層	甕胴部片	厚:0.8	微細な黒色粒を含む	赤茶褐色	タタキ目あり。常滑
2P026	G貝層a地点5層	常滑甕破片	厚:0.9	微細な褐色粒を含む	茶灰色	多面にタタキ目。
2M001	G貝層a地点5層	銭				元豐通宝。裏面のさび著しい。

検出されたシルト岩ブロックは東西方向に延びており、貝層の限界もほぼシルト岩ブロックまでとなっている。残念ながら北側は攪乱により破壊されてしまっているため、その範囲の限界をつかむには至っていない。

この貝層中からはあまり出土遺物は認められなかったが、貝層直上の黒褐色土中からは陶器片などの出土遺物が確認された。

#### **遺構外出土遺物（第45図）**

遺構外から出土している遺物は他の調査区同様に少なく、実測可能なものはごくわずかであった。また、井戸の脇の包含層中からから漆椀が1点出土したが、保存処理が済んでおらず、参考遺物として写真のみ掲載しておく。

## 第4章 まとめ

金沢八景駅東口地区土地区画整理事業に伴って、2年度にわたり3件の発掘調査を実施した成果を以下にまとめてみる。

遺跡地の周辺の様子を知るための資料のひとつに『相中留恩記略』がある。この本は江戸後期天保10(1839)年に相模国鎌倉郡渡内村の名主福原高峰が、相模国内の徳川家康に関する遺蹟や名所などを江戸の画家長谷川雪堤の挿絵を用いて紹介する絵図形式に編纂された地誌として知られている。

瀬戸神社の項の挿絵には、本社の向かって左側(西側)に神主と書かれた建物が描かれている。この建物と本社との間には北側からわずかに迫り出した丘陵によって仕切られ、本社やそれ以外の社、蛇木(ビヤクシン)などの位置関係から、本遺跡付近に神主(千葉氏)の建物があった事が予想されていた。

また、貞享2(1685)年に水戸藩主の水戸光圀の命で編纂刊行された『新編鎌倉志』では、瀬戸神社の前を走る六浦道が南側に折れる付近に神主と書かれた建物が描かれている。これらの文献から現在では開発などによって縮小されてしまった瀬戸神社の境内が、元々はある程度大きな広さをもっていたと考えられ、遺跡がある地点はまさしくこの境内に存在しているため、遺跡名に冠され昭和62年度にその大半の部分の調査が横浜市埋蔵文化財調査委員会により実施された。

今回の調査は基本的に前回未調査部分の発掘調査として計画が持ち上がったが、本体事業の実施・進捗状況、調査期間の問題などから単年度にすべての調査区の発掘調査を実施することができないため、2年度3回の調査として実施したものである。

これらの調査で検出された遺構の中心は江戸期の遺構であった。大規模なものでは2か所で確認された地業面およびそれに伴うピット、貝層を伴う溝状遺構(F貝層)、石垣および参道があり、F貝層以外にも規模は劣るもののG・H・Iの3か所の貝層が検出されたほか、石切遺構や井戸、杭列などさまざまな種類の遺構が見ついている。ただ、前回の調査から引き続いて調査の主眼となっていた神主関連の建物に伴う明確な遺構を確認することはできなかった。また、前回調査で確認され、その広がり予想されていた古墳時代の貝層(E貝層)についても残念ながら遺存していなかったが、中世まで遡る遺構として切石積み遺構が確認されており、中世から続く遺跡であることが分かった。

### 地業面について

22年度調査区内から2か所の地業面が検出された。このうち、調査区中央を東西方向に細長く地業しているものは調査区の中段域にあることから中段地業面として調査を行なった。また、これより一段下に位置するものは下段地業面として調査を行なった。中段地業面は25cmほどの厚さの地業層中にかわらけの破片を多く包蔵しており、なかには完形や実測可能なものも含まれていた。これに対して下段地業面は最大でも15cmほどしか層厚はなく、遺物もほとんど出土していない。

中段地業面は斜面に直交した方向に細長く伸びており、地業面下にはシルト岩ブロックによって区画した周辺の地業を行なっていることから、あるいは道路状の用途で作られた可能性も考えられる。

また、出土遺物や土層の堆積状況などから、中段地業面は中世、下段地業面は近世の地業層であることが分かっている。

## F貝層

F貝層は、溝状に掘り込まれた遺構に貝等を廃棄して形成されたものであるが、最上層では溝の範囲からはみ出しているところもあり、完全に溝が埋まってからも形成され続けたことが分かっている。また、遺存状況が悪く部分的にしか残っていなかったためはっきりしないが、溝の東側（傾斜の下部方向）には不整形の泥岩ブロックを積み並べ、いたずらに貝殻が散逸しないような工夫が施されていたようである。

貝層は確認できた限りで最大9層が確認されているが、明確に遺存していたのは、山裾の北側に寄った部分だけで、南側に向かうに従って上面からの後世の攪乱で削平され遺存しておらず、溝の覆土内のみ貝層が残っているような状況であった。検出された溝状の掘り込み内には貝層だけではなく、部分的に泥岩ブロックが集中している部分が確認され、貝層を覆うように溝覆土の中位から上面まで検出され、整然とはしていないものの意識的に貝層を覆っているように見受けられた。なお、こうした泥岩ブロックの中には、被熱しているブロックも存在しているほか、鉄滓も検出されている。

また、F貝層の南側の一角には、遺物包含層中に貝がまばらに散乱しているような状況（混貝土層）が見受けられたが、こちらは石垣などを設える際にF貝層の一部を破壊したために起こったものとして捉えた。なお、調査区北西寄りで6～8cm程度の厚さで宝永火山灰層が確認されたが、F貝層の南側最下層で宝永火山灰層が混入している層が認められていることから、少なくとも溝状遺構が溝として機能していたのは宝永火山灰の降灰以前のことで、貝層が形成されたのはそれ以降であったことが判明した。

## I貝層

近世の地業面と考えられるものが2か所で検出され、そのうち下段地業面とした地業層の下から間層を挟むものの約150cmの層厚を測る厚いカキ殻層が検出された。一般的な縄文時代の貝塚を形成する貝層の多くは、複数種の貝によって成り立っている。F貝層も同様である。だがこのI貝層は調査時において目視したところほぼ全てがカキ殻からなっているように見受けられ、この点で一般的な貝塚とは趣を異にしていた。サンプルとして持ち帰った貝層について貝種の同定を行ない付編に掲載しているので、細かな貝種割合などはそちらに譲るが、これだけ大量のカキ殻の貝層を形成するためには、意識的にカキのみを選んでいることが容易に推測される。

また、検出された量は膨大で、個人規模の消費に伴う廃棄ではあり得ず、漁業や製造業（石灰製造）などに関係している可能性が高いものと思われた。貝種の同定作業を実施していただいた神奈川県立生命の星・地球博物館名誉館員の松島氏の同定結果によれば、大きさが揃っていること、カキのみ（90%以上）の堆積層という点からみて、養殖カキであることが指摘されている。

地域の方の話によれば、瀬戸神社から国道を隔てた南側に位置している料亭「千代本（もとは千代元）」は大正時代にカキ料理で評判だったそうである。この「千代本」は江戸時代の文化・文政期の文書の中にも登場しており、江戸時代からの創業であることはよく知られている。こうした文書の中から「千代本」では海鮮料理が評判であったらしいことも伝えられ、カキ殻の検出量からこれらのカキ殻が「千代本」に由来したものである可能性も考えられる。

また、遺跡周辺は表土層が薄く部分的に基盤層である岩盤が露出し、大雨後に湧水が頻繁に湧出する

ような場所であった。こうした場所をぬかるまないように地業するためには、水はけなどを考慮する必要がある。その際に、食用に際し身を外し不要となったカキ殻などは、湿気や水抜き対策としてはうってつけの資材であったであろう。瀬戸神社の佐野和史宮司によれば、子どもの頃にぬかるんだ場所によく貝が敷かれ、そういった場所を歩く際に足が痛かった記憶があるという。貝層の上面で検出された地業層が、何に伴うものかは定かではないが、瀬戸神社から米倉陣屋方面にむかう「六浦道」が通っていたことは知られており、ある時期の六浦道であった可能性も捨てられない。

また、近接する上行寺裏遺跡（瀬戸14番地やぐら群）では、7・9号やぐら内で貝層が確認されている。こちらの貝層中におけるカキの割合は4割弱であるが、これらのカキ殻の半数近くには刃物で殻からカキの身を取り出す際に付けられた痕跡が残されていた。江戸時代のカキの流通には、剥き身と殻付の両方の形態があったようだが、この遺跡の周辺ではカキを剥き身にしていた可能性が示唆されている。I貝層を形成するカキ殻にも同様の痕跡を有するものがあったが、その数は少ない。江戸時代の養殖カキについてはいまだ詳らかではないが、今後は、文献などと照らし合わせて平潟湾周辺でのカキ養殖や流通についても調べていく必要があるだろう。

#### 遺跡内の鍛冶について

今回の調査では鉄滓や土器類に溶着した鉄成分、鞆の羽口など多くの鍛冶の存在をうかがわせる遺物がいくつか出土している。こうした遺物は同区内の上行寺裏遺跡（六浦二丁目5番地やぐら群）でも認められ、1号横井戸遺構から5本の鞆の羽口が出土している。この羽口は供伴する遺物から所産は江戸時代後期に求められるものと考えられている。また、遺跡の地権者の屋号が「かじや」であることと合わせ、直接的な遺構は検出されていないものの、遺跡地内での鍛冶操業が指摘されている。偶然であろうが、大正時代末に瀬戸神社旧境内地内遺跡に隣接地、調査直前まで営業していた遊興施設から駅前に向かって右側にあった家の屋号も「かじや」であることは興味深い。また、上行寺裏遺跡（六浦二丁目5番地やぐら群）では1号横井戸遺構の北隣で1号横穴状遺構が調査されており、この遺構は地権者の話から近年まで焼却炉として使用していたというが、1号横井戸内から出土した鞆の羽口と合わせみて、焼却炉として使用する以前に鍛冶に関係する施設として作られた可能性も捨てられない。

昭和62年の瀬戸神社旧境内地内遺跡の調査では横井戸や横穴状遺構のような遺構は検出されていない。しかし今回の調査では、F貝層を覆うように検出された土丹ブロックの集石地点では羽口や被熱ブロックが見つかっており、鍛冶炉のような直接的な遺構は検出されていないが、周辺で鍛冶を行っていたことは容易に想像できる。また、付編の金属学的調査に詳しいが、銅線や銅板などの修繕や加工のための部材と思われるものも見つかっており、こうした部材を用いた鍛冶あるいは金属加工ないし修繕職人の存在も考えられる。瀬戸神社の前面を通る六浦道は地元では近年まで「歴史の道」とも呼ばれているが、嘉元3（1305）年の瀬戸橋架橋以来、鎌倉と称名寺を結ぶ主要道として栄えた。その後、元禄以降この付近は金沢八景の景勝地としてさらに賑わい、「千代本」の様な料亭旅館の他にも鍛冶屋などさまざまな職業、店舗が設けられるようになり町並みが整っていたのではないだろうか。

また、鍛冶遺構ではないが、基盤層を掘り込んでいる粘土採掘穴とした遺構については、近年まで栄区内で朝比奈焼きを操業していた（現代陶器の）窯元があり、ここでは基盤層の岩盤を砕いて釉薬に用

いていたそうである。土器の胎土や鍛冶炉の炉壁などの材料として用いられただけでなく、釉薬の原材料を確保するための痕跡である可能性を有している。

### F貝層出土の陶磁器ならび土器類について

今回実施した3つの発掘調査のなかで、最も遺物を伴っている遺構はF貝層である。F貝層は溝状内に破棄した貝からなる貝層で、これらの貝に混じって多くの陶磁器類などが見つかっている。

陶磁器類については、17世紀代後半から19世紀代までのものが認められるが、その大半は18世紀代の特徴を有している。磁器碗類では圧倒的に18世紀代の肥前系のものが多く、19世紀代まで下るものは客体的に認められる程度である。皿類では、磁器では肥前系の18世紀代の特徴を持つものが多く、陶器では肥前と瀬戸・美濃系との割合が近くなっている。播鉢の多くは瀬戸・美濃系のものが優位で、堺・明石系のは劣勢である。なお、出土個体数が少ないため櫛（播）目についての傾向を掴むには至っていない。また、中世（15世紀代）の所産と考えられる捏鉢の破片なども認められるが、何れも破片であることから、他の常滑甕片とともに二次的に紛れ込んだものと考えられる。

実測可能なかわらけは全部で24点あった。その内、底面に回転糸切り痕を有しているものは21点で、糸切りの回転方向が左のものが17点で全かわらけに占める左回転糸切りの割合は70%を越えている。また、小片からの復原実測のものには回転糸切り後にヘラナデがなされているものもあり、観察が不十分で中世のかわらけが混入している可能性も考えられる。

神奈川県内東部では近世遺跡が調査されていないこともあって近世遺物の研究は進んでいないが、東京都内では近年の近世遺跡の発掘調査件数の増加に伴ってかなりの成果があげられている。江戸のかわらけの編年では、18世紀代に入ると底面に残されている回転糸切り痕が左になることが指摘されている。東京大学医学部附属病院地点のかわらけでは、それ以前では少ないながらも右回転のものが存在するが、18世紀所産の遺構から出土したかわらけを見ると、すべてが左回転であるという。本遺跡のF貝層から出土したかわらけも70%を越えているものが左回転となっていることから、その所産時期について共伴遺物の年代間とずれはなく、同年代をあてて間違いないものと考えられる。また、その他の特徴としては、体部がほとんど直線的に立ち上がり、器高が低いことがあげられる。また、体部と底部の境目が指頭により沈まされ、幅広の沈線状を呈するもの（円台状のもの）が多く、内底部に同心円状の調整痕が残されている。こうした特徴は、中世の所産と思われる切石積み遺構出土のかわらけには一切認められず、江戸期のかわらけの特徴のひとつとして考えてもよいであろう。

### 切石積み遺構について

今回の調査では祭祀関連の遺構と考えられる切石積み遺構が検出された。この遺構は泥岩切石と泥岩不整ブロックの二種類の異なる形状の石材を使用している遺構で、大型の不整形ブロック周辺には泥岩ブロックに混じってかわらけが纏まって出土している。その殆どが破損しており、大型のブロックにかわらけを投げつけて割るかわらけ割りのような祭祀を行なったものではないかと考える。また、切石は最下部の一段しか残っていないが、表土を除去時に重機で動かしてしまったもので、少なくともこの上に1段の切石が積まれていたことは確認できた。これらの切石は南西に面を揃えて置かれており、遺構

の向き（軸）は南西側を正面にしていたものとする。寺社の境内の調査は他の発掘調査に比べ調査例が少なく、同様の遺構が調査されたことを知らない。結論は今後の類例を待ちたい。

また、所産時期は異なるが、昭和62年の調査においても大型の岩盤ブロック周辺に祭祀に使用されたと考えられる遺物が見つかり、長い期間にわたり、境内地内、あるいは海岸付近での巨岩を伴う祭祀遺構があった事は興味深い。

### 千葉屋敷石垣と円通寺参道について

瀬戸神社は社伝によれば、治承4（1180）年に源頼朝が伊豆三島大社を勧請したのが始まりとされるが、神職としてもっとも古い記録として残されているのは千葉胤義である。千葉胤義の出自については詳らかではない。ただ、上行寺開山の日祐（1298-1374）の弟であるとか、嶺松寺の開基であるともいわれている。この千葉胤義以降、明治時代の千葉督都の代まで約500年間の長い間、代々千葉氏一族が瀬戸神社の神主職を務めてきた。このため、さきに紹介した2つの資料に描かれている神主と書かれている建物については千葉氏の居館であると考えられている。

千葉屋敷の周囲を巡っている石垣については、明治初期の瀬戸神社の周辺の旧状ををうかがい知ることができる資料として瀬戸神社を写した写真がある。この写真では、瀬戸神社の前を通る六浦道の北側に石垣が写りこんでおり、写真奥にあたる円通寺に向かって長く続いている様子がわかる。

今回調査に入る時点では、この石垣と考えられるものは遊興施設の西側にわずかに残っていたに過ぎないが、昭和62年度の調査時点では海軍道路（瀬戸神社の西側を走る道）から遊興施設部分を除き約100mほど続いていた。この石垣は今回の調査開始時点では、六浦道からL字に北側に折れ数mで途切れていた。しかし京浜急行協の調査区を掘削したところ、この石垣は調査以前に露呈していた部分で終わるのではなく、さらに北側に延び瀬戸神社へと続く丘陵（地元では千葉山あるいは五助山と呼ばれる）の裾まで延びていた。ただ、正確に言えば、丘陵裾付近では京急関係と思われる泥岩の切石積み擁壁により破壊されていたため確実ではない。今回、土中に埋もれ遺存していた西側の石垣基部の検出と『相中留恩紀略』の挿図ならびに明治期の写真から、少なくとも明治期までは瀬戸神社の宮司を長い間務めてきた千葉氏の居館地として区画され使用されていたことを裏付けることとなった。

地域の方の聞き取り調査をもとに復原された「大正末の瀬戸」によれば、大正時代の末頃までは千葉名の建物があったことが分かっている。ただし、この時点では、遊興施設のあたりには違う姓の家がすでに建てられており、境内の範囲は最盛期に較べれば縮小されていたことが分かる。その後、保土ヶ谷の材木商の井上五助により五助荘（旅館）が建てられるまでにいくつかの家があったという情報も得ている。

また、この千葉屋敷に伴う石垣を検出していたところ、石垣の内側の一部に三和土状の部分が検出された。この三和土状の部分の南北両側には千葉屋敷の石垣と直交した方向に2mほどの矩形を呈した石積みがあり、参道の可能性が考えられた。しかしながら瀬戸神社の社殿までは約140mほどの距離があるうえ、六浦道より西側に位置していることから、一端瀬戸神社と逆側に迂回してから向かうこととなり、直接的な関係がないものではないかと思われた。

さきの『相中留恩記略』所収の挿図「社家分村御宮」には、現在では瀬戸神社に合祀された御宮（東

照宮)や廃寺となった円通寺とその周辺が描かれている。円通寺は南北朝時代に創建され、万治年間(1658~1661)年東照宮が造営されると天台宗に改宗しその別当寺となった。円通寺の客殿が現在の金沢八景駅の西側にある茅葺き屋根の民家であることはよく知られている。

円通寺の前面域には、田畑のような空間と樹木が描かれ、その手前には六浦道と思われる道と駕籠および通行人が描かれている。この六浦道の西側に面した部分、樹木との境には石垣状のものが描かれ、最も北側に位置する部分には南北側に2つの矩形の石垣状の高まりを有し、中央が階段状のようにも見受けられるものが描かれている。この部分の描写が今回検出された石積みの様子と似通っている。また、これらの位置関係から見て今回検出された三和土状の部分およびその周囲の石積みが挿絵に描かれている参道である可能性は非常に高いものとする。この挿絵には千葉氏の石垣と思われるものは描かれていないことから、この参道と思われる両脇にある石垣の西側を用いて後の時代に千葉氏の居館と瀬戸神社を囲む石積みを造り直したものと思われる。遺構の新旧関係から見ても齟齬はきたしていない。

また、三和土の一部には相対する場所に2穴のピットが検出され、その内の1つには柱状の木材が残っており、この部分に木戸のようなものが設置されていたことも考えられる。しかし、挿絵にはそのような表現はなく、三和土状をなす部分にも階段状のものが見当たらないことから、絵図が描かれてから後に修繕されている可能性も考えられる。『相中留恩記略』は1839年に出されたものであるが、石垣下で検出された貝層の底面に宝永火山灰層が混入していた点と合わせみて、この参道部分は円通寺が改宗した万治年間には存在せず、宝永年間以降に造られたものと考えられる。

### 井戸および杭列について

今回の調査では井戸が検出されたが、この井戸は周辺に住んでいた人が使用していたことはいままでの調査中にもない。調査中に戦前のこの地域の様子を知る数人の方に話を伺う機会があったが、遊興施設があったあたりに建物が建っていた記憶はないという。しかし、今回調査された井戸の覆土からはプラスチック製の味の素のスプーンやプラスチック製の家庭ゴミなどが入っていたことからみて、埋戻しは少なくとも戦後に行なわれたものであって、それまでは使用するしなみに関わらず、井戸の形状を保っていたのではないかと推測される。また井戸の掘り方から出土した焔炉の破片が、F貝層から出土した焔炉と接合していることから、この井戸は少なくともF貝層以降に造られたものであることが分かっている。

また、残念ながら遊興施設の攪乱により周囲を壊されてしまっていたため、全貌を掴むに至らなかったが、今回発見された杭列も松杭のような建物の基礎であったことも十分に考えられる。

また、今回の調査においても2か所で、昭和62年の調査時と同じく縄文時代海進(あるいは海退期)の波蝕台が検出された。また、この波蝕台より南側に位置する砂層にはオオノガイのコロニーが数か所で確認されたほか、カガミガイも見つかっており、縄文期の自然貝層の資料として貴重なものとなっている。この自然貝層の一部はサンプルとして一部神奈川県立生命の星・地球博物館名誉館員の松島義章氏が採取しており、その性質(遺物ではない)や調査期間の問題などから今回の報告書では触れることができなかったが、今後別の機会に公表されることを期待している。

文末ではありますが、忙しい時期に現地にたびたび足を運んでいただき。波蝕台ならびに出土具につ

いてご教授いただきました松島義章氏、毎日のように現地に訪れ、さまざまな地域の情報を教えてくださった地域の郷土史家の山田善一氏、瀬戸神社の佐野和史宮司にお礼を申し上げます。

#### 参考文献

- |                   |      |  |
|-------------------|------|--|
| 福原高峰撰・長谷川雪堤画      | 1967 | 『相中留恩記略 全』 有隣堂                             |
| 福原高峰撰・長谷川雪堤画      | 1967 | 『相中留恩記略 全』校注編 有隣堂                          |
| 佐野 大和             | 1968 | 『瀬戸神社』小峯書店                                 |
| 佐野 大和             | 1984 | 「中世における瀬戸三島大明神」『三浦古文化』第35号                 |
| 東京大学遺跡調査室         | 1990 | 『東京大学本郷校内の遺跡 医学部附属病院印地点』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 3 |
| 財団法人かながわ考古学財団     | 2001 | 『上行寺裏遺跡（瀬戸21番地やぐら群）』かながわ考古学財団調査報告124       |
| 金沢区政五十周年記念事業実行委員会 | 2001 | 『図説 かなざわの歴史』                               |
| 上行寺東やぐら群遺跡発掘調査団   | 2002 | 『上行寺東やぐら群遺跡発掘調査報告書』                        |
| 横浜市教育委員会          | 2004 | 『横浜市文化財地図』                                 |
| 財団法人かながわ考古学財団     | 2007 | 『上行寺裏遺跡（瀬戸14番地やぐら群）』かながわ考古学財団調査報告211       |
| 財団法人かながわ考古学財団     | 2007 | 『上行寺裏遺跡（瀬戸14番地やぐら群）II』かながわ考古学財団調査報告217     |
| 財団法人かながわ考古学財団     | 2008 | 『上行寺裏遺跡（六浦二丁目5番地やぐら群）』かながわ考古学財団調査報告225     |
| 財団法人かながわ考古学財団     | 2008 | 『瀬ヶ崎和田山遺跡』かながわ考古学財団調査報告227                 |
| 財団法人かながわ考古学財団     | 2009 | 『上行寺裏遺跡（瀬戸14番地やぐら群）III』かながわ考古学財団調査報告241    |
| 金沢区生涯学習“わ”の会      | 2010 | 『新版かねざわの歴史事典 INDEX金沢』                      |

付 編



# 瀬戸神社旧境内地内遺跡から出土した江戸期の貝層に見られる貝類組成

松島 義章\*・田口 公則\*・川名 ひろみ\*\*

## 1. はじめに

瀬戸神社旧境内地内遺跡は、横浜市金沢区瀬戸に位置する（図1）。京浜急行金沢八景駅東口地区の土地区画整理に伴い1986年から発掘調査が進められている中で、複数の遺跡の存在が明らかになった。これまでに土地区画整理地域内には、古墳時代の遺跡や近世江戸時代の遺跡などが確認されている（横浜市教育委員会, 1988；松島・川口, 1991；川口・松島, 未公表）。

今回取り扱う遺跡資料は、近世でも江戸時代後期の貝塚貝層と地業面に分布していた貝層である。F貝層、G貝層、H貝層とI貝層の4層から出土した大量な貝類について、その貝類組成の分析結果を報告する。

## 2. 出土貝類の分析方法と計数処理

### 1) 出土貝類の分析方法

分析を行った貝類資料は、図1に示す横浜市金沢区瀬戸の瀬戸神社旧境内地内遺跡において、新たに出現したF貝層、G貝層、H貝層とI貝層の4貝層から出土したものである。

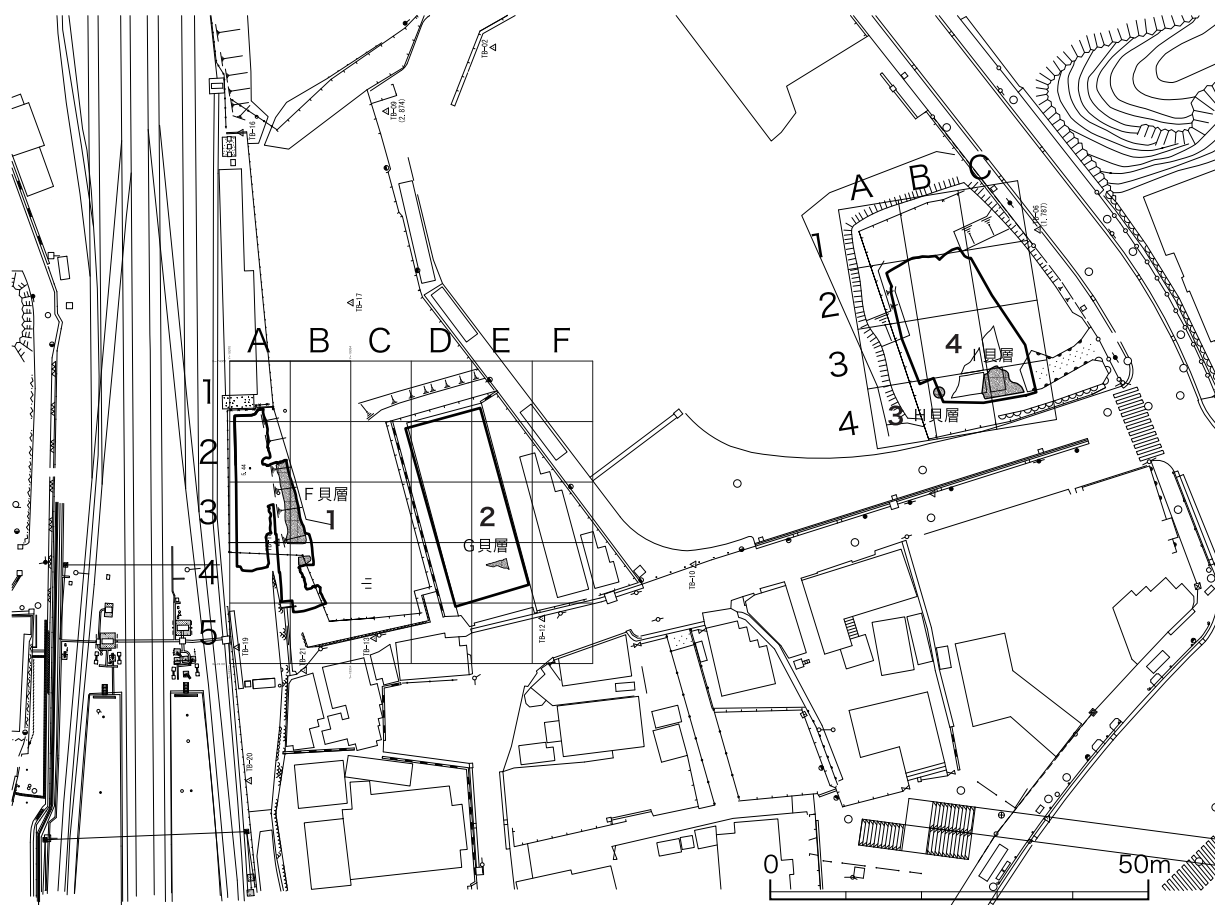


図1. 横浜市金沢区瀬戸の瀬戸神社旧境内地内遺跡の貝層分布図（公益財団法人横浜ふるさと歴史財団, 2012）  
1：F貝層、2：G貝層、3：H貝層、4：I貝層（公益財団法人横浜ふるさと歴史財団, 2012）

採取された資料は、いずれも9mm、4mm、1mmメッシュの篩で水洗、乾燥後に、残った粗粒な資料中に含まれている貝類について調べた。

分析は各貝層の貝類組成の特徴を最もよく示す9mmメッシュの篩で取り上げられた貝類を基本にした。4mmメッシュの篩では得られた中で、種の同定ができる保存の良い貝殻だけを取り上げた。なお、1mmメッシュの篩で残された貝類については、未整理のため、本分析では取り扱っていない。

## 2) 種の同定と計数処理

種の同定と計数処理には、可能な限り完全な個体を用いた。しかし、マテガイ、マルタニシなどは、貝殻が薄く弱いため破損していたり、マガキのように殻がはがれ易いもの、イガイやオオノガイなど採取時に壊れたり、風化して保存のよくない個体もかなり多く含まれていた。そのため計数処理には、二枚貝類では殻頂が、イボキサゴなどの巻貝類では、殻口が残されている個体を基準とした。特に、イガイ、オオノガイやイボキサゴなどは、殻頂や殻口の破損している個体も少なくなかった。サザエでは殻と棘、スガイでは殻と蓋が別々に出土しており、その特徴から種の同定ができれば各1個体とした。また、破損した殻で三分の一以上が残り、殻頂や殻口がなくても種類を決める特徴を残す貝殻片であれば1個体として計数した。なお、二枚貝類は1個体から左右2殻片を生じるが、1殻片を1個体として計数した。なお、4mm以上の貝類を取り上げたのは、食用として採取した貝類のほとんどが検出できると判断したことによる。

表1～3は明らかになった4mm以上のサイズを示す貝類についてまとめた。同定できた種名と種類ごとの計数、さらにその種の殻に破片が多数みられた場合には+を表記、貝殻の保存状態で殻に破損が多く含まれる場合にはxとした。貝殻のサイズでは成貝をl、稚貝をs、その中間をmとした。重さは(・・g)で記録し表記した。

## 3. 3 貝層の貝類遺骸群集の特徴

### 1) F貝層のあらまし

F貝層は2011年10月12日～11月11日にかけて実施された瀬戸神社旧境内地内遺跡発掘調査によって明らかになった貝層である。本層には近世の文化遺物（江戸時代の陶磁器やかわけ）が含まれていることで、江戸時代の貝層とされてきた。今回の発掘によって本層の下位層準には、富士山が1707年に爆発した宝永噴火の火山灰層が確認された。このことから本貝層の形成年代は、江戸時代後期になることが分かった（公益財団法人横浜ふるさと歴史財団, 2012a）。

発掘地点は図1に示すように瀬戸神社旧境内地内遺跡分布内の、最も西に位置し、京浜急行の線路際と接するところ

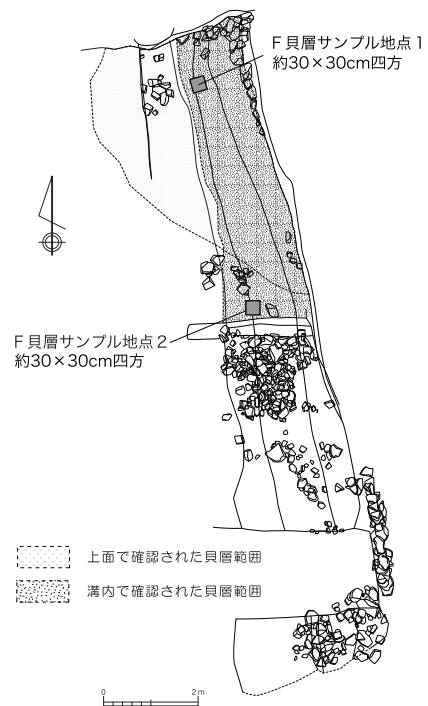


図2. F貝層の分布と分析サンプル採集地点  
(公益財団法人横浜ふるさと歴史財団, 2012a)

ろにあたる。この発掘エリアからは近世の石垣・参道・貝塚などの遺構が確認されている（公益財団法人横浜ふるさと歴史財団, 2012a）。F貝層は、鉄道施設に関連する擁壁の下面に分布していた貝層である。この貝層の形成年代は、前述のように厚さ8cmの宝永火山灰層が下位層準に介在していることで、1707年以降の早い時期となる。

F貝層の分布は図2のように広がっていた。分析には地点1と地点2の2ヶ所から採取した資料を用いた。2地点とも各層ごとに約30×30×50cmの資料を採取して分析を行った。地点1では、4層、6層、9層、13層、15層の5層準を、地点2の貝層では18層と20層の2層準の併せて7層準の資料となる。

## 2) F貝層の貝類遺骸群集と推定される貝類採集地

F貝層から出土した貝類で識別ができた種類は、表1に示す二枚貝類が16種と巻貝類15種の合計31種になる。

この31種の中で食用の対象となる二枚貝類は、ナミマガシワを除くカリガネエガイからオオノガイまでの15種になる。一方、巻貝類では食用に適さないカニモリとアラムシロを除いた、イボキサゴからマルタニシまでの13種が食用になっていたと考えられる。次に各層の貝類組成について検討する。

地点1の4層では、二枚貝類が11種と巻貝類の4種の合計15種となる（表1）。その中で最も多く出土した種は、アサリ（図8, 5a-b, 6a-b）の3,738+個体（全体の95.6%）で、本層のほぼ大半を占める。次いで若干となるが、サルボウ（図7, 3a-b, 4a-b）の55個体（1.4%）、バカガイの51+個体（1.3%）の順になり、巻貝類ではイボニシ（図9, 11a-b）の21個体が出土した。圧倒的多量を出土したアサリは、大きく成長した1サイズの個体が目立ち、小さな殻のsサイズは含まれていなかった。巻貝類は21個体のイボニシを除けば、スガイ（図9, 8）の4個体とウミニナの5個体の出土に過ぎない。

本層の貝類組成を見ると、アサリ・サルボウ・ハマグリ（図8, 1a-b, 2）・カガミガイ・シオフキ・ヒメシラトリ（図8, 7a-b）・ウミニナによる内湾砂底群集が、全体の98%を占める。バカガイ（図8, 3a-b）は沿岸砂底群集構成種であり、東京湾に面し開いた乙舳海岸には生息するが、閉塞した形の平潟湾内では生息していない（木村・海をつくる会, 1995）。スガイ（図9, 8）とイボニシ（図9, 11a-b）の岩礁性群集種は、東京湾の岩礁に生息しているが、それほど多く見られる貝類ではない。横須賀の観音崎以南の岩礁域から、三浦半島西岸の岩礁では普通にみられる。これらの貝類が、この4層からわずかに混じって出土するのは、地元でなく少し離れたところから持ち込まれた可能性が高い貝類と言えよう。

本貝層の貝類の採集地は、沿岸の砂底に生息するバカガイが51個体以上も出土していることに注目し推測すると、当時の平潟湾内ではなく、松島（2011）の図12に示す東京湾に面した乙舳海岸であろう。地点1の6層では、二枚貝類が4種と巻貝類の3種の合計7種と少ない（表1）。その中で最も多く出土した種は、アサリの137+個体（全体の86.7%）となる。次いでハマグリ（図8, 1a-b, 2）の9個体（5.6%）、サルボウの5個体（3.1%）の順となり、バカガイも4個体が出土した。巻貝ではスガイ、イボニシ、ヘナタリ（図9, 9）がわずかに出土した。この6層の出土状況を4層に比べると、全体量がわずか4%を占めるに過ぎないが、この貝類群集組成は4層と同じといえる。この点から見て本貝層の貝類採集地も、4層と同様に乙舳海岸であろう。

地点1の9層では、二枚貝類が6種と巻貝類の6種の合計12種になる（表1）。その中で最も多く出

土した種は、バカガイの443+個体（全体の51.9%）である。次いでアサリの383+個体（44.9%）、ウミニナの8個体の順となり、ハマグリも5個体、カリガネエガイ（図7, 1a-b）の3個体などが出土した。多く出土したバカガイは、大きく成長した1サイズの個体が目立っている。巻貝類はウミニナの8個体を除けば、エゾタマガイ（図9, 10）それぞれの種で3～1個体程度の貧弱な出土となる。9層は上位の4層、6層と比べてバカガイが最も多く出土したことが特徴となる。しかし、アサリもバカガイに近い数量が出土した貝類構成となっている。したがって、全体の貝類群集組成は大きな変わりがなく、貝類の採集地点は確実に乙舩海岸であったといえる。

地点1の13層では、二枚貝類が5種と巻貝類の1種の合計6種となり、地点1の中で最も少ない出土となる（表1）。その中で最も多く出土した種は、バカガイの74+個体（全体の56.9%）となる。次いでアサリの48+個体（36.9%）、オオノガイ（写真）の5+個体（4.2%）の順になる。巻貝類ではイボキサゴがわずか1個である。多く出土したバカガイは、1サイズの個体が目立つ。この13層の貝類群集構成も、出土個体数は少ないが上位の9層と良く対応している。この点からも本層の貝類の採集地は、乙舩海岸であったと推測できる。

地点1の15層では、二枚貝類が6種と巻貝類の1種の合計7種と少ない（表1）。その中で最も多く出土した種は、アサリの157+個体（全体の81.7%）となる。次いでオオノガイ（図8, 8a-b）の21+個体（10.9%）、サルボウの9個体（4.6%）の順になる。上位の9層と13層では、バカガイが最も多く出土したが、本層からはわずか2個体に過ぎない。どちらかと言えば、最上位の4層、次の6層と同様にアサリが主体の内湾砂底群集の出土となっている。巻貝類ではイボキサゴがわずか1個のみである。このような貝類群集組成から判断すると、本層の貝類採集地は、これまでの東京湾に面した乙舩海岸ではなく、平潟湾でも砂地の発達する入江であろう。例えば、安藤広重が天保6,7（1835,6）年頃に画いた「野島夕照」で知られる湾口部の天神岬沖（松島, 2011）か、「平潟落雁」に見られる野島の浜の、いずれかの地点で採取してきたものと推測される。

以上、地点1の4～9層、13層、15層の5層は、明らかとなった貝類群集組成から推定される貝類の採集地が、15層を除いて、貝層の分布する瀬戸神社旧境内地内遺跡前面の平潟湾を渡り、対岸の東京湾に面した乙舩海岸が主体であった。最下部の15層だけは、貝層の前面に広がる平潟湾沿岸であろう。

地点2の18層では、二枚貝類が10種と巻貝類の9種の合計19種となり、F層中で最も多い出土となった（表1）。その中で最も多く出土した種は、アサリの1,209+個体（全体の76.2%）となる。地点1で出土したアサリと比べ、殻の大きな個体が見られず、中形のm～小形のsサイズのものとなっていた。次いで多い種はバカガイの254+個体（16%）、サルボウの26+個体（1.6%）、シオフキ（図8, 3a-b）の15個体の順になる。注目すべきは、田圃や沼などの淡水域に生息するマルタニシ（図9, 12）が17個体（1%）出土した。殻は薄く壊れ易い、完形の個体はなく大部分が殻頭部となっている。マルタニシ以外の巻貝類はサザエ（図9, 6, 7）・イシダタミ・スガイ・イガイ（図7, 2a-b）の岩礁性種、イボキサゴ・ウミニナ・カワアイ・エゾタマガイの内湾砂底種と、マガキ・オキシジミ（図7, 9, 10）・オオノガイ（図9, 1a-b）の干潟群集や内湾泥底種のアカニシ（図9, 4）が出土した。このような多様な貝類群集組成から貝類の採集地点を推測すると、地点1の4～9層、13層と同じ乙舩海岸を主体となり、時に平潟湾沿岸低地の沼や田圃に生息しているマルタニシと、他からもたらされたサザエをはじめとする岩

礁性の貝類が食用となったといえる。

地点2の20層では、二枚貝類が6種と巻貝類の5種の合計11種であった(表1)。その中で最も多く出土した種は、バカガイ(図8, 4a-b)の300+個体(全体の68.6%)である。次いでアサリの127+個体(29%)となる。この2種はいずれも大きく成長した1サイズの殻が多く出土した。この2種以外のマガキ(図8, 5, 6)をはじめとする二枚貝類と巻貝類の9種は、テングニシ(図9, 5)を含めてほとんどが1個体の出土である。このような出土状況から貝類の採集地点を推測すると、確実に乙舩海岸と言える。

以上地点2の18、20層における貝類の採集地は、貝層が分布する瀬戸神社旧境内地内遺跡前面の平潟湾を渡って、対岸の東京湾に面する乙舩海岸が主体であった。しかし、それ以外の環境に生息する貝類のうち、マルタニシは近くの沼や田圃に生息するので、時にわずかでもそれを採取して食した。さらに、東京湾内に生息していないサザエやイガイなどの岩礁性貝類は、三浦半島などから持たれたものと推測でき、出土数が少ないことで稀に食していたと言えよう。

### 3) G貝層のあらまし

G貝層は図1に示す瀬戸神社旧境内遺跡発掘地のF貝層に接する東側に位置する。この発掘調査は瀬戸神社旧境内地内に於ける4回目の遺跡調査で、2011年12月13日から2012年1月6日にかけて実施された(公益財団法人横浜ふるさと歴史財団, 2012b)。この発掘調査で検出された遺構の内には、小規模ながら保存の良いG貝層が出土した。

G貝層の分布は、図3のようにA地点とB地点の2ヶ所で確認された。分析を行った貝層は、図4の貝層断面に示すa地点1層、a地点3層と7層の3層となる。1層の上面はすでに削剥され2cmから4cmの薄層である。3層は1層との間に2cm~3cmの薄い土層に覆われ、その下位の凹地を埋める状態の貝層である。7層は1層から下方の6層目にあたる。層厚10cmとG貝層中で最も厚い貝層となっている(公益財団法人横浜ふるさと歴史財団, 2012b)。

G貝層から出土した貝類で識別ができた種類は、表2に示す二枚貝類が16種と巻貝類18種の合計34種となる。

この34種の中で食用の対象となった二枚貝類は、ナミマガシワを除くカリガネエガイからオオノガイまでの15種に及ぶ。一方、巻貝類では食用に適さないヒメタカベ、カワザンショウ、カニモリ、キクスズメ、ムギガイ、アラムシロを除いた、イボキサゴからマルタニシまでの11種が食用になっていたと考えられる。次に、各層の貝類組成について検討してみる。

### 4) G貝層の貝類遺骸群集と推定される貝類採集地

a地点1層では二枚貝類が7種と巻貝類の8種の合計15種が見られる(表2)。その中で最も多

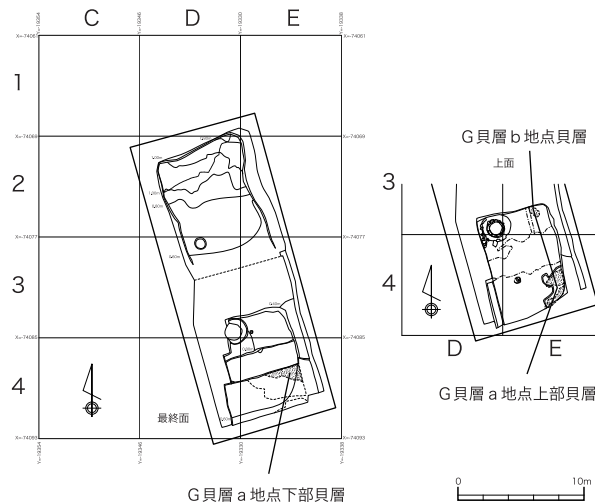


図3. G貝層の分布と分析サンプル採集地点  
(公益財団法人横浜ふるさと歴史財団, 2012b)

く出土した種は、アサリ（図10, 6a-b）の413+個体（全体の88%）となる。次いでシオフキの20+個体（4.2%）、サルボウ（図91a-b）の19+個体（4%）に順となり、ハマグリも3個体が出土した。特に多く出土したアサリは、大きく成長した1サイズの個体が含まれる。巻貝類はそれぞれの種に於いて1個体程度の貧弱な出土となっている。アサリ・シオフキ・サルボウ・ハマグリは、いずれも内湾砂底群集の主要な構成種であることからみて、F貝層の2地点と同様に、当時の平潟湾内でも砂底の発達する地点か、湾口部の野島と天神崎付近で採取してきたものと推測される。

a 地点3層からは、二枚貝類はサルボウ、ナミマガシワ、アサリの3種と巻貝類のイボキサゴ、ヘソアキクボガイ（図10, 15）、ウミニナ（図9, 20）ナの3種の合計6種となる（表2）。3貝層の中で最も少なく単純な貝類組成である。その中で最も多く出土した種はアサリの237+個体（全体の97.1%）となり、次いでサルボウ（0.8%）とイボキサゴ（0.8%）の僅か2個体の出土となる。アサリは1層と同様に、大きく成長した個体が目立っている。1層と同様に内湾砂底群集の主要構成種からなっているので、平潟湾内でも砂質の広がる浜から採取してきたと推測できる。

a 地点7層からは、二枚貝類は14種と巻貝類が16種の合計30種となる（表2）。3貝層の中で最も多く種と個体数が出土し、変化に富んだ貝類組成となっている。その中で最も多く出土した種は、イボキサゴ（図9, 7, 8）の1,164+個体（全体の55.9%）である。次いでアサリ（図9, 6a-b）の485+個体（23.3%）、スガイの170+個体（8.1%）、イボニシの56個体（2.6%）、マガキ（図9, 2a-b, 3）の45+個体（2.1%）、イシダタミ（図9, 14）の34個体（1.6%）の順となり、さらにマルタニシの33個体（1.5%）が加わっている。上位の1貝層と3貝層で明らかになった内湾砂底群集組成へ、全く異なる環境で生息する貝類群集が加わり、多様な遺骸群集組成となっている。詳しく見るとアサリ・ハマグリ（図9, 4a-b）サルボウ・ムギガイ（図9, 19）やアラムシロ（図9, 23, 24）などの内湾砂底群集を主体に、マガキ・オキシジミ（図9, 5a-b）の干潟群集、サザエ・スガイ（図9, 9~13）・イボニシ（図9, 16）・イシダタミやキクスズメ（図9, 18）の岩礁性群集と、感潮域に生息するカワザンショウ（図9, 17）沼や池・田圃にすむマルタニシの淡水域群集が混じる混合遺骸群集と言える。岩礁性群集の中でサザエは、東京湾内の岩礁に生息していない貝類である。少なくとも横須賀の観音崎以南の岩礁域か、三浦半島西岸に限られる。そのため遠方から持ち込まれた貝類となる。さらに、淡水域に分布するマルタニシは、平潟湾背後の低地で埋め立てによってできた田圃や沼に生息していたものが採取され食べられたと推測される。したがって、貝類の採集地点は1地点と2地点と同じ、前面の平潟湾となる。

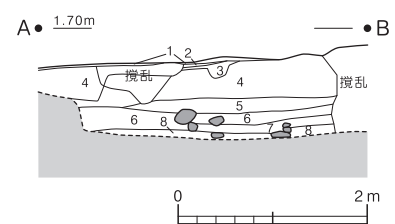


図4. G貝層の層序断面図  
（公益財団法人横浜ふるさと歴史財団, 2012b）

## 5) H貝層とI貝層のあらまし

H貝層とI貝層は2010年10月14日から11月8日にかけて実施された瀬戸神社旧境内地内遺跡発掘調査で明らかになった貝層である。この地域には松島・川口（1991）や松島（2011）が報告した埋没波食台が分布しており、この波食台上に形成された近世の地業層と貝層からなる。

発掘地点は図1に示すように瀬戸神社旧境内地内遺跡発掘域内では、最も東に位置し、公道を挟んで東側には現在の瀬戸神社境内となる。

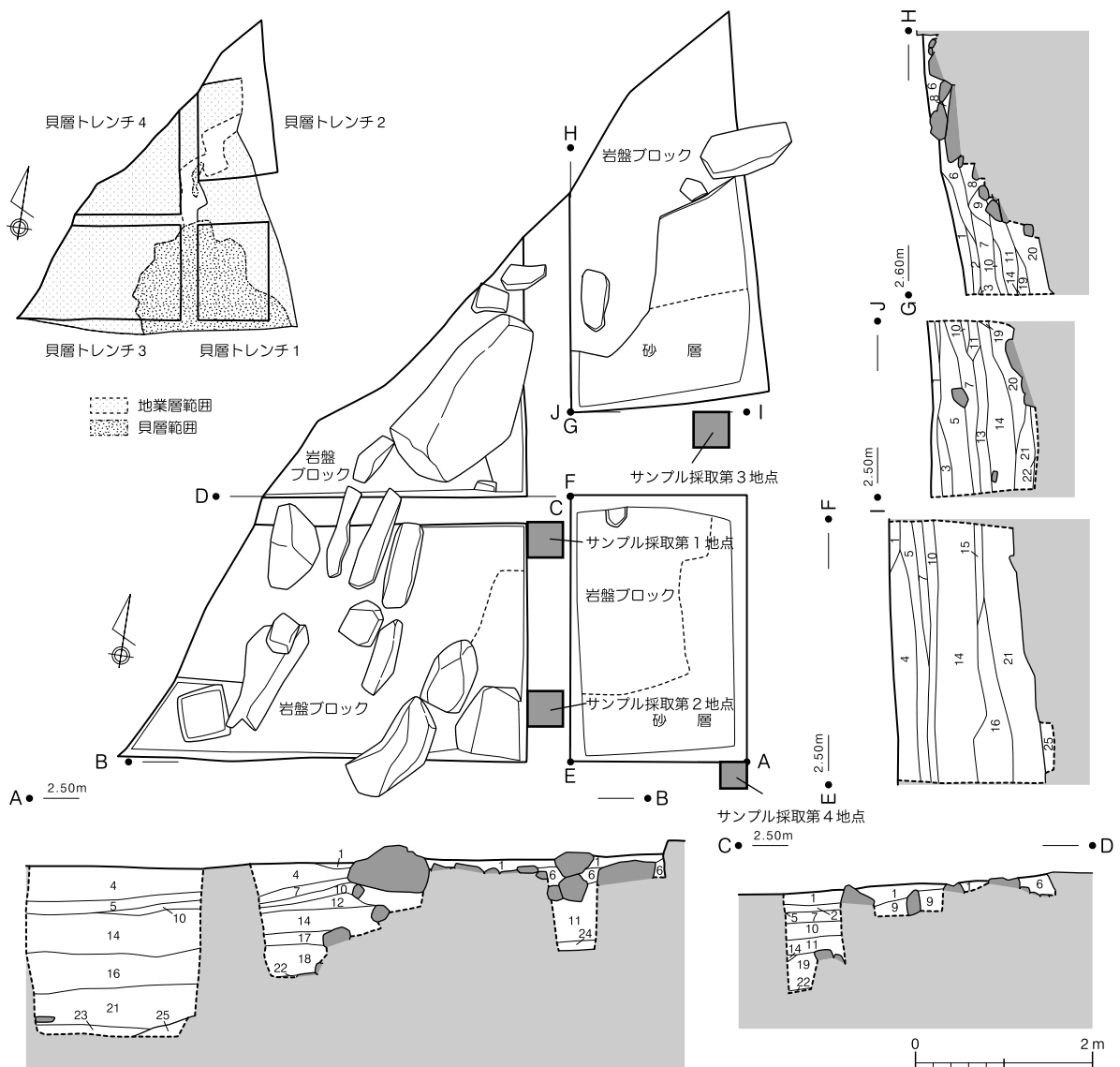


図5. 1 貝層の分布図（公益財団法人横浜ふるさと歴史財団, 2012）

H貝層は調査区の南端で発掘境界面と接する位置にあった小さな貝層である。その分析は41層の1層準のみとなる。出土した貝類の種類は、表3に示す二枚貝類が3種類のみで極めて少ない。

I貝層は、発掘調査地の南境まで広がる貝層となる。本層は分析資料の採取した第1地点～第4地点を含めた地業層中に広く分布する貝層となっていた。なお、I層には江戸時代の遺物を包含していることで、本層の形成年代を確認することができた（公益財団法人横浜ふるさと歴史財団, 2010）。貝層の分析には図5に示すようにサンプル採取を、4ヶ所とした。第1地点が5層、10層、14層の3層準。第2地点も5層、14層、16層の3層準。同第3地点も5層、13層、14層の3層準。同第4地点のみ4層の1層準で合わせて10層準となる。資料は各層ごとにそれぞれ約40×40×30（4地点のみ30×30×30）cmを採取し行った。

I貝層から出土した貝類で識別ができた種類は、表3に示す二枚貝類が3種と巻貝類1種の合計4種と極めて少ない。その中で、二枚貝類はいずれの層準でもマガキが独占種となる。巻貝類はわずかにオオヘビガイ（写真）が、第1地点10層で1個体を出土した。

表1. 瀬戸神社旧境内地内遺跡のF貝層から出土した貝類リスト

	F貝層4層	F貝層6層	F貝層9層	F貝層12層	F貝層15層	F貝層18層	F貝層i層	貝類群集区分 (松島, 1984)
二枚貝類								
カリガネエガイ			3. l. (8g), Ph					沿岸岩礁性群集
サルボウ	55. m. (296g), Ph	5. m. (32g)	1. m. (6g)	1x. m. (1g)	9x. m~s. (37g)	26+, l~s. (44g)		内湾砂底群集
イガイ						4x. l~m. (68g), Ph		沿岸岩礁性群集
ナミマガシワ	1x. m. (1g)						1. m. (12g), Ph	沿岸岩礁性群集
マガキ	3. s. (12g), Ph							干潟群集
ツキガイモドキ	1. s. (2g), Ph							内湾泥底群集
ハマグリ	13+, l~s. (38g), Ph	9. m. (20g)	5. l~s. (14g)		1x. m. (1g)	3x. l~s. (10g)	1x. m. (2g)	内湾泥底群集
オキシジミ						2. m. (8g), Ph		干潟群集
カガミガイ	1x. m. (12g)				1x. m. (1g)			内湾泥底群集
オニアサリ							1x. l. (4g)	岩礁底群集
アサリ	3,738+, l~m. (9,453g), Ph	137+, l~m. (368g)	383+, l~m. (882g)	48+x. m~s. (1,34g)	157+x. l~s. (454g)	1,209+x. m~s. (3,154g)	127+x. l~m. (266g)	内湾泥底群集
シオフキ	7. m. (22g)			1. m. (4g)		15. m~s. (21g), Ph		内湾泥底群集
ハカガイ	51+, l~m. (198g)	4. l. (16g)	443+x. l~s. (1,276g)	74+x. l~s. (2,74g)	2x. s. (2g)	254+x. l~s. (698g)	300+x. l~s. (948g), Ph	沿岸砂底群集
ヒメシラトリ	1. m. (2g), Ph							内湾泥底群集
マテガイ	4+, m. (18g)		3x. m. (18g)	5+, m~s. (24g), Ph	21+, l~m. (106), Ph	5x. s. (3g)	2. l. (14g)	内湾泥底群集
オオノガイ						5+x. l~m. (24g)		干潟群集
巻貝類								
イボキサゴ				1x. (1g)	1. s. (1g)	4x. s. (4g)	1x. m. (1g)	内湾泥底群集
イシダマ						2. s. (2g)		沿岸岩礁性群集
スガイ (含蓋)	4. m. (6g), Ph	1. s. (1g)	3. m. (3g)			12x. m~s. (6g)	1. m. (1g)	沿岸岩礁性群集
サザエ (含棘)						5x. l~s. (64g), Ph		沿岸岩礁性群集
ウミナナ	5. s. (2g)		8. m~s. (3g)			9. s. (6g)	? 1x. s. (1g)	内湾泥底群集
イボウミナナ			1. s. (1g)					干潟群集
カワアイ						1. s. (1g)		干潟群集
テングニシ			1. s. (1g)				1x. m. (4g), Ph	沿岸砂底群集
カニモリ								沿岸砂底群集
ヘナタリ		1. s. (1g), Ph						干潟群集
エソタマガイ			1. m. (4g), Ph			1. m. (1g)		内湾泥底群集
アカニシ						1. l. (176g), Ph	1x. m. (4g)	内湾泥底群集
イボニシ	21. s. (44g), Ph	1. m. (2g)						沿岸岩礁性群集
アラムシロ	1. s. (1g)							干潟群集
マルタニシ						17x. l~s. (14g), Ph		淡水鏡群集

表3. 瀬戸神社旧境内地内遺跡のI貝層から出土した貝類リスト

	第1地点5層	第1地点10層	第1地点14層	第2地点5層	第2地点14層	第2地点16層	第3地点5層	第3地点13層	第3地点14層	第4地点4層	H貝層4層	貝類群集区分 (松島, 1984)
二枚貝類												
マガキ	243+x. l~s. (1,658g), Ph	116+x. m~s. (616g)	157+x. m~s. (325g)	157+x. l~s. (1,306g), Ph	196+x. l~s. (1,650g)	179+x. l~s. (1,712g)	169+x. m~s. (948g)	132+x. m~s. (700g)	51+x. s. (194g)	6. s. (22g)		干潟群集
マガキ (破片)	(1,300g)	(210g)	(1,128g)	(1,264g)	(1,310g)	(1,368g)	(666g)	(872g)		(90g)		
ツキガイモドキ												内湾泥底群集
オニアサリ								1x. l. (6g)				岩礁底群集
アサリ											286+x. l~m. (500g), Ph	内湾泥底群集
アサリ (破片)											(142g)	
シオフキ											11. l~m. (34g), Ph	内湾泥底群集
巻貝類												
オオヘビガイ		1. m. (6g), Ph										内湾岩礁性群集

表2. 瀬戸神社旧境内地内遺跡のG貝層出土の貝類リスト

	a 地点1層	a 地点3層	a 地点7層	貝類群集区分 (松島,1984)
二枚貝類				
カリガネエガイ			1+, s, (1g)	沿岸岩礫性群集
サルボウ	19+, l~s, (96g), Ph	2x, m, (14g)	1x, s, (2g)	内湾砂底群集
イガイ			6+x, m, (184g)	沿岸岩礫性群集
ナミマガシワ		1x, m, (1g)		沿岸岩礫性群集
マガキ	1+, s, (4g)		45+x, m~s, (174g)	干潟群集
イタボガキ			2x, s, (36g)	内湾泥底群集
ウチムラサキ			?1x, m, (10g)	岩礫底群集
ハマグリ	3x, s, (3g)		10x, m, (38g), Ph	内湾砂底群集
オキシジミ			5x, m~s, (10g), Ph	干潟群集
カガミガイ			5x, m, (51g)	内湾砂底群集
オニアサリ			1x, m, (2g)	岩礫底群集
アサリ	413+, l~m, (1,204g), Ph	237+, l~m, (736g)	485+, l~m, (1,784g)	内湾砂底群集
バカガイ	?1, x, s, (2g)			沿岸砂底群集
シオフキ	20+, s, (4g)		2x, s, (8g)	内湾砂底群集
マテガイ			3x, s, (3g)	内湾砂底群集
オオノガイ	?1, x, m, (1g)		9x, m~s, (40g)	干潟群集
巻貝類				
イボキサゴ		2+, s, (2g)	1164+x, m~s, (462g), Ph	内湾砂底群集
イシダタミ			34x, m~s, (54g), Ph	沿岸岩礫性群集
ヘソアキクボガイ		?1, s, (2g)	5, m, (12g), Ph	沿岸岩礫性群集
コシダカガンガラ	1, m, (2g)			沿岸岩礫性群集
スガイ(含蓋)	1, m, (2g)		170+, m~s, (134g), Ph	沿岸岩礫性群集
?ヒメタカベ			7x, s, (2g)	沿岸岩礫性群集
サザエ (棘)			1x, s, (1g)	沿岸岩礫性群集
カワザンショウ			1, s, (1g)	感潮域群集
オオヘビガイ	1x, s, (2g)		1, s, (2g)	内湾岩礫性群集
ウミノナ	4, s, (2g)	1?, s, (2g)	9, m~s, (6g), Ph	内湾砂底群集
カニモリ			2, s, (4g), Ph	沿岸砂底群集
キクスズメ	1, m, (1g), Ph		1, s, (1g)	沿岸岩礫性群集
アカニシ	1x, s, (6g)		6x, m, (74g)	内湾泥底群集
カゴメガイ	?1, s, (1g)			沿岸岩礫性群集
イボニシ	?1x, s, (1g)		56x, m~s, (56g), Ph	沿岸岩礫性群集
ムギガイ			1, m, (2g), Ph	内湾砂底群集
アラムシロ			14, m~s, (4g), Ph	干潟群集
マルタニシ			33+x, m~s, (8g)	淡水域群集

出土した4種は全て食用になるが、ツキガイモドキは内湾の水深10m前後の泥底に生息する種で、食用になるほどの量を採集するには困難であろう。次にH貝層とI貝層の各層にみられる貝類組成について検討してみる。

## 6) H貝層とI貝層の貝類遺骸群集と推定される貝類採集地

H貝層の41層は、I貝層のように広い範囲の分布する貝層と異なり、調査区境の小さな貝層である。本層からはアサリ (図10, 3a-b, 4a-b, 図11, 3a-b) が288+個体で、全体の94.4%を占める。次いでシオフキ (図11, 4, 5) が11個体の3.6%とマガキの6個体の3.6%の3種が出土した (表3)。

この3種の貝類組成から見て、アサリを特徴とする貝層である。しかもアサリとシオフキの殻の大きさは、いずれも1~mサイズのもので占められる。一方、わずかに出土したマガキは小形のsサイズ、しかも不揃いなものとなっている。このような状態のマカキは、当時の平潟湾の干潟に生息していたと言える (松島・川口, 1991; 松島, 2011)。したがって、本層から出土した貝類の採集地点を推測すると、前面に広がる平潟湾へ身軽に出かけ潮干狩りの調子で、食用となるこれらの貝を採取していたものと思われる。

第1地点5層では、マガキの1種のみで構成するマガキの純層である。マガキは243+個体を確認する (表3)。その重さは1,658gとなり、マガキの破片の1,300gと合わせると2,958gになる。マガキ (図10,

2, 図11, 2) の大きさは、大部分が殻高13cm×殻長6cm大の1サイズからなり、sサイズで殻高3.5cm×殻長3cmも出土するが少ない。全体的に大きさにバラツキが少なく、大量に出土することから見て、食用には最適な3年蠣(荒川・山崎, 1977)である。この様に大きさの揃ったマガキは自生のものでなく、平潟湾をはじめ東京湾西岸域では確認できず、養殖によるもので外部から持ち込まれたものである。

なお、わが国のカキの養殖は、1620年(元和元年)に広島で始まった(荒川・山崎, 1977)。現在の生産地の主な場所は広島、宮城、岡山、岩手、北海道などとなっている。

第1地点10層では、マガキ、ツキガイモドキ(1個体)、オオヘビガイ(1個体, 図10, 5)の3種が出土したが、マガキの純貝層である(表3)。ツキガイモドキは前述のように水深10m前後の深場で生息する貝である。マガキやオオヘビガイが潮間帯に生息するのと異なり、1個体だけのツキガイモドキは食用の対象にならなかったと言える。なお、マガキの重さは516gと破片の210gを合わせると726gになる。上位の5層のマガキと比べ、個体数と重さが約半分の値となっているが、本層のマガキも5層と同様に外部から持ち込まれた養殖ものである。

第1地点14層も、マガキの1種のみで構成するマガキの純貝層である。マガキは157+個体となる。その重さは325gとなり、その破片の1,128gと合わせると1,453gになる(表3)。マガキの大きさが5層より中形サイズが少なく、マガキの破片はより多くなっていた。第1地点の最下層に当たるため貝殻は押しつぶされて、破片が多くなったものと判断した。5層と同様に外部から持ち込まれた養殖ものである。

第2地点5層では、マガキ(図10, 1a-b, 図11, 1a-b)の1種のみで構成するマガキの純貝層である。マガキ(写真)は157+個体となる。その重さは1,306gとなり、その破片の1,264gと合わせると2,570gになる(表3)。マガキは大きさでは第1地点から出土したものより全体的に大きい1サイズの殻が多く、破片もより多くなっている。第1地点と同様に外部から持ち込まれた養殖ものである。

第2地点14層も、マガキの1種のみで構成するマガキの純貝層である。マガキは196+個体となる。その重さは1,650gとなり、その破片の1,310gで合わせると2,960gになる(表3)。マガキは大きさでは上位の5層と同様に大きい1サイズの個体が多く、破片もより多くなっている。外部から持ち込まれた養殖ものである。

第2地点16層も、マガキの1種のみで構成するマガキの純貝層である。マガキは179+個体となる。その重さは1,704gとなり、その破片の1,368gで合わせると3,072gになる(表3)。マガキは大きさでは上位の5層、14層と同様に大きいサイズの個体が多く、破片もより多くなっている。外部から持ち込まれた養殖ものである。

第3地点5層も、マガキの1種のみで構成するマガキの純層である。マガキは294+個体となる。その重さは1,712gとなり、その破片の1,704gで合わせると3,416gになる(表3)。マガキの大きさは第2地点ほど大きな1サイズがなく、中形のmサイズとなる。その個体数と破片は共に最大の数重となる。2地点と同様に外部から持ち込まれた養殖ものである。

第3地点13層では、マガキの他にオニアサリが1個体含まれるが、本層もマガキの純貝層となる。マガキは169+個体でその重さが948gで、その破片の666gと合わせると1,614gになる(表3)。マガキの

サイズの大きさでは5層とほぼ同じ1サイズのものからなり、外部から持ち込まれた養殖ものである

第3地点14層は、マガキの1種のみで構成するマガキの純貝層である。マガキは132+個体となる。その重さは700gで、その破片の872gで合わせると1,572gになる(表3)。上位の5層、13層と同じ大きさのマガキからなる貝層で、外部から持ち込まれた養殖ものである。

第4地点4層は、I貝層が分布する範囲で最も東に位置する。ここでも、マガキの1種のみで構成するマガキの純貝層となっている。マガキは51+個体となる。その重さは193gとなり、その破片の90gで合わせると283gになる(表3)。I貝層の第1地点～第4地点の11層準を調べた中で個体数、その重さが最も少ない。I貝層の分布範囲に東端に位置することを示すものであろう。本層も外部から持ち込まれた養殖ものである。

以上、第1地点5層～第4地点4層までの10層準を調べた。本貝層は、マガキが構成する純貝層である。その結果、貝層の中心は第2地点であった。そのためか第2地点のマガキは、いずれも大きな1サイズの個体が多く、しかも厚く堆積している。分布の中心から離れるほどに貝層は薄くなる。東南端の第4地点4層では、sサイズの小さな個体になっている。

サイズの揃った大きなマガキが大量に出土する本層には、マガキ以外の貝類がほとんど含まれていない。このマガキは平潟湾で自然に分布するマガキではなく、養殖したマガキを外から大量に持ち込み、食用としたものである。推測すると、本地点は瀬戸神社の境内に位置することから、マガキの純貝層が分布する近くにはカキを食べさせる場所(宿坊や食堂など)があったことを伺わせる資料であろう。

#### 4. まとめ

瀬戸神社旧境内地内遺跡の発掘調査によって、近世のF貝層、G貝層、I貝層の3つの貝層が見つかった。その中でF貝層は下位の層準に1707年の富士山噴火による宝永火山灰層が挟まっていて、F貝層の形成年代が確実に1707年以降で、それに近い年代に形成された江戸時代後期の貝層となることが明らかになった。

F貝層では2地点で7層準の資料を分析した。出土した貝類は二枚貝類16種と巻貝類15種である(表1)。本層を最も代表する種はアサリ(内湾砂底群集構成種)であり、次いでバカガイ(沿岸砂底群集構成種)となる。7層準における両種の出土状態からみて、貝類の採集地点を推定すると15層を除く4～9、13、18、20層の6層は、東京湾に面した乙舳海岸で、15層のみ平潟湾内で採貝活動をして採集してきた貝類が主体であった。

G貝層では3層準の資料を分析した。出土した貝類は二枚貝類16種と巻貝類18種である(表2)。本層を最も代表する種はアサリとなる。アサリと共生するハマグリ、サルボウなどの内湾砂底群集構成種が大半を占める。このことから本層の貝類は、平潟湾内から湾口付近で採集されたものと推定した。出土数は少ないがサザエ・イシダタミ・スガイ・イボニシなどの岩礁性貝類が含まれる。特に、サザエは観音崎以南から三浦半島で採取されたものが、持ち込まれたものであろう。

H貝層ではアサリを特徴する小さな貝層であり、シオフキとマガキを含めて前面の平潟湾へ出かけ採取した貝類から構成されている。

I貝層では、第1～4地点の10層準の資料を分析した。出土したのは二枚貝類5種と巻貝類が1種で

ある（表3）。しかし、第1～4地点の10層準ではマガキをのぞく他の種はわずか1個体のみで、マガキの純貝層となる。どの層準のマガキも大きさが揃っており、平潟湾の干潟で自然に生息するマガキではなく、食用のため養殖されたもので、外から持ち込まれ食用となったものである。一方、第5地点の貝類はアサリを特徴する貝層で、前面の平潟湾へ出かけ採取した貝類から構成されている。

謝辞 本稿をまとめるに当たり、調査と公表する機会を与えて下さった公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターの鹿島保宏氏、橋本昌幸氏、をはじめ、現場で協力を頂いた調査団の方々に対し記し謝意を申し上げる。

\*：神奈川県立生命の星・地球博物館

\*\*：神奈川県立生命の星・地球博物館 ボランティア

#### 引用文献

荒川好満・山崎妙子 1977 かき牡蠣 その知識と調理の実際. 柴田書店

木村喜芳・海を作る会 1955 横浜市金沢区野島海岸および周辺地域の動物目録. 横浜・野島の海の生きものたち, 八月書店.

川口徳治朗・松島義章 MS 瀬戸神社旧境内地内遺跡の文化貝層から産出した貝類. 横浜市教育委員会.

公益財団法人横浜ふるさと歴史財団 2012a 瀬戸神社旧境内地内遺跡埋蔵文化財発掘調査概報

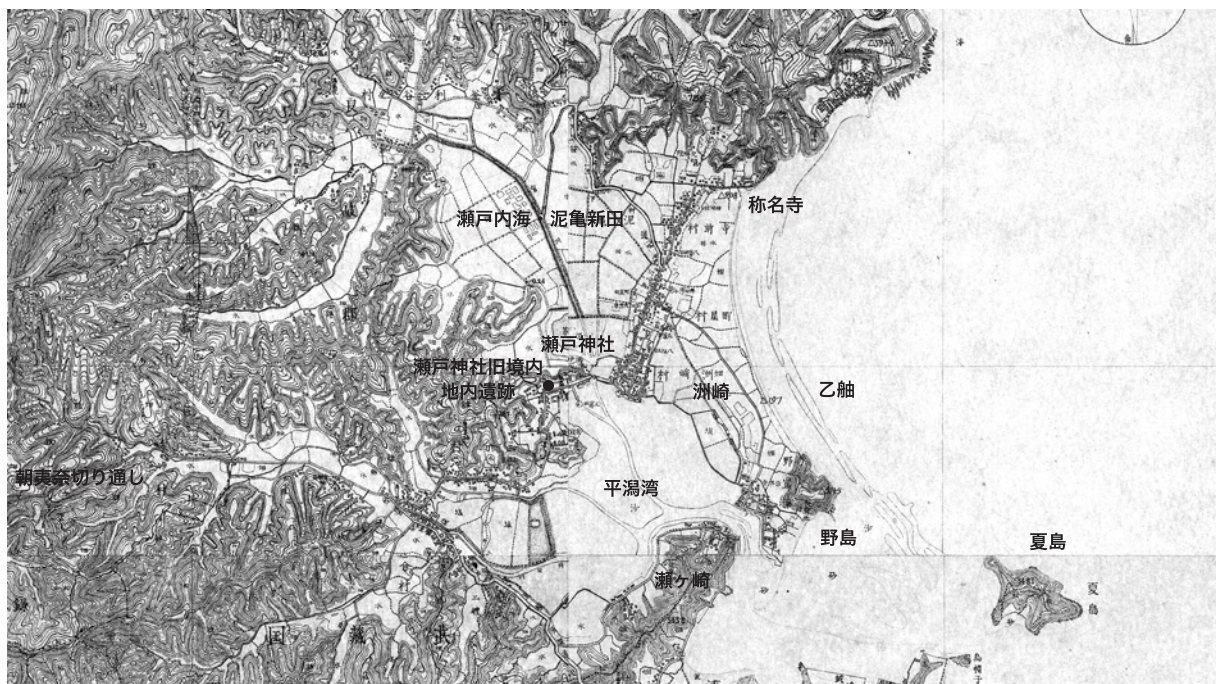
公益財団法人横浜ふるさと歴史財団 2012b 瀬戸神社旧境内地内遺跡埋蔵文化財発掘調査概報

松島義章 1984 日本列島における後氷期の浅海性貝類群集－特に環境変遷に伴う時間・空間的変遷－. 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学), 15号.

松島義章 2011 東京湾西岸, 平潟湾における縄文海進と遺跡の立地. 明治大学学術フロンティア『環境史と人類』4冊.

松島義章・川口徳治朗 1991 横浜市南部, 金沢八景瀬戸神社旧境内地内遺跡における自然貝層の14C年代とそれに関する問題. 神奈川県立博物館研究報告, 自然科学, 20号

横浜市教育委員会 1988 瀬戸神社旧境内地内遺跡 (五助山遺跡). 昭和62年度文化財年報, 横浜市教育委員会



\*参考地図 明治時代初期の平潟湾周辺の景観 国土地理院所蔵二万分の一迅速測図 (明治15年) を加工

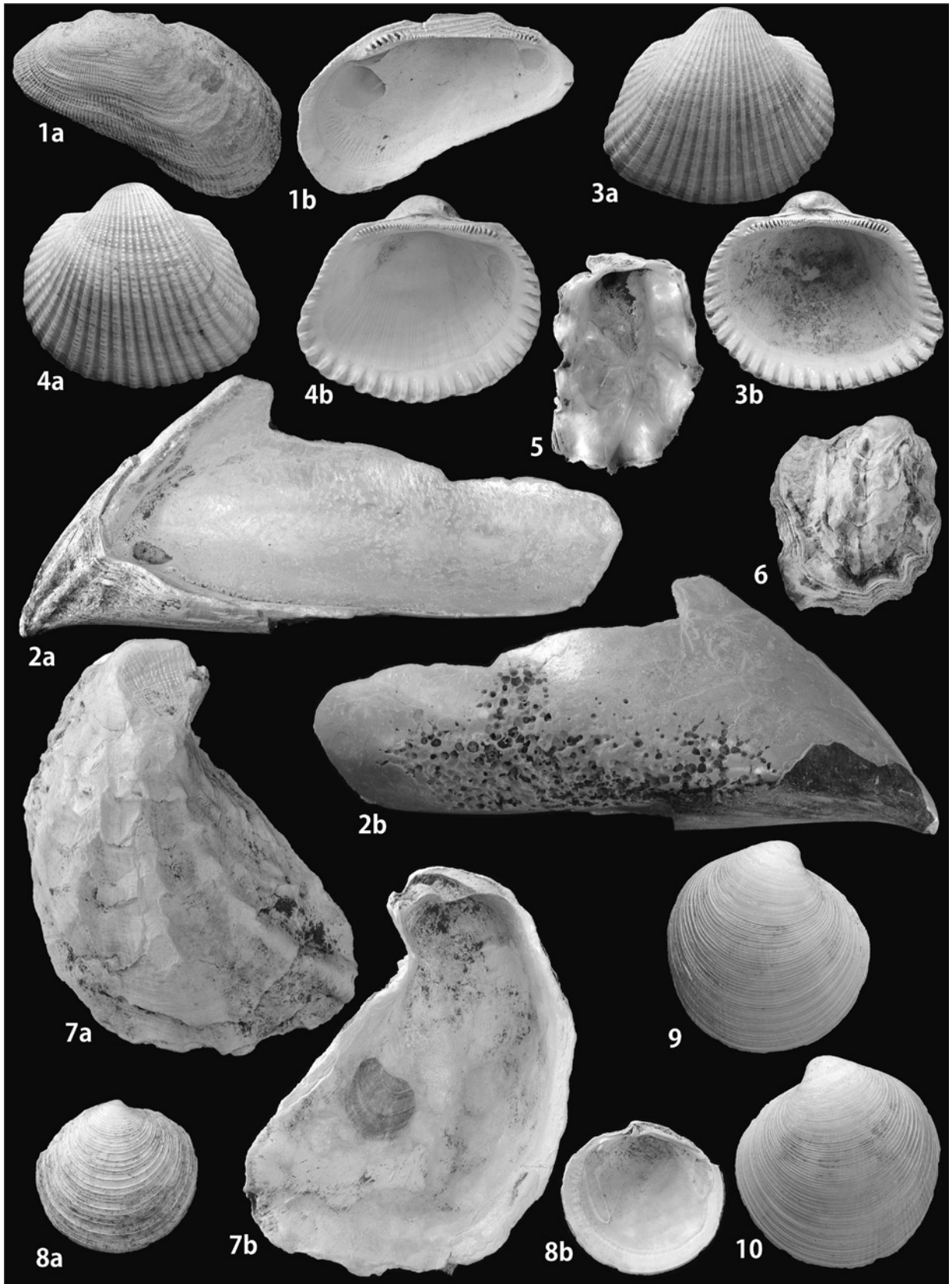


図6 F貝層から出土した貝類(1) (全て実物大)  
 1a-b. カリガネエガイ. 2a-b. イガイ. 3a-b, 4a-b. サルボウ. 5, 6, 7a-b. マガキ. 8a-b. ツキガイモドキ.  
 9, 10. オキシジミ.

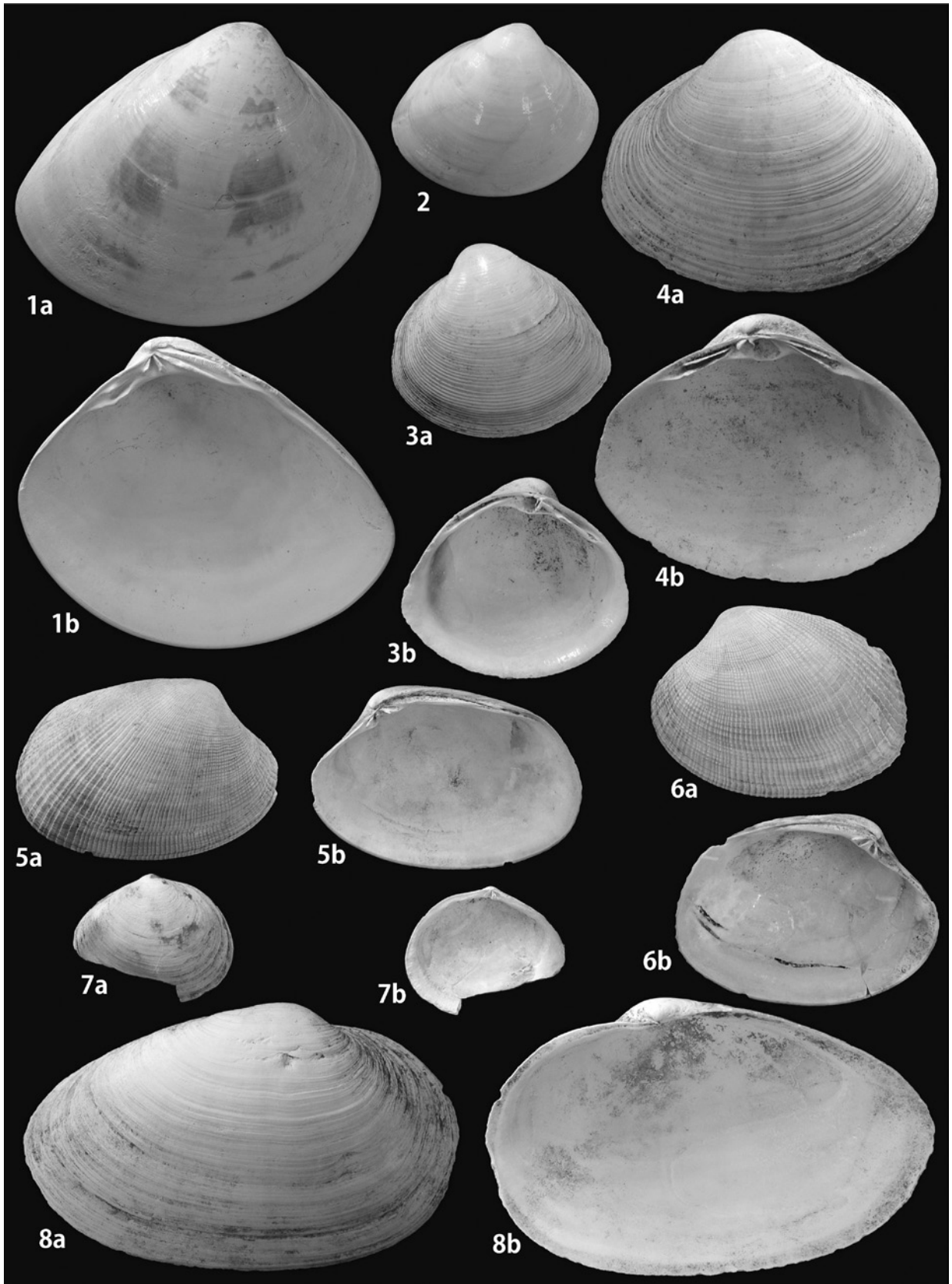


図7 F貝層から出土した貝類（2）（全て実物大）  
 1a-b, 2. ハマグリ. 3a-b. シオフキ. 4a-b. バカガイ. 5a-b, 6a-b. アサリ. 7a-b. ヒメシラトリ.  
 8a-b. オオノガイ.

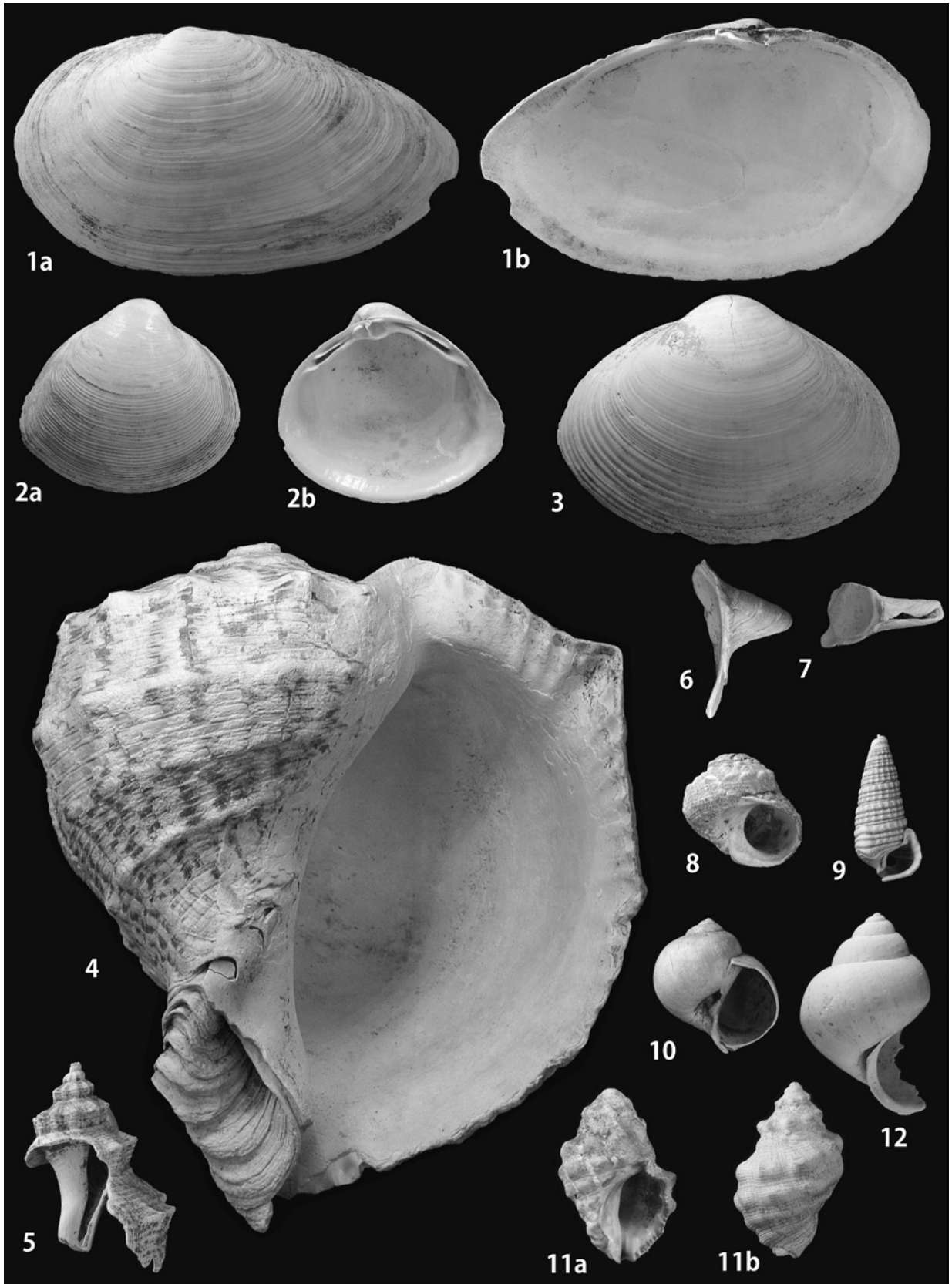


図8 F貝層から出土した貝類 (3) (全て実物大)

1a-b. オオノガイ. 2a-b. シオフキ. 3. バカガイ. 4. アカニシ. 5. テングニシ. 6, 7. サザエ (棘). 8. スガイ. 9. ヘナタリ. 10. エゾタマガイ. 11a-b. イボニシ. 12. マルタニシ.

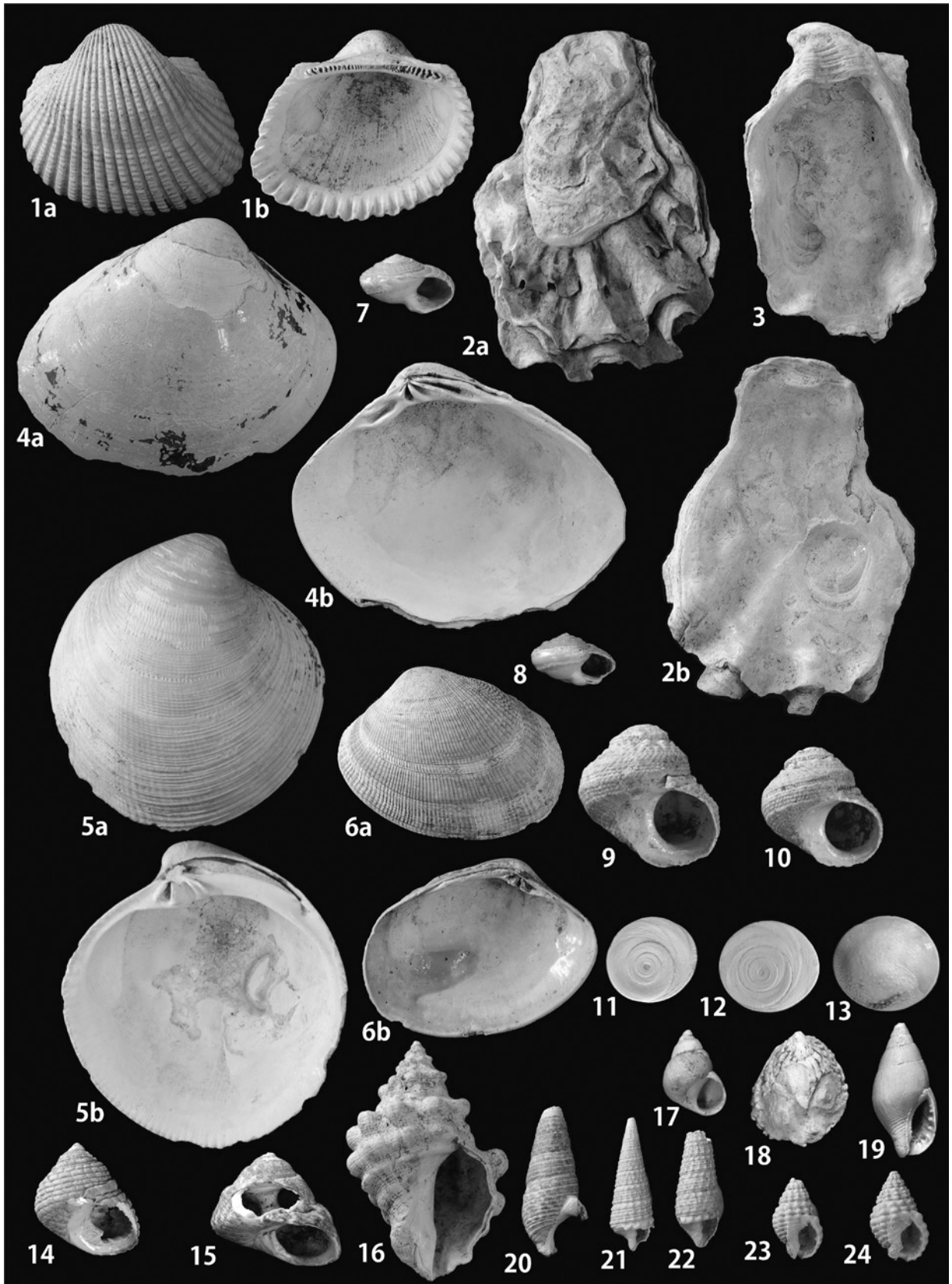


図9 G貝層から出土した貝類 (11, 12, 13は1.5倍, 17, 18, 19は2倍, その他は全て実物大)  
 1a-b. サルボウ, 2a-b, 3. マガキ, 4a-b. ハマダ, 5a-b. オキシジミ, 6a-b. アサリ, 7, 8. イボキサゴ, 9, 10, 11,  
 12, 13. スガイ, 14. イシダタミ, 15. 15. ヘソアキガンガラ, 16. イボニシ, 17. カワザンショウ, 18. キクスズ  
 メ, 19. ムギガイ, 20. ウミニナ, 21, 22. カニモリ, 23, 24. アラムシロ.

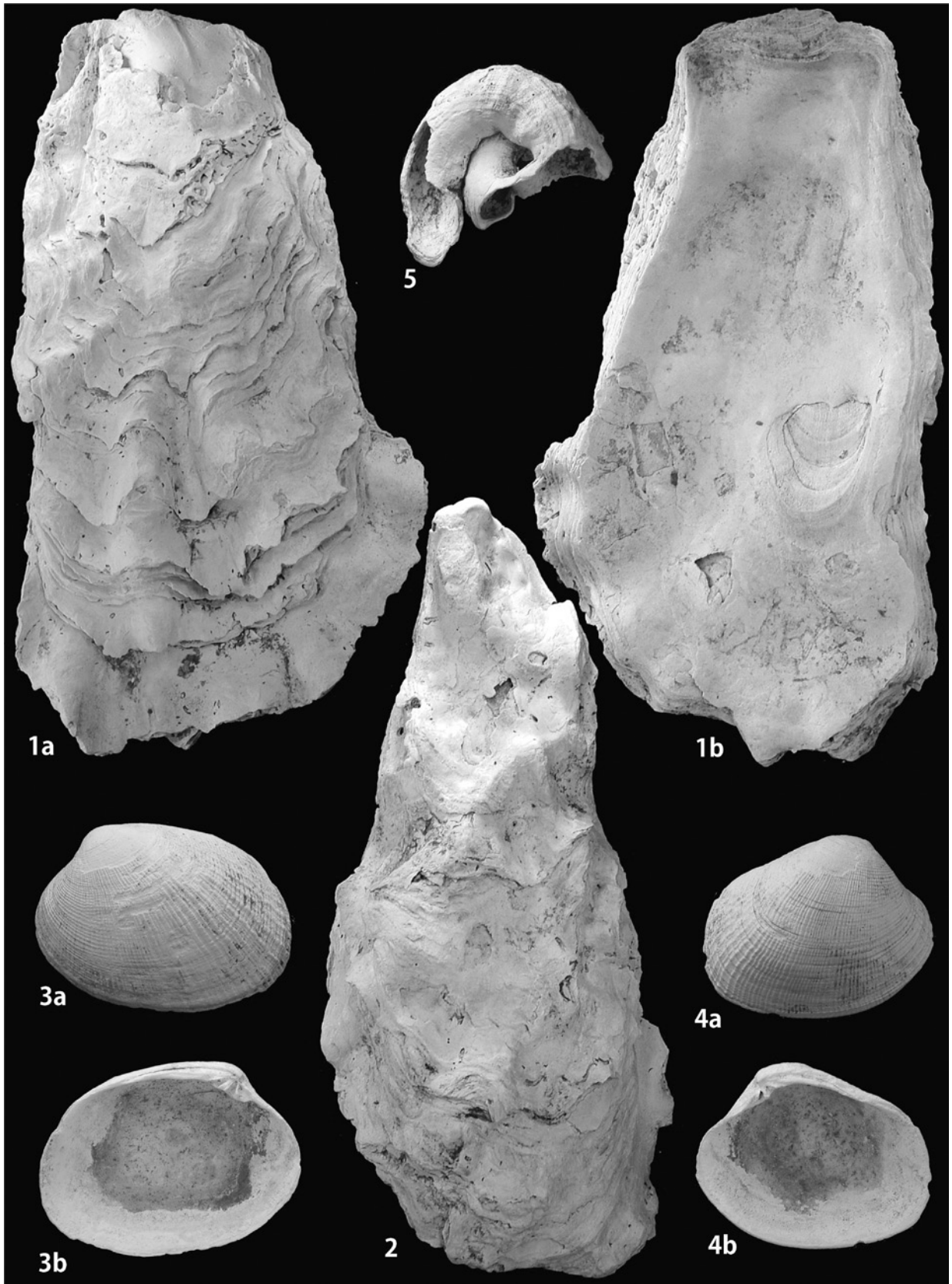


図10 1貝層から出土した貝類(1) (全て実物大)  
 1a-b, 2. マガキ, 3a-b, 4a-b. アサリ, 5. オオヘビガイ.

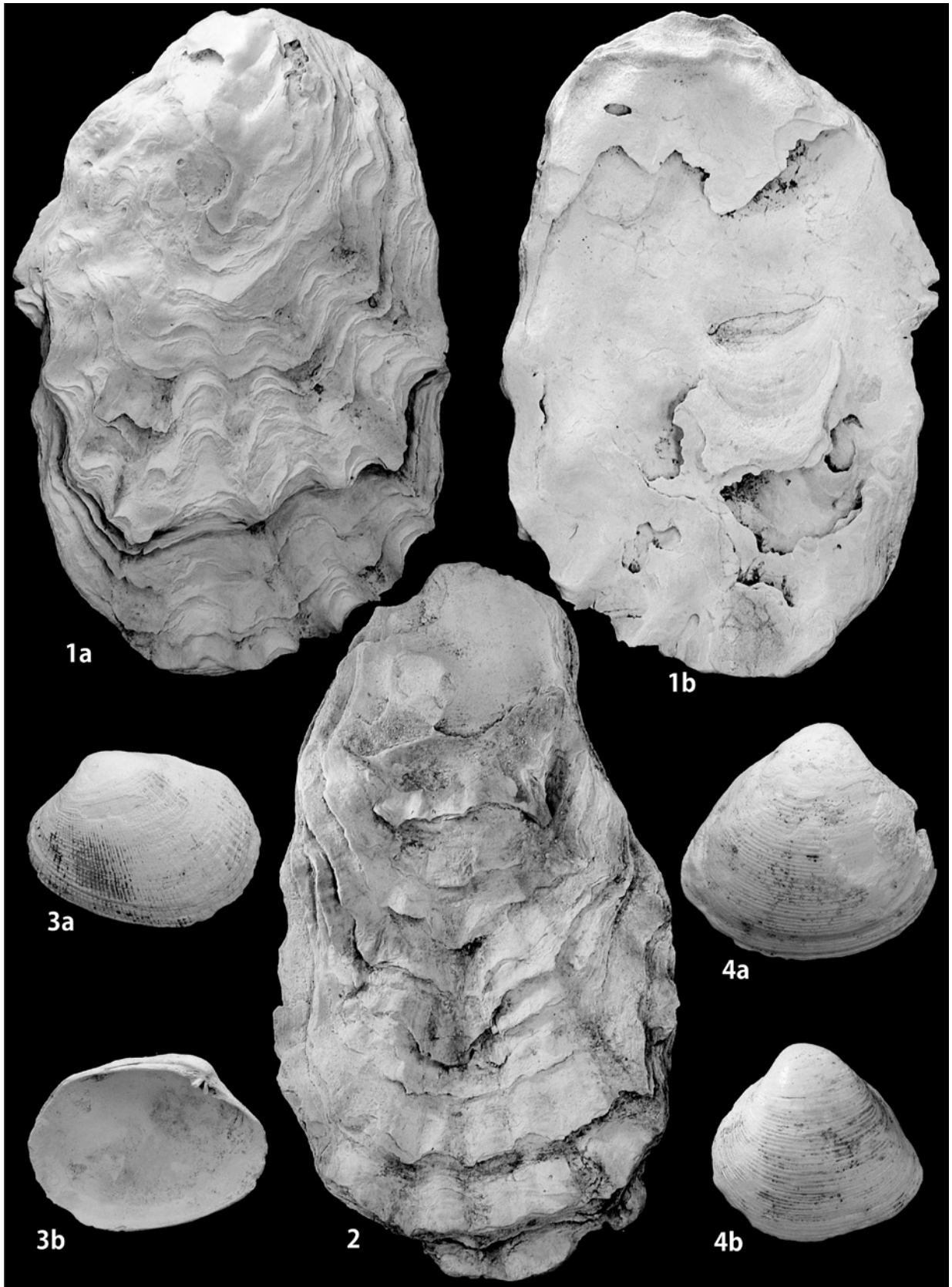


図11 貝層から出土した貝類（2）（全て実物大）  
1a-b, 2. マガキ, 3a-b. アサリ, 4a-b. シオフキ,

# 瀬戸神社旧境内地内遺跡から出土した哺乳類・鳥類について

神奈川県立生命の星・地球博物館 大島 光春

## はじめに

瀬戸神社旧境内地内遺跡（横浜市金沢区瀬戸4500-4）で行われた発掘調査により出土した動物遺体のうち、哺乳類の歯および骨と鳥類の骨について報告する。

約1 cm以上の骨質と肉眼で歯とわかる大きさのものを対象にしたが、破片になりすぎて特徴がわからないものは、骨片とした。調査区画と層準ごとにまとめた結果を表1に示す。



図1 位置図

## 哺乳類の種類

哺乳類のうち、種類がわかったものは表2-1に、わからなかったものは表2-2に示した。種まで同定できた哺乳動物は、イノシシ (*Sus scrofa*)、ニホンジカ (*Cervus nippon*)、ドブネズミ (*Rattus norvegicus*) である。大きさや形態について現生の動物との差異は見られなかった。

ウマ (*Equus caballus*) とウシ (*Bos taurus*) も出土したが、属までの同定であり、種については推定した。他にイヌと思われる上腕骨遠位部と、キツネと思われる後位の尾椎は断片的すぎて確定できない。クジラ類については骨の組織からクジラと推定できたのみで、破片が小さすぎて部位を特定することができなかった。



図2 哺乳類

1. ウマ右中手骨, 2. ウマ右基節骨 (指骨), 3. ウマ右上顎第3前臼歯?, 4. ウマ上顎第1臼歯?, 5. ウマ左下顎第3切歯, 6. ウシ右中手骨, 7. シカ右大腿骨, 8. シカ左上腕骨骨体, 9. シカ左肩甲骨, 10. イノシシ右下顎骨 (m1-2), 11. イノシシ左下顎骨 (m1-2)

## ウマ

本遺跡では最も数多くの骨と、歯が出土した。

四肢骨遠位部の中手骨、指骨が目立った。図2-1、図2-2に示した中手骨と基節骨は同一個体

のものと思われる。切歯(図2-5)は歯種の同

定がしやすいが、前臼歯(P)と臼歯(M)は、P1とM3を除くと形状がよく似ていて、判別しにくい。遊離した上顎(前)臼歯2個(図2-3、図2-4)は、当館の現生シマウマ標本やHillson(2003)、松井(2006)を参考にそれぞれP3(図2-3)、M1(図2-4)と同定した。

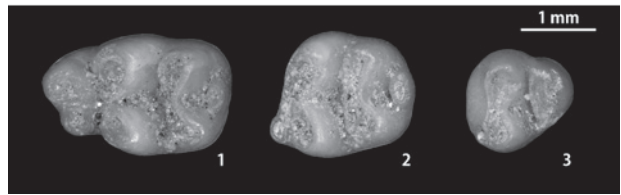


図3 ドブネズミ左下顎臼歯 1. m1, 2. m2, 3. m3



図4 鳥類

1. キジ科(ニワトリ?) 鳥口骨, 2. キジ科(キジ?) 上腕骨, 3. キジ科(キジ?) 尺骨, 4. キジ科(キジ?) 橈骨, 5. カモ科鳥口骨, 6. キジ科(キジ?) 7. キジ科(キジ?) 大腿骨, 8. キジ科(ニワトリ?) 大腿骨, 9. キジ科(キジ?) 足根中足骨, 10. キジ科(ニワトリ?) 脛足根骨

## ウシ

中手骨を1個だけ確認した。シカより明らかに大きく、太く、短い。

## イノシシ

m1-2が残った下顎骨後部(遠心部)が左右各1個(図2-10, 図2-11)と、前肢の中手骨、指骨が出土した。寛骨は小さな断片。

## ニホンジカ

大腿骨(図2-7)、上腕骨(図2-8)、肩甲骨(図2-9)など四肢骨が出土した。

表1 層準区別哺乳類・鳥類一覧

F 貝層

区	層	種類	部位	R/L	区	層	種類	部位	R/L	
1区	4層～黒褐色土	キジ科	尺骨	R	4区	貝層上黒褐色土	シカ	大腿骨近位部	R	
	4層～黒褐色土	キジ科	上腕骨	R		黒褐色土	ウマ	下顎第3切歯	L	
	4層～黒褐色土	キジ科	橈骨	R		黒褐色土	鳥類	骨片	?	
	貝層中	ウマ	上顎第1臼歯?	R		黒褐色土	鳥類	骨片(長骨)	?	
	最下貝層	ウシ	中手骨	R		黒褐色土	鳥類	骨片(長骨)	?	
	石垣下	シカ	大腿骨	R		黒褐色土	鳥類	大腿骨骨体	?	
2区	最下貝層	キジ科	大腿骨	L		黒褐色土	哺乳	類骨片(長骨)	?	
3区	下部貝層	カモ科	上腕骨遠位部	R		黒褐色土	哺乳	類骨片(不規則骨)	?	
	下部貝層	キジ科	脛足根骨遠位端	?		黒褐色土	哺乳	類大腿骨	L	
	下部貝層	キジ科	烏口骨	R		5区	貝層～黒褐色土	カモ科	上腕骨	R
	下部貝層	キジ科	尺骨骨体	?			貝層上黒褐色土	シカ	後頭骨底部	R
	貝層上黒褐色土	?	骨片(扁平骨)	?			貝層上黒褐色土～貝層	イノシシ	寛骨(腸骨)	L
	貝層上黒褐色土	?	肋骨破片	?			貝層上黒褐色土～貝層	イノシシ	中節骨(指骨)	?
	貝層上黒褐色土	ウマ	肩甲骨後縁	R			貝層上黒褐色土～貝層	ウマ	基節骨(指骨)	R
	貝層上黒褐色土	シカ	上腕骨骨体	L	貝層上黒褐色土～貝層		ウマ	中手骨	R	
	貝層中	キジ科	尺骨骨体	L	貝層上黒褐色土～貝層		ウマ	中節骨(指骨)	R	
	土丹集石上	ウマ	大腿骨遠位部	R	貝層上黒褐色土～貝層		哺乳類	骨片(扁平骨)	?	
	土丹集石付近	ウマ	橈骨骨体	R	貝層上黒褐色土～貝層		哺乳類	骨片(扁平骨)	?	
	土丹精査	イヌ?	上腕骨遠位部	R	貝層上黒褐色土～貝層		哺乳類	骨片(扁平骨)	?	
	土丹精査	イノシシ?	大腿骨破片	?	貝層中		ウマ	上顎第3前臼歯?	R	
	土丹精査	カモメ科	足根中足骨	R	貝層中		ウマ	上腕骨滑車	R	
土丹精査	カモメ科	脛足根骨骨体	L	貝層中	ウマ		中手骨遠位端	L		
土丹精査	カモ科	脛足根骨近位端	L	貝層中	キジ科		足根中足骨遠位端	L		
土丹精査	鳥類	尺骨近位端	?	貝層中	鳥類	橈骨骨体	?			
4区	貝層～黒褐色土	鳥類骨片	(長骨)	?	貝層中	鳥類	脛足根骨遠位端	?		
	貝層下	鳥類	尺骨近位端	R	貝層中	鳥類	脛足根骨近位端	?		
	貝層上黒褐色土	イノシシ	中手骨近位端	?	?	18層サンプル	ヘビ?	椎骨	—	
	貝層上黒褐色土	カモ科	烏口骨	R		B-1	シカ	大腿骨近位部	L	
	貝層上黒褐色土	キジ科	大腿骨遠位端	L		15層サンプル	ドブネズミ	下顎第1臼歯	L	
	貝層上黒褐色土	キジ科	脛足根骨	L		15層サンプル	ドブネズミ	下顎第2臼歯	L	
	貝層上黒褐色土	キツネ?	尾椎	—		15層サンプル	ドブネズミ	下顎第3臼歯	L	
	貝層上黒褐色土	シカ	肩甲骨	L						
中段地業面										
区	層	種類	部位	R/L						
1区	地業面中	哺乳類	大腿骨近位部	R						
	地業面中	クジラ類	骨片	?						
包含層・その他										
区	層	種類	部位	R/L	区	層	種類	部位	R/L	
A~B-3G		鳥類	骨片	?	E-3G	包含層	哺乳類	骨片(短骨)	?	
B-2G	包含層	哺乳類	尺骨近位端	?	E-3G	包含層	哺乳類	骨片(扁平骨)	?	
B-3G	包含層	哺乳類	骨片(長骨)	?	E-3G	包含層	哺乳類	骨片(扁平骨)	?	
B-3G	包含層	哺乳類	骨片(扁平骨)	?	E-3G	包含層	哺乳類	骨片(扁平骨)	?	
B-3G	包含層	哺乳類	骨片(扁平骨)	?	E-4G	包含層	鳥類?	大腿骨	R	
1号井戸	掘方	哺乳類	上腕骨	R	獣骨No.1	イノシシ	下顎骨(m1-2)	L		
B-2G	包含層	イノシシ	下顎骨(m1-2)	R	(E-3G)					
B-4G	包含層	ウマ	中手骨	L						

ドブネズミ

遊離した臼歯3点が出土した。これらは左m1-3でおそらく同一個体のものと考えられる。図3-1~3はキーエンス製デジタルマイクロスコープの深度合成機能を使って作成した画像である。

鳥類の種類

鳥類の骨については、当館の現生標本や松井(2006)を参考に科レベルの同定にとどめた。カモ科、カモメ科、キジ科に属する鳥類の骨格が出土した。2個の烏口骨を除けば四肢骨のみであった。主な物を図4に示した。

まとめ

瀬戸神社旧境内地内遺跡の主にF貝層からは、イノシシ、ニホンジカ、ドブネズミ、ウマ、ウシ、キツネ(?)、イヌ(?)クジラ類等の哺乳類の骨や歯と、カモ科、カモメ科、キジ科などの鳥類の骨が出土した。

本報告では取り上げていないが、ヘビと思われる有鱗目の椎骨が複数出土した。

文献

Hillson, S., 2003. Mammal Bones and Teeth. Institute of Archaeology, University of London, 64 pp.

松井 章編, 2006. 動物考古学の手引き. 独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター, 152 pp.

表2-1 哺乳類

種類	部位	R/L	遺構	区	層・その他	
ドブネズミ	下顎第1臼歯	L	F貝層		g層サンプル	
	下顎第2臼歯	L	F貝層		g層サンプル	
	下顎第3臼歯	L	F貝層		g層サンプル	
イヌ?	上腕骨遠位部	R	F貝層	3区	土丹精査	
キツネ?	尾椎	—	F貝層	4区	貝層上黒褐色土	
ウマ	上顎第1臼歯?	R	F貝層	1区	貝層中	
	肩甲骨後縁	R	F貝層	3区	貝層上黒褐色土	
	大腿骨遠位部	R	F貝層	3区	土丹集石上	
	橈骨骨体	R	F貝層	3区	土丹集石付近	
	下顎第3切歯	L	F貝層	4区	黒褐色土	
	中節骨 (指骨)	R	F貝層	5区	貝層上黒褐色土～貝層	
	基節骨 (指骨)	R	F貝層	5区	貝層上黒褐色土～貝層	
	中手骨遠位端	L	F貝層	5区	貝層中	
	中手骨	R	F貝層	5区	貝層上黒褐色土～貝層	
	上顎第3前臼歯?	R	F貝層	5区	貝層中	
	上腕骨滑車部	R	F貝層	5区	貝層中	
	中手骨	L	B-4	E-3G		
	イノシシ	中手骨 (For.)	?	F貝層	4区	貝層上黒褐色土
		中節骨 (指骨)	?	F貝層	5区	貝層上黒褐色土～貝層
寛骨 (腸骨近位)		L	F貝層	5区	貝層上黒褐色土～貝層	
下顎骨 (m1-2)		L	獣骨No.1	E-3G		
	下顎骨 (m1-2)	R		B-2G	包含層	
イノシシ?	大腿骨破片?		F貝層	3区	土丹精査	
ウシ	中手骨	R	F貝層	1区	最下貝層	
クジラ類	骨片	?	中段地業面		地業面中	
シカ	大腿骨	R	F貝層	1区	石垣下	
	上腕骨骨体	L	F貝層	3区	貝層上黒褐色土	
	肩甲骨	L	F貝層	4区	貝層上黒褐色土	
	大腿骨近位部	R	F貝層	4区	貝層上黒褐色土	
	後頭骨底部	R	F貝層	5区	貝層上黒褐色土	
	大腿骨近位部	L	F貝層		B-1	

表2-2 不明の哺乳類哺乳類

部位	R/L	形状	遺構	区	層・その他
骨片	?	長骨	F貝層	4区	黒褐色土
大腿骨	L	長骨	F貝層	4区	黒褐色土
骨片	?	不規則骨	F貝層	4区	黒褐色土
骨片	?	扁平骨	F貝層	5区	貝層上黒褐色土～貝層
骨片	?	扁平骨	F貝層	5区	貝層上黒褐色土～貝層
骨片	?	扁平骨	F貝層	5区	貝層上黒褐色土～貝層
骨片	?	長骨		B-3G	包含層
骨片	?	扁平骨		B-3G	包含層
骨片	?	扁平骨		B-3G	包含層
尺骨近位端	?	長骨		B-2G	包含層
上腕骨	R	長骨	1号井戸		堀方
骨片	?	扁平骨		E-3G	包含層
骨片	?	短骨		E-3G	包含層
骨片	?	扁平骨		E-3G	包含層
骨片	?	扁平骨		E-3G	包含層
骨角器	?	長骨	中段地業面	1区	地業面中
大腿骨近位部	R	長骨	中段地業面	1区	地業面中

表3 鳥類

種類	部位	R/L	遺構	区	層	種類	部位	R/L	遺構	区	層
カモ科	上腕骨遠位部	R	F貝層	3区	下部貝層	キジ科 (ニワトリ?)	脛足根骨	L	F貝層	4区	貝層上黒褐色土
カモ科	鳥口骨	R	F貝層	4区	貝層上黒褐色土	キジ科 (ニワトリ?)	大腿骨遠位端	L	F貝層	4区	貝層上黒褐色土
カモ科	上腕骨	R	F貝層	5区	貝層～黒褐色土	鳥類	尺骨近位端	?	F貝層	3区	土丹精査
カモ科 (マガン?)	脛足根骨近位端	L	F貝層	3区	土丹精査	鳥類	骨片	?	F貝層	4区	貝層～黒褐色土
カモメ科	脛足根骨骨体	L	F貝層	3区	土丹精査	鳥類	骨片	?	F貝層	4区	黒褐色土
カモメ科	足根中足骨	R	F貝層	3区	土丹精査	鳥類	骨片	?	F貝層	4区	黒褐色土
キジ科	尺骨	R	F貝層	1区	a層～黒褐色土	鳥類	骨片	?	F貝層	4区	黒褐色土
キジ科	上腕骨	R	F貝層	1区	a層～黒褐色土	鳥類	尺骨近位端	R	F貝層	4区	貝層下
キジ科	橈骨	R	F貝層	1区	a層～黒褐色土	鳥類	大腿骨骨体	?	F貝層	4区	黒褐色土
キジ科	脛足根骨遠位端	?	F貝層	3区	下部貝層	鳥類	脛足根骨遠位端	?	F貝層	5区	貝層中
キジ科 (キジ?)	大腿骨	L	F貝層	2区	最下貝層	鳥類	脛足根骨近位端	?	F貝層	5区	貝層中
キジ科 (キジ?)	足根中足骨遠位端	L	F貝層	5区	貝層中	鳥類	橈骨骨体	?	F貝層	5区	貝層中
キジ科 (ニワトリ?)	鳥口骨	R	F貝層	3区	下部貝層	鳥類	骨片	?		A～B-3G	
キジ科 (ニワトリ?)	尺骨骨体	?	F貝層	3区	下部貝層	鳥類	骨片	?		A-2G	
キジ科 (ニワトリ?)	尺骨骨体	L	F貝層	3区	貝層中	鳥類?	大腿骨	R		E-4G	包含層

# 瀬戸神社旧境内地内遺跡出土遺物の金属学的調査

伊藤 薫

## 1. いきさつ

瀬戸神社旧境内地内遺跡発掘調査に伴い出土した金属関連遺物について金属学的調査を行う。同遺跡は、横浜市金沢区瀬戸に位置し、東京湾から入り込む平潟湾の最奥部にある。中世から近世にいたる地業層・貝塚・やぐらから多くの遺物が出土している。そのうちの、「F貝塚層」から出土した遺物のうちの10点を選定し金属学的調査を行なう。

## 2. 調査試料の内訳

表1に調査試料の一覧を示す。羽口片2点、鉄滓4点、土器片1点、銅関係遺物3点である。

## 3. 調査項目および試料調製

表2に調査項目と実施試料を示す。調査項目および試料調製の詳細は以下の通りである。

### 1. 外観観察

肉眼および実体顕微鏡にて、外観的特徴を観察記録する。使用した機器は以下の通りである。

デジタルカメラ DMC-FX 8型 (パナソニック製)

実体顕微鏡 VHX-500型 (キーエンス製)

### 2. 断面マクロ・ミクロ組織観察

平均的な箇所について、15×15mmの大きさにダイヤモンドカッターにて切り出した。洗浄・乾燥後、真空下で樹脂を含浸させ、断面が観察面になるように組織を固定する。固化後、鏡面になるまで研磨し組織を現出した後、光学顕微鏡にて観察・記録する。使用装置は以下の通りである。

光学顕微鏡 BX51M型 (オリンパス製)

### 3. 成分分析 (定性分析)

上記の埋め込み研磨試料を用い、一部は少量を採取してX線マイクロアナライザー (EPMA) にて定性分析を行なう。使用装置は以下の通りである。

X線マイクロアナライザー (EPMA) JXA-8100型 (日本電子製)

## 4. 調査結果

各試料の外観観察結果および断面マクロ・ミクロ組織を写真1～10に示す。また、定性分析結果を表3・4に示す。各試料は以下のような特徴を有している。

表1 調査試料の一覧と大きさ

試料番号	出土位置	試料名	大きさ(mm)	重量(g)
1	1区貝塚層中	羽口片	57×50×26	43.2
2	3区貝塚層上黒褐色土	羽口片	75×50×30	66.8
3	4区黒褐色土	鉄滓	56×43×18	50.6
4	5区貝塚層上	鉄滓	57×37×26	23.5
5	5区貝塚層上黒褐色土～貝層	鉄滓	60×60×18	45.2
6	4区貝塚層上黒褐色土	鉄滓	37×23×23	12.6
7	1区貝塚層中	緑青色塊状物	40×29×20	9.7
8	1区最下貝塚層	銅線	1φ	1.6
9	1区貝塚層中	銅板	40×30×8	6.3
10		五徳状製品	92×95×30	211

表2 調査項目と実施試料

試料番号	外観観察	組織観察	成分分析
1	○	×	○
2	○	○	○
3	○	○	○
4	○	○	○
5	○	○	×
6	○	○	×
7	○	×	×
8	○	○	○
9	○	○	○
10	○	×	○

表3 羽口等遺物、鉱物相の定性分析結果 (mass%)

試料番号		FeO	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	MgO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	TiO <sub>2</sub>	C	N	O	S
1	鉄錆付着	14.7	49.1	18.1	3.56	10.3	・・・	1.67	1.76	0.97	・・・	・・・	・・・	・・・
	溶融部	11.8	51.3	16.8	9.55	3.72	2.23	2.56	1.09	0.94	・・・	・・・	・・・	・・・
	ウスタイト	96.5	・・・	0.86	0.54	1.28	・・・	・・・	・・・	0.81	・・・	・・・	・・・	・・・
4	ファヤライト	53.2	32.7	・・・	3.86	10.1	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・
	スラグ	28.6	35.8	9.53	16.6	1.29	2.14	3.43	2.11	0.54	・・・	・・・	・・・	・・・
	ウスタイト	96.1	・・・	1.35	・・・	2.01	・・・	・・・	・・・	0.65	・・・	・・・	・・・	・・・
10	スラグ	32.6	34.9	8.91	14.5	3.02	1.53	2.53	2.01	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・
	黒色部	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	80.8	4.71	11.5	1.65
	光沢部	22.1	30.2	36.4	1.03	2.82	・・・	5.91	・・・	1.67	・・・	・・・	・・・	・・・

4-1 ; 試料No.1 (羽口片)

茶褐色で大きさが57×50×26mm、

重さ43.2gを測る。中央に丸い凹み

が形成されており、湾曲の形状から約25mm程度の径を有する羽口の破片である(写真1)。固着している茶褐色部の一部を削り取った試料の定性分析の結果(表3)、粘土成分のほかに数10%の鉄分が検出するこの羽口は鉄鍛冶操作に使用した羽口と考えられる。

4-2 ; 試料No.2 (羽口片)

茶褐色で大きさが75×50×30mm、重さ66.8gを測る。前記No.1と同様に中央部に丸みを帯びた凹みがある。凹みの形状から、元の直径は30~35mmを有する羽口である。また、片側には黒褐色で光沢のあるガラス化した領域が存在する。かなりの被熱があったものと考えられる(溶融推定温度は1200~1300℃;写真2)。この部分は、粘土成分に多くの鉄分が混入したガラス層で、カルシウム(Ca)分が含まれている(表3)。恐らく、この羽口製作には貝殻を含んだ近傍の粘土を使用した可能性が考えられる。

4-3 ; 試料No.3 (鉄滓)

茶褐色で大きさが56×43×18mm、重さ50.6gを測る平板状の鉄滓破片である。表面の一部に黒色を帯び気泡を巻き込んだガラス状の物質が存在する。また、底部には木炭片が固着している(写真3)。構成鉱物は若干の金属鉄(Fe)、微細結晶のウスタイト(FeO)、短冊状で大きく発達した結晶のファヤライト(2FeO・SiO<sub>2</sub>)、そしてガラス質珪酸塩からなり、チタン化合物は存在しない。ガラス質珪酸塩中には16%強のカルシウム分(Ca)が含まれており、通常の炉材成分にしては高い。したがって、本遺構の鍛冶炉に使用した炉材には遺構周辺の貝殻を含む粘土を使用したことが伺える(表3)。大きさ・生成鉱物相からみて、小鍛冶操作で生成した鉄滓と考えられる。

4-4 ; 試料4 (椀型鉄滓)

茶褐色で大きさが57×37×18mm、重さ23.3gを測る椀形状の鉄滓破片である。前記試料No.3と同様に表面の一部には黒色でガラス化した物質が存在する。構成鉱物は若干の金属鉄、ウスタイトおよびガラス質珪酸塩からなりチタン化合物は存在しない(写真4)。ガラス質珪酸塩中には14%強のカルシウム分が含まれており(表3)、前記の鉄滓(No.3)と同様に小鍛冶操作で生成した鉄滓と考えられる。

4-5 ; 試料5 (鉄滓)

茶褐色で表面には多くの微細亀裂が存在する。大きさは60×60×26mm、重さ45.2gを測る。断面をみると、塊の中央部には厚さ約3mmの錆化した鉄板が存在する。残存している金属鉄はレーデブライト(白鉄)組織であることから元は鑄鉄、恐らく鉄鍋の破片と推測される。周囲の組織は土砂を含む鉄錆である(写真5)。したがって、この遺物は、鑄鉄破片と鉄錆の焼固まったものといえる。鉄器加工時、再利用するために素材としてこの破片(鑄鉄片)を使用したことが考えられる。

表4 銅関連遺物の定性分析結果 (mass%)

試料番号	分析箇所	O	S	Cu	Pb
8	銅線	・・・	0.22	98.7	1.53
9	銅板	25.2	0.12	74.6	0.11

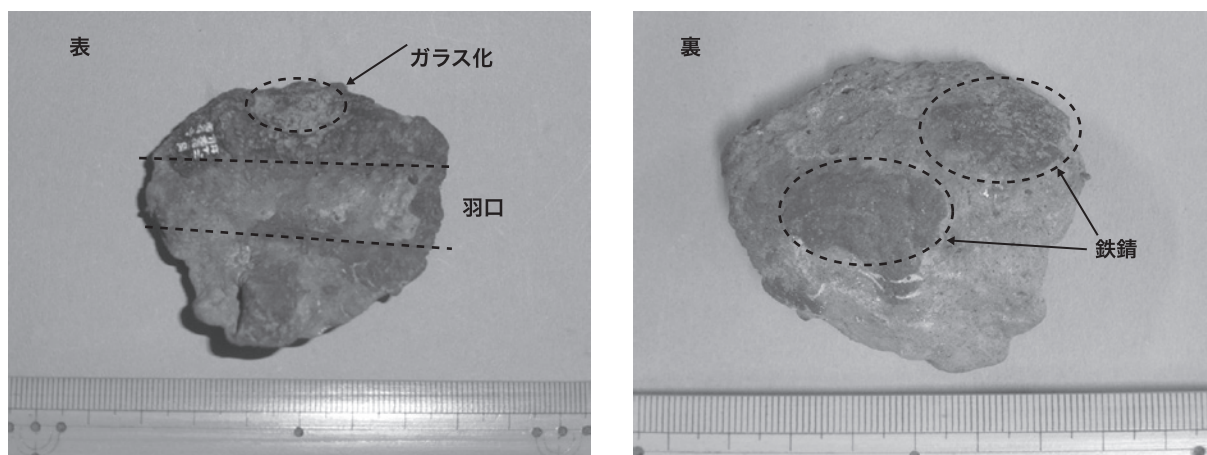


写真1 試料No.1 (羽口片) 外観

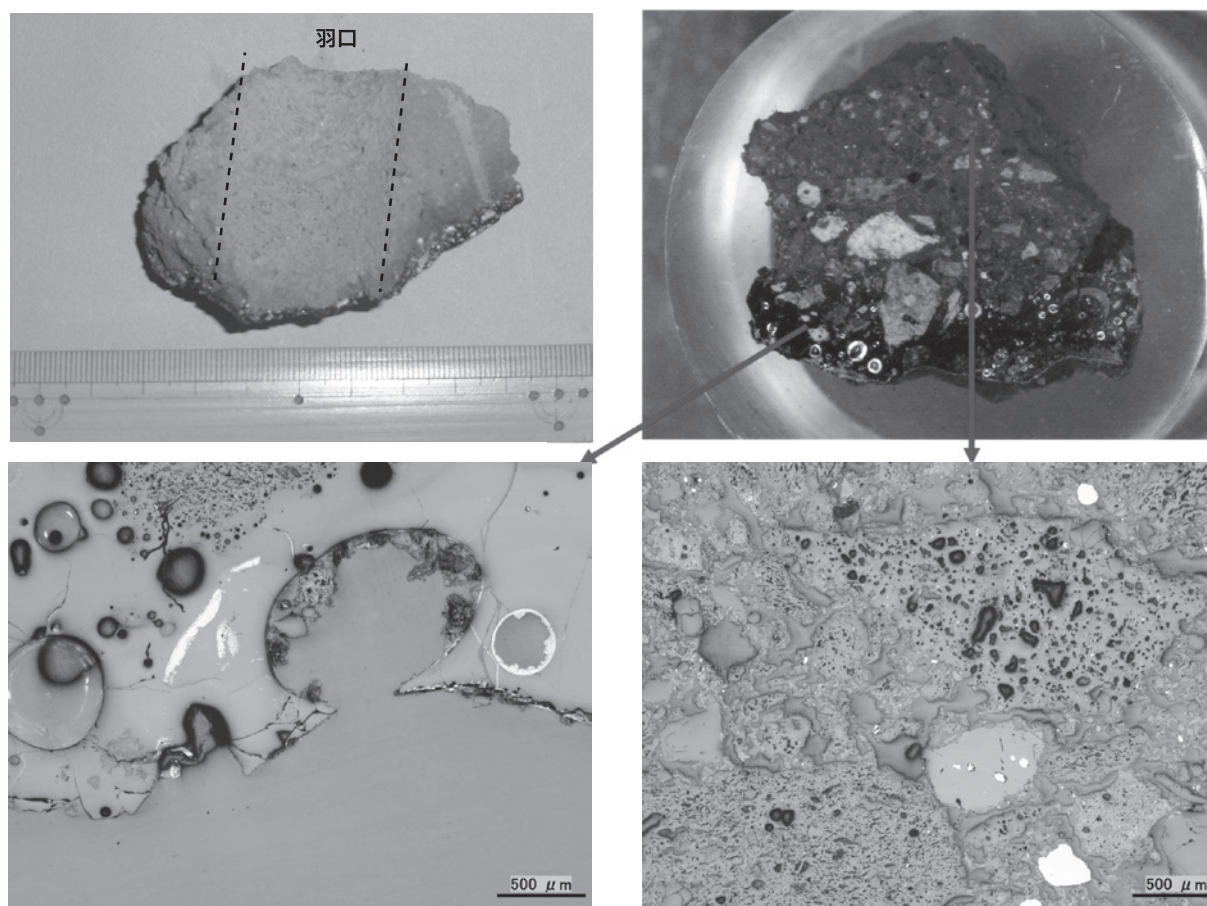
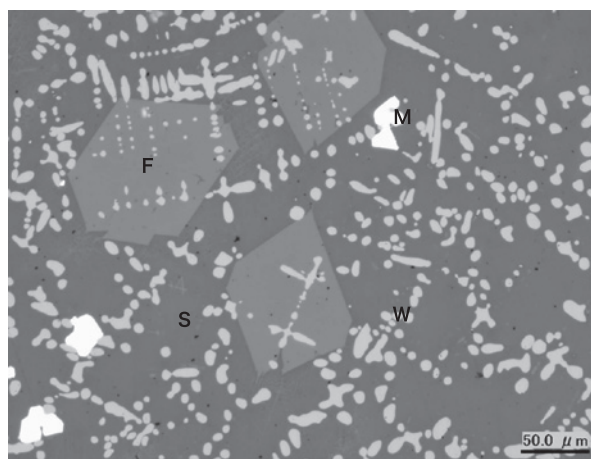
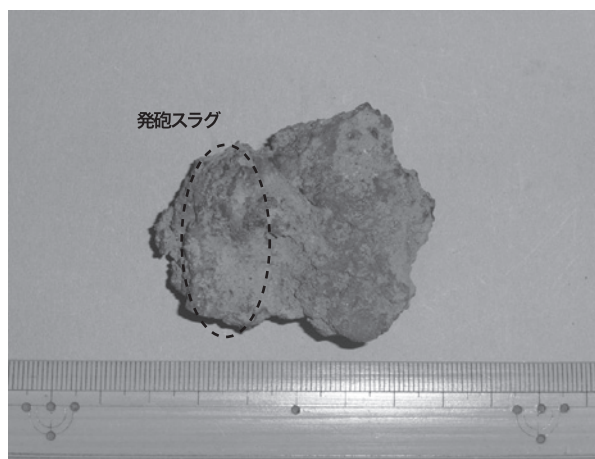


写真2 No.2 試料 (羽口片) 外観と断面組織

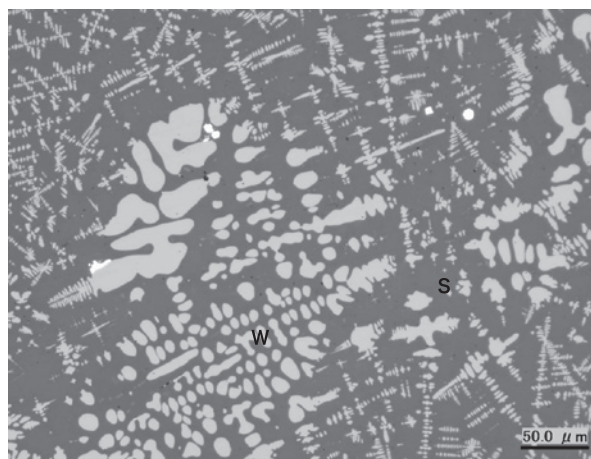
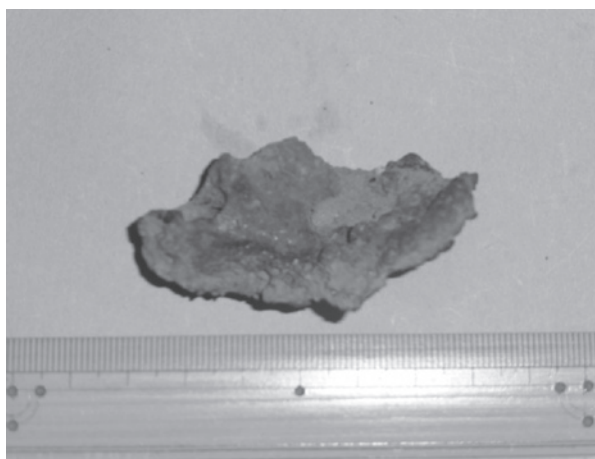
#### 4-6 ; 試料6 (鉄滓)

黄褐色で表面は粗い砂粒が存在する。大きさは $37 \times 23 \times 23$ mm、重さ12.6gを測る。一部には黒褐色のガラス質物質が存在するが比較的脆い塊状物である。断面組織は、大きな空孔が存在し鉄錆と土砂が混ざった焼結物である(写真6)。恐らく、鍛冶操作段階で生成した鉄錆(鉄器加熱時に鉄器表面に発生する酸化鉄皮膜)が周囲の土砂(炉材の一部を含む)と一体となり、焼固まったものと考えられる。



M:金属鉄、W:ウスタイト、F:ファヤライト、S:ガラス質珪酸塩

写真3 試料3 (鉄滓) の外観と断面組織



W:ウスタイト、S:ガラス質珪酸塩

写真4 試料4 (鉄滓) の外観と断面組織

#### 4-7: 試料7 (緑青色塊状物)

緑青色を呈し、大きさは40×29×20mm、重さ9.7gを測る。1 @程度の厚さを有する酸化した銅板、土砂および白色の貝殻破片を巻き込んだ「泡おこし状」塊状物である (写真7)。銅細工中に周囲の土砂と混ざり固化したものと考えられる。

#### 4-8: 試料8 (銅線)

直径が約1mmの錆びた銅線である。断面をみると、表面から数10μmm厚さは腐食して酸化銅となっているが、内部は金属光沢を示す金属銅である。銅地金中には鉛(Pb)を1.53%含むが、他の微量元素は検出しない。また、地金中には数μmの灰色微細結晶が多く存在するが、これは酸化銅である (表4)。恐らく、線材に加工する時に (溶解作業?)、周囲の空気を巻き込んでしまったためと推測される。

#### 4-9: 試料9 (銅板)

緑青色で一部は褐色を呈し、貝殻も付着している酸化した銅板である。大きさは40×30×8mm、重さ6.3gを測る。若干の金属銅は残存するものの、殆どは酸化銅となっており、中央部には腐食で脱落した大きな空洞も生じている。表4の定性分析の結果から、若干の鉛が検出されているが、酸素(O)濃度をみてもかなりの酸化が進んだものとなっている (表4)。この銅板も、前記No.8と同様の材質と推測される。

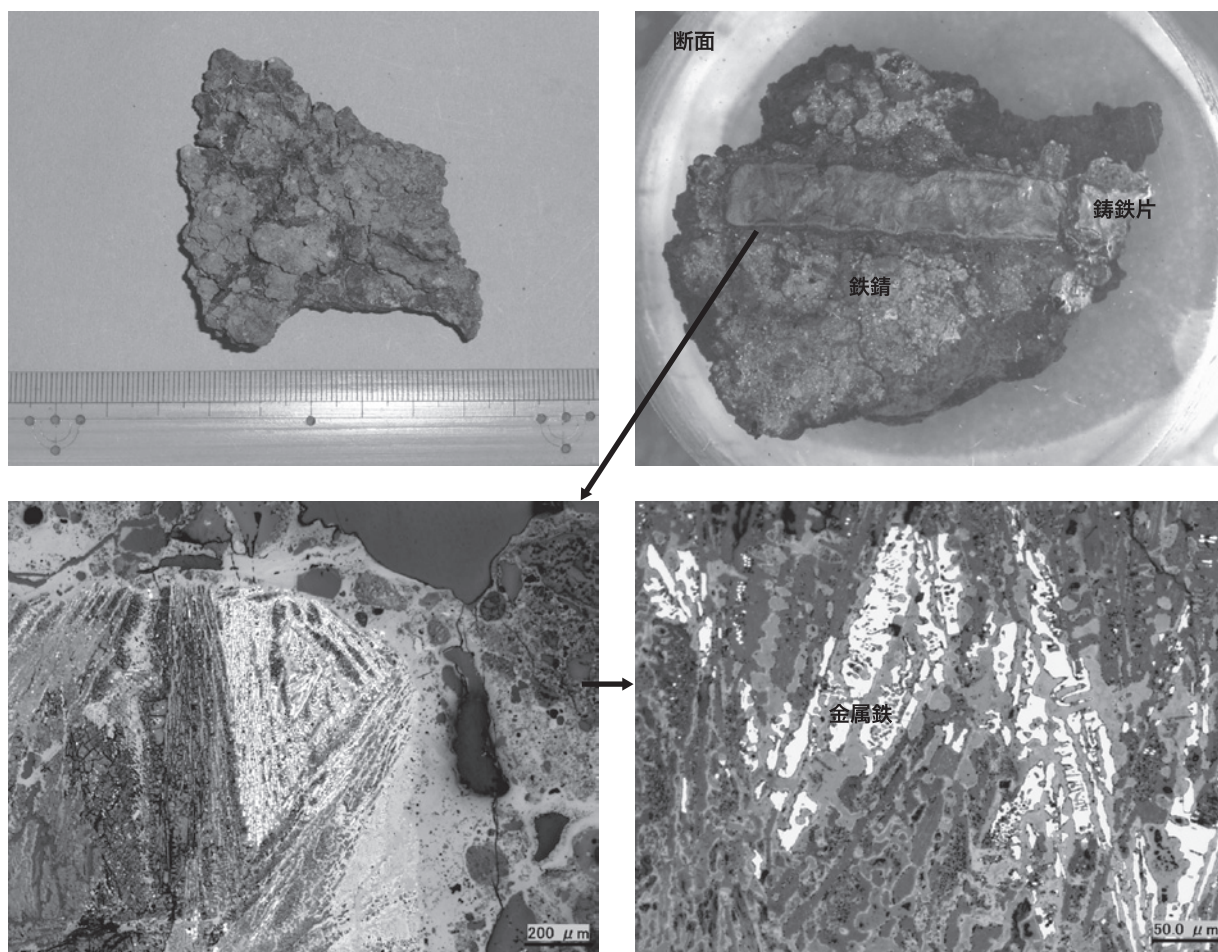


写真5 試料5（鉄鑄+鑄鉄片）の外観と断面組織

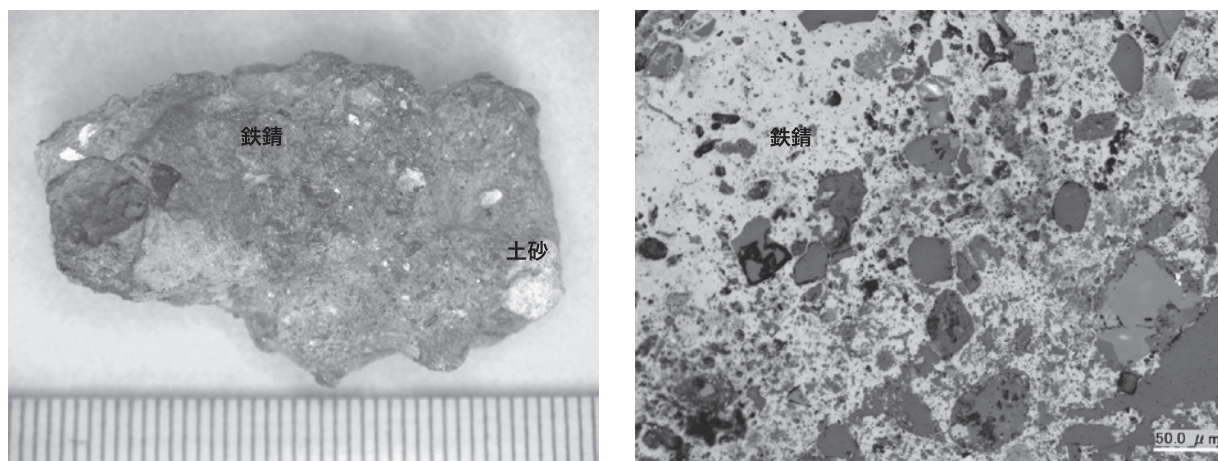


写真6 試料6（鑄鉄塊）の外観と断面組織

#### 4-10；試料No.10（五徳状製品）

茶色の土器破片。大きさは92×95×30mm、重さ211gを測る。淵には黒色の塗料が付着している。また、表面には0.5mm程の光沢を示す粒子が点在する（写真3）。この黒色部および光沢を示す部分の定性分析結果から、黒色物はタール類、また光沢粒子は結晶の大きく発達した岩石粒子で、土器を構成する分の一部と考えられる（表3）。

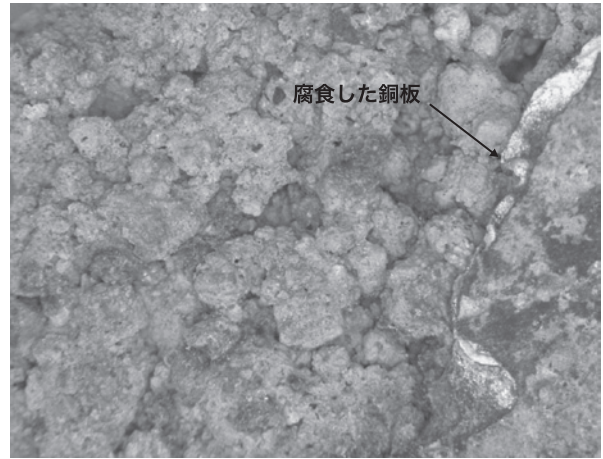
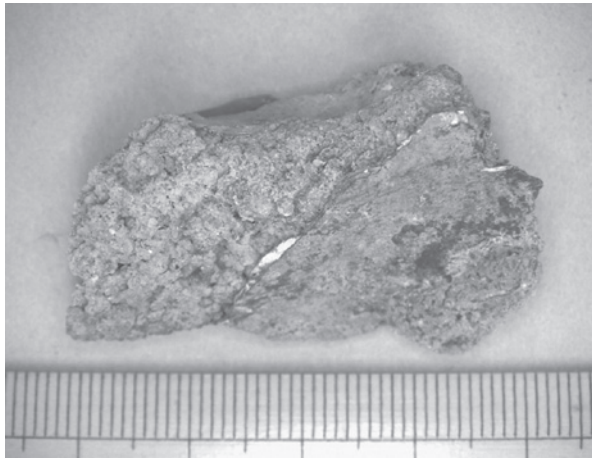


写真7 試料7（青緑色塊状物）の外観と拡大組織

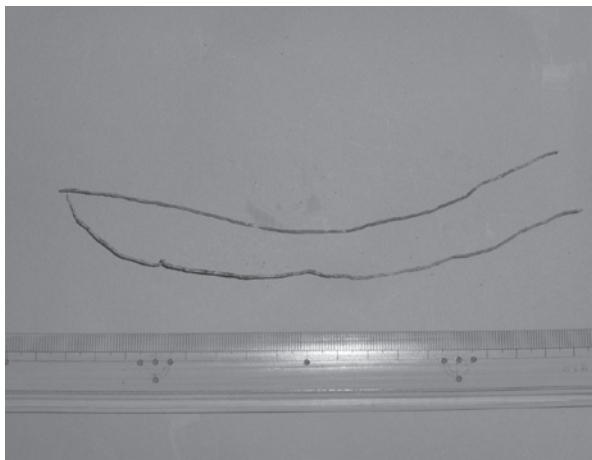


写真8 試料8（銅線）の外観と断面組織

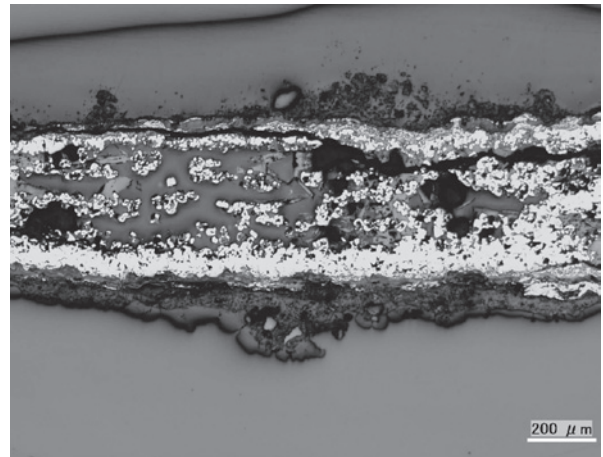
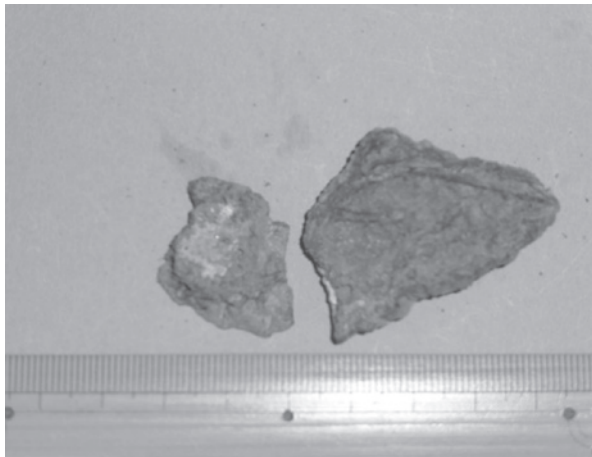
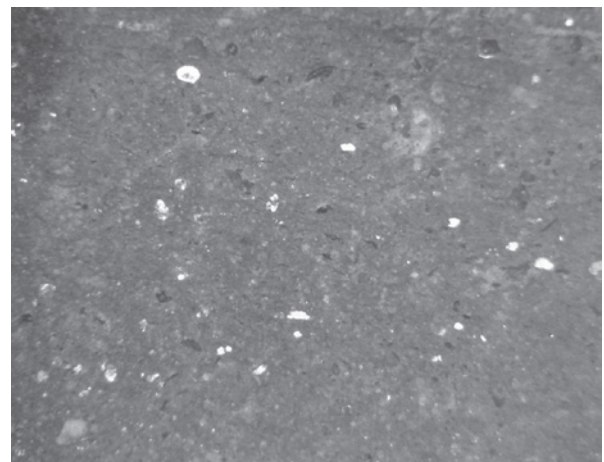
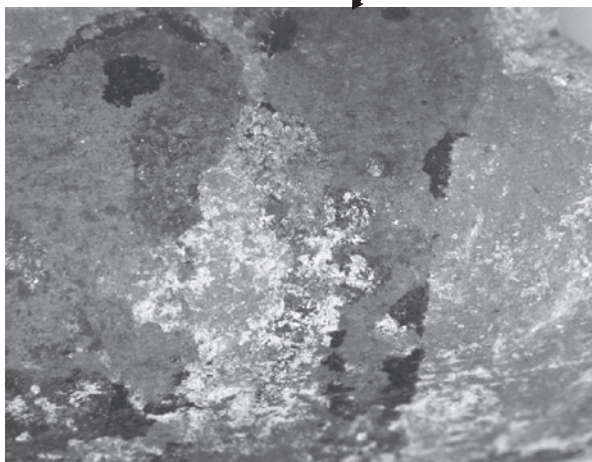
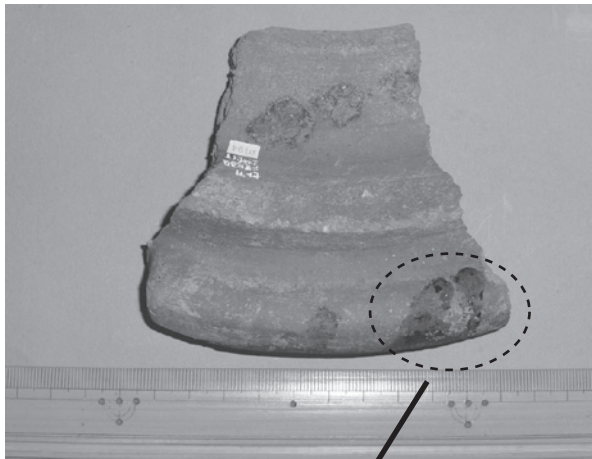


写真9 試料9（銅板）の外観と断面組織

## 5. まとめ

瀬戸神社旧境内地内遺跡から出土した遺物（10点）について金属学的調査を行なった結果、以下のことが判明した。

1. 羽口片2点は、鉄錆が付着あるいは鉄分と反応してガラス化した部分も有する羽口であった。したがって、2点の羽口は鉄鍛冶操作に使用された羽口と考えられた。また、形成している粘土中には高濃



○印；黒色塗料

◎印内；岩石両牛

写真10 試料10（五徳状片）の外観と拡大組織

度のカルシウム分が含まれており、羽口製作には周辺の貝殻を含む粘土が使用されたことが伺えた。

2. 鉄滓類4点は、いずれも小鍛冶操作によって生成したものであった。そのうちの2点は（No.3, 4）は、鍛冶炉の炉材と使用した鉄素材の反応で生成した小さな椀型を呈する鉄滓であった。また、No.5は中央に鑄鉄破片を巻き込んだ鉄錆の焼結物、No.6は鉄錆と周囲の粘土成分を巻き込んだ焼結物であった。一方、成分中に含まれるカルシウム分が高いことから、鍛冶炉の炉材には貝殻成分が多く含まれていることが想定された。

3. 銅関連遺物3点は、本遺構にて銅細工（溶解を含めた小規模な作業?）が行なわれていたことを推測させる遺物であった。

4. 土器片は、使用目的は不明であったが、付着していた黒色塗料がタール類と思われることから、本遺構で製作していた鉄器類あるいはそれ以外の材料の防錆用として使っていたものの一部が、付着したためと想定された。

以上

## 写 真



調査風景



写真1 遺跡遠景（野島より臨む）



写真2 遺跡近景（南より）



写真3 調査前風景（障害物撤去後）



写真4 表土除去及び遺構確認風景



写真5 調査区設定風景



写真6 コンクリート地下構造物（東より）



写真7 石切遺構（南より）



写真8 切石積み遺構（南東より）



写真9 切石積み遺構（南より）

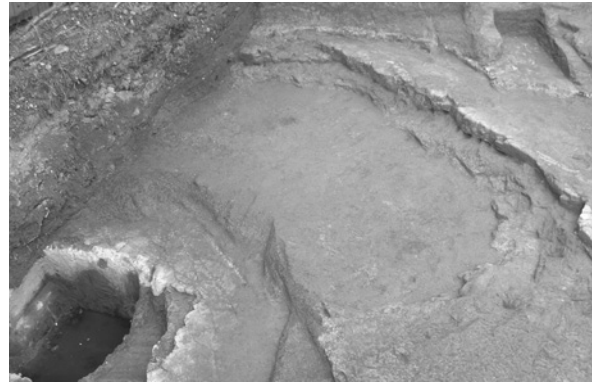


写真10 切石積み遺構（大型ブロック撤去後）

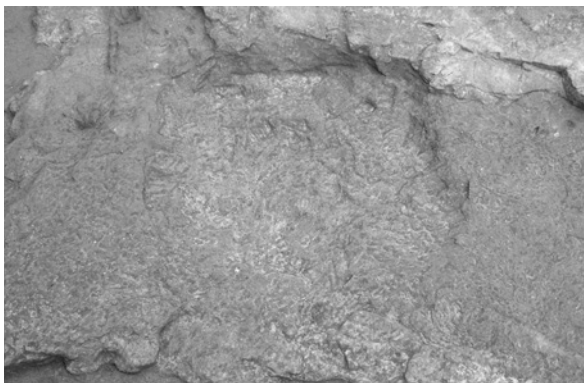


写真11 方形掘込み遺構（南より）



写真12 土坑（南より）



写真13 中段地業面検出・精査

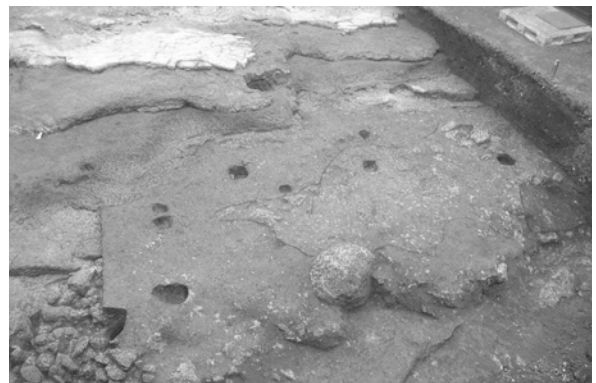


写真14 中段地業面およびピット（南より）



写真15 中段地業面調査風景



写真16 中段地業面ブロック検出状況（南東より）

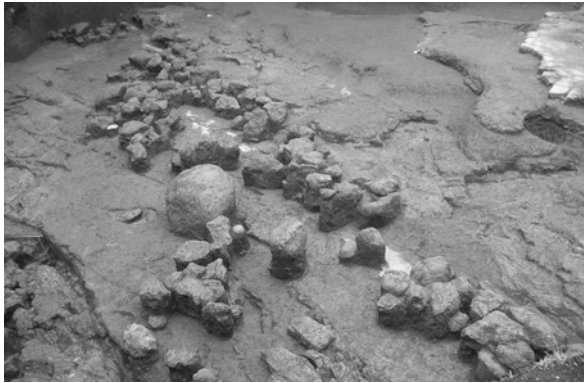


写真17 中段地業面ブロック検出状況(東寄り部分)

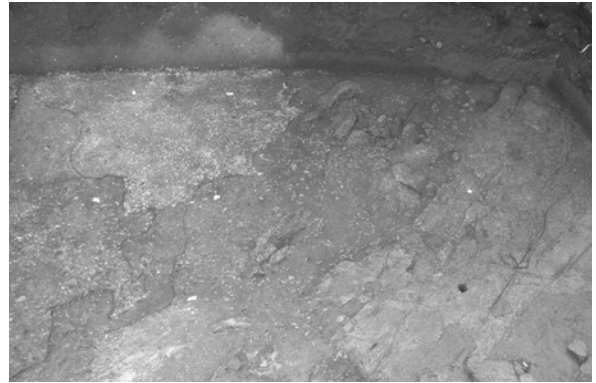


写真18 下段地業面及びI貝層(北より)



写真19 I貝層貝層トレンチ完掘状況(東より)



写真20 貝層トレンチ1北壁貝層堆積状況



写真21 貝層トレンチ1西壁貝層堆積状況



写真22 貝層トレンチ2完掘状況



写真23 調査区境で検出されたH貝層



写真24 遺跡完掘状況(南東より)



写真25 遺跡遠景（南東より）



写真26 調査前風景（南より）



写真27 調査区測量風景



写真28 表土除去風景



写真29 京浜急行擁壁部分表土除去後（南より）



写真30 擁壁外遺構確認後（南西より）



写真31 石垣検出状況（北西より）



写真32 石垣組み方



写真33 石垣検出状況（調査区南寄り）



写真34 参道三和土検出状況（北西より）



写真35 参道完掘状況（東より）



写真36 参道完掘状況（西より）



写真37 参道北側ブロック積み状況



写真38 参道北側ブロック積み状況



写真39 参道東側のブロック検出状況（東より）



写真40 調査区境で検出された暗渠（西より）



写真41 調査区境で検出された暗渠（南より）



写真42 調査区境で検出された暗渠（東より）



写真43 暗渠の蓋石を撤去後（東より）



写真44 暗渠の蓋石を撤去後（東より）



写真45 F貝層北側最上部の堆積状況



写真46 F貝層最上面での貝層の広がり状況



写真47 F貝層（溝状遺構内に堆積する貝層）



写真48 F貝層最北端でのブロック検出状況



写真49 F貝層調査風景（貝層精査）



写真50 F貝層調査風景（土丹ブロック精査）



写真51 F貝層土丹ブロック検出状況（南より）



写真52 鉄道関連擁壁下にある貝層及びブロック層



写真53 F貝層北西部のブロック堆積状況（東より）



写真54 F貝層試掘トレンチ掘削風景



写真55 F貝層完掘状況（南より）

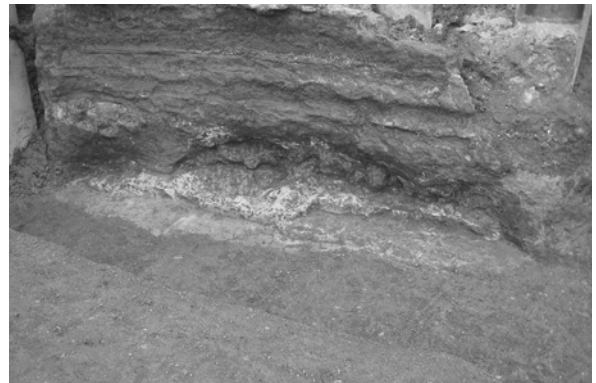


写真56 粘土採掘網（南より）



写真57 遺跡遠景（南東より）



写真58 調査区設定風景（南西より）



写真59 調査前風景



写真60 南西より表土除去風景



写真61 北側調査区完掘状況



写真62 井戸掘削風景（上部）



写真63 井戸掘削風景（下部）



写真64 井戸完掘状況（東より）



写真65 井戸掘り方状況（西より）



写真66 灰溜まりピット



写真67 坑列検出状況（西より）



写真68 坑列検出状況（南より）



写真69 土坑（南東より）



写真70 G貝層掘削風景



写真71 G貝層 a地点貝層と断面



写真72 G貝層 a地点貝層検出状況



写真73 G貝層 a 地点上部掘込み実測状況



写真74 G貝層 a 地点下部貝層検出状況



写真75 G貝層完掘状況（南西より）



写真76 調査終了後の底面の様子（北東より）



写真77 調査終了後の底面の様子（北より）



写真78 調査終了後の底面の様子（南より）

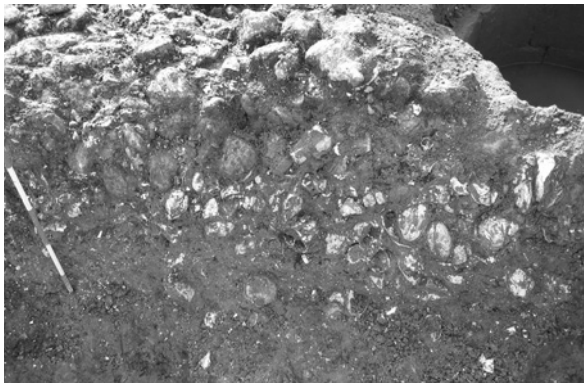


写真79 自然層で確認されたオオノガイのコロニー

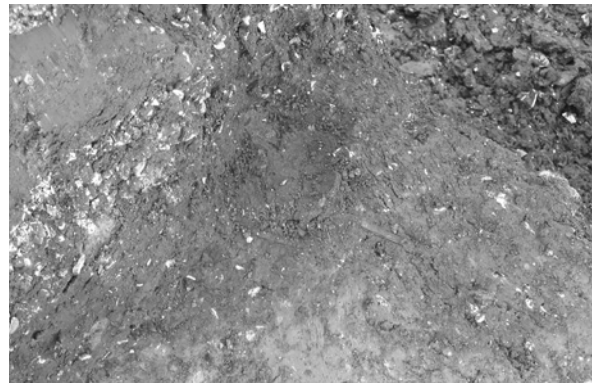


写真80 包含層中から出土した漆椀



写真81 22年度調査出土遺物写真

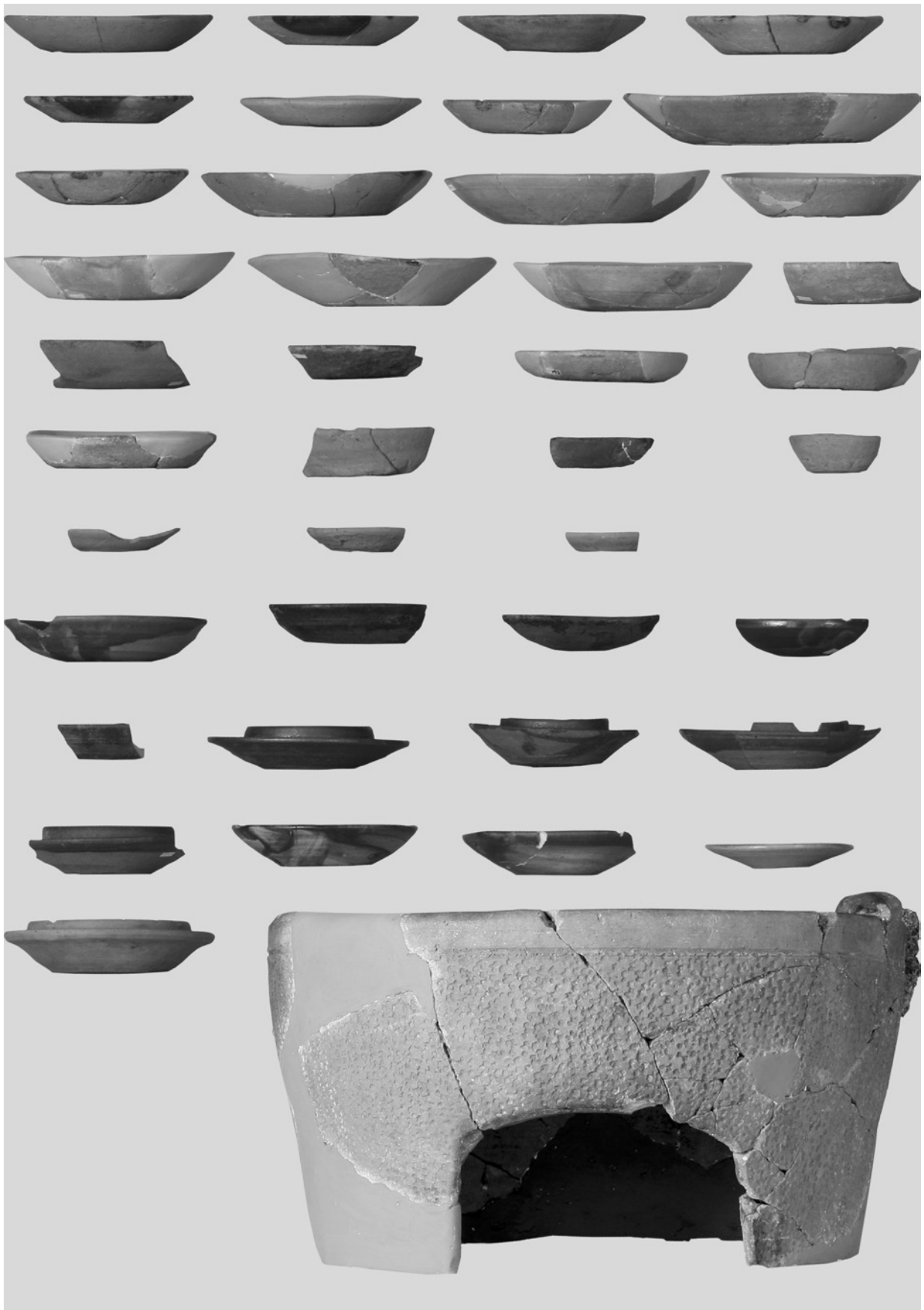


写真82 23年度調査（京浜急行部分）出土かわらけ・灯明皿類写真

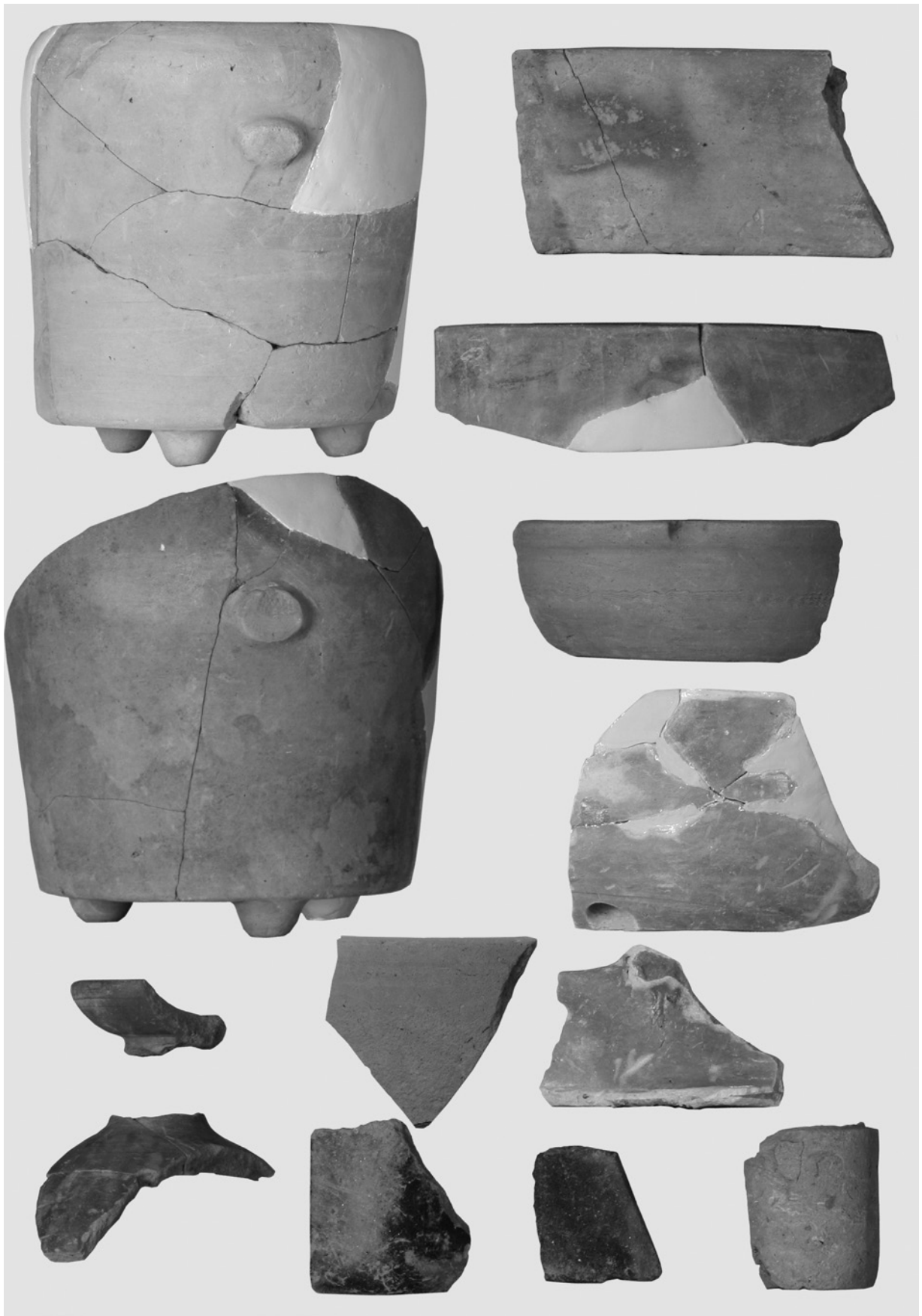


写真83 23年度調査（京浜急行部分）出土焜炉類写真





写真85 23年度調査（遊興施設部分）出土遺物写真

## 抄 録

ふりがな	せとじんじゃきゅうけいだいちないいせきはつくつちようさほうこく		
書 名	瀬戸神社旧境内地内遺跡発掘調査報告		
副 書 名			
巻 次			
シリーズ名			
シリーズ番号			
編著者名	鹿島 保宏		
編集機関	公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター		
所在地	横浜市栄区野七里2-3-1 TEL. 045-890-1155		
発行年月日	西暦2013年2月15日		
ふりがな	せとじんじゃきゅうけいだいちないいせき		
所収遺跡名	瀬戸神社旧境内地内遺跡		
所在地	横浜市金沢区瀬戸4503-5 ~ 4504-3ほか		
市町村コード	141089		
北緯	35° 19' 55"	東経	139° 37' 14"
調査期間	2010年10月4日～2010年11月8日（現地調査）	調査面積	本発掘調査280㎡
調査原因	土地区画整理地業		
所収遺跡名	瀬戸神社旧境内地内遺跡		
種別	散布地	時代	中世・江戸時代
主な遺構	地業層・石切場・石積み遺構など		
主な出土遺物	中世かわらけ・縄文時代早期土器片など		
特記事項	昭和62年に遺跡の大部分の本発掘調査をすでに実施		
調査期間	2011年10月12日～2011年11月11日（現地調査）	調査面積	本発掘調査159㎡
調査原因	土地区画整理地業		
所収遺跡名	瀬戸神社旧境内地内遺跡		
種別	散布地	時代	中世・江戸時代
主な遺構	貝層・石垣・参道など		
主な出土遺物	中世かわらけ・近世陶磁器片など		
特記事項	昭和62年に遺跡の大部分の本発掘調査をすでに実施		
調査期間	2011年12月13日～2012年1月6日（現地調査）	調査面積	本発掘調査195㎡
調査原因	土地区画整理地業		
所収遺跡名	瀬戸神社旧境内地内遺跡		
種別	散布地	時代	中世・江戸時代
主な遺構	貝層・井戸など		
主な出土遺物	近世陶磁器・など		
特記事項	昭和62年に遺跡の大部分の本発掘調査をすでに実施		

本書の印刷使用について

紙質	表紙	レザック66年うすねず、四六判215kg
	見返し	上質紙A判57.5kg
	前文・本文・写真・奥付	マットコート紙四六判135kg
印刷	電算写植によるオフセット印刷	
刷色	墨一色	

文化財保護、教育普及、学術研究を目的とする場合、この報告書の一部を複製して利用することができます。

なお、利用にあたっては、出展を明記してください。

この報告書にかかる遺物ならびに記録図面類（写真を含む）は公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターで保管しています。原品を利用する際には別途、利用申請が必要となります。

---

## 瀬戸神社旧境内地内遺跡発掘調査報告

—金沢八景駅東口地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

編集 / 公益財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター  
〒247-0024 横浜市栄区野七里2-3-1 TEL.045-890-1155

発行 / 横浜市都市整備局

発行日 / 平成25年2月15日

印刷所 / 株式会社ナデック

---